

雅

(銀七輪～終輪【角十三輪】)

「岬の風景とせきの様」

第七章

それぞれの意志

一

「貴方の思う通りに生きなさい。他の誰でもなく、貴方自身の意志で」

白い透けるような類は、病にやつれて血の気が失せているせいだ。優しい手が延ばされ、頬を撫ぜた。

「母様……」

同じ色の深紅の瞳。炎のような鮮やかな色。同じ事が自慢だ。

「貴方のものなのだから」

優しい声。

何てこの部屋は、白くて眩しいのだろうと思った。目が痛くて周りが滲んで、母様の姿がはつきり見えないじやないか。こんなに傍にいるのに、光に溶けていってしまいそうだ。

「貴方が選びなさい」

選ぶ。選ぶ事はもう決まっている。

選んだのに。

何よりも強く望んだのに、——何で。

何故、母様は傍にいてくれなかつたのだろう。

傍にいてくれれば、それで良かつたのに。

「——いで」

死なないで。

暗い。

今まで光に溢れた部屋にいたのに、何でいきなり暗くなつたのだろう、アナスタシアは瞳を見開いたまま思つた。

それから、ああ、夢を見ていたのだ、と氣付く。
あの部屋、母を看取つた部屋は光に満ちていたけれど、それは目を逸らしたくなる程の痛みのある白だ。
(だから、目を背けたのかな)

今、この薄暗い場所にいるのは。

しかしすぐに、これは現実なのだと氣付いた。

アナスタシアはゆっくり身を起こし、辺りを見回した。頭がぐらりと揺れる。

「——」

どうやら薄暗い小さい部屋——四方を布で囲つた天幕のような場所で、アナスタシアはその中央に敷かれた柔らかな毛皮の上に横になつていたようだ。

「アーシア……」

小さく名前を呼んだが、アーシアの返事はない。確か、アーシアと森にいたはずだ。森で、彼と、レオアリスと別れて、それからもう一度戻ろうとしていた。

次第に記憶が戻つて来て、アナスタシアは立ち上がり声を上げた。

「アーシア！」

あの森の中で、詠唱が聞こえて、すごく眠くなつて——アナスタシア達は倒れた。その後の事は全く覚えていない。

「アーシアっ！」

天幕の一角で、光の筋が揺れた。

「！」

身構えた時、光の筋はくつきりとした、四角い空間になつた。幕の一部が巻き上げられたのだ。

そこに人影が差した。

「誰だっ」

「どうぞ、お気をお静めください、アスタロト様」

女の声だった。どこかで聞き覚えがあるような気がした。

アナスタシアが立ち尽くしている間に、女は恭しく数歩近付くと、長衣の

裾を引いて跪いた。両手を身体の脇につけ、深く頭を下げる。

「お目にかかるて光榮に存じます。アスター公爵様」

女がアナスタシアをアスター公爵と呼んでいる事に気付き、アナスタシアはさつと顔を強張らせた。

「誰だ」

警戒と詰問の響きにも、女は上げた顔に柔らかい笑みを浮かべただけだ。

茶色の髪を頭の後ろで丸く結い上げた、少し頬骨の張った細い顔。三十前後の年齢だろうか。だがアナスタシアの記憶にはない相手だった。じっと探るように落とされるアナスタシアの視線を受けても、女に動搖する気配はない。

「私はクレア・リンデールと申します。貴方様の術士でござります」

「術士——」

「正規西方軍法術士団中将を任せられております」

歌うようにそう言うと、リンデールは右腕を胸に当てる正規軍式の敬礼を施して、再び頭を伏せた。

アナスタシアの脳裏に、あの歌が甦る。

あの歌声——詠唱は

「お前か」

女はただ頷いた。憤りが身体を走り、アナスタシアはリンデールに詰め寄つた。

「何のつもりで……アーシアは！」

リンデールがやんわりと片手を上げる。

「外におります。ご心配なさいませぬよう、先程の術はただのまどろみの術に過ぎません」

「ただの！？術なんてかけておいで——」

リンデールは面を伏せたまま、きっぱりと告げた。

「貴方様をお護り申し上げる為でございます。ご無礼、何卒ご容赦くださいませ」

かあつと頭に血が昇る。深紅の瞳を熾火のように光らせて、アナスタシア

はリンデールを睨んだ。その熱が辺りを焦がしそうな程だ。

「護る？ 余計なお世話だ！ 護つてもらう必要なんて無い！」

「そんな事を仰るもんじやございません」

ふいに別の、低いしゃがれた男の声が割って入った。

アナスタシアはさつと天幕の入口を睨み付けた。入口の幕を繰り上げて、男が肩の張った身体を縮めて天幕の中に入ってくる。

男は天幕の天井に頭が付く程の大柄の身体を真っ直ぐに伸ばし、岩のような顔の中の小さな瞳をアナスタシアへ向けた。そこには厳しい光が浮かんでいる。

「貴方の為に多くの兵が、危険を冒して森に入ってるんですぜ」

砕けた口調ではあったが言葉は鋭く、アナスタシアはぐつと息を飲んだ。

「ワツツ少将、膝を曲げよ。公女の前に無礼であろう」

アナスタシアに対するものとは打って変わったリンデールの厳しい叱責に、ワツツは片方の眉を上げ、それでも素直に跪いた。

右腕を胸に当て、深く頭を下げる。

「公女アナスタシア、ご無事で何よりです。すぐにでも王都にお送り申し上げます」

アナスタシアは驚いてワツツを見返した。

「王都？ 誰がそんな勝手な事……」

ワツツはひよいと片手を上げて、剃り上げた頭をつるりと撫でた。外見に似つかわしくない澄んだ緑の瞳が、飄々とアナスタシアを見返す。

「アスター公爵家長老会からのご要請と、それを受けた正規軍副將軍の正式な通達によるものですなあ」

「長老会——」

唇を震わせたアナスタシアの前で、ワツツは太い首を手で擦りながら、また緑の瞳を閃かす。

「という訳で、我々の任務は貴方を無傷で保護し、王都へ無事にお送りする事として。貴方は無事に保護する事ができたら、後は王都へお送りすりやあ、この厄介な森ともおさらばつて訳です」

「ワツツ少将！」

リンデールはワツツの人を食つた口調に、苛々と彼を睨み付けた。ワツツは首を竦めてみせたが、全く動じていよいのは明らかだ。

「おつと済みません、何せ根が田舎者でしてね」

リンデールは紅い唇を歪めて顔を背ける。それにやりと笑って、それからワツツは天幕の入り口を片手で示した。

「どうぞ、公女。王都までお送りする用意が整っております。精銳二十名、皆若くて面のいいのを集めてますし、それにリンデール中将も同道されます。

「安心ください」

何とも茶化したような、だが憎めない口調だが、アナスタシアは笑う代わりにぎゅっと両手を握り締めた。頬は血の気が引いて白く透けている。

「私はまだ帰らない」

きつぱりと、自分の意志を宣言するように、ワツツとリンデールを睨む。

「この森に黒竜が来たのは知ってる。私は黒竜を倒しに来たんだから」

その言葉を聞いてさつと青ざめたのはリンデールだ。リンデールは宥めるようすに首を振った。

「アスター様、ですが黒竜など、恐れながらいかに貴方様といえど危のうございます」

「そんな事を言つて、だつたら誰が黒竜を倒すんだ」

「軍にお任せんなつてください」

アナスタシアの言葉にも、ワツツにはどこ吹く風といった様子だ。まるつきり相手にもされていない事に、アナスタシアは苛立ちの余り足を踏み鳴らした。

「黒竜だぞ？！ 軍にだつて被害が出るのは判つてるはずだ！ それを見なした。

「ワツツは少し大げさに溜息を吐いた。
「黒竜だぞ？！ 軍にだつて被害が出るのは判つてるはずだ！ それを見ない振りして帰れるか！」

「我が儘言つてお嬢さんに、何ができるんです？」

「ワツツ！」

かつとして、アナスタシアはワツツへと詰め寄つた。

遊びでこんな所まで来た訳ではないのだ。アナスタシアだつて色々と考えた上での行動だ。それをまるでくだらない事のように言わわれるのは、我慢がならなかつた。

「我が儘なんかじやない！ 私は次期正規軍將軍だ、私にはその責務が」

ワツツはいきなり立ち上がつた。立てばアナスタシアの遙か上に頭が来るような巨体だ。それが目の前に壁のように立ちはだかつて、アナスタシアだけではなく、リンデールさえ怯んだ。

「舐めるんぢやねえ！ あんたが勝手に森に入った事で、今、二百五十もの兵がこの森に投入されてる。森をうろつくだけでさえ黒竜を刺激するかもしれないねえつてのに、敢えてだ。あんたを探す為だお嬢さん。それも黒竜が一吹きすりや、二百五十が一瞬で死ぬんだ」

「——つ

アナスタシアはワツツを睨みつけようとして失敗し、力なく項垂れた。

二百五十人——それは、予想もしていかつた数字だつた。被害を食い止めようと森に来たのに、逆に自分のせいでの多くの兵が危険に晒される。

ワツツの言葉に、アナスタシアは打ちのめされていた。黒髪が表情を隠すようすに頬に掛かる。

「ワツツ、貴様、公に対して——」

リンデールはわなわなと唇を震わせたが、ワツツはしつかりとアナスタシアに視線を据えたままだ。

ただ、次の言葉は諭すように柔らかかった。

「将軍つてのは、兵を死に追いやるのが仕事じやねえでしょう」

今までの張り詰めた空気が打つて変わつて、だから余計にアナスタシアは泣きそうな気持ちになつた。

「兵を思つての行動だつていうのは、良く判りました。だからこそ、最高責任者として貴方にしかできない事つてのは、他にあるはずです」

王都にお帰りいただけますね？ と穏やかに問われ、アナスタシアは首を振る事ができなかつた。

天幕を出ると、まだ眩しい陽射しが空に高く昇つていて、午後もまだ早い位なのだろうと判つた。周りを見回せば、そこはアナスタシアが水を汲みに出たあの池のほとりだつた。

あの時は何もなかつた場所に、今は池の淵の狭い草地に沿うようにして幾つかの小ぶりの天幕が張られ、多くの兵達がその淵で立ち働いている。

「アナスタシア様！」

振り返るとアーシアが駆けてくるのが眼に入った。

「アーシア……」

優しい青い瞳を見たとたん、抑えていたものが込み上げて来て、アナスタシアはアーシアの首に抱きついた。

「アナスタシア様——？」

アーシアはアナスタシアの様子に心配そうに眉を顰めたが、それでも何も言わずに背中を撫ぜた。

ワツツはアナスタシアを探す為に、二百五十もの兵がこの森に投入されているのだと言つた。一人の為に、二百五十だ。それは、アナスタシアが王都を飛び出す切っ掛けになつた事と、とても良く似ていた。

アナスタシアの不注意な行動の為に、ファーガソンを始め館の者たちが解雇される事になつた、その事と。

結局、自分がやつてゐる事は何にも変わつていないので、アナスタシアは唇を噛み締めた。

知つていて、判つてゐるつもりで動いていても、本当には判つていなかつたのだと。

優先していたのは、自分の意思ばかりだ。

「——アーシア

〔〕

強く抱き締めてくる腕の、裏腹なか細さに、アーシアはただ背中を撫ぜた。ワツツは暫く黙つてそれを眺めていたが、一つ咳払いをして口を開いた。

「申し訳ない、ご案内させていただいでも？」

アナスタシアは少し恨みがましい眼をしたが、それでも何も言わなかつた。

背中に添えられたアーシアの手の温もりだけを追うように、じつと意識を向けていた。

「まあ、貴方をお見送りしたら、我々もすぐに森を発ちます。」

(……良かつた)

それだけは良かつたと、心からそう思つた。

アーシアは驚いた瞳でアナスタシアの顔を覗き込んだ。アナスタシアは口元を引き締め、アーシアの視線から逃れるように瞳を逸らす。

「アナスタシア様——王都に、お帰りになるんですか……？」

「うん」

短く頷いて、アナスタシアは促されるままに、ワツツとリンデールに挟まれるようにして歩き出した。

アナスタシアに気付くと兵士達は次々と膝を折り、感激したように声を震わせてその名を呼び、敬礼する。

「アスター様」「公女」「正規軍将軍」「炎帝公」

どれも恭しく感極まつた声で、それが自分を過剰に崇めるように感じられ、早くこの場から離れてしまいたくて、アナスタシアは顔を伏せたまま足を早めた。それでも、彼等の声は嫌でも耳に入る。

「アスター公」

「炎帝公だぞ」

逃げ出したいと、そう思つた。

そんな呼び名に、自分は相応しくない。

「炎帝公」

耐え切れずに耳を塞ごうとした時、空気を切るように、聞き覚えのある声が響いた。

「アナスタシア！」

思いがけない声に呼ばれて、アナスタシアははっと顔を上げた。声の主を探して迷った視線が、対岸に近い池のほとりに立つてゐるレオアリスの姿

を見つける。

「——レオアリス？」

何で彼がここにいるのか全く判らず、アナスタシアは束の間立ち尽くした。それでも驚きの影から、ゆっくりと安堵が込み上げ、胸を満たしていく。

「レオ……」

駆け寄ろうとして——そこで漸くアナスタシアは、レオアリスの周りに数人の兵士が張り付いてゐる事に気付いた。アーシアが不安そうにアナスタシアの顔を見つめる。

「もしかして、何か勘違いされたんじや」

「——つ、どういうつもりだ！　あいつは関係ない！」

アナスタシアはワツツを睨み付け、食つてかかった。

「いや、彼は」

ワツツの言葉を皆まで聞かず、アナスタシアは身を翻した。慌てて道を開ける兵士達の間を抜けて、レオアリスに駆け寄る。彼の横にいた兵士達がさつと跪いた。

アナスタシアと兵士達とをレオアリスは交互に見つめた。その顔の上には驚きと困惑の色がありありと浮かんでいる。

アナスタシアはそれに気付かず、腕を掴んだ。

「レオアリス！　何でお前こんなところにいる！」

「何でつて、」

どこから説明すべきなのかと首を傾げ——レオアリスはふとアナスタシアの顔に視線を止めた。アナスタシアの様子が、どことなく違つて感じられたからだ。

彼がこの場にいる事に驚いてもいるのだろうが、見開かれた深紅の瞳には、レオアリスが一番強く印象に残つた、炎のような激しさがない。全くの別人のようである。

まるで何かを堪えるようで、その事にレオアリスは知らず息を詰めた。

疑問よりもまず、何があつたのか、それが気になつた。

「どうしてお前まで連れてこられたんだよ？！」

「俺は、何となく」

「何となく？！——お前、バカ？！」

呆れ返った声に、レオアリスは急いで取り消した。

「あ、いや、その何となくじやなくて、訳の判らねえ内に連れてこられたつていうか……そんな事よりお前等、大丈夫なのか？」

レオアリスはアナスタシア達が軍に追われていたという認識しかない。だから一番心配していたのは、二人が捕まつた事そのものだ。

まだ驚いた顔で、レオアリスはアナスタシアと、彼女を追いかけてきたアーシアと、周りの兵士達を見回した。少し離れた場所では、体格のいい、頭を丸めて岩のような顔をした男が、そのこわもてにどことなく面白そうな色を浮かべてこちらを眺めている。

「——俺はてっきり、アーシアがまた倒れて、それで連れてこられたのかと

……」
レオアリスが考えていたものとは、だいぶ——いや、全く違う。

捕らえられたというのなら、周囲の兵士達がアナスタシアに対して跪いて

いるのはおかしい。

正規軍の兵士達が、まるで彼女を崇めるように膝をついて。

「——お前、一体……」

黙り込んだアナスタシアの隣で、アーシアが瞳を強張らせた。

「捕まつた訳じや、ないんだな……？」

「私は」

「一体どういう

アナスタシアの腕に手を掛けようとして、いきなりレオアリスはぐいと襟を引かれた。首が締まって、後ろによろめく。

「いつてえつ」

「無礼者！」

襟を掴んだ兵士は、そのままレオアリスを地面に引き倒そうとした。

「何するんだ！」

アナスタシアが怒りの籠もつた瞳を向ける。兵士はアナスタシアの瞳に睨

まれて、レオアリスの襟首を掴んだまま、硬直した。

「も、申し訳ございません、しかしこの者が」

「いいからさっさと放せ！」

兵士は慌ててレオアリスを解放し、畏まった。

「何……」

首筋を擦りながら、レオアリスがまだ信じられない顔でその様子を見つめた時——きつい女の声が飛んだ。

「御前に跪かぬか！ その方は次期アスター公爵ぞ！」

さつと、その場の空気が緊張を孕んだ。そこにいた兵士達も再び、身を硬くして跪く。

レオアリスは一度、その名前を口の中で呟き——アナスタシアを見つめた。

「——アスター公爵……？」

確認するような、訝しその声が刃物のように鋭く感じられて、アナスタシアがびくりと肩を揺らす。

『嘘つき！』

『アスター公爵……』

その名前なら考えるまでもなく、誰でもすぐに思い付く。

アスター公爵。この国の最高位に位置する大貴族であり、正規軍を統括する、将軍だ。

レオアリスは辺りを見回した。

正規軍——ここにいる彼等の。

あの炎。

『炎帝公……』

半ば呆然と呟かれた言葉に、アナスタシアは耳を塞ぎたい気持ちになった。心臓がまるで早鐘のように、煩く音を吐き出している。

『レオアリスさん、アナスタシア様は』

アーシアがレオアリスに何か言おうとしているが、その二人の姿すら、アナスタシアの瞳には、いつかの少年達の姿に重なつて見えた。

『騙して楽しいかよ』

「わ——私」

「貴様！ 何故公の前で跪かん！」

「リンデールが歩み寄り、レオアリスの肩を掴んで、無理矢理跪かせようとした。」

「や……やめろっ！」

「そんな事をされたら——全部断ち切られてしまう。」

「止めようとして延ばした腕がやけに重くて、心臓の鼓動が頭に響き渡るよう」

「うに感じられた時、思わずそこから助け舟が入った。」

「まあ中将、ここは一つ穩便に行きましょうや。見たとこそんな無粋な間柄じやなさそうでしょう」

「ワツツ、貴様こそ、いい加減その口の聞き方を改めろ！」

「ワツツは大した事もなさそうに肩を竦めた。」

「申し訳ない。こりや俺の性分でして。だから昇進が遅れるんですね」

「貴様、これが終わったら、辺境行きは免れんぞ」

「そうなるだろうと、既に家を購入しとりまして」

「ワツツは嘯いて、一瞬だけ兵士達の間に笑いを堪える空気が流れた。リン

デールは忌々しそうにそれを睨んだが、明らかにここでの彼等の信頼は、ワツツに向かっている。

「リンデールは中将であつても、彼等にとつては一時的に派遣されたに過ぎ

ない。正確に言えば彼等そのものが正規の編成ではないが、ワツツにはどいか人を惹きつけるものがあつた。」

「とにかく、ご存知の通り彼は別件で保護したんで、中将がお手を煩わせる必要はありません」

「別件……？」

「レオアリスはワツツとリンデールの顔を交互に眺め訝しそうに繰り返したが、ワツツはそれには答えなかつた。リンデールもまた、納得の行かない様子ではあるものの口を閉ざしている。」

「おい、とレオアリスの後ろの——レオアリスを捕まえた時に指示をしていた兵士に、ワツツは顎をしゃくつた。」

「連れて——いや、俺が預かるう」

「兵士がレオアリスを促す。押しやつたり無理矢理引き摺るような事はしなかつたが、有無を言わさない雰囲気に押されレオアリスはアナスタシアに視線を注いだまま、それでもワツツの前に移動した。アナスタシアもじつとレオアリスに顔を向けている。」

「ワツツは苦笑を浮かべながらも、アナスタシアに敬礼した。」

「公女。道中のご無事を」

「それをきっかけに、リンデールが恭しく、だがしつかりとアナスタシアの腕を取る。」

「アスター様、参りましょう」

「互いに言いたい事があつて、それを口に出せず、ただ相手から視線を逸らせないままに、距離だけが離れていく。」

「レオアリスの顔にちらりと視線を落とし、ワツツは口の中で笑った。」

「未練らしい面だね。ま、相手があんな高嶺の花だつて判つて、しかもお別れじや仕方ねえ。同情するぜ」

「……そんなんじやない」

「そう、そんな事ではなくて……。もつとずっと、大事な事を。」

「見栄張る必要はねえよ」

「ワツツはまた笑つて宿营地の奥を指差した。「さて、お前にはこっちに付いてきてもらおう」

「ワツツはさつさと歩き出し、レオアリスも釣られるように一、三歩歩いたが——ぴたりと足を止めた。」

「いきなりレオアリスが身を翻し、ワツツは驚いてその肩を押えた。」

「アナスター！」

「ワツツに構わず、レオアリスは声を張り上げた。レオアリスの視線のずっと先で、兵士達に囲まれていたアナスターが振り返る。表情は遠くて良く見えない。」

声が、届くように——レオアリスは大きく、息を吸い込んだ。

「——俺は、王都に行くからな！」

一瞬の沈黙の後、アナスタシアは頷いた、気がした。

リンクデールに促されて、アナスタシアは歩き出し、周りの兵士の姿に隠されてしまう。

見えないアナスタシアの姿が森に消えるのをずっと見送つて、レオアリスは詰めていた息を吐いた。

「若いヤツは熱いねえ。俺ももうちょっと若かつたらなあ」

ひゅう、と口笛を吹いたワッツを、レオアリスが少し呆れ気味に見上げる。

「……あんた幾つだよ」

「俺か？ まあお前より十は歳上だな」

「え？！ 二十四？」

てっきり四十越えてるかと思った、と言いそうになつて、レオアリスはぱつと口を押えた。

「そこまで若かあねえ……何だ？」

気配を察知したのか、ワッツは小さい目を細めた。

「何でもない。——とにかく、あんたが思つてるようなのと違うけど、ただ」

「ただ、何だ？」

「……別に。」

自分でも上手くは言えない。あんな状態のまま別れては駄目だと、そう思つただけだ。

驚いたのは当然、物凄く驚いた。それは誰でも、突然相手が公爵だ正規軍将軍だと言われては驚くだろう。正直に言えば、レオアリスはまだ信じがいくらいだ。

ただ、傷付いたような、何かを堪えるような顔をしていたから——。

(どつかで見たな)

同じような表情を、と考えて、思い当たつた。

「ああ——」

法術から引き戻された、あの時だ。泣きそな。

「何だ？」

「別に何でもない」

「また別にか」

「いいだろ、何だって。それよりあいつらが無事なら、何で俺を捕まえたんだよ」

レオアリスの物怖じしない言い方に、さすがのワッツも呆れた。

「お前、いい度胸してんなあ。将来大物になるぜ。ま、俺みたいに出世にや

縁遠くなるかも知れねえけどな」

「あんたは辺境に家買つたんだろ。そんな事より」

鼻先に皺を寄せたワッツの顔を睨む。

「早く解放してくれよ。俺もこの森に用事があるんだ」

もう一つ、王都に行く理由ができたばかりだ。

「御前試合か？ 龍の宝玉」

レオアリスは立ち止まり、それから驚くというよりはもう半ば呆れ気味に、短く息を吐いた。

「——そうだよ。そんな事まで知つてんのか」

「軍の情報網を舐めんなよ」

「——残念だが、そりや無しだ」

「何で……まさか御前試合が中止なのか？！」

「そうじやねえが、この森に入るのが今、禁止されてんだ」

「——黒竜……？」

小さい緑の目が、レオアリスに対して剣呑に細められる。

「おめえ、それが判つてんのにここにいるのか」

「はつきり判つてた訳じやないけど……聞き齧つたくらいで」

「状況判断できねえ奴は早死にする。軍ではな」

端的に事実だけを述べた言葉は冷たい刃物のようで、レオアリスは返す言葉もなく黙り込んだ。

ワッツは肩の張った身体を揺らしながら歩き、レオアリスを小さな天幕に

導くと「例の少年をお連れしました」と声をかけてから、顎で入れと促した。

(例のつて何だ……)

ワツツを見ても何も言わない。アーシアの為にではなく、もう二人が捕まつた——捕まつたというのは少し誤弊があるが——以上、レオアリスには軍が自分に何の用があるのかが判らなかつた。

「——」

「ほれ

もう一度促され、渋々天幕の布を捲る。樹々の枝に器用に縄をかけて造られた天幕の中は、意外と広い。

見回すまでもなく、入口の反対側に男が一人座つているのが目に入つた。

レオアリスの後について入つたワツツが、その前に敬礼した。

「ワインスター大将殿、連れて参りました」

(大将——)

ワツツと同じ濃紺の軍服の胸には、確かに地位を表すように幾つもの紀章があしらわれている。男——ワインスターは表情を変えないまま頷いた。

「ジ苦勞だつたな。貴様は下がれ」

一瞬だけワツツはレオアリスに視線を送り、同席を願い出るべきか迷うような素振りを見せたが、再び敬礼した。

「——はつ」

行つてしまふのかと言いたげに、レオアリスが首を巡らせてワツツの姿を追いかけるのへ、口の端を歪めて答える。

厚い布地を捲つて天幕を出ると、ワツツはその前で振り返つた。

(公女にや頬も見せねえで、單なるガキと面会か?)

大将まで出張つて来て、てつきりアナスタシアを迎える為だと思つていたワツツには、それは意外どころの話ではなかつた。

(あのガキに何があるってんだ?)

アナスタシアの搜索の為に組織された特殊小隊に、わざわざ名指しして探させた程だ。

(そんな大したボウズには見えなかつたがなあ)

ワツツは暫く入口の布の隙間に目を凝らしていたが、薄暗い内部は伺えない。

ただ、この場にいるなども言わていなかつたら、その場に留まる事に決めて、傍の樹に寄りかかつた。

レオアリスはまだワツツが出ていったままの状態で立ち尽くしていた。ワインスターは落ち着いた、だが決して穏やかとは言い難い瞳をレオアリスに向いている。

「私は西方軍第六大隊大将ワインスターだ」

「えーと」

こんな場合の作法など知らないレオアリスは、たつた一人で置いていかれ、困り切つてうろうろと視線を彷徨わせた。重苦しい沈黙が天幕内に落ちる。とにかく名乗ろうと思つた矢先に、ワインスターが再び口を開いた。

「——」
「名はレオアリス。歳はこの春で十四。北の辺境の出身で間違いないな？」

「何故自分の名前や出身が知られているか、不思議そうな顔だな」

レオアリスの心を読んだように、ワインスターは口の端を引き上げた。

「座れ」

レオアリスの足元を眼で示し、頷いた。座ろうと屈んで手を付いた時、ワインスターが不意に問い掛けた。

「剣は使えるのか」

「え——？　あ、一応、独学だけど。いや、独学ですけど。……そうだ、あれ返して貰えるんですよね？」

先ほど取り上げられた荷物を思い出し、ついでにレオアリスはほんの少し疑わしそうにワインスターの顔を見た。

「その剣ではない」

「え？」

「お前自身の内にある剣は使えるのかと聞いているのだ、——剣士」

レオアリスはぽかんと口を開けた。

「——何言つて……」

ワインスターの目は笑いもせずにじっとレオアリスに注がれている。冗談でも勘違いでもなく、本気なのだとその目は言つていた。

「……聞かれてる意味が、良く判りません。俺は術士で、剣士なんかじや」
『お前はあれだ、剣士』

瞳を見開いて口を閉ざしたレオアリスの様子を、ワインスターは検分するようにならぬでいる。

「——俺は、術士です」

もう一度、レオアリスは自分に言い聞かせるようにそれを口にした。

「本当に知らないのか」

「本当も何も——そんな事言われたって……。第一、俺が剣士だつたら何だつていうんですか」

「既に聞いているかもしけんが、このカトウシユ森林には今、黒竜がいる」レオアリスが既に知つてゐるのを表情から確認し、ワインスターは話を続けた。

「正規軍は、カトウシユ森林を封鎖した。昨日の午後からだ」

「封鎖——？」

物々しい響きにレオアリスが眉を潜める。昨日の午後——レオアリスがちょうど森に着いた頃だ。

「黒竜は森に入つてから場所を変えてはいいない。おそらく廃坑に身を伏せているのだろうが、いつまでもそのままとは限らん」組んでいた腕を解き、腰に刷いた剣の鞘を握る。

「問題は一つ。再び眠りに就けばいいが、いずれ森を出れば——国土に甚大な被害が出るのは必至」

「それが、何の」

だがレオアリスにも、ワインスターが言わんとしている事が、漠然と判りかけてきた。

「我々としては、民や国土への被害は、僅かなりとも避けたいのだ」

レオアリスに剣士であるかを聞いたのは——

「先の大戦で、風竜を倒したのは剣士だ。その剣士の力があれば、黒竜を斃

「それは不可能ではないと、そう考へている」

「そんなの、伝説みたいなものだ。」

レオアリスは早口に言つた。ワインスター、——軍は、レオアリスに、黒

竜と戦えと言つてゐるのだ。

（可能性？）
レオアリスが剣士かもしだれなくて、剣士なら黒竜を斃せるかもしだれないか
ら、だから戦えというのは、それは単なる無責任というのではないのか。
(無茶苦茶だ)

術士としてやれと言われた方が、まだ現実味があるというものだ。

無性に腹が立つて、レオアリスはワインスターを睨み付けた。

「何でそんな事になつたのか知らないけど、俺は剣士なんかじやないし……、もし剣士だつたって、そんな事俺にできるわけない！」

「黒竜を斃し、国を救えるとしても？」

「そんな事、俺に言われたつて……」

“救え”

ふいにカトウシユの声が甦つた。カトウシユの言わんとしていた事は——

“剣のこども”

『剣士とか、言われたこと無い？』

（無いよ、そんな事……）

何故今になつてそんな事が次々と出でくるのだろう。村にいる間は、まつたくそんな事は聞かなかつたし、言られた事などない。

（今まで全然）

村を出てから、いきなり——

剣……青い石。

ずっとレオアリスが身に付けていた、小さい飾り。

手が胸元を探つた。石が見つからなくてぎくりとしたが、鎖が切れて袋にしまつておいたのを思い出した。

「——

あの青い石の奥に彫られているのは——、剣の意匠だ。
(あれは)

頭の中はすっかり混乱して、息苦しささえ感じた。

逃げ道を探して、辛うじてレオアリスは口を開いた。

「軍は——あんたらは何やつてんだ。封鎖だけして黒竜がどうするか待つだ
けかよ。こんなガキ相手に、そんなわけのわからない事言つてる暇があつた
ら、」

「勿論軍は必要とあれば黒竜とも戦う。そうなれば現在封鎖の為に投入され
ている一大隊だけでは足りないだろう。相当の被害も覚悟している」

正規軍の一大隊はおよそ三千名の兵士で構成される。その兵士の大半は失
われるだろう、とワインスターは告げた。

ワインスターは暫く黙つてレオアリスを見つめていたが、やがて組んでいた腕を解いた。

「——残念だ」

レオアリスは自分の膝に視線を落としたまま、その上に付いた手をぐつと握り締めた。

まるで責められているように感じられるが、だからといって判りましたと言えるものではない。

いきなりお前は剣士だから黒竜と戦えと言われて、どうすればいいのか？
「ワツツ少将！　この少年の荷物を持って来い！」

天幕の外からワツツの低い声が返る。レオアリスはまだ視線を落としていた。

「森の外まで送らせよう。その後は、故郷へ帰れ」

「そんな事言われる筋合いは」

ワインスターはきつぱりと、断ち切るように告げた。

「帰れ。お前の村の者達が、心配しているぞ」

ワツツは天幕から出てきたレオアリスの顔をじっと眺めた。

(何の話をしてたんだか)

ワインスターには悟っていたように、ワツツは立ち去らずその場で待機して——有体に言えば聞き耳を立てていた。時折、レオアリスの声はくぐもつて聞こえたが、それでも話の内容までは聞き取る事ができなかつた。

「ほら、お前の荷物だ。一応中確認しな」

レオアリスは袋を受け取り、中を探ると、一番最初に鎖の切れた飾りを取り出した。簡単に掌に包み込める大きさだ。薄く延ばした銀の板の真ん中に、陽の光を弾く青い透明な石が嵌め込まれている。

光にかざさなければそれと気付かないが、石の奥に、二本の剣が交差する

(——剣……)

その模様があるのは知つていたが、物心ついた時には既に身に付けていたもので、今までそれに意味があると思つた事など無かつた。祖父のカイルからずつと身に付けているように言われていた事もあるが、単なるお守りのようなものだと思つていた。

「剣……」

「剣か？ ほれ」

レオアリスはぎくりと顔を上げた。だがワツツが言うのはレオアリスの剣の事で、手にしていたそれを差し出した。

「ああ——」

何故かほつとした様子でレオアリスは剣の鞘を掴み——そのまま手を止め

てじつと剣を見つめた。

剣。

村の剣は造りが甘いせいなのか、いつもすぐに折れた。

ハモンドから譲り受けた剣。

あの時折れたのは、岩に当たつたからだ——
簡単に、折れて——
どくん、と身体の奥で鼓動が響いた。

何かが、自分の中で繋がろうとしている。

それはどこか、レオアリスを脅かすような感覺だつた。

「……おい、手離すぞ」

まだ反対から鞘を握ったままのワツツが、訝しそうに眉を上げる。ワツツが手を離しても、剣はしつかりレオアリスの手に握られていて落ちる事はない。かたが、レオアリスはまだ剣に視線を注いだままだ。

「すり替えたりはしてねえよ」

そう言つたが眼を上げもしない。ワツツは肩を竦め、それからレオアリスの背中を軽く押して歩き出した。

ちらちらと、ワツツは隣を歩くレオアリスの顔——ワツツからは頭のてっぺんが見えるような感じだつたが——を気にしていた。

ワツツにしてみれば仕事ではあるものの、十四歳という、言つてしまえばまだ子供の域を脱しきつていらない相手を拘束した事自体、気持ちの良いものではない。

レオアリスがワインスターと面会をした後は特に、事情が判らないまでも、胸の中がすつきりしなかつた。彼が先程までとは違う、思い悩んだ様子をしているからだ。

「まあ、なんだ」ワツツはごほんと咳払いし、それからレオアリスの肩に手を置いてゆさゆさ搖すつた。さすがにレオアリスも驚いて顔を上げる。

「何？」

「いやまあ、お前もちよつと運は悪いけどよ」

「運？」

「確かにあんな美少女滅多にいねえよ。ありや誰だつてぼーつとならあな」

「——はあ？」

「まあけど、女は一人だけじやねえ。王都にいきやあ、パリつとした艶のあらる女が沢山いるぜ」

この男は何を言つているのかと、レオアリスの瞳が呆れて細められる。大体レオアリスの年代でそういう女が好みとは到底思えないが、ワツツは気にせず豪快に笑つた。

「失恋の一つや二つ、気にすんなよ！」

「——あんた何言つてんだ？」

「だから、大将殿から釘差されたんだろ？」

「——何の？」

レオアリスは眉をしかめた。だがワツツは、口元に笑みを残したまま、レオアリスが気付かない程度に聲音を低くした。

「違うのかい。てつきりその話かと思つたぜ」

「まさか。そんな話でガキを呼べるくらい軍は暇なのか？ 違うよ、そうじやなくて——。——あんたは、知らないのか……」

それとなく聞き出そうとしたものの、そうはつきりと言われてしまいワツツは言葉を濁した。

「知らねえ……まあそудが」

決まりの悪さにつるりと頭を撫で、顔をしかめる。それから、結局自分にはまどろつこしいやり方は向かないというように胸を張った。

「知らねえから気になつてよ。何話してだんだ？」

ただレオアリスはワツツが知らない事自体は、さほど気になつていない様子だ。というよりは、彼はどこかほつとしたように、ワツツには見えた。

「俺も、正直何を言われたのか、よく判らないんだ。——でもまあ、判んないからもう用無しみたいだけだな」

「——」

ワツツは足を止め、池のほとりに先ほどレオアリスを連れて来た部下の姿を認め、声を張り上げた。

「おい、クーガー！ 二人ばかり集めてこのガキ送つてやんな。森の外までがつちりだ」

クーガーと呼ばれた若い兵士は額き、すぐにそこにいた兵士二人を連れて、ワツツの方へ近寄つてくる。

それを横目で見ながら、ワツツは口を閉ざして近づいてくる兵士達を気にしているレオアリスに、少し早口に告げた。

「言つとくが用無しつて訳じやねえ。無事送り返すのも俺達の役目だつて事

——
「ワツツ少将……」

横合いから遠慮がちな声がかかり、ワツツは振り返つてすぐ右手にいた兵士達を眺めた。

「何だ？」

「その、我々は、今後どのように行動するのでありますか」

周りにいた他の兵士も、釣られるようにワツツに顔を向ける。

「ああ——。まあすぐ指示が出る。それまでおとなしく待つてろ」

「しかし、……リンデール中将は引き上げてしましました。黒竜は」

彼等は、正規軍法術部隊のリンデールが来た以上、彼女が黒竜を抑えるものだと思つていたのだ。

いや、口には出さないが、アナスタシアに——「炎帝公」に対する期待が、兵士達には確實にあった。

そのアナスタシアが引き上げてしまつたとあれば、不安は無理からぬ事だ。上層部の判断もあつたとはいえ、アナスタシアを送り返したワツツとしては後ろめたさも感じたが、さすがにそう言う訳にもいかない。まして上からの指示で、など、最も無責任な発言だ。

「安心しろや。まさか一斉に突つ込めなんて言われやしねえからよ。予定では順次エスクローに引き上げて、それから司令部の作戦待ちだ」

引き上げ、という言葉を聞いて、兵士達の上に漸く安心感が流れた。視界の隅で、こつそり隣の相手の胸を叩きあつて喜ぶ姿まで見え、ワツツは心の中で溜息をついた。

「まだ森に散つてる奴等もいる。もう少し待つてろ」

もう一度そう言うと、レオアリスを手招いて再び歩き出した。

「全く……精銳部隊がこれかよ。黒竜なんざ本当に勘弁してもらいたいぜ」

ワツツは首筋をやたら擦りながら口の中で呟いている。レオアリスは少し

早足に横に並んで、その顔を見上げた。

「——あんたは、恐くないのか？」

「ああ？ やなガキだなあ」

眉をしかめ、それから後ろのクーガー達に聞こえないよう声を潜めた。

「……恐エに決まつてんだろう。どこの世界に黒竜見て喜ぶ奴がいるんだ。

正直役じやなきや逃げてえな」

脱走で軍法会議にかけられる方がまだましだ、とおどけたが、その声はど

ことなく硬い響きを持つていて、ワツツは鼻に皺を寄せ肩を竦めてみせた。

「ま、今そんな事言つたつて始まらねえ。要はどうやって奴を無事やり過ご

すかだ。戦うなんて選択肢は、まずねえんだからな」

レオアリスは束の間、足元の下草に視線を落とした。緑色の鮮やかな草が
敷き詰められ、所々に小指の先ほどの小さな白い花を散らしている。

春だな、と思つた。

この森は生命に満ち溢れた季節を迎えていたのに——鳥の声も獣の気配も
ない。

黒竜がいる為に。

“ 救え”

カトウシユの森は、その事を嘆いているのか。
レオアリスは思い切ったように顔を上げた。

「ワツツ少将、だつけ。……劍士つて知つてる？」

「劍士？ 何で劍士だ？」

「——何となく」

ワツツは訝しそうに眉を上げた。

「軍にいて知らねえヤツはいねえな。腕を剣に変化させて戦う、——いわゆ
る戦闘種つてヤツだ」

その知識は、レオアリスも同じだ。この世界には様々な種族があり、戦闘
種とは戦いに長けた種族をひと括りにして呼んだものだ。

剣士はその中でも、最も高い戦闘能力を持つとして、——恐れられる。

またの呼び名を『殺戮者』『戦う為だけに生まれる種』

それは少なからず揶揄を含めた呼び名だが、どれもレオアリスには想像も

つかない。

「一人で一小隊抑えるぐらい戦闘能力は高いらしいが、俺は会つた事も見た
事もない。まず数が少ないからな。で？」

「いや、剣士なら何とかなるのかなつて……黒竜だけど」

「そんなこつたろうと思つたぜ」

ワツツは太い腕を胸の前に組み、レオアリスを見下ろした。

「確かに相手にするにや恐えよ。一人で百を抑えるなんざ、普通考えられねえ
からな。けど、言つちまえばそこまでだ。いくら剣士つたつて、たつた一人
で黒竜を倒せる程とは思えねえ」

ワツツは一度息を止め、「剣士は想定範囲だが、黒竜は想定外なんだよ」と、
そう言つた。

ワツツは一度息を止め、「剣士は想定範囲だが、黒竜は想定外なんだよ」と、
そう言つた。

「範疇を超えてる」

「風竜を倒したつていう、その剣士はどうなんだ？」

「大戦の剣士を連れて来いってか？ どこにいるかも判らねえのに？ 大体

大戦以来名前も聞かねえ。死んだつて話もある」

ワツツはあくまでも一つの話としてそう言つたのだが、レオアリスは何と
なく——がつかりした。

「……そうか……」

ワツツはそれを、レオアリスなりの期待だと思つたようだ。

「そう残念がるなよ。ま、いねえよりいた方がいいのは確かだな。黒竜なん
て化物相手じや、何にだつて縋りてえよ。けど軍にや剣士はいねえし——ま
あもしかしたら名のある奴を呼ぶかもしれねえなあ」

縁りたい。

それほど軍も切羽詰まっているのだろうか。

レオアリスにあんな話を持ちかける程に。

『この国を救えるとしても？』

ふと先ほどのワインスターの言葉が頭を過った。

国を救う？ いくら無謀でも、そんな言葉を現実として捉える程、レオアリスも世界を知らない訳ではない。

この旅で知った事——それは、自分は自分で思う以上に、ちっぽけだとう事だ。それを知った上でなお、宝玉を得る為に竜に挑もうとは思つても、国を救おうなどとは思えない。

国を救う英雄の物語は幾つも書かれていて、レオアリスも読んだ事がある。けれどそれはあくまでも物語で、現実に置き換えられる訳ではない。

その力が自分に有るか無いかという以前に、想像が及ばないのだ。それは誰でも、「さあ国を救つてください」と言われたら、同じように感じるだろう。

ただ、今、この森にいる兵士達は、同じ時間、同じ目線に存在する相手だった。彼等は恐がっている。

ワツツは草地の外れで足を止めると、レオアリスを振り返った。

「さてと、お前とはここでお別れだ。この三人はまあ精銳だし、一日もありや森を抜けられる。街道へ出たら、このカトウシユには暫く近づくな」

ワツツは部下の三人の名前——クーガー、チエンバー、ウェインと次々呼び、「森を抜けたらついでに状況報告で、エスクロートに戻れ」と背中を叩いた。彼等の顔にも、安堵の色が灯る。

促され、レオアリスは三人の間に挟まれるようにして、立ち並ぶ樹々の間へと再び入り込んだ。少し歩いてから振り返れば、樹々の間からは、戻つていくワツツの姿と、池のほとりで思い思に休んでいる兵士達の姿が見える。

「——」

こここの兵士達——彼等は無事に、帰れるのだろうか？

もしレオアリスがアナスタシアやワインスターの言う通りに、剣士だったとして。

(だつたとしてつて言つたつて、さっぱり判らねえ)

『可能性の問題だ』

(そんな事、俺じやなくたつて皆同じだ)

可能性だけでその気になつても、現実には上手くはいかないだろう。

それでもなお、僅かにでも可能性があるのなら。黒竜を倒し、国を、森を、ここにいる彼等を助けられる可能性が、僅かで

もあるなら——。

剣士とか、術士とか、そんな事全て関係なく。レオアリスは黒竜と、対峙すべきなのだろうか——？

(気付かされたんだ。——この森で)
多くの事から。

「お辛くはございませんか?」

リンデールの問いかけに、何の事を指しているのだろうと、アナスタシアは首を傾げた。

「本来、貴方様をお歩かせするなど、礼を弁えない行為ではございますが」
何だ、そんな事かと笑いたくなつた。

「平氣」

大体、今二十名もの兵士に大事そうに囲まれて、この他に何の気配もなく

静まり返つた森の中を歩いている自分は、恐ろしく滑稽だとすら思う。

皆、アナスタシアの形にばかり捉われて。

でも多分、そんな事をしてくれなくともいいのにとか、それさえ、アナスタシアのような立場では言つてはいけないのだ。

彼等の前にいるのは「アスター公爵家のアナスタシア」 「次期正規軍將軍」なのだから。彼等の前でそれらしく振る舞うのは、アナスタシアの義務でもある。

この先結構辛いかもしれないな、とアナスタシアはぼんやり思つた。

周囲が崩れ落ちた狭い足場に立つ。そんな光景が頭を掠めた。

「申し訳ございません。少し広い場所がこの先にございます。そこで転移の陣を敷きます故」

「——うん」

(転移——)

「ここまで——やはり王都まで飛ぶのだろう。

判つて歩き出したはずなのに、心が騒ぐ。

後ろに置いてきた彼等——。

自分の意志を果たせないままに、王都へ戻る事。

王都へ戻る事自体は、もうそれほど嫌ではない。最初に王都を飛び出して

きた理由など、今の状況に比べれば、本当に頑是無い子供の我が儘のようなものだつたと、アナスタシアは既に気付いていた。

自分の小ささも、力の無さも。

黒竜の気に当てられて苦しんでいるアーシアを助けたのは、アナスタシアよりもレオアリスだ。

レオアリスが術の最中に倒れた時に、アナスタシアには何一つ、できる事が思い付かなかつた。

アナスタシアが森に入つたせいで、二百五十もの兵が、命を危険に晒す事になつた。

(王都に帰つて、もつと)

『俺は、王都に行くからな!』

あの時、レオアリスは確かにそう言つた。

その後ろに続けられなかつた言葉があるのを、多分アナスタシアは知つてゐる。

『だから、王都で会おう』と。

それが単なるアナスタシアの思い込みではなく、自分の事を知つてなお、

彼がそう言つてくれるのであれば——王都に戻る事は無駄ではないと、そう思つ事ができる。

もしこの先彼と再会する事が無くとも、そう言つてくれた事実は、アナスタシアを後押ししてくれる気がした。

王都に戻つて、ワツツに言われたように、自分のできる事をするのだ。

何ができるのか、明確に判つてゐる訳ではない。でもそれは、誰に聞くのでもなくアナスタシアが考えるべき事だ。

(それで——それが、いいんだ)

アナスタシアは顎をもたげ、瞳をまっすぐに、見えない王都へ向けて了。

アーシアは少し複雑な思いで、アナスタシアの横顔を見ていた。

アーシアが天幕の外で待つてゐる間に、リンデールやワツツ達とどんな会

話がなされたのか、アーシアには判らない。

ただ天幕から出でてきたアナスタシアはひどく打ちひしがれた顔をしていて、掛けるべき言葉が咄嗟に見つからなかつた。

今、昂然と頭を持ち上げ、黒髪を弾ませて歩く姿は、一見全て自分の中で納得しているからのようにも見える。

ただ、時折不安定に揺れる瞳が、アーシアの心にひつかかっていた。

アナスタシアの瞳には常に、炎が宿つている。

ゆらりと揺れ立つ炎の光。肌を焦がし身を焼き、あらゆるものを焼き尽くす力を秘めながら、彼女の瞳の中に踊るそれは、どこか儂い。

幻想のように儂くて、強い。

強く、激しく、そしてゆらゆらと不安定に揺れる。

美しい、アナスタシアそのものだ。

彼女の気儘さも奔放さも、苛烈さも、その炎ゆえのものだ。

だからアーシアが常に一番に望むのは、その炎がいつも、力強く瞳に踊っている事だった。

今のように少し、どこか躊躇いがちにさえ見える炎は、彼女の中の躊躇いや不安をそのまま表しているようで、それがアーシアの心に訴えているのだった。

(何かあつたら、僕がお助けする)

その何かは、アーシアの中でも明確ではない。ただ、アナスタシアの望む事に従つて、それを助ける。アーシアは自分の役割をそう決めている。

だからアーシアは、アナスタシアの瞳から些細な変化も見逃すまいと、改めてそう心に誓つて、アナスタシアの隣を歩いた。

あの宿营地を経つてから半刻近くは歩いたどうか。

アナスタシア達は急にぽつかりと開けた草地に出た。どうやらここが、兵士達が目指していた場所のようだ。

兵士の一人がリンデールに草地の広さを確認し、リンデールが頷くと、別の兵士がアナスタシアの前に跪いた。

「（）無礼を。リンデール中将が法陣を整えられるまで、こちらでお休みください」

兵士の指した場所では、もう早速日除けの布が張られて始めている。

「——そんな事までしなくなつて」

あまりの徹底振りに恥ずかしさ覚ええたが、アーシアは少し苦笑しながらもアナスタシアを促した。言葉には出していないが、アーシアの表情は彼等の行為を無駄にするべきではないと言うようだ。

仕方なく彼等の後について日除け布の下に行き、敷かれた布の上に座った。「お飲み物を」

堪らずアナスタシアは両手を上げて遮つた。

「いや、いい！ いいから——皆も休んで」

さつと、兵士の顔の上に喜びの色が浮かぶ。それは休めと言われた事にではなく、アナスタシアが彼等を気遣つた事によるものだ。

僅かなたつた一言が意外な力を持つている事に、アナスタシアは恥ずかしさと共に、驚きも覚えた。

結局、野外に似つかわしくない程の立派な陶器の杯を差し出され、アナスタシアは礼を言つてそれを受け取り、辺りを見回した。

少し横長の、片側がざつと七、八間——兵士達が五、六十人はここで休めそうなくらいの広さがある。片側は低い段になつていて、その先はまた樹々が枝葉を茂らせている。

リンデールはその中央に立ち、法陣を描き始めていた。手にした小さな壺から白い粉を掬いだして足元に撒き、数歩歩いてまた撒く。アナスタシアの場所からも、草の上に落ちた粉が微かに光を纏つていて、それが見えた。

アナスタシアはさほど詳しくは無いが、転移の法術は非常に高度な技だ。軍に属する方術士は当然ながら、主に攻撃、防御といった戦闘系の術を身に収めた者達が多い。そしてまた、リンデールのように部隊や物資を移送するための法術を学んだ者も重宝される。

多くの法術士は軍よりも、法術院での仕官や研究を選ぶのが主流だが、それでも軍に属する法術士の力が劣る訳ではない。

リンデールはその中でも中将位を得て、転移の術を最も得意としていた。

(レオアリスが見たら、興味津々だろうな)

そんな事も思う。あの辺りで立つて、じつとリンデールのやり方を見ていそうだ。ただ、リンデールは嫌がりそうだ。

リンデールはこの空き地全体を使って、広い陣を敷こうとしている。少し時間はかかるのだろうが、陣が完成すれば、もうアナスタシアは王都へ飛ぶ事になる。

おそらく一瞬。

それで、アナスタシアはこの地から去るのだ。

今更ながらに、心が揺れた。

王都ですべき事は沢山あるだろう。ワツツの言う事は正しい。おろそかにしてはいけない事だ。

けれど――

目の前にある事を放り出して、見ない振りをして自分だけ安全な場所に帰る。それは本当に正しいのだろうか。

『貴方自身の意志で』

優しい母の、最後の言葉。

あれは、自分勝手に生きればいいと言つていた訳ではない。

公爵家という枠に捉われず、自分の意志で選択しようと、そう言つたのだ。

(私の意志――)

アナスタシアは迷つた。

何が一番自分の望む事なのか、それすら判らず迷う、そんな自分を情けないと思う。

しかし、ある意味彼女の迷いは、誰もが突き当たる、とても当たり前の事だ。自分が何をすべきか、答えを始めから持つている者などいないのだから。

そんなものは誰も持つていない。用意されてもいいない。

暗闇の中で手探りするように探して、触れたものを必死で掴んで、それす

ら違う事もある。

違えば、引き返し、或いはまた別のやり方を探せばいい。そしてそれはどちらも、決して間違いではないのだが、それを納得できるのは自らの後ろに、通ってきた道を振り返った時なのかもしれない。

アナスタシアもまた、暗闇の中で自分の手に触れる、不確かなものに迷っていた。

例えは経験という光は、暗闇に微かに道を浮かび上がらせる標となるが、アナスタシアはまだたつたの十四歳で、その光も手にしてはいなかつた。

リンデールの詠唱が始まる。法陣が輝く。

アナスタシアが帰るべき時が来たと告げている。

「公女。そろそろご用意を」

兵士がアナスタシアの傍らに跪いて告げた。

「私は――」

どれを、何を掴むべきなのか。

法陣の輝きに引かれ、それが標の光のように、アナスタシアは立ち上がった。

踏み出そうとした時、アーシアがふいに、声を震わせた。

『ア、アナスタシア様』

振り返ったアナスタシアの瞳が、蹲つているアーシアの姿を捉える。

「アーシア？　どうした？」

見ればアーシアの顔は、血の気が引いて真っ青になつていて。

「アーシア？！」

虚ろな瞳を見開き、恐怖を押し出すように、アーシアは呟いた。

「来る――」

その時、森が揺れた。

それは、突如として起つた。

一度、地面が揺れた。

「何だ——」

宿营地にいたワツツは辺りを見回した。

レオアリスを部下達に預け森へ送り出して少し肩の荷を下ろし、部隊にはいつでも撤退できるよう準備をさせていた。あと半刻も待てば、森に散つていた他の部隊も合流する。

それを待つて撤退を開始する事をウインスターに進言するつもりで、ウインスターのいる天幕に向かつて立つところだつた。

樹々が大きく身を震わせ、足元の池が激しく波打つて岸辺を叩いている。その波紋が兵士達へも広がつていくように、宿营地に騒めきが走つていく。

「——落ちつけ」

叫ぼうとしたワツツの眼が一点に吸い寄せられ、凍り付いた。

池の向こう側に見えるなだらかな丘の奥——斜面の向こうが膨れ上がり、轟音とともに白く輝く柱が天空へと立ち昇つた。

樹々が、大地の欠片が上空へ吹き上がり、光に溶けるように消え失せる。

それらは、実際に、溶けていた。

柱から降りかかる輝く光の雨に触れた樹々が、音もなく溶けていく。

それに気付いた時、ワツツは心底、この場に居合わせた事を後悔した。

「退け……」

自分の声のあまりの小ささに気付き、ワツツは無理矢理、あらん限りの声を張り上げた。

「退けッ！」

池の縁を走りながら、怒鳴り続ける。

「身一つで構わねえ！ 走れ！ 固まるな！ 散れ！ 三人一組だ！」

兵士達が森へと走り込んでいく。三人一組になれているのかどうか、判る状態ではない。

しかしそれもどうでも良かつた。

一ヶ所に固まつたままあれを——あの「息」を食らつたら、終わりだ。

「行け！」

叫びながら、ワツツは再びぐるりとその場を見渡し、そしてそれを見た。光の柱が、静かに消えていく。

それに取つて代わるように——丘の上に、巨大な翼が広がつた。

闇よりも深い漆黒。

長い首がゆづくりと持ち上がる。

その爛々と燃える両眼。

ワツツは、立ち止まつた兵士達は、全身が石と化したかのようにその様を眺めている。

丘の上で、黒竜は立ち尽くす兵士達を睥睨し、世界を切り裂くように咆えた。

目の前にいるのは一分の隙もなく制御された軍人ではなく、彼等もまた生身の一個人なのだと、改めて告げられているようだ。

「悪いが、このまま歩くぞ。夜までに距離を稼ぎたい」

「おい、ガキ。疲れたんなら俺がおぶつてやろうか」

後ろを歩いていたチエンバーという兵士が、レオアリスの肩を叩いた。四十前後の気の良さそうな顔をした男だ。

「……いいよ。来る時は坦いで連れて来られたから、体力は残ってる」

「それだけ憎まれ口を叩けるなら大丈夫だな」

もう一人、ウェインという兵士がにやりと笑って、今度は背中を叩いた。

彼はチエンバーより少し若い位だろうか。一番若いのはクーガーで、まだ二十代前半のようだ。ただ、彼等の間に序列があるようには見えない。

クーガーは彼等とレオアリスとを見回すと、一つに束ねた髪を振つてまた歩き出した。

「さあ行こう。まだ歩き出したばかりだ」

クーガーの言葉通り、まだ彼等は宿营地からそう遠くない場所にいた。耳

を澄ませば、兵士達が立てる鎧の金属音が微かに聞こえる程の距離だ。
四人は森を南に抜けようとしていた。それが街道に出るには一番早い。

「俺達は運がいいぜ。お前を送るつて理由で一足先にこの森を出られるからな」

チエンバーがおどけた様子でそう言うと、後ろのウェインも頷いた。

「帰つたら暫く来たくないねえ。いっそ東軍に行きたいぜ」
「そしたらお前きつと、ワツツ少将と辺境軍だぜ。第七のシスファン大將の下で訓練受けるか？」

「それじや黒竜の方がマシじゃないか」

他愛のない会話を織り交ぜながら、それでも足を緩める事なく、樹々の根の盛り上がった森を進む。彼等は平静を保ち面に表しはしなかつたが、心の底にはやはり怯えがあった。誰も、実際には黒竜に会つた事はなく、その脅威に直に触れた事はない。それでも、静まり返つた森は口を開ざすと彼等に迫つてくるようで、その奥に黒竜の眼が燃えているように感じられる。

「——あ、いや、大丈夫……」

レオアリスは息を詰めていた事に気付き、ゆっくりと吐いた。

少し眉を潜めたクーガーの声には、レオアリスの様子を慮る響きがある。一番最初にレオアリスを捕えた時の、あの取りつく島もない印象とは全く違う事に、レオアリスは戸惑いも覚えた。

（そんな事、俺にできる訳がない）

（『劍士』）

（『国を救えるとしても？』）

（『そんな事、俺にできる訳がない』）

（『本当に？』）

（『言い切れるか？』）

レオアリスの心中には、否定しようとする自分を俯瞰するもう一人の自分がいて、ワインスターの言葉に重ねるように、容赦なく問い合わせてくる。

『一大隊を持つてしても、黒竜を斃せるかは判らん』

——黒竜を倒せ。

（そんな事、無理に決まってる！）

何もしないで、逃げるのか？

（そうじやない！ 倘じやなくたつて）

『可能性を』

息苦しさを覚えて、レオアリスは傍らの樹の幹に手を付いた。

可能性など、そんなものがどこにあるのだろう。誰が決めるのか。

「おい、大丈夫か？」

はつと顔を上げると、クーガーが足を止め、レオアリスを覗き込んでいる。

「顔が真つ青だぞ」

「——あ、いや、大丈夫……」

レオアリスは息を詰めていた事に気付き、ゆっくりと吐いた。

少し眉を潜めたクーガーの声には、レオアリスの様子を慮る響きがある。

一番最初にレオアリスを捕えた時の、あの取りつく島もない印象とは全く違う事に、レオアリスは戸惑いも覚えた。

こうして他愛のない会話を交わす事で、日常の中に身を置こうとしている

のだ。隠しきれずに伝わってくる彼等の焦燥感は、レオアリスに幾度もワインスターの言葉を思い起こさせた。

レオアリスが黙り込んでいるのをやはり恐怖からだと思ったのか、チャンバーは彼を構う事にしたようだ。

「ガキ、お前」

「レオアリス」

「レオアリスか。お前は何でこんな場所に来たんだ?」

チャンバーは歩きながら、レオアリスの後頭部に話し掛けた。レオアリスも振り向かずに答える。

「御前試合に出ようと思つて」

「御前試合——?」

遠慮の欠片もなく吹き出したのはウェインだ。チャンバーは呆れたように首を振った。

「お前が御前試合だつて? うちの坊主と同じ位の年じやないか」

子供がいるのか、と、それは何となく意外だった。家庭がある。それなら

「……あんたのとこの息子は知らないけどさ、そいつにだつてやりたい事はあるだろ? 年なんか関係ない」

そう言つたものの、結局レオアリスは宝玉を手に入れないと、森を出る為にこうして歩いている。カトウシユ森林が封鎖されている以上、もう御前試合に出る道は無いように思えた。

(結局何もしてないな……)

勇んで村を飛び出して、ただ帰るだけ。

ワインスターに問われた事からも、逃げて——。

(逃げてる訳じゃない。元々そんな事できる訳ないじやないか)

言い訳がましく響くのは何故だろう?

チャンバーはレオアリスの様子に気付かず、感心したように溜息をついた。

「しつかりしてるなあ。うちはまだ、かみさんの手伝いもしないで遊んでばつ

かりだよ」

それが妙に悲嘆の籠もつていたから、ウェインが笑つた。

「父親の背中見て育つからなあ」

「そういうお前のところはどうなんだ。もう十位になるだろ?」

「まだ六つだよ。まあでもうちの子も遊んでばかりさ。言う事は聞かないし、散らかすし、こっちが疲れてる時にも構え構えで適わないしなあ」

そう言いながらウェインの声は決して本気で嫌がつてはいるようではない。

その後二人は、父親の威厳や、妻と黒竜どつちが恐いか、などとひとしきり議論を交わして笑い合つた。お互いの話に気が済んだのか、今度は先頭を歩くクーガーに矛先を向ける。

「そういうえばクーガー、お前まだ独身か。さつさと身を固めろよ。いいぜ、家庭は」

「あんたの方の話聞いてると、結婚に夢が見れないんですけどね」

呆れた返事にも、二人は動じる様子はない。「ひつくるめて全部、いいもんさ」などと言って、レオアリスになあ、と同意を求めた。

「なあつて言われてもな……」

彼等の会話は、他人であるレオアリスにも暖かさを感じられるものではあつたが、同意を求められても困る。

「お前の両親だつて似たようなモンだろ?」

「……さあ

不明瞭な返事に、チャンバーは少し眼を見張つた。

「さあつて」

「知らない。両親つていなかから」

二人は急に黙り込み、チャンバーなどは特に気まずそうに頭を搔いた。

「悪かつたな……」

「いや、別に……じいちゃん達がいるし。気付いたらなかつたつて感じだから、あんまり気にしてないんだ」

「そ、そつか」

あまりに二人が決まり悪そうに肩をすぼめたものだから、逆にレオアリス

の方が悪い事をした気持ちになった。

実際、レオアリスは両親がいない事をそれほど気にした事はない。冷たいと取られるかもしれないが、物心ついた時には周りには祖父達だけで、村には他の子供はいなかつた。幼い頃は「親」という機能そのものを知らなかつたと言つていい。

それに村人達は非常に愛情深く、時には厳しく、実の親にも劣らない態度でレオアリスを育ててきた。だからレオアリスは、親がない事を寂しいと感じた事はほとんど無い。

「死んだとも言われてないし」

(――聞いてないし)

以前、ずっと幼い頃には、祖父に尋ねた事もあった。けれどカイルがひどく悲しそうな顔をしたから、聞いてはいけないと、そう思つたのを覚えている。

「どこかにいるかもしれないし――」

今更だが、考えてみればレオアリスは自分の出自を知らない。

何故両親がいないのか。

何故、祖父達と姿形が違うのか。

何故、祖父達は、何も言わないのか。

「――」

(俺は――)

ふと思つた。

自分は、何者だろう?

どくん、と鼓動が鳴る。

自分のものであつて、自分のものではないように、その音は響いた。

「そう言えば、御前に出るつて――なにで出るつもりなんだ?」

クーガーが珍しく話題に乗つて来る。話題を変えようと思つたのだろう。レオアリスは、なにで、という言葉の意味するものを一旦考えて、手段を指しているのだと理解した。

「術だよ。俺は……術士なんだ」

「へええ！ 術士様かい」

「リンデール中将と同じか」

レオアリスの口調はどこか言い張るような響きがある。クーガーは捜索時の情報を思い出したのか、ああ、と納得したが、チエンバーとウェインはとにかく感心して顔を見合させた。

「リンデール？」

「さつきのきつつい姉ちゃんだよ。あの人は軍の法術士団の法術士だ」

クーガーが代わつて答える。

「法術士団……」

「軍の術士は隊に配置されないで、別編成なんだ。状況に応じて能力の見合つた術士が派遣される」

「お高く止まつてるのが多いけどな」

「リンデール中将は何だっけ」

「転移とか、眠りとか、あと盾だ」

「羽翼系？」

耳慣れない言葉に、三人とも聞き返した。

「うよく？」

「補助つて事だ。支援系全般の術」

「ああ、そういうのか？ へえー」

ウェインはまた感心した顔をする。

「まあそういう補助つてのも有難いは有難いけど、折角なら黒竜を斃せる術士を派遣してくれりやいいのになあ」

「お前どうだ？ 御前に出ようつて位だからいけないか？」

「黒竜を斃せば、それこそ英雄だ。地位も名譽も黙つてたつて転がり込んで」

「無理に決まつてるだろ！」

自分が発した言葉の強さに気付き、レオアリスは顔を逸らした。

「――普通無理だよ」

「冗談だつて」

彼等にしてみれば、元から本気で言つてゐる訳でもない。そもそも彼等は

レオアリスがワインスターから言われた事を知らなかつたし、まだ十四歳の少年に黒竜と戦わせようなどと本気で言う者がいると知つたら、それが大将であつても怒つただろう。

それより、とにやりと口元に笑みを浮かべて、チエンバーはレオアリスに近寄つた。

「公女の為か？」

「公女——？ ああ」

一旦きよどんと見返してから、アナスタシアの事を指しているのだと氣付き、レオアリスは複雑な顔をした。

「御前で優勝すれば、少しほは見合つた地位が手に入るもんなあ」

「ああ、だから御前試合なんて考えたのか」

「そりやそうだ。今まんまじや高嶺の花過ぎる」

「へええ、泣ける話じやないか」
まだどうとも返事をしない内に、二人はすっかりそのつもりになつてレオアリスを両側から挟んだ。

「気に入つた！」

「よし、応援するぜ」

「もう手ぐらい握つたか？」

「——そんなんじや」

「照れるなつて！」

「心配すんな、さつきの見てりや、絶対脈有りだ！」

ばん、と同時に背中を叩かれて噎せ反り、レオアリスは少し恨みの籠もつた視線を両側に向けた。

「……あんたら、そういうの好きだな……」

ワツツといい、こんな時だというのに妙に楽しそうなのは何故なのだろう。「気にするな。軍なんて場所、そういうのしか楽しみが無いんだ。他人の話はいい暇潰しだよ」

クーガーは年配者二人を呆れた眼で見やつておいて、それから顔を寄せた。「で？」

「——」

黙りこんだレオアリスをどう取つたのか、耳元でこつそりと声を落とす。「お前ちゃんと、手順考えろよ。手ぐらい握つとかないと、その先なんて到底無理だからな」

「で——」

狼狽えたレオアリスに、クーガーは経験者らしい余裕の笑みを浮かべた。

「照れ臭いのは判る。俺も初恋は初々しかつたもんだ」

「照れてねえ！ 大体、手順も何も、あいつとは昨日の夜に会つたばかりで、公女とかそんなのだつて俺は知らないし」

「マジか！」

「じやあさつきいきなりかよ」

「出会つた途端に引き裂かれるのか、泣ける話じやないか」

今度は同情に満ちた三対の眼が集中する。そもそもレオアリスは、まともに反応するのを止めようかと思い始めた。要は本当に暇潰し——というより、乗れる話題があれば何でもいいのだ。

「……いいけど。どうでも」

「そんなすぐ諦めるもんじやない。俺のかみさんは初恋だ。別の男とかみさん争つてなあ。いわゆる三角関係つてヤツだよな」

「三竦みの間違いじやないのか、ウエイン。顔に似合わねえ事言つて少年の夢を壊すなよ」

「顔はいいだろう」

「髭づらがか」

「これは嗜みだよ」

「熊に見える。森で会つたら矢を射られるぞ。あ、ここ森か。——気を付けろよ」

「誰がだ」

「そんな他愛ない、終わりなく続きそうな会話は、唐突に破られた。

突然、ずしん、と下から突き上げるような振動が走つた。

「何だ？！」

今までの和やかな雰囲気は消し飛び、三人は瞬時に兵士の顔に戻った。緊張を張りつかせ、剣に手をかけて周囲に視線を投げる。だが折り重なるように立ち並ぶ樹々の奥には、何も異変を探し出す事ができない。

「おい……」

擦れた声で背後を指差したのは、ウェインだ。

その指先を追つて——全員が凍り付いた。

頭上の枝葉の隙間から、白く輝きを放ちながら空へ吹き上がる、光の柱が見える。

「何だ、ありやあ——」

ウェインの声は囁きに近い。

宿营地にまだいるであろう部隊の、微かな争乱の響き。

振動がまた彼等の足元にまで伝わる。一度、二度。

再びしん、と静まり返つた次の瞬間——

大気をつん裂く咆哮が響いた。樹々の枝葉を揺すり、幹を軋ませる。

僅かな沈黙の後、クーガー達は声を震わせた。

「まさか」

「宿营地だ」

「まだ部隊はあそこにいるぜ」

凍り付いた顔でお互いを見回し——、次には彼等は身を翻した。

「ちくしょうッ、戻るぞ！」

顔は既に蒼白にも関わらず、クーガー、チャンバー、ウェインは一齊に来た道を駆け出した。

「ま——待て！ 戻つたら」

「坊主、お前は逃げろ！ 真っ直ぐ南に向かって走れ！」
クーガーが首を巡らせ、レオアリスに行けと腕を振る。

「ま——」

レオアリスは茫然と立ち尽くした。

(何で)

感じたのは、当然の疑問だ。

今まで彼等は怯えていたはずだ。彼等が戻つたところで、何が変わる訳でも無い。

先程まで家族の話をしていた——早く森を出る事を考えていました。

それなのに、躊躇もせず、何故戻ろうとするのか。

『国を救えるとしても？』

そう考えたからとは思えない。咄嗟にそんな事を考える余裕などない。おそらく彼等の頭にあるのは、あの場に残る仲間達の事だ。

彼等は自分にできるかできないか、そんな事は問題にしていなかつた。

どくん、と鼓動が身体を打つ。鼓動がレオアリスを急かすように問い合わせてくる。

お前はただ立ち止まるだけか？

自信が無いと言つて、できない事を言い訳に、何もしないのか？

あの商隊を野盗が襲つた夜がふいに思い浮かんだ。あれはまだほんの二日前の事だ。

あの時のように、何もできない自分に歯噛みして、膝を抱えるだけか。

レオアリスは唇を噛み締めた。

剣士だとか、そんな事は知らない。

ただ、今この状況ではつきり判つてゐる事は、剣士などではなくても、レオアリスには術を使う事ができるという事だ。可能性というならそこだ。

『国を——』

(関係ない)

そんな事が問題な訳ではない。

そんな途方も無い事ではなく、ただ自分ができる事があるなら——それがどんなに僅かな事であつても、何もせずに後悔するのは、もう嫌だった。

レオアリスはぐいと顔を上げ、彼等を追つて森の中を駆け出した。

遠くで、咆哮が響いた。

それは腹の底に、じわりと蠢く恐怖を引き起こす響きだった。

樹々に併するように、長く尾を引いて消えていく。

アナスタシア達は身動きもできず、宿营地のあるだろう方角を見つめていた。

最初に我に返ったのはリンデールだ。途切れていた詠唱の、最後のひとひ

らを紡ぐ前に、アナスタシアの名を呼んだ。

「アスター様！ お早く——陣を発動します！」

兵士がアナスタシアの腕を引く。

「公女、どうぞこちらへ。すぐにこの場を離れます」

もう一人が蹲つたままのアーシアを抱き抱え、足早に法陣へと向かった。

見渡した全員の顔に、恐怖と焦燥が見て取れる。だが彼等はアナスタシアが

法陣に入るまで自分達は入ろうとはせず、じつとアナスタシアを待っている。

「私は」

ここで帰るのは、正しい選択だろうか？

自分の為に森に入った彼等を置いて。

あそこにはまだ、レオアリスもいるはずだ。

（違う……）

もう状況は違う。迷う時でもない。

アナスタシアの瞳に見えているのは、暗闇でも、選択肢ですらない。

たつた一つ。

アナスタシアは瞳に、躍る炎を宿した。

「発動させる！ 連れしろ！」

「公女、さあ」

兵士に促されるままに、法陣へと歩み寄る。円の内側、ぎりぎりに立ち、

アナスタシアは背後の空を振り返った。

兵士達が全員法陣に入つた事を確認し、リンデールが詠唱を再開した。

再び、振動が伝わる。

兵士達が騒めく中で、アナスタシアはじつと詠唱を聞いていた。自分の横に蹲っているアーシアと瞳を合わせる。

リンデールが最後の詠唱を終えようとした、その時に——、アナスタシアは法陣を飛び出した。

「——お前達は帰れ！」

「公女！」

「アスター様！」

リンデールが叫ぶ。延ばされた兵士の腕を擦り抜け、彼を陣の中へ押しやつてアナスタシアはアーシアを呼んだ。

「アーシア！」

アーシアが身を震わす。瞬きの間に、彼の姿は青い飛竜に変わつて飛び、アナスタシアの背後に降り立つた。

「アスター様！」

リンデールが顔を蒼白に歪めた。もはや発動は止められない。既に法陣はアナスタシア達を残し、彼等を囲い込んで飛ばそうとしている。

法陣が白く輝きを増し、周囲を照らす。アーシアの濃紺の鱗がまばゆく光を反射した。

『貴方の意志で』

「これが、私の意志だ！」

リンデールと兵士達の姿が陽炎のように揺らめき消えていく。

完全に光が消え、彼等が消えた草地を束の間見つめてから、アナスタシアはアーシアの背に飛び乗つた。アーシアの長い首をぎゅっと抱き締める。

「アーシア、ごめん——飛んでくれ」

「どこなりと」

誰よりも黒竜の脅威を感じているだろうアーシアは、しかしアナスタシアの決断を喜ぶように笑つてみせた。

青い翼が風を煽り、彼等は震える森の上へ飛び立つた。

第八章

死の 頬

あぎと

触れたもの、全てを溶かす、死の息。

黒龍の頸あざとが、大きく開かれた。喉の奥に沸き上がる、白い光。

(来る――)

咆哮が薄く薄く、大気に溶けるように消えていった後も、ワツツや兵士達は呪縛をかけられたかの如く凍り付いていた。

丘の上に闇が降りたように翼を広げた、巨大な、黒燐の竜。

任務としてこの森に投入され、その影に怯えを覚えていながらも、彼等は本気では、黒竜が目の前に現れるとは考えていなかつた。あくまでも、それはお伽噺の中の恐怖だつたはずだ。

しかし今、お伽噺でしか有り得なかつたその存在が、目の前にある。

風が哭いた。

びようと顔に吹き付け、ワツツはゆるゆると腕を上げた。額に指先が触れ、吹き出た汗が氷のような冷たさを伝える。

軽口を叩く裏で黒竜の脅威を予測してはいたが、これほどまでとは想定していなかつた。

丘の上にあり眼下を睥睨する闇のごとき姿を眼にするだけで、身体の奥底から本能的な震えが止め処なく這い上がる。

(範疇を超えてるだと?)

自分が吐いた言葉が薄っぺらく思えて、ワツツは口元を歪めた。

そんな代物ではない。次元が違う。

(あんなもの……人がどうにかできる訳がねえ……)

黒竜が首をもたげる。ずらりと牙の並んだ頸あざとが空気を吸い込むように開かれ、胸が膨らんでいく。

何をしようとしているのか、判つていた。判つていてるのに、誰一人、まるで魅入られたように動かない。

竜の息。彼等竜族の最大の武器だ。先程大地を破つたそれを、再び放とうとしている。

炎、吹雪、水瀑、その特性により様々ある中で、この黒竜の息は、酸だ。

黒竜の頸あざとが、大きく開かれた。喉の奥に沸き上がる、白い光。

(来る――)

そう思つた瞬間、一条の光が放たれた。

轟音と突風が吹き抜け、ワツツは草の上に背中から倒れ込んだ。

だがその瞳は、見開かれたまま、光の走り抜けた場所に釘付けにされている。

無い。

そこにいたはずの、兵士達の姿が、光が抜けた跡にあつたはずの、森の樹々が――消えた。

大地は抉られ、その無惨な傷痕を晒している。

樹々が、大地が、ぐずぐずと溶けているのが見えた。その上に何かが点々と散らばっている。

じつと眼を凝らし、ワツツは呻いた。

溶け残った、兵士達の足だ。

恐怖に叫び出したい。だがそれは、塊のように喉に詰まつた。

恐怖の呪縛から彼等を目覚めさせたのは、ワインスターの叱責の声だった。西方軍第六大隊大将は池の縁に立ちはだかり、兵士達を見渡した。

「何をしているかつ！　退け！」

声に打たれて、凍り付いていた兵士達がはつと顔を上げる。

「もう一度来るまでには猶予がある！　森へ散れ！」

丘の上で、黒竜は再び、大気を体内に呼び込もうとしている。

「ワツツ！　貴様が動け！」

ワツツはバネ仕掛けが弾けたように身を起こした。兵士達を引き付けるよう、声を上げながら森へ走る。

「走れ！　立ち止まるな！　固まらずに走るんだ！」

兵士達がまだ呪縛を掛けられているように、じりじりと退る。それから、漸く駆け出した。

だが、もはや絶望的だ。

どこへ走ればあの息から逃れられるというのか。

光が黒竜の喉元を染めている。

ワツツの中に、諦めにも似た感情が込み上げた。

（誰も——）

生きては戻れない。

ふいに岩を鳴らすような雷鳴が響いた。森の中からだ。

「何だっ！？ 新手か……」

ワツツが棒立ちになつて音の方向へ視線を向けた時、森の奥から一直線に

走つた金色の光が、黒竜の身体を撃つた。

巨大な身体を雷光が爆ぜ、黒竜が金属を擦るような苦鳴を上げる。

「な、何だ——」

（法術——）

リングデールかと振り返つたワツツは、視界に捉えた姿に愕然とした。少し

前に送り出したはずの部下が、森の中から駆けてくる。

「クーガー、チエンバー！？ ウエイン！ てめえ等、何で戻つてきやがつ

た！」

「ここに部隊がいるのに、俺達だけ帰れません！」

クーガーはきつぱりとそう言つたが、ワツツは憤りのあまり、その肩を乱暴に掴んだ。

「馬鹿かつ！ 死にに来やがつて……てめえの任務はどうした！ あのガ

キを！」

「あいつ、すごいですよ、術が」

興奮した口調のチエンバーが振り返る前に、彼等の背後に、丸い光の陣が

浮かぶ。

そこから再び金色の光条が、黒竜へと走つた。

光は黒竜を撃ち、黒い身体が身を捩る。巨体がよろめき、広げられていた

翼が音を立てて地に落ちた。

雷を呼ぶ法術——雷撃だ。

驚愕の声と歎声が上がる中、ワツツの眼が消えていく法陣の向こうに、レオアリスの姿を捉えた。

「お前——」

走り寄り、先程のクーガーと同じように肩を掴む。

「一体何考えてやがる！ てめえ等は渝いも揃つて頭がねえのか！」

頭ごなしに怒鳴り付けられ、レオアリスはむつと睨み返した。言われなくとも、まだ心臓は早鐘を打つていて。森を走つたせいだけではなく、黒竜の姿を目の当たりにしたせいだ。

一撃目の雷撃が間に合つたのが奇跡に近い程、腕も声も震えて仕方なかつた。まだ残つてゐる震えを振り払うように、早口で言い返す。

「効いてんじやないか！ 第一、そんな事言つてないで早く皆逃げないと」「そりや」

確かに、レオアリスの放つた雷撃によつて、黒竜は倒れたのだ。それはワツツにも、先程までの絶望を上回る希望を与えていた。

どうにかなるかもしれない、と。

術は効くのだ。

一度退いて態勢を立て直し、強力な術士を呼べば。

（このガキの術だつて、捨てたもんじやねえ）

ふう、と息を吐いて気を静め、ワツツはレオアリスの肩を叩いた。

「礼は後から言う、とにかく退こう。仕切り直して術士を呼ぶ。それまでは

お前にや覺悟決めてもらうぜ」

ワツツの言葉が終わらない内に、レオアリスの顔が強ばつた。ワツツの肩越しに据えられていたその漆黒の瞳が、色を失つて見開かれる。

「何だよ……」

ぎくりりと凍りつき、ワツツは嫌がる身体を無理矢理振り向かせた。

食いしばつた歯から呻き声が洩れる。

丘の上で、再び黒い翼が広げられていく。

レオアリスの擦れた眩き。

「二発も入れたのに……起きる」

全く——効いていないのだ。

レオアリスの漆黒の瞳に、傷痕一つ無い巨体を持ち上げた黒竜の姿が映つた。

黒竜の燃える両眼が怒りを映して、真っ直ぐ向けられる。

レオアリスへ。

翼が羽ばたく。風が渦巻く。

ふわりと重量を感じさせずに、黒竜は宙に浮いた。

急激に黒竜の翼が視界一杯に迫り、レオアリスは身構える間もなく翼が煽る突風に吹き飛ばされた。ワツツやクーガー達、その周囲にいた兵士達も、黒竜の翼に煽られて樹々に、地面に叩きつけられる。

黒竜は森の樹々を苦もなくへし折って、レオアリスの前に降り立つた。

意識が飛んだのは一瞬だった。

自分が樹の幹に凭れかかるように倒れているのに気付き、レオアリスは地面に手を付いて起き上がるようとしたが、身体は意識から切り離されたようになく動かない。

(——何が……)

がしゅ、と何を擦るような音が響き、レオアリスは視線を上げた。

目の前に、爛々と光る眼があった。瞳の虹彩に黒と赤い線が交じっているのまではつきりと見て取れる。夜を束ねたような鱗が連なった顔は、レオアリスの身長よりも、まだ大きい。

「——

黒竜と真っ正面から対峙したまま、その両眼に魅入られたようにレオアリスは動けなかつた。遠くで微かに、声が響いている。

「……！」

(何だ——)

「……！」

ワツツが、地面に倒れたまま、レオアリスに向かつて叫んでいる。

(何言つてんのだ……?)

ワツツが頭上を指差して——
ふいに、音が戻つた。

「坊主！ 上だ！」

鋭い鉤爪が、レオアリスの頭上から振り下ろされた。

頭に閃いたのは、死の予感だ。鉤爪の、鋭利な光。

身体の裡で、鼓動が鳴つた。

レオアリスの中で、何かが急速に膨れ上がつた。

その場にいた誰もが、眼を背けかけ、——それから、黒竜の足元から青白い光が差すのを見た。振り下ろされた爪は光に触れた瞬間弾かれ、黒竜が身を反り返らせた。黒い血が吹き上がる。

耳をつん裂く音が辺りに響き——ワツツ達はそれが黒竜の苦鳴だと、後から氣付いた。

ワツツの足元の地面に、重い音と共に黒い塊が突き立つ。視線だけをそろそろと動かして、ワツツはその塊が黒竜の手から失われた鋭い鉤爪だと判つた。

その断面は、鋭利な刃物で断たれたようだ。

(——何だ)

黒竜の右手から、幾つかの爪が根元から失われ、血を滴らせている。ワツツはレオアリスを取り巻いている青白い光を見つめた。その光が黒竜の硬い鱗を断つたのだと、この場で理解した者がいたどうか。

声もなく息を呑んでいるワツツ達の視線の先で、レオアリスを包む光は、ゆっくりと薄れていく。

レオアリスは樹の幹に背中を預けたまま、死んだように動かない。鉤爪が当たつたのかすら、ワツツの位置からは判らなかつた。

「ガキ……」

呟いて、漸く駆け寄ろうとしたワツツの頭上から、黒竜が吼えた。

黒竜の眼が怒りと――驚愕に満ちて、自分の爪を落とした存在に向けられる。身を鎧う硬い鱗はこれまで永い時の中で、傷一つ受けた事はなかつた。

この存在は危険だと、黒竜は本能的に理解した。

黒竜はレオアリスを叩き潰そうとする代わりに、彼を避けるように巨体を引いた。あぎと頸が開かれ、喉の奥が光り始める。

(不味い……)

死の息を放とうとしている。

その破壊の力に対する恐れだけではなく、黒竜が怒りや痛みに我を忘れる事無く、最も確実な手段を取ろうとしている事実に、ワツツは慄然とした。

「――ちくしょう！」

チエンバーが剣を引き抜き、ワツツの横から飛び出す。

「待てッチエンバー！」

「あんなガキ見捨てるなんてできません！」

レオアリスは彼の息子と同じ位の年で、その事がチエンバーの身体を動か

した。チエンバーは黒竜の喉元目がけて剣を力の限り投げつけ、硬い鱗に弾かれるのも構わず倒れているレオアリスの元へ駆け寄る。

剣は黒竜の気を、僅かながら反らす役割を果たした。だが黒竜の動きが止まつたのは一瞬で、黒竜は走り寄るチエンバーへと首を巡らせた。

黒竜の太い尾が唸りを上げてチエンバーへ振り下ろされる。大地を碎く音が響き、土煙が上がった。チエンバーの身体が弾き飛ばされ、森の中に叩きつけられる。

「チエンバー！」

ワツツとウェイン達が駆け寄ろうとした時、ワインスターの声が走つた。

「斉射用意、一陣撃て！」

号令と共に數十本の矢が一齊に放たれる。驟雨のような矢の中で、黒竜は喉に湛えた光を飲み込み、鬱陶しそうに身体を振つた。

ワツツの視線の先、黒竜の向こうに、ワインスターは既に兵を横並びの三層に配置していた。一列目の兵が立ち上がり弓を構える。

「ワツツ！ 第二射と同時に走れ！ 救出する！」

「大将……」

ちらりとワツツの頭を過つたのは、何故ワインスターがレオアリスを――言つてしまえばただの子供を、危険を冒して救出しようとするのかという疑問だ。しかしその疑問を掴む前に、今はただ、レオアリスとチエンバーを救い出す事を選んだ。

「ウェイン、クーガー！ てめえ等はチエンバーのとこに行け！」

弓が引き絞られる。黒竜が兵士達へと向き直り、ワツツ達に背を向けた。

ワインスターの号令、弦が風を打つ音と同時に、ワツツは黒竜の足元へと走つた。黒竜の鱗に鉄の矢じりが弾ける音、次いで第三射の風切り音が響く。

黒竜の鱗に弾かれて落ちてくる矢を避けレオアリスの元へと駆け寄ると、ワツツは剣の鞘を払いながら、倒れているレオアリスの顔を覗き込んだ。目を伏せた顔はただ眠っているようで、一見しただけでは、どこも怪我などは無いように見える。

(一)

手を掛けようとして、黒竜の爪を落とした光が脳裏を過り、ワツツは一度びくりと手を引いた。それから舌打ちして一息に担ぎ上げる。

腕が切り落とされる事もなく、「当然だ」ワツツは呟いて、止め処なく降り注ぐ矢の音を背に森の中に走り込んだ。

「ウェイン！ クーガー！」

「ここです！」

樹々の向こうから声が上がる。彼等は少し離れた樹の根元にしゃがみ込んでいる。ワツツに向けられたクーガーの顔は蒼白だ。

「チエンバーは」

「い、息はあります。けど、動かせねえ」

ウェインの涙交じりの声に、彼の肩越しから倒れているチエンバーを覗き込み、ワツツは口元を引き結んだ。

あの尾をどう受けたのかはっきりは判らないが、左半身に重症を追い、左腕と左脚の骨が折れている。大量の血が身体と地面を染めていた。

「救護班を呼ぶ。何とか止めしろ」

「俺が行きます。少将はそいつを……そいつはどうなんですか？まさか」

クーガーが立ち上がり、ワッツが担いだままのレオアリスの顔を見つめた。

「安心しろ。多分目え回してるだけだ」「良かった。……そいつ——、いえ」

クーガーにもワッツと同様の疑問はあるようだったが、思い直したように口を閉じた。一度辺りを見回し、他に一人の兵士の姿も見えない事に苛立ちを浮かべ、また池の方向へと駆けていく。

「メンバー、しつかりしろ。すぐ救護班が来るからな……」

ウェインは引きちぎった布をメンバーの傷に巻きつけながら、彼の顔を覗き込み、絶えず声を掛け続けている。ワッツはレオアリスを地面に降ろし、ちらりと頭上を見上げた。樹々の隙間から見える黒竜は、矢の雨の中で、取り合うべきかどうかを考えているように見える。

少し鬱陶しいが、どうしようか？

そんな様子だ。

鋭い鉄の矢も鋭利な剣も、何百あろうと全く無意味だと、ワッツは改めて思つた。レオアリスの法術、それすら全く効いていなかつたのだ。

（引き付けて——それからどうすんだ……）

このままでは、ワインスター達が先に黒竜の息を受けるだけだ。

（このガキを優先する事に、何の意味がある？）

だが、確実に意味があるのだ。ワインスターがわざわざレオアリスに面会した事と、同じ意味が。

状況を掴めていないワッツには、分の悪い選択に思えたのは当然だろう。

レオアリスの身を取り巻いた光が黒竜の爪を断つた事で、ワインスターは既に確信し、そしてレオアリスの救出を優先させる事を決めた。黒竜を倒せる可能性をだ。

（あの光——あれが関係あるのか）

何故、黒竜の爪が光に断たれたのか。それは果たして希望と言えるのだろうかと、ワッツは思つた。

（希望——？）

ワッツの眼が黒竜の喉元に吸い寄せられる。

黒竜が大気を呼び込んでいる。

最早黒竜の氣を逸らす手立ても無い。あの一吹きで、宿营地にいた兵士達は搔き消える。その次は自分達かもしだれない。

（希望なんてあるか？）

ただ、もう慌てる氣にもならなかつた。

運良く生き残る者が何人いるのか——、二百五十の兵士達の中に。カトウシユを封鎖している、西方軍第六大隊の内に。その先をワッツは考えるのを止めた。

黒竜が現れた事に、司令部は気付いただろうか。だが、指揮を執るワインスターがここにいる。

（上手い具合に本隊の増援なんてねえだろうし、あつてもな）

万策尽きたと、ワッツが他人事のように思つたその時に——。

救いの手は、もう一度、差し伸べられた。

ワッツにそれは、空から火矢が降り注いだように見えた。

黒竜の身体を炎が包んだ。黒竜が身を捩り、吼える。

「下がれ！」

凛とした声と共に、黒竜の頭上に青い飛竜が滑り込み、ぐるりと旋回した。

「皆下がれ！」

アナスタシアが飛竜の背に立ち、再び叫ぶ。

「炎帝公！」

肌を焼くような熱を感じながら、兵士達が、ワッツもウェインも上空を振り仰ぎ、その姿を見つめた。

何度も度となく変転する状況に、初めワツツは事態が好転したのかすら疑つた程だ。

だが黒竜は、炎の中で苦しそうに身を捩つてゐる。翼の薄い膜の辺りが、炎に焼かれ、崩れ始めていた。

矢も剣も、雷撃すら通さない黒竜の鱗を焼く、紅煉の炎。

「——炎帝公か……」

ワツツはアナスタシアの振る舞いを諫めたが、それは自分の測り違いだつたと、そう思つた。彼女は確実に、アスターの炎を継いだ存在であり——炎を支配する、炎帝公だ。

「焼き尽くす！ 下がれ！」

凜とした声は、すでに将軍の風格さえ備えている。

離れていても感じる熱に、ワツツは数歩後退つた。ワインスターが池のほとりから、残つていた兵士を撤退させていく。

アナスタシアはアーシアの背からそれを見下ろし、再び作り出した火球を黒竜へと放つた。

新たな炎に包まれ、黒竜が身を振り、苦痛の咆哮が響く。炎は確実に黒竜の鱗を焦がし、厚い鎧の下の肉を焼いていた。纏い付く炎を振り払おうと黒竜が身を揺するが、炎は張りついて身から離れなかつた。怒り、苛立ち、焦り、そして恐怖——黒竜の混乱がワツツ達にも感じられる。

息を飲む兵士達の前で、黒竜の巨体が音を立てて地面に倒れた。炎を消そうともがき、池の中に転がり落ちる。炎の熱に触れ、池の水が水蒸気となつて激しく立ち上がつた。

大量の水は漸く、纏い付いていた炎を鎮めた。だがその上から新たな炎の矢が立て続けに降り注いだ。池の水が干上がるほどの水蒸気が、黒竜の姿を白く包み込む。

ワツツは啞然としたまま、その光景を凝視してゐた。目の前で展開されいるのは、最早自分達が踏み入る余地のない、別の次元の出来事だ。

もうもうと辺りを包む水蒸気の中で、叫び、黒竜は翼を広げた。風を煽り、まだ消え残る炎を翼に纏い付かせたまま、黒竜は飛んだ。

宿营地から驚愕のどよめきが起きる。零れ落ちる火の粉を雨のように振り注ぎながら、黒竜はアナスタシアに背を向けて、丘を目指した。

思わず森を駆け出て、ワツツは黒竜がよろめきながら飛ぶ姿を、信じ難い思いで見つめた。

「……逃げて」

あの強大な竜が、アナスタシアの炎の前に、尊厳すら捨てて逃げている。

青い飛竜がその後を追つて動いた。アナスタシアの横に幾つもの炎の矢が浮かぶ。それは彼女の瞬き一つで、逃げる黒竜目掛けて疾駆する。

矢が翼を撃ち抜き、黒竜はぐらりと体勢を崩した。そのまま地上に向けて墜ちる。

「やつた……！」

何という幕切れか——。

だが、歎声が響く中、一人厳しい目をしたのは大将であるワインスターだ。

「違う」

黒竜が丘に激突する。——いや、激突したかのように見えて、黒竜の巨体はそのまま丘に呑まれるように沈んだ。

黒竜が最初に姿を現わした時、酸の息で穿たれた穴が、黒竜の目指していたものだつたのだ。アナスタシアの炎から逃れ、黒竜は暗黒の空洞へと姿を消した。

一度退いただけだ。迂闊に追えば、黒竜の息に迎え撃たれる危険は高い。特に縦穴に入ったところで下から死の息を受けければ避ける事すらできない。

「アスター公！ 一旦お退きください！」

ワインスターが張り上げた声は、アナスタシアまで届いたようだ。丘に口を開けた巨大な縦穴の上で青い飛竜は一度旋回した。

「——何とかなつたかな。あれで斃せたと思う？」

自分で口にしながらそつは思えず、アナスタシアは眼下に、池の淵から森へ向けて走る死の息の傷痕を見つめた。その傷痕は森の中を、およそ半里は

続いている。

瞳を転じれば、黒竜の消えた縦穴は、傾いた陽の光が落とす影により黒々と口を開けていた。淵に向かって石や岩の欠片が滑り落ち、暗闇に飲まれていく。

深い闇の沈黙は、却つて不気味な空気を纏っていた。

「どうしよう……追おうか」

「いえ。一度お退きになつた方がいいです。もしかしたら、このまま封じる事もできるかもしませんし」

「うん——」

池の淵に立ち、アナスタシア達を見上げているのは、先ほどアナスタシアに退けと呼び掛けた相手だ。ワツツとは違うが、その傍へ駆け寄るワツツの姿も見えた。

「あがが中将か、大将かな。とにかく降りよう」

レオアリスはどうしただろう、とアナスタシアは眼下を見渡しながらその姿を探した。アナスタシアからは、レオアリスのいる場所は樹々に隠されて見えなかつたからだが、宿营地に残つた兵士達の間にはその姿は見当たらず、アナスタシアは息を吐いた。

（いない——もういないのかも）

安堵と、ほんの少し落胆を覚えながらも、アナスタシアはアーシアに視線を戻した。

「アーシア、降りよう」

アーシアが大きく旋回して池の淵に降りようとした時、アナスタシアは視線の端に、光るものを感じた。もう一度目を凝らすと、確かに光を放つている。

「アーシア、あれ！」

アーシアの瞳も、黒竜の落ちた穴の縁に、虹色に光る石を見つける。アーシアの瞳に、彼女の指が示す先を追つた。

「あれつて、もしかして……」

アーシアは頷いた。

「あがが宝玉です」

竜の息が凝つた宝玉——色を移ろいながら輝くそれは、今、他の石に紛れ斜面をゆっくり穴の縁へと転がっていく。

（レオアリスの——）

御前試合の出場資格だ。

あれを手に入れれば、レオアリスは御前試合に出る事ができる——

ゆっくり、光を弾きながら、宝玉は縁へ引き寄せられていく。

（落ちちゃう……）

それだけが頭を過り、アナスタシアは急かされるままに、アーシアの背を蹴つて丘の上へ飛び降りた。

「アナスタシア様！」

狼狽えるアーシアの声を背に、アナスタシアは斜面を駆け寄り、それから走るのさえもどかしくなつて斜面を滑り降りた。アナスタシアの身体を追うように、小さな石や砂が斜面を滑る。

縁に辿り着く前に、アナスタシアの右手が宝玉を掴んだ。

（やつた！）

「アーシア！」

アナスタシアは喜びに顔を輝かせてアーシアを振り仰いだ。アーシアが降りてくる。アナスタシアは宝玉を目の前に掲げた。

熱を持つているのではないかと思っていたが、ひんやりとしていて、確かに存在感が手のひらに感じられる。

「あいつ、怒るかなあ」

余計な手出しをするなど彼が怒ったのは、まだこの昼の事だ。それでも、こんな機会は二度と無いかもしれない。

「いいや、目の前にあつたんだし、何とか言いくるめて」

ぎゅっと大事そうに宝玉を握り締め斜面に立ち上がつた時、音を立てて亀裂が走つた。

足元が深い縦穴に消え、アナスタシアの身体もそのまま一度宙に浮いた。

瞳が丸く見開かれる。

伸ばした腕は掴むものないまま空を切り、そのままアナスタシアは落とした。

「アナスタシア様！」

一瞬の内に、斜面は縦穴に向かつて崩れ、砂煙を上げて雪崩落ちていく。

丘の斜面そのものが、岩を割るような破碎音と共に、次々と陥没する。

「アナスタシア様っ！」

アーシアは縦穴に飛び込もうとしたが、それよりも早く、注ぎ込んだ土砂が縦穴を塞いだ。

土砂に突き当たる寸前で身を躊躇し、アーシアは埋まつた縦穴の上で、茫然とその無常な光景を見下ろした。

「そんな……」

力が失われていくように、アーシアの姿が飛竜から、もとの少年の形に戻る。

「そんな……」

再び呟いて、アーシアは土砂の上に膝を付いた。

伸びした指が、砂を搔く。砂は容易く掘れたが、すぐに落ちかかり、搔いた跡を隠してしまう。

「アナスタシア様……」

砂を搔く。砂はアーシアの搔いた跡を容赦なく埋めていく。

「アナスタシア様——アナスタシア様」

掘れば、砂は落ち掛かる。両手で掘れば、その分の砂が落ちてくる。幾度となく繰り返す内に、爪に砂が入り込み、爪を割り、血が滲んだ。

アーシアは何度も何度も、何度も土砂を掘りながら——悲鳴を上げた。

兵士達が駆け寄りその身体を無理矢理引き離すまで、アーシアはずっとア

ナスタシアの名を叫びながら土砂を掘り続けていた。

天幕を出て、一度ワツツは天幕の中を振り返つてから、池のほとりに立て丘を睨んでいるワインスターに近寄つた。ワインスターはワツツを振り返り、短く問い合わせる。

「どうだ」

「意識を失つてゐるだけで、どこも負傷の跡はありません。ぱつと見、眠つてゐるだけに見えますよ」

ワインスターは頷いた。明らかに、その結果に満足してゐるように見える。

ワツツの後ろの天幕の中に寝かせられているのはレオアリスだ。まだ眼を覚ます様子はない。

ワツツは夕闇の落ちる池のほとりをぐるりと見回した。

目に映るのは混乱の跡——まだ恐怖を張りつかせた戦場の跡だ。そして黒竜が消えたというのに恐怖は消え去るどころか、更なる、拭いようのない絶望がそこにはある。

——アナスタシアは、黒竜と共に落ちた。

「司令部へは伝令使を飛ばした。早ければ未明には、王都から援軍が着くだろう」

呼んだのは法術師団の一隊だ。彼等が到着すれば——。

（黒竜を追撃するのか？ 封じるのか？）

どちらも容易くはない。追撃を選べば相当の被害を受けるだろう。下手をすれば再び黒竜は地上に戻り、この次は森から飛び立つかもしれない。

だが、安易に封じる事を選べる状況にもないのは事実だった。

落ちたアナスタシアの生死を確認できない以上、ただ黒竜を封じる事は、まだ生きているかもしれないアナスタシアごと封じる事になるかもしれないからだ。

まずはアナスタシアの救出——生きていれば、という考えをワツツは首を振つて打ち消した。救出には、必然的に地底へ部隊を投入する必要がある。満足な退路すらない、黒竜の領土へ。

(くそ)

ワツツにしてみれば、何度もぬか喜びさせられ、その都度事態は悪化する気がしていた。

そして今は、最悪の状況だ。

この状況から抜け出して、望める結果は一体何か。

ワインスターはしばらくワツツの顔を眺めていたが、おそらく考えていた事は同じだつただろう。元々ワインスターは追撃を考えて援軍を呼んでいる。

「……彼が目覚めたら呼べ」

そう言うと、ワインスターは池のほとりに沿つて宿营地を歩き始めた。ワツツはその名を呼び、振り返ったワインスターの厳しい顔に、一度唇を湿らせた。

「何だ」

ワツツの持つている疑問に気付いているはずだが、ワインスターは敢えて

問い合わせてくる。

「——あの少年は何なんですか？」

ワインスターは底冷えのする瞳をワツツへ向けた。

「お前もあの時、黒竜の爪を断つた光を見ただろう。あれは剣光——剣が纏う光だ」

ワインスターはワインスターの言う意味が掴めずに眉を潜める。

「知らないか。……あの少年はまだ自覚していないが、剣光は現れた。自己

防衛本能だろうな」

「大将。あんたが何の話をしているのか、俺にはさっぱり……」

「彼は剣士だ」

ワインスターは自分の放つた言葉の効果を測るように、じつとワツツに瞳を注いだ。ワツツが黙っているのを見て笑う。

「剣士を知らないのか？ 剣士とは戦闘種と呼ばれる種族の一種だ。その主な特長として、彼等は自らの腕などを剣に変化させる」

ワインスターはワツツが判つてている事を前提にした上で、まるで学生を前に説明する教師のような言葉使いをする。

「いや、それは知っています、知っていますが」

「ならば、どんな意味を持つかも判るだろう」

『可能性があるのかと思つて——剣士なら、黒竜を倒せるのか』

レオアリスがワインスターとの面会の後に、ワツツに尋ねた事だ。

大戦で西の風竜を剣士が倒したのは今も語り継がれる話で、剣士は子供の頃の憧れの対象でもあった。ワツツはレオアリスの問いを、そうした少年らしい憧れと期待だと思った。

だが、ワインスターがレオアリスに面会した時、彼が既にレオアリスが剣士だと考えていたのであれば、

ワツツはワインスターの意図を理解した。それはできればあまり理解したく無かつたものだとも言える。

「……大将、あんた本気で考えてんですか——。あんなガキに、黒竜と戦わせるつもりだつたんですか？」

ワツツは大将としてのワインスターを尊敬している。統率力も状況判断も、十分信頼に足る男だ。

だが、軍属でもなくまだ十四の子供にそんな事をさせるのは、どう考えても間違っているように思える。

ワインスターはワツツの批判の目にも、全く動じた様子はなかつた。

「可能性から考えれば、有効な手段だ」

「可能性——？」 ガキに負わせて、それが正規軍の取る手段ですか

問い合わせる早い口調に対し、ワインスターはわざとゆっくり、声に力を籠めた。

「ワツツ——。我々には義務がある。黒竜を封じ、国土を守る義務だ。その為には最も可能性の高い手段を選ばなければならんのだ」

最も高い可能性——？ ワツツの脳裏に、咄嗟にレオアリスを助けに走ったチエンバーの姿が過ぎる。

「……チエンバーは、そんな事を考えてあいつを助けに行つたんじやありますせん」

「お前は優秀な軍人だ。機転も効くし、部下を大切にする。——だが、甘い。

それがお前を少将に留めているのだ」

ぐつと唇を引き結び、ワツツは首を振った。

「……俺は、ずっと少将で構いませんよ」

ウインスターが何か言う前に、ワツツは一礼してその前を離れた。まだ騒いでいる兵士達の間を歩き、もう一つの天幕に向かう。チエンバーが手当てを受けている天幕だ。

天幕の布を繰り中を覗くと、包帯で全身を巻かれたチエンバーが横たわっている。交代で見ていたクーガーが顔を上げた。

「——骨は幾つかいっつまつますが、内臓が無事で。悪運強いですよ」

そう言つたものの、泣き笑いのような顔になり、クーガーは慌てて顔を伏せた。命は助かつたが、今いる医療班は足を落とす事になるだろうと告げられた。この先正規軍の任務をこなすのは難しいだろう。

ワツツはその横に座り、チエンバーの顔を覗き込んだ。

「ああ、俺達あ悪運が強え。——ガキに二度も救けられてなあ」

黒竜の息に呑まれもせずに、生き残った。何人命を落としたのか、まだ把握仕切っていない。

ただ、チエンバーのように負傷した者は少なかつた。皆あの酸の息に、瞬時に消えた。チエンバーの傷は逆に生々しい。

「チエンバー。俺が行きや良かつたなあ……」

ワツツはチエンバーの血の気の失せた顔にじっと視線を落としたまま、ぼ

そりと呟いた。クーガーも顔を上げずに呟き返す。

「それを言うなら俺ですよ。独身だ。このおっさんより身軽なのに」

「お前は先がある。こういうのは年功序列だ」

「そんなしようもねえ決まり、誰が決めるんです」

クーガーの非難の目に、ワツツは口をへの字に曲げる。

「ふん。じゃ、給料の多い順だ」

「……それなら納得します」

ワツツは鼻に皺を寄せ、あぐらをかいた両膝に手を付いて、それから頭をつるりと撫で上げた。凝つた力を抜くように肩を回す。

「ま、あんま湿っぽくてもいけねえ。チエンバーが葬式と間違えてあの世へ行っちゃう」

そう言つてワツツは重い身体を起こした。向けられた背中にクーガーが声を掛ける。

「ワツツ少将、いつ出るんです？」

「何が」

「俺も行きます」

「——」

クーガーは口元を引き締めて、ぐいとワツツの顔を見上げた。

「公女を助けに行くんでしょう。俺も志願しますよ」

「……余計な英雄根性はいらねえぞ」

「まさか」

クーガーはワツツの心を見透かしたように笑った。

「英雄にやなれません。そんなのはチエンバーが息子に自慢するだけでいい」

「——判つた。頭あ数えとくぜ」

ワツツは頷いて、天幕を後にして、外へ出て、もう一度肩を回す。

もう一つ、ワツツが気掛かりな眼を向けたのは、左の奥に設けられた天幕だ。そこは一番厳重で、周りに二名の兵士が立っている。内部は、今は眠つたよう静かだつた。

(どこもかしこも、堪らねえな……)

すっかり日は暮れかかっている。森から暗闇が手を伸ばし、池のほとりを染めようとするようだ。

振り向けば、黒竜が消えた丘は、まだ頂の辺りに最後の陽が差しかかり、橙色に浮き上がつていた。

第九章

声

青白い光が辺りを染めた。見つめる前で、拡散していた光は次第に集まり、ゆっくりと一本の剣を形作る。

長剣だ。

鞘はない。初めから、鞘は存在しない。

両刃の刃は白々として光を弾き、眼にする者の身を震わす。近寄るだけで、空気ごと切り裂かれそうだ。

青白い光が鼓動のように脈打つ。

その脈動を追う内に、ふと違和感を覚え、じっと眼を凝らした。

違和感の理由はすぐに判つた。

剣は一本ではなく、重なるようにして、全く同じ造りの剣がもう一本あるのだ。

二本の、青白く光る美しい長剣。

魅入られたように眺めながら、その柄に手を伸ばそうとしたが、どうして

も身体が動かなかつた。

剣を取りたい。

やる事がある。

剣を入れて、やるべき事がある。

剣は焦れるように明滅した。

剣もまた、彼が自分を手に取る事を望んでいる。渴望している。

顕現を。

身体が動かない。指一本上がらなかつた。

焦燥に煽られながら、明滅する剣を見つめる。明滅は次第に早くなる。

やるべき事があるのだ。

剣を——

『……呼べ』

レオアリスは跳ねるように起き上がりつた。
体全体で呼吸を繰り返し、肩が大きく上下する。

「剣」

呟いて、それから咄嗟に辺りを見回した。あの長剣の姿は、影も形もない。

「——」

冷たい汗が首筋を伝い、ぐいと手のひらでそれを拭つた。全身が指の先まで冷えきつていたが、胃の辺りだけが熱を持っている。

腹を押えるように手を当て、それからもう一度、レオアリスはぐるりと見回した。布で四方を覆つた——見覚えのある天幕だ。

「ここは」

物音に気付いたのか、天幕の布を捲り、男が大きな身体を半分入れた。彼にも見覚えがある。

「目え醒めたか」

そう言つたきり、男はじつとレオアリスに細い目を向けている。何かを告げようとして、それを迷つて見えた。レオアリスは彼の名前を思ひ出した。

「……ワツツ少将」

「んああ、……飯食うか」

「飯……？ 腹は、——減つてゐるけど、いや、それより」

胃は素直に空腹を訴えていたが、どうも胃の辺りが重く熱を帯びていて、あまり食べたいとは思わなかつた。それより確かめたい事が沢山ある。

「それよりも何も、食い盛りのガキが我慢するもんじやねえや。待つてろ」
ワツツはそう言つてさつさと引っ込んでしまつた。

「あ、ちよつと」

まだ朦朧とした頭を押え、レオアリスは立ち上がりつた。記憶は曖昧で、自分が何をしていたのか、良く覚えていなかつた。

(夢――)

あの、青白く光を纏う剣。本当にそこにあつて、息づいているかのようだつた。

手に取りたいと、強く焦れるように思つた。

『剣士』

レオアリスは自分の両腕を見つめた。普通の、いつもと変わらない腕だ。力を込めてみても、何の変化もない。ぐつと拳を握り込み、暫くそうして、それからレオアリスは息を吐いた。

「夢だ」

剣士だと、そう言われたから、それで夢を見たのだろう。まだふらつく膝に力を入れ、ワツツの出でていった布を繰り、天幕を出た。

途端に目の前に広がつたのは、薄闇の中に兵士達の立ち働く姿と、幾筋も昇る煙、それから池のほとりから森へと走る、無惨な傷痕だ。

息を飲み――、記憶がどつと押し寄せる。

アナスタシア、ウインスターの言葉、森を歩いていた兵士達、雷撃、黒竜の巨大な姿――。

振り下ろされる爪の冷たい光まで、鮮明に思い出した。

まるでたつた今振り下ろされたかのようにびくりと首を縮め、レオアリスは宙を凝視した。

黒竜の姿はない。

身体を見回しても、どこにも怪我一つ負つていなかつた。

(あの後、どうなつたんだ……)

目の前に迫つた鋭い爪。切り裂かれると、そう思つたのを明確に覚えていられるのに、その後が判らない。何故助かつたのか。

そもそも、黒竜はどこに行つたのか。

記憶の奥で青白い光が揺らめき、鼓動がどくりと鳴つた時、傍らから声が掛けられた。

「気分はどうだ?」

振り返つた先にいたのはワツツではなくウインスターだ。ウインスターが

近付いてくる間、レオアリスは戸惑いながらじつと立つて、目の前に立つと、ウインスターも見上げるほど背が高い。ワツツほどではないが、それでも六尺は超えていて、頭一つほど違うレオアリスには圧迫感を感じさせた。

「……悪くは、ありません」

少し身を引きつつ取り敢えずそう答えたが、そこから先が続かない。昼に

ウインスターと話した時は、レオアリスはその問い合わせを否定し、ウインスターはレオアリスをある意味見限つたような状況だつた。

あの夢。

「――」

ウインスターはレオアリスの沈黙を別の意味に取つたようだ。

「警戒するな、と言つても無理か」

少し疲れているのか、ウインスターは口元を微かに歪めて笑つた。見れば濃紺の軍服は、すっかり砂埃に塗れている。大将としての威厳を損ねるものではなかつたが、その様は今の状況の一端を物語つていた。ウインスターが軽く息を吐き出す。

「取り繕つても仕方がないし、世間話をする間柄でもない」

ウインスターはちらりとレオアリスの肩越しに視線を投げた。ワツツが肩の張つた身体を揺らすように歩いてくる。

軍の携帯食料をいくつか持つて戻つたワツツは、天幕の前に立つレオアリスとウインスターの姿を認め、急に眉の辺りに慌てた色を浮かべた。手にした包みを懷に入れて素早く歩み寄り、ウインスターとレオアリスの間に入るようにして敬礼する。

「失礼します、大将殿。気が付いたらお知らせするつもりでありますがあくまでも飯をと思いまして」

そう言つてレオアリスを天幕に戻そうとしたが、ウインスターは構わず、切り込むようにレオアリスを見つめた。

「剣はどこにある?」

「こいつは今眼工覚ましたばかりです。いきなり聞いても何の事か判りませんよ」

ワツツはレオアリスを庇うように早口で言つたが、レオアリスの肩がぴくりと反応したのをワインスターは見逃さなかつた。

「——剣なんて」

「ワインスター殿、それはまた後で改めて」

ワツツは二人の間に身体を入れ、押し留めるように両の手のひらをワイン

スターに向けた。ワインスターはその肩を押し、一步近寄る。

「剣光が証明している。お前は剣士だ」

「剣光」

「青白い光——お前が持つ剣の光だ」

レオアリスが瞳を見開く。

「青——」

夢の、あの剣。青白い光を纏つていた——。

「でもあれは、夢だ。手に取れなかつた」

ワツツは細い眼をレオアリスの頬の上に視線を落とし、それから素早くワインスターを見た。ワインスターはレオアリスを見据えたまま、また一步身を寄せた。レオアリスは押されるように一步退つた。

「お前は既に事態に関わつた。最早知らぬで通る状況ではない。現に、チエンバーはお前を助けようとして重症を負つてゐる」

「ワインスター殿！」

思わずワツツは声を荒げた。

「——チエンバーって……」

レオアリスは血の氣の引いた頬を張り詰め、確認するようにワツツを見上げた。ゆっくりと、状況が飲み込めてくるにつれ、ワインスターの言葉が示す事実に、指先が冷えていく。

「重症……？　まさか、あの時」

「命はある。お前が気にする事あねえ、軍人である以上」

「この先、軍人としては働けまい。」

ワインスターはワツツの言葉を無情な程きつぱりと遮つた。

「大将！」

ワツツがワインスターを睨む。レオアリスは二人の前で、視線を足元に落としたまま黙つている。

「お前が剣を使えれば、黒竜を倒せる可能性は高まる。チエンバーの犠牲を無駄にしたくないなら、その努力をしろ」

「大将、あんたは」

「アスター公は黒竜と共に墜ちたぞ」

ワツツは太い腕を今にも振り上げそうになるのを押さえて、ワインスターに詰め寄つた。ワインスターはその様子を薄く笑つてあしらい、再びレオアリスに瞳を向けた。

「アスター公は黒竜とも皮肉ともつかない

面持ちで暫く見つめ、それから踵を返した。

「——待つてくれ」

レオアリスの声は驚きに張り詰めている。
「アスター公が顔を跳ね上げ瞳を見開いたのを、自嘲とも皮肉ともつかない面持ちで暫く見つめ、それから踵を返した。

「——待つてくれ」

レオアリスの声は驚きに張り詰めている。

「アスター公が顔を跳ね上げ瞳を見開いたのを、自嘲とも皮肉ともつかない面持ちで暫く見つめ、それから踵を返した。

黒竜と共に、落ちた。

どこに。

頭の中に、言葉が激しく明滅するようだ。

落ちた——アナスタシアが？

（何だ……、それ）

鼓動が気持ち悪い位はつきりと感じられる。色々な事が頭の中で交じり合つて、聞こえる。

「公は黒竜を退かせたが、ご自分も落ちられた」

ワインスターは半身を向け、レオアリスの瞳に答えるように足元、大地の下を指差した。

「——

「我々は援軍が到着次第、いや、地下へ潜る道を発見次第ここを発つ。お前がどうすべきか、考える」

レオアリスは棒を呑んだように立ち尽くし、再び歩き出したワインスターの後ろ姿を追っている。

ワツツは苛立ちを手のひらに押し潰した。爪が皮膚に食い込む。

ワインスターが何を目的にああ言つたのか、ワツツにも判つていた。好き好んで言つている訳でもないだろう。だが、負い目を負わせて無理に駆り立てようとするやり方は、ワツツには納得できなかつた。

レオアリスが剣士であつても、黒竜を斃せる保証はどこにもない。

「坊主、」

「——何があつたのか、教えてください」

「お前の責任じやねえ」

「ワツツ少将つ」

責任が無いと言われて、それで納得できるような話ではない事は、今のレ

オアリスにも判る。

「俺にだつて、責任はあるはずだ！」

その挑みかかるような視線に圧された訳ではないが、ワツツは暫く睨み合つた後、根負けしたように息を吐いた。

「……確かに、責任つづりは、知る権利はあるな」

特にチエンバーの事は、こうして知つた以上はいくら厳しい事実であつても、曖昧に済ますべきではないのだろう。

(全く、堪んねえ)

告げる方も告げられる方も、行き場の無い話だ。ワツツは心底ワインスターのやり方を恨んだが、今更言つても始まらない。

「……チエンバーは、あん時お前を助けようとして飛び出しやがつた。黒竜の尾を食らつたが、まあそれで生きてんだから強運だ」

「どこに……」

「——こっちだ」

ワツツはレオアリスを手招いて歩き出した。様子が気掛かりになつて首を巡らせれば、レオアリスはしつかりした足取りで付いて来ている。宿营地はさほど広くない。チエンバーのいる天幕はすぐそこだ。ワツツはしばし足を

止め、レオアリスの横に並んだ。

「何度も言うようだが、チエンバーが負傷したのは、何もお前のせいだけじゃねえ。お前は巻き込まれたようなもんだ。本来黒竜を相手にすんなあ正規軍の役目だし、俺達がお前を連れて来なけりやお前は黒竜に関わる事もなかつたんだからな」

そう告げる事がどれほどレオアリスの自責の念を和らげるのかは判らなかつたし、気休めにも聞こえないだろうと思いはしたが、ワツツは言い含めるように言葉を継いた。

「まあ、お前はだから、チエンバーに礼の一つも言つてやつてくれ。それでいいんだ」

それしかできないだろう、とはワツツは口にしなかつた。

「——

納得していないのがありありと判るレオアリスの顔を斜めに眺め、ワツツは深い溜息をついた。チエンバーが寝ている天幕の布を繰る。

ワツツの後から入ってきたレオアリスを見て、そこにいたウェインとクーガーは咎めるようにワツツに顔を向けた。二人とも、革の鎧を纏い手甲をつけ、出立の準備をしている。

「連れてきちまつたんですか」

「悪いな。——チエンバーは」

「今さつき、ちょっと目え開けたんですが、痛み止めが効いてるから半分寝たような感じで」

ワツツはレオアリスを促すのも忘れてさつとチエンバーの脇に座り、つい大きな声を出しそうになるのを抑えて早口に呼び掛けた。

「チエンバー、おい、……おい、聞こえるか？」

「また寝たんじや」

ウェインが覗き込もうと首を延ばした時、チエンバーは身動いで目を開けた。左はまだ腫れていて、片目を瞑つたような状態で、右目だけをワツツに向ける。

「ワツツ少将……」

声もまだ擦れがちで、漸く発している状態だ。身を起こそうとしたメンバーを制して、ワツツはメンバーの右側に座り直した。

「俺が判るか、メンバー」

「あんたはでかいから、嫌でも目に入ります」

チエンバーの擦れた軽口に、ワツツは笑つてゐるのだか泣いてゐるのだか

判らない、くしゃくしゃな顔になつた。

「……黒竜は」

「退いたぜ。もういねえ」

「良かつた……。俺は、生きてんですねえ。驚きだ」

「そうだ。ほんと強運だぜ、お前は」

「左足の感覚がねえや。無理ですかね」

ワツツはぐつと息を飲み、言葉を探した。

「……軍も現場だけじゃねえ。事務やつてもらうさ」

「事務か。死ぬ危険がなくていいですね」

笑おうとして咳き込み、身体を走った痛みに呻く。暫く、荒い呼吸の音だ

けが狭い天幕に聞こえていた。

呼吸が落ち着くと、チエンバーは天幕の中を探すように瞳を動かした。

「……あのガキは？」

まだ入口に立つたまま、レオアリスはびくりと肩を震わせた。

「姿が見えねえ……まさか、」

ワツツは一瞬、チエンバーの目が見えなくなつたのかと思ひぎよつとしたが、身動きできないチエンバーの位置からはレオアリスが見えないのだと気付いて、レオアリスを手招いた。

「安心しろ。お前はきつちり仕事したぜ。……ほら、こつちきて座れ」

手招かれてレオアリスは漸く近付き、その傍らにしゃがみ込んだ。近付けば、包帯を巻かれた身体は所々に血が滲み、より痛々しい。

ワツツがレオアリスの頭に手を置いて、ぐいとチエンバーの顔の前に突き出す。

「この通り無事だ。判るか？」

瞳を見開いたレオアリスの視線の先で、チエンバーは少し頬を緩めた。

「ああ——。良かつたなあ、怪我、無いか？」

「——俺は、大丈夫です」

何かを堪えるようにぐつと唇を引き結んだレオアリスを見て、チエンバーは口元だけで笑つた。

「泣くなよ、十四の男が」

「泣いてる訳じや」

「うちのガキも、そんな顔するからな」

親だから判る、と呟く。チエンバーはもう少し何か言いたそうだったが、薬が効いているせいだろう、また目蓋が落ちてきて、何度か眼をしばたかせた。

「まあ、親が泣くより、いいか」

そのまま眼を閉じると、すぐに静かな寝息を立て始めた。

レオアリスは暫く身動きもせずに息を詰めていた。詫びる言葉も感謝の言葉も、どちらも言い損ねたままだ。

離れ難いが、かといって何ができる訳でもない。ただそれはレオアリスが十四の子供ではなく大人でも、同じ軍人であつても変わらないだろう。できる事など僅かなものだ。その中で自分のできる何かを探すしかない。

(できる事……)

何だろう。何があるだろう。

剣。剣士。

術。術にも治癒の領域はあるが、レオアリスの技量では、怪我を癒す術など使えない。

(何が——)

レオアリスは黙つてゐる間ずっと、それを頭の中で繰り返していた。クーガーもウェインも適当な言葉が思い付かなくて、意味もなく鎧の結びを直してみたりしている。ワツツは太い溜息をついて、区切りをつけるよう

に膝を叩いた。

「さあ、もう寝かせといてやろうぜ。また後で話しゃいい」

一度エンバーの顔を見つめ、それから他の三人の顔を見回す。

「こいつは暫く王都の第一軍にやるつもりだ。王都ならいい医者がいるだろ

うからな。大将殿に話を通す」

誰に、というよりは自分に言い聞かせるようにそう言つて、ワツツはレオアリスの頭をくしやくしやにしてから立ち上がつた。

「そう言や、お前に飯持つてきたはずなのに、どこやつちまつたかな」

ワツツの手は空だ。

「自分で食つちまつたんじやないですか」

「ふん。——ああ、あつた」

ワツツは懷から干し肉の包みと潰れた麵麺を取り出し、暫く迷うようにレオアリスと見比べてから、ウェインとクーガーに差し出した。

「食うか？」

受け取ったクーガーが顔をしかめる。

「……なまぬるいですよ」

「味は変わらねえ」

「じや、何で俺達なんですか」

「ガキにこんなもん食わせて腹壊されたらまずいだろ」「部下にひどい仕打ちをする上官だなあ」

「ふん。ほら、いくぞ。狭い天幕に五人詰まつてたら息苦しくていけねえ」

そう言うとワツツはレオアリスの背中を押して立ち上がらせ、先に天幕を出た。

外はすっかり陽が沈み、黒々とした闇に包まれていた。宿営地は所々に篝火が焚かれていたが、その数も疎らで全て黒い傘で覆われ、足元を照らし出すのも覚束ない。

篝火を細くして傘で覆うのは、上空からの眼を極力避ける為だ。ただ、その目的を考えると、逆に僅かな灯りすら煌々と輝く真昼の太陽のように思える。

まだエンバーの姿を瞼の裏に残したまま、ゆっくりと息を吐き、レオアリスはその篝火に引き寄せられるように瞳を向ける。

瞼気に揺れる隠された炎は否が応にも、失われた少女を連想させる。

『公女は、黒竜と共に落ちた』

内心は尋ねたくはない。何かを知る事そのものが、これほど重く圧し掛かるものだとは、今まで考えた事も無かつた。

見ない振りはできないという強い思いの反面、これ以上、自分では何ともならない事を知りたくないという思いは確かにあって、起きた事を知らなければ、それは起こらなかつた事になつてはくれないかと、そう思った。

それでも、炎はレオアリスの瞳の奥で揺れる。

一緒に居たのは半日にも満たない。にも関わらず、その印象は鮮烈だ。奔放な炎そのもの。アナ斯塔シアと向かい合うと誰もが感じるそうした印象を、やはりレオアリスも抱いていた。

奔放だけれど、綺麗な炎だ。

最後に見たのは、今の瞼気な篝火のような、どこか傷付いたような顔だった。

レオアリスは思い切つたように口を開いた。

「……アナ斯塔シアは、本当に落ちたんですか」

レオアリスの表情は、内心の思いを押し殺すように張り詰めている。ワツツは闇を見透かすように眼を細めた。

「——落ちたのは本当だ。黒竜が酸の息で開けた穴に落ちた。」

レオアリスは両手を握り締めた。

「黒竜に？」

「いいや。アスター公は黒竜を追い詰めて落とした。落ちたのは、地盤の崩壊に巻き込まれたからだ」

「崩壊——」

夜に和らげられていても判る程、レオアリスの頬が蒼白になつた。心臓が早鐘を打つように激しく鳴つている。昼間見た、アナスタシアの顔が過る。最後に——

「でも、運良く……」

それは余りに、頼りない期待に聞こえた。地盤が崩壊して、その中に落ちた者がどうなるか。

ワツツはその頼りない期待を承知の上で頷いた。

「だから救出に行く。ただ、時間は掛かるかもしれない。縦穴はどこまで続いているたか判らねえが、入口が潰れちまつたのは確かだ。どうしようもねえ。」

今別の道を探してゐるところだ。ここらには古い坑道があるからな

レオアリスに向かた瞳は、闇と同じよう暗い。

「いつ行くんですか」

ワツツの目が陥しくなる。

「お前、まさか剣士なんて信じて、ついて来るつもりじゃないだろうな」「そんな事しないです。無理について行つたって足手纏いになるだけだ」

剣士だとウインスターがどれほど言つたところで、夢で剣を見たところで、

今現実にレオアリスの手に剣がある訳でもない。

その状態で一緒に行動し、また彼等を危険に晒して負担を掛けるのは、絶対にしたくなかった。

絶対にだ。

(そんな事はしない)

レオアリスの瞳に浮かんだ光は篝火のかぎろいに隠されて、ワツツは気付かなかつたようだ。

「それがいい。軍に任せな」

ワツツは暫く黙つて暗い池の向こうの丘を見つめていたが、息を吐くようになづいた。

「あの時、何で丘に降りたんだかな……。何かを取ろうとしたみたいだが、何だつてあんな時に」

ワツツのその言い方は、起つてしまつた事への苦い後悔のようなものだったが、レオアリスはそこに含まれた言葉に無意識に引き寄せられ、顔を上げた。

「……取ろうとしてたつて、——何を」

「そう言つてたんだ。混乱しちまつて判らないが、何か見つけて飛び降りたた。

「……取ろうとしてたつて、——何を」

「何かを見つけて、飛び降りた——？」

恐ろしい予感が、足の先から這い昇る。

今まで激しく打つていた鼓動が、ぴたりと止まつてしまつた気がする。

(……まさか)

『竜の吐いた息が』

アーシアの声が蘇る。眩暈を覚え、レオアリスは額に手を当てた。

『私が持つてきてやろうか』

『吐いた息が、凝つたものなんです』

再び、先程よりももっと激しく、鼓動が鳴り響く。

それを打ち消すように、アーシアの声が聞こえた。

『宝玉というのは、竜の吐いた息が凝つたものなんです』

黒竜が酸の息で空けた穴。

ぎゅっと眼を瞑る。レオアリスは怒りすら感じていた。

アナスタシアに対しても、自分にだ。

(何で——)

ワツツはアナスタシアが取ろうとしたものが宝玉だと、そう言つた訳ではない。だがレオアリスには、それ以外考えられなかつた。

(何で——)

「おい、どうしたんだ」

蒼白になつて拳を握り締めたレオアリスの様子に、ワツツが訝しげに近寄る。ワツツの姿を視界に捉えるともなしに捉えながら、ふと先程のワツツの言葉に引っ掛かりを覚えて、レオアリスは顔を上げた。

混乱してて。誰が？

混乱していくと、ワツツは確かに言つた。

「ワツツ少将、それ、誰から」

「お前真っ青だぜ。もういいから」

「誰から聞いたんですか！？」

レオアリスが何に反応してこれほど必死になつているのかが全く判らず、

ただ勢いに押されるようにワツツは口を開いた。

「……アーシアだ。従者の坊主だよ」

レオアリスは何かに引かれるように、ワツツに詰め寄つた。

「アーシアは無事なんですか！？　まさか、倒れて」

「倒れてはない。身体はなんともねえ。だが、精神的には大分参っちゃいる」

「——倒れてない……」

それまでレオアリスは、アーシアもアナスタシアと共に落ちたのだと思いつ込んでいた。

(アーシアが……)

アーシアが、ここにいる。

レオアリスの瞳が僅かに力を増した事に、ワツツは不思議そうな目を向けていた。

「どこに――会わせてください」

「駄目だ」

「ワツツ少将！」

「お前、もういいだろう。会つたって辛いだけだ。これ以上嫌なモン見る必要はねえ」

ワツツはきつぱりと首を振った。十分だ。もうレオアリスは辛い現実を見過ぎている。これ以上の辛い思いを、ただ巻き込まれただけのこの少年がす

る必要は無いと、ワツツはそう思つていた。

「お前だけじゃねえ、アーシアって坊主にしても、今は」

「今、会う必要があるんだ」

「せめて明日に」

「明日じや間に合わない！」

頑として譲ろうとしないレオアリスに、ワツツは暫くその顔を見つめた後、重い息を吐き出した。

「顔を見るだけだ。——来な」

た。

「ここだ」

ワツツは天幕の布を持ち上げ、レオアリスに入るよう促した。一步足を踏み入れて、レオアリスはぎくりと動きを止めた。

暗い天幕の中に、ぼんやりとした人影が見える。寝ているのかと思つていたが、アーシアは入り口に背を向けてじっと座り込んでいた。その後ろ姿は思わず息を飲む程、全く生気が感じられない。

首を垂れ肩を落とし、ぴくりとも動かない様子は、呼吸をしていないのではないかと思える。まるで人形が置かれているようだ。

「アーシア……」

「……表にいるぜ」

ワツツはそう言つて、持ち上げていた入口の布を戻した。

躊躇いがちに、レオアリスはもう一度、そつとアーシアの名を呼んだ。アーシアは身動き一つしない。

が頬にかかり、アーシアの表情を隠している。

「アーシア？」 大丈夫か？

ふと、膝の上に投げ出したアーシアの両手が目に止まり、レオアリスは息を詰めた。十本の指には包帯が巻かれ、その全てに、赤く血が滲んでいる。崩れた土砂を掘り返そうとした跡だ。

視線を上げると、アーシアの見開かれた瞳と視線が合つた。

ぎくりとして、それから、その瞳が自分を映していない事に気付く。

アーシアの瞳は何も映していない。瞬き一つせず、ただの硝子玉のようだ。そこにはあの穏やかな、柔らかな光の面影は全く無かつた。

「——」

アナスタシアを目の前で失つた事で、アーシアは全ての感覚を——、生命

すら手放してしまつたかのようだ。

アーシアと話す為に——尋ねる為に来たのだが、それはできそもなかつ

今更ながらに、何故自分はある時、宝玉などと余計な事を言つてしまつたのかと、怒りが沸き上がつてくる。

『剣光が証明している。お前は剣士だ』

胃の辺りがどくりと脈打ち、熱を増す。

青白い光を纏う長剣。

ぎり、とレオアリスは唇を噛みしめた。

（剣士だつて言うなら——）

初めからそうだと判つていたら——戦えたら、良かつたのだ。

チエンバーもアナスタシアも、アーシアも、もつと違う結果があつたのではないか。

（俺は、何にもしようとなかった……）

ワインスターの言葉を信じなかつたのはレオアリス自身だ。

あの時信じたからといって、何ができるかという保証もない。だが、今のレオアリスの頭にあるのはそんな事ではなかつた。

自分に抑えようのない苛立ちを感じる。殴り付けたい程だ。

ぐつと両手を握り込み、剣など現われそうもないその腕を振り上げ、足元に叩きつけた。

「ちくしょう……」

鈍い音にもアーシアはぴくりともしない。

「……俺が」

悔しい。

何もできない自分が。

誰かの苦痛を前にして、こうして苛立ちをぶつけるしか術の無い自分が。何よりも悔しかつた。

（——）

何の術もないとしても——

レオアリスは床に額を落としたまま、絞るように呟いた。

「俺が必ず、アナスタシアを連れ戻して来るから」

変化は劇的だった。

アナスタシアの名を聞いた途端、それまでぴくりとも動かなかつたアーシアが、唐突に叫び声を上げた。

「アーシア！？」

驚いて瞳を見開いたレオアリスの前で、アーシアはまるでそこがアナスタシアが落ちた場所だというように、ひたすらアナスタシアの名を呼びながら、布で覆われた床を搔き巻り始めた。

既に壊れていた爪先から、新しい血が飛び散る。

「アーシア！」

慌ててアーシアの身体を抱き止めようとして、思いもかけない力で弾き飛ばされた。

騒ぎに天幕の布を繰つて、ワツツが飛び込む。だが丸太のようなワツツの腕すら弾いて、アーシアは叫び続け、足元を掘り続けている。

涙もない叫びは悲鳴のようで、余りの悲痛な響きは、聞く者の心を驚掴みにして潰そうとする。

レオアリスとワツツは二人掛かりで漸く、アーシアを床から引き剥がした。床を覆う布は引きずるような血の跡を残して捲れ上がり、引きちぎられている。

「アーシア！ アーシアっ！ 落ち着けよ！」

レオアリスはアーシアの肩を掴み正面から覗き込んだ。だがレオアリスの声など全く届いていない。アーシアは虚ろに瞳を見開き、焦点の定まらない乾いた瞳を宙に向けてアナスタシアの名を叫び、尚も足元へ腕を伸ばす。

「アーシア、聞け！」

アーシアの手がレオアリスの胸を打ち、レオアリスは弾かれた。倒れ込んだそのまま、レオアリスは身を起こす。

「つ……アーシア！」

「無理だ、止める！」

ワツツは闇雲に腕を振り回すアーシアの身体を羽交い締めにして遠ざけようとしたが、レオアリスは腕がぶつかるのも構わず、もう一度アーシアの肩

を掴んだ。

「アーシア！ ——アナスタシアは生きてる！」

ぴくりとアーシアの動きが止まつた。唐突なレオアリスの言葉に、ワツツは唖然として、不安そうにアーシアの向こうにある顔を見つめる。

「おい……そんな事言って」

だがレオアリスはアーシアの意識を引くように、肩を搖さ振つた。本当はそれを告げる為に、彼に会いに来たのだ。

アーシアになら、それが判るはずだからだ。

「お前、言つてたじやないか！ アナスタシアがお前に力をくれてるって！」

アーシアの瞳に、微かな光が過る。レオアリスは術を紡ぐように、言葉に力を籠めた。

「お前が今、生きてるんだ。それは、アナスタシアからの力が途絶えてないって事だろ？」

息を飲み、事情を飲み込めないまま二人を見比べているワツツの前で、レオアリスは一言一言区切りながら、はつきりと告げた。

「だから、アナスタシアは生きてる。お前が一番、判るはずだ」

がくりと、アーシアの身体から力が抜ける。瞳の焦点がゆっくりと結ばれ、乾いた瞳に涙が沸き上がつた。

「……アナスタシア様……」

「そうだ」

黒竜の気配に遮られた事で、アナスタシアがあれ程近くに居ても意識を失つたのだ。アナスタシアが命を落としたとしたら、更にひどい事になるのではないかと、そう思い、ワツツの言葉に対しても疑問が生じた。

悲しみに打ち拉がれていても、今、瞳に光を宿したアーシアを前にして、レオアリスの予想は確信へと変わっていく。

「生きてるよ、絶対」

「——生きて」

完全に力の抜けたアーシアから、ワツツが腕を解く。

放心したような長い沈黙の後、アーシアは喉を詰まらせ、身体を丸め、堰

を切ったように泣き出した。

ワツツは戸惑つて、アーシアから離して浮いた手をどこへ持つていくべきかとあちこち動かす。

「おい、一体何なんだ。お前、何の話をしてたんだ？」

「——後で話すよ。俺、落ち着くまで暫くアーシアを見るから」

レオアリスの言葉にはどこか有無を言わさない響きがある。ワツツはレオアリスとアーシアを見比べ、躊躇いながらも頷いた。

アリスとアーシアを見比べ、躊躇いながらも頷いた。

「後で事情を説明してもらうからな」

「後で事情を説明してもらうからな」

そう言い指してワツツが天幕を出るのを見送り、レオアリスは再びアーシアに視線を戻した。アーシアはまだ身体を震わせて啜り泣いている。その嗚咽を聞いている間、レオアリスはアーシアの背中をなめていた。

次第に嗚咽は小さくなり、やがて呼吸を落ち着かせて、アーシアは身体を起こした。

「——すみません」

自分の状態をどれほど覚えているのか、アーシアは恥ずかしそうに顔を伏せている。

「謝る必要ない。——」

レオアリスはアーシアの腫れ上がった目元をじっと見つめた。深い疲労は見えるものの、先程までの抜け殻のような状態とは全く違う。アナスタシアが生きていると確信し、ただその事で、アーシアは血の通った存在になつた。

「アーシア、アナスタシアは」

確認するよう尋ねるレオアリスの言葉に、アーシアは眺めるように、力強く頷いた。

「力が、途絶えてません。本当に……アナスタシア様は——、生きています」ほつと息を吐き出し、レオアリスは知らず知らずに身体に込めていた力を抜いた。

「そうか——」

良かつた、と声にならないまま呟く。

「僕、助けに行かなくちや——」

「待てって！ 今言つたって、軍に任せろって言われるに決まつての」

レオアリスは立ち上がりろうとしたアーシアの手を掴んで止めた。

本当は軍に任せた方がいいのかもしれない。だからこれはレオアリスの勝手な思いだ。チエンバーのあの姿を見た時から、決めていた。

「軍に言う前に聞きたいんだ」

「え」

「アナスタシアがどこにいるか、お前は判るか？」

レオアリスの眼差しは、アーシアにはそれが判ると始めから信じている色がある。アーシアは暫く迷い、頷いた。

「多分、まだ丘の辺りに。近付けば、はつきり判ります」

「近付けば、か——」

レオアリスは眉を寄せ、口元に手を当てた。

それでは困る。近付かなければはつきり判らないのでは、アーシアがいかければ話にならないという事だ。

（カイなら判るか……？）

アーシアから視線を外し、天幕の向こうを透かし見た。

その先にある、丘。

唇を噛みしめるように引き結ぶ。

今は生きている事さえ確認できれば、それでいい。アーシアを連れていく訳には行かなかつた。

（別の入口も、カイなら軍より先に探せる）

そのやり方は間違つてゐるかもしれない。愚かなやり方かもしれない。ただ、例えはワツツに告げたら、彼はレオアリスが行く事を認めないだろう。

いつそワインスターにでも言えばいいのかもしれないが、軍と共に行動して、また自分を庇わせるのも嫌だ。剣士だと言われても、どうすればいいのかすら判らない。

それにレオアリスは、今すぐにでも探しに行きたかった。

「ありがとう——軍に言えば、対策を考えてくれるはずだから」

今軍に告げても、軍が動くまでにはまだ時間がかかるはずだ。今の兵力で

は、黒竜と対峙する決め手が無い。援軍が来ると言つていたが、まだその気配は見えず、地底への入口を探すのも、おそらくまだ時間が必要だろう。

(探索なら、俺一人の方が早い)

大勢でいくよりも、ずっと黒竜にも気付かれ難いはずだ。

できる限り早く、アナスタシアを見つけて、連れて帰る。

レオアリスは立ち上がった。

急がなくてはいけない。アナスタシアは生きているとはいえ、どんな状況かまでは判らないのだ。

ただ、生きている——、その事がレオアリスを急かし、力を与えていた。

アーシアはレオアリスの表情から何かを察したのか、色を取り戻した青い瞳をレオアリスに向けた。

「レオアリスさん、何をするつもりなんですか？」

「——」

黙っているレオアリスに膝を詰める。

「アナスタシア様を探しに行くつもりなんじや」

「そんなんじやない、俺は」

内心の焦りを隠して首を振つたが、アーシアには通らなかつた。瞳の奥に、暗い中でさえ強い光が過る。

「僕も行きます！」

「お前は駄目だ！」

「いや——そうじやなくくて、」

「行きます、一人でも」

「駄目だ、軍に任せて」

「嫌だ！」

激しく声を上げ、アーシアは光る瞳でレオアリスを睨んだ。

「——」

レオアリスはアーシアの瞳を見つめた。どんな言葉も自分の意志を変える事はできないと、そんな光がその瞳の中にある。そもそも、アーシアがアナ

スタシアを助けようとするのを、レオアリスに止める権利もない。

レオアリスはもう一度だけ、アーシアの瞳を見据えたが、それは止める為ではなく、覚悟を聞く為だった。

「俺は、確信なんか無いんだ。必ず辿り着いて無事助け出だせる自信だつてない。自分で行つた方がいいって、それだけだぜ」

「僕も、自分で行きたいんです。絶対に」

一筋の迷いもない瞳に、レオアリスは息を吐いた。

「——判つた」

アーシアは顔を輝かせ、深く頭を下げた。

「ありがとうございます！　すぐに」

「いや、軍にばれないように出ないと、止められちまう」

アーシアを落ち着かせるようにそう言つて、レオアリスは腕を組んで考え込んだ。

どうやつてここを出るか、それが問題だ。ここにいる彼等の目を誤魔化さなくてはいけない。アーシアと二人して出ていくとなると下手な嘘は通用しないだろうし、追いかけられて捕まつたらもうその後は、抜け出す事は不可能に近くなる。

「何かねえかな、上手く抜け出せて、追いかけられない方法……」

「寝てる時にそつと出るとか……」

アーシアの言葉に、レオアリスはきつぱり首を振つた。

「全員寝ないよ。絶対見張りが立つ。大体、寝るのなんて待つてられない——」

呟いて、レオアリスはあつと声を上げた。慌てて口元を抑え、天幕の入口

を振り返る。布が持ち上がる様子はなく、ほつと肩を落とした。

「レオアリスさん？」

「……いい方法がある。耳貸せよ」

アーシアは耳を近づけ、レオアリスの囁いた言葉に目を丸くした。

ワツツは天幕から出てきたレオアリスを見て、寄りかかっていた樹から身を起こした。

「どうだ？」

「もう、すっかり落ち着いてます。」

「お前、さつき言つた事、ありやどういう事なんだ」

ワツツはレオアリスがアーシアに言つた事をはつきり耳にしてしまつてゐる。そこを問い合わせられたら、一から説明しなくてはいけないし、もしワツツが信じれば、逆にレオアリス達はどこにも行けなくなつてしまふ。内心の焦りを押し隠し、レオアリスは用意していた答えを口にした。

「——あれは、アーシアがあんまり辛そだつたから、つい」

ワツツが細い眼を剥く。

「お前、何考えてやがる！ 下手な期待なんか持たせやがつて、もし」

「助けるんだろ？！ そう言つたじやないか」

「助けるぜ！ 諦めちやいねえ！ だけど、万が一って事がある！ 期待持たせて駄目だつたら、お前もう一度あの坊主を突き落とす事になるんだぜ！」

ワツツは本気で言つて、本気で怒つてゐる。もしかして本当の事を話せば、ワツツは協力してくれるかもしれないが、レオアリスはぐつと飲み込んだ。

「——すみません」

顔を俯けて項垂れたレオアリスに、ワツツは言い過ぎたと思つたのだろう。気まずそうに首を擦る。

「いや……俺もきつく言い過ぎた。——あの坊主が正気に返つたのは、まあ良かつたぜ」

レオアリスはワツツの眼を見ないように顔を背け、それはワツツからはまるで罪悪感に打ちのめされているように映つた。実際、ワツツには申し訳ないと思つてゐる。

「すみません……」「いや」

ワツツは更に視線を泳がせた。

「——頭を、冷やしてきます」

「どこに……」

「この中を歩くだけだから」

ワツツは溜息をついたが、頷いた。

「あんまり深刻になるなよ。自分一人のせいだなんて思う必要はねえんだ」

「——ありがとう。アーシアは、今寝てるから、暫くそつとしておいてやつてください」

罪悪感と緊張で高鳴る鼓動が聞こえそうで、レオアリスはワツツに背を向け、歩き出した。ワツツの視線がずっと自分を追つてゐるのが感じられる。

周囲では兵士達が思い思ひに座り込み、武具の確認をしていた。

（——いつ出るんだろう）

彼等はレオアリスが通りかかると顔を上げ、時折身体の心配をして大丈夫かと声を掛けてくる。ワインスターは彼等にまでは、レオアリスに対する考え方を言つていないのである、彼等の上には戦場に似つかわしくない少年に対する心配の色しか見えなかつた。

「——」

レオアリスは宿营地の端まで来ると、屈む振りをして、足元に印を描いた。

一つ。

再び、今度は宿营地の外側を回るように歩き、先程の場所から離れたところに、もう一つ印を描く。森の側に合わせて三つ。

（印は、五つ）

池の縁に向かう時に、アーシアのいる天幕が見えた。ワツツの姿はない。一瞬中に入ったのかと慌てたが、少し離れた場所にワツツの大きな身体がぼんやりと見えた。そこにいる兵士達と何か話している。（アーシアは、抜けたかな）

一度自分のいた天幕に寄つて、そこにあつた荷物を手に取つた。中にはしつかり、二つの巻物が入つてゐる。片方の、細い海老茶色の巻物を一度握り込み、それから袋に戻して、レオアリスは天幕を出た。

次に池の縁に向かい、立ち止まつて印を打つ。

四つ。

五番目の場所に足を止め、レオアリスは池の右手にいる兵士達と、左手の対岸にある丘を見比べた。それから膝を付き、最後の印を描く。

これで五つ。必要な印の全てを、宿營地を囲むように打ち込んだ。

立ち上がり、後ろへ数歩退る。袋から海老茶色の巻物を取り出し、そつと広げた。

クラリエッタから貰つた、眠りの法術だ。

そこに書かれた長い術式を、暗い中で眼を凝らしながら、ゆっくりと静かに読み上げていく。視線の先で、草の上に打つた印が微かな光を放ち始めた。

それと判つて見なければ見落としてしまう程の微かな光だ。おそらく術の対象に気付かれないように、印の光が抑えられているのだ。

(すごいな……)

純粹な感想のまま、レオアリスは印を見つめた。高度で強力な法術。

こんな事の為にクラリエッタはこの術を渡した訳ではないだろう。

この遣り方が本当に正しいとも、レオアリスは思つていない。

ただ、どうしても、一刻も早く、アナスタシアを見つけ出したかった。

声が風に乗る事のないように気をつけながら、レオアリスは術式を紡いでいく。

長い術式の半ば辺りまで紡いだところで、レオアリスは訝しそうに眉を顰めた。口にする術式から返る手応えが、いつもより薄い気がしたからだ。

印に眼をやれば、光はずつと続いている。法術が発動しようとしているのは間違いない。

(——何だろう)

上手く術と印が噛み合わない、そんな感じだ。じわりと胃の辺りの熱が増す。

不安を感じたまま、レオアリスは最後まで術式を読み上げた。じつと印と宿營地に眼を向ける。

印は光つているが、宿營地の騒めきはまだレオアリスの元まではつきりと聞こえてくる。

(まさか、失敗か……?)

印を打ち損ねたのか、術式を間違えたのか——。印を確認して回れば、その行動で怪しまれてしまうだろう。

(どうする)

もう一度術式を唱えるべきかと、レオアリスが巻物に視線を落とした時、ふわりと印から光が立ち上がつた。視線の先で、五つの細い光が上空に向かって柱のように立つてゐる。

(何だ！？)

「何が起つてんだ！」

宿營地からいくつも声が上がつた。騒めきがどんどん大きくなる。まだ術は完全に発動してはいないのだ。光も、思った以上に弱い。

(早く)

とにかく焦りを覚え、レオアリスは汗の滲む両手を握り締めた。今にも兵士達は、光の外へ飛び出してきそうだ。

(早く！)

唐突に、五つの光の柱から、それぞれの柱を繋ぐように光が走つた。光は壁のように宿營地全体を囲い込み、その中に閉じ込めた。

息を飲むレオアリスの前で、宿營地の騒めきが、次第に薄れていく。やがて静寂な夜の中でさえ、物音一つ聞こえなくなつた。

(——)

成功したのだ。どうも術式 자체が上手く組めていなかつたようで、あまり長くは保たないと思えたが、それでも良かった。

全身の力を抜いて、肺の中に溜まつた空気をゆっくり吐き出した時、背後で翼の羽ばたく音がした。

〔！」

振り返り、そこに居た青い飛竜にぎよつと身を固める。青い飛竜はレオアリスへと近寄ってくる。

(しまつた——もう、援軍が着いてたのか?)

だが、その背は空だ。誰も乗っていない。

レオアリスが身構えたのを見て、青い飛竜は一度首を傾げ、それから身を震わせた。啞然として見守るレオアリスの前で、飛竜はたちどころに少年へと姿を変えた。

「——アーシア……! ?」

「はい。僕です」

まだ驚きに瞳を見開いたまま、自分をじっと見つめているレオアリスへ、

アーシアはにこりと微笑み、それから真剣な青い瞳を向けた。

「行きましょう、レオアリスさん。僕が運びます」

「——ああ」

驚いている時間は、今は無い。戻ってきてから、色々な事を、二人に聞けばいい。

アナスタシアとアーシアに。

「少し離れた場所で、一旦カイに入り口を探してもらう」

アーシアは再び身を震わせ、その姿を飛竜へと変えた。青い飛竜に歩み寄り、その首に手を当てる。

身体の裡で、何かがレオアリスを呼ぶように急かすように、囁いている気がした。

青白い光で、遠いところで、レオアリスを呼んでいる。

まだ、とても遠い。

レオアリスは一度瞳を伏せ、それからアーシアの背に飛び乗った。

今はただ、アナスタシアを見つけるだけだ。

「行こう——」

第十章

闇を征く者と
標の光

ゆ

しるべ

一

シユへ向ける。私も」

ヴァン・ヴレッグが立ち上がるうとした時、再び伝令使が嘴を開き、まだ残っていた伝言が流れる。

『剣光を確認しました……例の剣士を使います』

打たれたように振り返り、ヴァン・ヴレッグはまじまじと伝令使を凝視した。

「北の——剣士を使うだと？」

全てを伝え終えた伝令使は、何事も無かつたかのように羽を啄ばんでいる。

デフは暫くじっと考え込んでいたが、ヴァン・ヴレッグの傍に寄つた。

「北の」というと、スランザール殿から情報のあつた者の事ですね？ 文書官長ジエリド・ラザールの報告によれば、まだその子供は剣士としての自覚はないという事でしたが

「そうだ、そのはずだ」

低く咳き、ヴァン・ヴレッグは顔を上げた。デフの骨ばつた顔を睨むよう問い掛ける。

「——剣光というのは、覺醒の兆しか？」

「はつきりとは判りませんが、それは考えられます。元々剣士という種族はある一定時期までは剣が現れないものだと何かの折に読んだ事があります」

剣士という種族への知識は、実はあまり広く知られていない。彼等が種として少數である事と、組織に属する事が少ない為だ。

デフの知識も書物上のものだが、ヴァン・ヴレッグの思案顔に、デフは決定を促すように頷いた。

「きっかけの一つには十分では。剣士の存在は心強い」

ヴァン・ヴレッグの上には、微かな動搖が見える。

「——問題が多すぎる」

「しかし、この状態では少しでも可能性があるのならば、それに賭けてみる事も必要です。その剣士が使える可能性があるなら」

「可能性ではない、奴は既に使うと明言している」

「剣士でしよう」

「言つても始まらない事だが、ヴァン・ヴレッグは頭を抱え込み呻かずにはいられなかつた。余りに早く事が動いた。封鎖をして状況を見るつもりが、西方軍、いや、正規軍全体にとつて最悪の結果を招く事となつた。

「閣下」

「判つてゐる、要請通り直ちに法術士団を向かわせよ。第四、五大隊もカトウ

「剣士だ」

デフは眉を潜めた。ヴァン・ヴレッグの顔にはデフの知り得ない事を原因とする懸念が存在している。

「閣下、どうなされました。剣士を使うのは良案ではないのですか」

「——」
ヴァン・ヴレッグはデフの視線から顔を逸らせていたが、やがて首を振つた。

「……いや。法術士団は封印の長ける者を中心に構成しろ。黒竜を弊すのは難しい。カトウシユに封じる。準備が整つたら、ボルドー中将を私の前へ呼べ」
デフは訝しそうな顔をしたが、すぐに敬礼して執務室を出た。

やがてやつて来た中将ボルドーはヴァン・ヴレッグの指示に驚きを覚えつつ、法術士団を率いて王都を後にした。

アナスタシアの周囲を、炎が取り囲んでいた。炎は丸く珠のように彼女を包み込み、途方も無い重量の土砂の濁流をその熱で溶かしながら、その濁流に飲まれる事無く、ゆっくりと土砂の中を落ちていく。

アナスタシアはその炎の球体の真ん中に、浮かぶように横たわっていた。長い漆黒の髪が遊ぶように揺らいでいる。瞳は固く閉ざされ、意識はない。

炎はアナスタシアの意志ではなく、炎そのものの意志で、己を統べる主を護つていた。

土砂は黒竜の開けた深い穴を埋め、炎の球体を抱き込んだまま、やがて動きを止めた。

ぱらぱらと顔に落ちかかる砂に、アナスタシアは細い眉を寄せた。小さく呻いて瞳を開ける。

「——」

二、三度瞬きを繰り返したが、眼に黒い板を貼られたかのように真っ暗で何も見えない。自分が上を向いているのか下を向いているのかも判らない程の闇だ。

「……アーシア……？」

アナスタシアは横たわったまま、躊躇いがちにそつとアーシアの名を呼んで、耳を澄ませた。

「アーシア……？」

いつだつてすぐに聞こえる筈の優しい声の代わりに、返つたのは温度の無い沈黙ばかりだ。

「アーシア」

三度目に呼んで、それからアナスタシアは自分に起こつた事を思い出した。

黒竜が落ちた穴の縁で宝玉を見つけ、それを取ろうとしたのだ。だが手許を探つてみても、どこにもそれらしきものは見当たらない。

「落としたのかも……」

そう、落ちたはずだ。

穴の縁が崩れ、落ちたのだ。雪崩れかかる土や砂に飲まれて——
アナスタシアは闇の中で瞳を見開いた。

「……ここ、どこだ？」

胃の辺りでじわりと不安が動いた。自分の今いる場所が見当もつかない。

土砂に飲まれたのなら、何故今生きてているのだろう。それともあれは夢だつ

ただろうか。

夢なら眼が覚めたのに、何故アナスタシアは返事をしてくれなくて、こんなに静かなのだろう。

動くのは怖かつたが、アナスタシアはそおっと身を起こした。

「アーシア……いないの？」

誰一人、コトリとも動く気配がない。

「誰か……」

反つてくるのは痛い程の沈黙だけだ。

「アーシア……ファーガス……誰か」

じわりと沸き上がる恐怖に叫び出しそうになつて、アナスタシアは懸命にそれを抑えた。叫んでもしまつたら、多分気が狂う。

それを抑えられたのは、彼女の持つ強い意志と、本能のお陰だ。

(落ち着かなくちや……)

不安が生き物のように、アナスタシアの中で蠢いている。

(落ち着かなくちや。落ち着いて)

早くなる呼吸を胸元に手を当てて抑え、アナスタシアはその言葉を繰り返し呟いた。

(落ち着いて)

まず、何か一つ、行動に移すのだ。何でもいいから身体を動かせば気持ちも落ち着く。

できる事を探し、指先も見えない暗闇を闇雲に手探りしようとして、灯りを点せばいいのだと気付いた。

アナスタシアにしかできない、アナスタシアならば簡単な事だ。

(灯り)

念じるだけで、ぼう、と辺りが明るくなつた。小さな炎がアナスタシアの指先でちらちらと踊る。

一瞬それすら眼に痛い程だつたが、次第に眼が慣れてきて、指先に灯した炎を頭の上に掲げた。

「——つ

目の前に照らし出された光景に、アナスタシアは息を飲んだ。
茶色い壁が自分をぐるりと、どこまでも取り囲んでいる。どこまでも思つたのは、それが球状になつてゐるせいだつた。

恐る恐る手を伸ばし、その壁に触れるど、土のざらざらした手触りが伝わつてくる。

少し溶けた——、熱で焙られた手触りだ。
「これ——」
ぐり貫かれたような球状の壁。焦げた跡。

それが何を意味しているのか、アナスタシアには判つてしまつた。炎が彼女を護り、降り掛かる土砂をその熱で防いだのだと、本能で理解してしまつた。

「嘘……」

自分が今居るのは、黒竜の開けた縦穴のどこか——。大量の土砂に埋もれた、地底のどこかだ。

アナスタシアは立ち上がり、震える手で壁を撫ぜた。手のひらに伝わる硬い感触も、夢の中のようによけて感じられる。何度も擦るように壁を探り、それから手当たり次第にあちこちを叩き始めた。

悲鳴を上げるのは嫌だつた。上げてしまつたら、耐えきれなくなるのが判つていたからだ。

ぐいと唇を噛み締めたまま、アナスタシアはどこにもない出口を探して壁

三

を叩き続けた。

その音も振動も土の壁は無情に吸い込んで、ぱちぱちという乾いて軽い音を立てるだけだった。

「何だ、これは——」

ぱちん、と乾いた音を立て、足元で踏み締められた枝が折れた。

「法術……」

自らも法術士である彼等は、すぐに敷かれていた陣を完全に切った。一人が短く術式を唱え、ぱちりと指を鳴らす。空気の弾ける鋭い音が、眠つている兵士達の耳元で次々と鳴り響く。

その音で眠りを解かれ、兵士達は飛び起きて呆然と辺りを見回した。彼等は自分達が眠つていた事を呟嗟には理解できていよいようで、宿营地の中を戸惑うような騒めきが広がる。

「法陣が高度な割には、未熟な術だな」

中将ボルドーは灰色の瞳を足元の印に向けた。百名近い人数を一斉に眠らせたにしては、印からはそれほどの力は感じられない。

「ワインスター殿の報告にあつた少年でしょうが。術士だという……いや、剣士かな」

先程術を切つた法術士、少将のシアンが興味深そうに印に屈み込んでいる。
「そうだろう。リンデール中将の他には術士は配備されていなかつたはずだし、この森に今他の術士がいるとも思えない」

「面白いですね。剣士が術を使うつて聞いた事がないわ。だから術が中途半端なんでしょうか」
「呑気に分析している場合か。問題は、この相手が何を目的に術を使つたのかだ」

『危険と判断した場合は封じろ』

西方將軍ヴァン・ヴレッゲはボルドーにそう指示した。それは黒竜だけで

はなく、剣士についてだ。ヴァン・ヴレッグは詳しい説明をボルドーに与えなかつたが、何故、というボルドーの疑問はこの状況を見て懸念に変わつた。

何の為に軍の行動を妨げるのか。レオアリス達の胸中も経緯も知らないボルドーが、軍に対する意趣があると考えたのも無理な話ではないだろう。

ボルドーは頬に厳しい色を浮かべ、宿营地を歩き出した。残りの法術士達もその後に続く。

被きの付いた長い外套を纏つた法術士団独特の姿を見て、兵士達が自然と道を開ける。法術士達が外套を翻して歩く様は、いよいよ地底へ——黒竜の支配下への出立が近い事を示しているようだつた。まだ呆然と座っていた兵士も慌しく武具の点検を始める。

「ワインスター大将殿はおられますか？」

二度ほど呼ばわつただけですぐに前方で答えがあり、ボルドーは天幕の前に立つワインスターの姿を認めて駆け寄つた。一礼して膝をつく。他の法術士達も少し離れた場所で立ち止まり、ワインスターに対しても敬礼した。

束の間その場が静まり返り、風が枝葉を揺らす音が流れた。

「先遣として法術士団十名を率いて参りました。私は中将ボルドーと申します。封術を得意としており、先遣の中にも封術を得意とする者を多く揃えております。——状況のご説明とご指示を戴きたく」

「封術——閣下のお考えはそちらか」

「はい。黒竜をカトウシユに封じます」

ワインスターの瞳に浮かんだ光に答えるように、ボルドーは真っ直ぐ彼の目を見据えた。言葉では黒竜とのみ口にしたが、その裏に込めたものをワインスターも感じ取つていて。

ワインスターもまた、ボルドーの知らない事を知つてゐる。それは読み取れたが、少し迷つて、結局ボルドーは深く尋ねるのを止めた。

黒竜の封印に加えて、アナスタシアの救出、剣士の封印、どれ一つ決して

容易いものではなく、彼に余計な詮索をしている余裕はなかつた。

「大将殿、ここに施されていた術に、お心当たりはお有りですか？」

ワインスターは頷き、背後の天幕を見た。既にそこがもぬけの殻なのは確

認している。もう一つ、アーシアが居た天幕も同様で、彼等の荷物もない。

「おそらく」

視界の端に渋い顔をしたワツツが早足で近寄つてくるのを認め、ワインス

ターはワツツの報告を聞く前に状況を読み取り、ボルドーに向直つた。

「ここにいた少年二人がいない。彼等によるものだろう」

「二人？ 剑士の少年だけではないのですか？」

「公の従者だ」

ボルドーが更に疑問を投げ掛けようとした時、ワツツがワインスターに敬礼した。

「大将殿。宿营地内には二人とも見当たりません」

ワツツはボルドーに一旦目礼し、再び苦い色を宿した眼をワインスターに向けた。いつにない焦りの色がその岩のような面に浮かんでいる。

「俺に一隊をお貸しください。連れ戻します」

「——」

「大将殿、このまま行かせろつてのは無しですぜ。俺の監督不足ではあります、ガキを煽つた責任は貴方にもある」

「どういう事か、ご説明願えますか」

横合いからのボルドーの問いかけに、ワツツは苛立ちの籠もつた眼を向けた。ワツツと同年か少し若いくらいの年だが、服装から法術士だと判る。

「あんたは……」

「法術士団の中将、ボルドーという」

ワツツはワインスターの顔に素早く判断を問う視線を投げた。そこに込められた焦燥を敢えて無視して、ワインスターが口を開く。

「先程も言つたように、ここには二人、少年がいた。一人は公の従者、一人は剣士だ」

「剣士かどうかは」

ワツツはその結論を保留しようと口を挟んだものの、ワインスターは構わず続けた。

「おそらく一人は、公の救出に向かつたのだろう」

「救出？ 救出に行つたのですか？」

ボルドーは驚いた顔で、目の前の落ち着き払った顔を見つめた。

危険であれば封じろと言われた事から彼が想定していた状況とは、全く違う。躊躇いというよりは混乱がボルドーの面に浮かんだ。

「では何故、術など」

「言えば止められると思つたのだろうな」

ボルドーは考え込んでいる。

「——敵対の可能性は？」

「何の為に？」

ワインスターは微塵もその可能性を疑つていないと言うように、僅かに瞳を見開いた。

「——」

「一人は公の従者だ。何故敵対する。彼等に黒竜に組する理由があるか？」

「いえ」

「一刻も早く救出しようという、子供らしい浅はかさだ」

一見刺のある物言いだが、傍らのワツツはやや意外な思いでワインスター

を眺めていた。どうやらワインスターは二人を庇うつもりのようだ。

軍の行動を妨げた事は、処罰の対象になる。ワインスターなりの罪滅ぼしだろうかとワツツは瞳を細めた。

「大将殿、こうしている時間はありません。一隊、いえ、十名お貸しいただければ十分です。許可を」

ワツツの言葉を遮つて、ボルドーがワインスターの前に進み出た。

「我々にお任せください。元より黒竜を封じる為に参つたのです。そのついでに連れ戻します」

ボルドーの口調が軽々しく感じられ、ワツツは少し苛立ちを覚えて彼の横顔を睨んだ。

「黒竜は軽い気持ちで封じられる相手じゃありません。黒竜なら黒竜だけに集中すべきでしょう。彼等は俺達が」

「残念だが、剣は今回役に立つまい」

「そいつは」
色をなしてボルドーに詰め寄ろうとしたワツツを、ワインスターの冷静な声が阻んだ。

「護衛はいるだろう。ワツツ、十名選んで共に行け」

ワインスターの言葉に二人は口を閉ざして敬礼し、ボルドーは背後の法術士達へと踵を返した。ワツツは眉をしかめたまま首を巡らせて、その背を眼で追つた。

元々通常の部隊と法術士団の間には多少の軋轢がある。普段のワツツなら取り沙汰そうとも思わないものだが、黒竜の脅威を身を以て知り、二人の少年とその想いを知つてゐる為に、ボルドーの言葉は軽々しく感じられていた。

ワインスターはボルドーから視線を戻すと、歩きながらワツツを呼んだ。

「ワツツ」

低い声音に、ワツツは素早くワインスターの傍に寄つた。横を歩きながら視線だけを合わせる。だがワインスターの口から出た言葉に、ワツツは驚いて足を止めた。

「ボルドーは剣士を封じろとの命も受けている」

「……は？」

前触れもない单刀直入な言葉に、ワツツが瞳をしばたかせる。

「そりや……一体どういう事ですか」

ワインスターは立ち止まる気はないようで、ワツツは再びワインスターを追いかけて横に並んだ。

「私は今回、剣士を使おうとしたが、剣士とはそう御しやすいものではない」

「それで何で封じるなんて話になるんです」

「剣士の剣そのものが、時として黒竜にも劣らない脅威になるからだ」

「——」

ワツツの細い眼が険しくなる。

「特に経験豊かな者ならともかく、まだ剣すら操つた事のない未熟な者では、思ぬ事態を引き起こす事もあるだろう。それ故、ボルドーは場合によつては、剣士を封じる指示も受けてゐる」

ワツツの顔はますます険しくなった。ワインスターは上層部の考えを詳らかに語っているようで、その実まだ深い部分に閉ざされたものがある。

そもそも、レオアリスが剣士だと、何故ワインスターや上層部が知っていたのか。

ただそれよりも、ワツツが強く感じていたのは憤りだ。少なくとも上層部は剣士を肯定的に捉えていない事は、ワツツにも判つた。

「使える時は都合良く使つて、危ないと思つたら処分ですか」

「気に入らんか」

「気に入りませんね」

「ワインスターは苦笑を浮かべ、ワツツの前を離れた。

「お前が判断しろ」

「法術士団の邪魔していいって事ですか？」

「そう思うのならな。出立を急げ」

ワインスターはそれで話を打ち切り、今度はそこにいた他の兵を呼んだ。

法術士団とワツツ達が出た後で、宿营地の全ての兵も彼等の後衛に回るべく指示をしていく。

「——」

（脅威……思わぬ事態だと？）

ワツツは荒々しく軍靴を鳴らし、ワインスターに背を向けた。

（気に入るわけねえ）

「クーガー！ ウエイン！」

駆け寄つた二人が既に出立の準備を済ませているのを眺め、ワツツは彼等の眼を見て頷いた。

「ガキ共を拾いに行くぜ。ついでに法術士団の警護をする」「ついでですか」

クーガーとウエインがにやりと笑うのへ、ワツツも口元を歪めた。

「あくまで救出が目的だ。まあその過程で法術士殿達との目的とひっくり返るかもしねえが、気にするな」

「ここだ。最近立ち入った跡がある」

坑道の入口は森の斜面に樹々に隠さればつかりと口を開けていた。打ち捨てられた古い木の扉が両脇の柱に傾いでしがみ付き、辛うじて扉としての役割を果たしている。押せば何の抵抗も無く軋んだ音を立てて開く。

足元の土には、複数の足跡が残されていた。もう擦れかけているが、レオアリス達よりも少し大きい、大人のものだ。

レオアリスの肩の上でカイは誇らしげにピイと鳴いた。その喉を撫でてや

りながら、傍らで同じように坑道を覗き込むアーシアと視線を合わせた。

アーシアの顔は蒼白だ。アナスタシアへの心配と、黒竜の存在への恐怖。

それはアーシアが一番感じている事だろう。レオアリスにしても、心臓の鼓動は高まっている。

レオアリスは一度背後を振り返つた。宿营地は遠く、まだ二人を追つてくる気配は近くには無い。

実際には二人が宿营地を後にしてから半刻足らずで、法術士団が到着していた。今はワツツ達が地底への入口が見つかり次第、彼等を追つて発とうと

しているところだ。法術によつて時もかからず、この入口を捜し出すだろう。

ただ二人には状況は全く判らず、どのくらい猶予があるのかは全く判らなかつた。

「カイ、暫くここに居て、軍が来たら教えてくれ」

そう言うと、カイを扉の柱に残して、レオアリスは暗い坑道に足を踏み入れた。アーシアもその後に続いて扉を潜る。

身を包む強い闇の——黒竜の気配に、アーシアは一度身を震わせた。（いる……）

黒竜の顎あごとがすぐ傍にあるような、息づく気配だ。

ほんの僅かな期待ではあるが、アーシアは黒竜があの崩壊で弊れたのではないかと考へました。そうでなければ、弱つてゐるのではないかと。

だが今全身に感じる気配は、少しの衰えもない。それどころか今まで以上の怒りがひしひしと伝わってくる。

ただ、その中に、アナスタシアの存在も確かに感じ取れた。

(アナスタシア様が、僕に気付いてくれればいいけど)

アーシア達が彼女を捜している事を、伝えられれば。

レオアリスはアーシアが足を止めた事に気付いて、坑道の入口を振り返った。

「アーシア？ 大丈夫か？」

「……大丈夫です。行きましょう」

アーシアは力強く頷いて、青い瞳を煌めかせた。

レオアリスは一度アーシアの顔をじっと見つめた。アーシアの様子はある

脱け殻のような状態とは、もう全く違う。

黒竜を恐れているはずの、その中にある強さに驚きすら覚えながら、レオアリスは顔を戻して再び歩き出した。

数歩進むだけで、背後の入口から僅かに差し込む夜の光さえ失われ、坑道内は真の暗闇に満たされてしまう。レオアリスは間に合わせで作った、木の枝を括った松明に火を灯した。ゆらりと壁が揺れる。

「——あんまり役に立たないな

「そうですね」

二人は松明を心許無げに見つめた。声がつい心細そうな響きになるのは仕方が無い。松明の明かりは一間ほどの——大人二人が手を伸ばした距離ほどしか照らし出す事ができず、その先は深い闇が粘つくように凝っている。ただ、松明の炎が前後に揺らめき、少なくとも風が通っている事だけは分かった。

二人はお互に手を伸ばせば届く距離で進んでいた。それは図らずも、數日前にこの坑道を降りた二人——御前試合を目指していたタナトウス達と同じような距離だ。松明の明かりが闇を払える、僅かな光の版図でもある。進むほどに、距離も、時間も定かではなくなる。それほどの闇と、何よりも、無音。

一刻も早くアナスタシアを探し出したいと焦る一人の気持ちを、闇はその無言と無情で麻痺させようとするかのようだ。

眞の闇というものがこれほどに、言いようのない恐怖を感じさせるものだとは、レオアリスもアーシアもこれまで経験した事が無かつた。闇そのものが何か恐ろしい巨大な存在で、自分達はその巨大な生物の喉の中を、胃袋に向かって歩いているように感じられる。

黒竜と対峙しても、これほど得体の知れない恐怖は感じなかつた気がする。

「あのさ」

闇の喉を歩く感覺を振り払おうとレオアリスは口を開いた。声は囁くよう

で、レオアリスは一度口を噤んでから、もう一度意識して声を出した。

「アーシア。聞いていいか？」

「何をでしよう」

二人の声が微かな残響を残して闇に消える。だがレオアリスが話を始めた事で、アーシアもほつとして前を歩く彼の背中を眺めた。話を始めて、二人の足が止まる様子はない。

「……聞きたい事自体は、一杯あるんだよな。でも取り合えず——お前は、飛竜なのか？」

単刀直入な聞き方が面白くて、アーシアは口元だけで笑った。

「そうです」

「……飛竜って皆そうなのか？ そうなのかつてのは、人の姿を取れるのかつて事だけど」

「僕もよく分かりません。でも、書物で見る限りでは、飛竜が僕と同じように人の姿を取るのは例が無いみたいですね」

その言い方が不思議だったのか首を巡らせたレオアリスへ、アーシアは苦笑を返した。

「僕は自己の一族というものを、よく知らないんです。殆んど記憶にありますから、彼等が僕と同じだったのか、それも判りません」

レオアリスは足を止め、束の間驚いた顔をしていたが、「じゃあ、俺と同じだな」と可笑しそうに笑つて呟き、再び顔を戻して歩き出した。

「――びっくりしたからさ。いきなり目の前で飛竜がアーシアに変わるんだもんな。もしかして俺がここまで乗ってきたヤツも同じで、結構無理矢理連れて来させたから怒ったのかなーと」

「怒られたんですか？ 飛竜に？」

「怒られたつづーか、カトウシユに向いたがらなかつたところを無理矢理来て、最後は放り出された。それでも森の上に放り出してくれたからまだ良かつたけど」

アーシアは目を丸くして、今度は小さく声を立てて笑った。

「今思えば、多分黒竜が居たからだろうな」

「そうですね……」

アーシアは今でも、身の芯から来る震えを感じている。少しづつ慣れてきているものの、黒竜の存在は絶え間なくアーシアの意識に触れてくる。

自分がこれほど黒竜の存在を感じるのだ。他の飛竜達がそれを感じるのは当然だろう。よくカトウシユまで飛んだものだと、アーシアはその飛竜に尊敬の念を抱いた。そう言うとレオアリスも改めて頷く。それから、アーシアは先程から気になっていた事を尋ねた。

「同じじつて、どういう事ですか？」

「――」

「すみません、無理に聞くつもりは」

途端にアーシアが恐縮した為に、レオアリスは慌てて手を振った。松明の光が併せてゆらゆらと揺れ、二人の影を伸び縮みさせる。

「そうじやない。俺も、自分だけなのか、俺の一族つていうのもそうだったのか、良く判つてないから、まあそこが同じじつていうか」

「一族というのも？」

レオアリスの言い方は一族という存在すら曖昧なものようで、アーシアは思わず聞き返した。

「俺はじいちゃん達に育てられたけど、種族は全然違う。じいちゃん達は半鳥族なんだ。てことは、やっぱり他に同じ種族がいるはずだろ？」

一度言葉を区切り、レオアリスは話の方向を変えた。

「アナ斯塔シアは、俺の事を剣士なんじやないかって言つただろう。覚えてるか？」

「覚えています。まだ……今日の昼の事です」

あの時のアナ斯塔シアの口振りまで、はつきりと思い出せる。自分の発見に喜んでいる、どこか得意そうな響き。

何でそう思ったのか、もっと真剣に聞いておけば良かつたと思う。

「うん。……その後他のヤツからも、同じ事を言われた」

「剣士――？」

「そう。というか、そらだと断言された」

「やつぱりそらだつたんですね？」

変な会話だな、と呟いて、レオアリスは少しだけ笑った。

「判らない。今まで聞いた事も無かつたし、第一どうやつたら剣が出てくるのかだつて、さつぱり判らないからな。普通困るだろ、そんな事いきなり言われたつて」

どうやらレオアリスが話し続けているのは、自分の考えを纏めたいからのようだと、アーシアはその後姿を見つめた。

ただ、彼はそれほど、自分が剣士である事を否定しても嫌がつてもいいように、アーシアには思える。もう既に受け入れているが、単にそこからどうすればいいか判らず戸惑つて、そんな感じだ。

「腕が剣つてなあ……どう思う？」

「どうつて……」

「腕が剣になつたら、飯とか風呂とかどうするんだろうな？」

「それは……そういう問題なんですか？」

「――まあ、違う」

適当に喋り過ぎた事が少し恥ずかしくなつて、レオアリスは短い髪をくしゃくしゃと交ぜた。僅かな沈黙の後、アーシアは躊躇いがちに口を開いた。

特に尤もらしい事が言える訳ではなかつたが、感じている事をそのまま伝えたいと思つたのだ。

「剣士つて、僕からすればやつぱり少し怖いですけど、でも僕は、もしレオ

アリスさんがそうだったら、嬉しいです」

「嬉しい？」

意外な言葉に、レオアリスは瞳を見開いて振り返った。

「自分勝手な意見ですけど。でも、今、すごく希望が湧きました。風竜を斃したのは剣士でしょう？だからもし貴方が剣士なら、絶対、僕達はアナスタシア様を助けられるつて。——怒つてくださつていいです、すみません」

アーシアは真剣な色を浮かべて頭を下げる。一方でレオアリスにしてみると、真剣に謝られても、怒りを感じるというより戸惑う気持ちの方が強い。

「でも俺、剣なんて使えないぜ」

だから役には立たないだろうというと、アーシアは首を振った。

「いいんです。これは僕の自分勝手な期待ですし、そんなものの為に貴方が黒竜と戦う必要なんてありません。ただ……多分そう思うだけで、希望が湧くんです」

「希望？」

「希望です」

アーシアは力強く頷いた。レオアリスはどう返すべきか判らないまま、ただ黙つて足を進めた。

剣士だから黒竜と戦つて斃せるなどと言われても、実際に黒竜を見てしまつた後では真実味などないし、それで希望と言われると面白い。

ただ、単に誰かの希望になるのなら、それはそれで——それだけでも意味はあるのかもしれない。

暫く二人はそれぞれの想いに沈んだまま、道を急いだ。道は長く緩やかに下へと下つていく。実際に見える訳ではないが、地底へと深く降りているのがじわじわと感じられた。

会話が途絶えると、再び闇は重苦しく道に横たわり始める。ただ闇の色は、アーシアが口にした希望に、少し弱められたようだ。

ふと明かりの輪の先に二つの闇が揺れ、レオアリスは足を止めた。左右に道が分かれている。右は下へと下り、左の道は同じように下つてゐるが、すぐ先で更に左へ折れ曲がつてゐる。

「分かれ道だ——。どっちか判るか？」

「——こっちです」

覗き込んでも先など殆んど見えない筈なのに、アーシアは少しも迷う事無く左側の道を選んだ。代わり映えのしない狭くて緩い下り坂を、今度はアーシアが先に立つて進んでいく。

アーシアは明快だ。それは真っ直ぐ、目の前の目的だけを見ているからだろうか。

（そうかもしない）

可笑しな言い方だが、レオアリスは今では、自分が剣士であつてもいいと思う。いや、剣士であれば、もっと何かできる事は増えるだろう。それならその力が欲しい。

自分にできる事があるのなら、それが欲しい。

身体の奥で鼓動が揺れた。

瞳の奥に夢で見たあの青白く光る剣が浮かぶ。

まるで近寄るだけで、空気ごと切り裂かれてそうな、研ぎ澄まされた刃。

あの光は、希望に見えるだろうか。

手に入れたら、アーシアの希望は、叶えられるだろうか。

アナスタシアを助け出して、お前の考えは正しかつたと、そう告げる事ができるだろうか。

黙々と歩く内に余計な事は頭から流れ出していく。

レオアリスは自然と、あの剣が実在し、それを手に取る事を考えていた。

どうやつたら得られるのか、その事を。

北の故郷を出て果てしない街道をただひたすら歩いていた時、王都への想いだけがそこにあつたように、今心の中にあるのは、あの剣の事だった。

レオアリスの身の裡で、ゆっくりと青白い光が明滅したが、それを見る事はまだできなかつた。

幾つかの分かれ道を、アーシアの導きのままに足早に進んでいく。そろそろ松明が燃え尽きそうになり、レオアリスはアーシアに声を掛けて立ち止まつた。

「火を移す、ちょっとこれ持ってくれ」

差し出された新しい松明を受け取り、火を移そうとした時、ふとアーシア

が顔を上げ、辺りを見回した。

「レオアリスさん……」

アーシアの声が緊張を含んでいて、レオアリスは手を止めて彼の顔を見つめた。アーシアの額には汗の粒が浮かんでいる。

「どうした？」

アーシアが答える前に、前方で物音がした。何かを引き摺るような、重い音だ。

二人は咄嗟に身構え、じっと闇に目を凝らした。

がしゅ。

前に凝った闇が囁いた。

「！」

二人は咄嗟に身構え、じっと闇に目を凝らした。

がしゅ。

前に凝った闇が囁いた。

五

どれだけの間壁を叩き続けたのか、アナスタシアは疲れ果てて座り込み、抱えた膝の上に額を預けたまま俯いていた。

どうすればこの場所から出事ができるのだろう。このおそらく膨大な土砂で埋まつた地中から抜け出す方法があるのか、何度もそれを考えようとして壁を叩く手を止め、途端に空間を支配する恐るべき無音にいたたまれなくなった。

このまま、誰にも見つけてもらはず、暗い土の下で、飢えと孤独に苛まれて死んでいく——。その考えはアナスタシアを闇雲な焦燥の中に突き落とした。

壁を叩いて、思いつく限りの名を呼んで、次第にその力も無くなつた。腕は鈍く骨に響くように痛み、喉も嗄れて熱を持つようだ。

疲労と絶望に、アナスタシアは膝を抱え込んだまま、明確な思考も無く視点を結ばない瞳で足元を見つめていた。

炎は丸い空間の頂上部分で、小さく灯り続けている。酸素が無くなつてしまふかもしれないという惧れよりも、灯りを消して暗闇になつてしまうのが怖くて、ずっと炎は消せなかつた。

炎がゆらゆらと揺れる。

アナスタシアの下の小さな影も、その揺らめきに合わせて踊る。

それは夕暮れ時の、赤い光の中の影を思い出させる。

幼い頃、こんな光の中で影踏みをして遊んだ。アーシアや館の女官達は柔らかな笑みを溢し、走つて追いかけるアナスタシアの小さな足に影を踏ませていた。

(私は負けるのが嫌で、影をあちこち揺らしたんだ)

炎でわざわざ影を作つて、アーシアや女官達が踏もうとしたら、炎を動かした。

くるりくるりと回る影、可笑しそうに声を立てて笑いながらアナスタシアもアーシアも回る。

笑い声が夕暮れの陽射しに散る。

くるり。

影が回り、アーシアが回る。

丸い空間の中で誰も踏む者もないのに、茶色い土の上でアナスタシアの影は逃げるよう左右に揺れる。

揺れて。

じつとその揺らめきを追つていて、アナスタシアはそれに気が付いた。その意味する事が頭の中に入つてくるに従つて、深紅の瞳がゆっくりと見開かれる。

「——揺れてる……」

影は左右に不規則に揺れていた。アナスタシアは炎を動かしていない。それは炎の自然な揺れとは明らかに違う揺れ方だった。見上げれば、頭上の炎は何かに押されるように左右にゆらゆらと揺れている。

「風——」

はつとして、アナスタシアはきよろきよろと辺りを見回した。

風が流れていく。

炎は、この球状の空間を流れる風に揺れているのだ。

それはどこかに、隙間が在るという事だ。

アナスタシアは手を伸ばし壁を探り始めた。もどかしく壁をさすり、反対側に走り寄つて同じように腕をあちこちに伸ばして壁を調べる。

「あるはず——あるはずなんだから」

こんなふうに闇雲に探しても見つからない。アナスタシアは立ち止まり、何度か、深呼吸を繰り返した。炎は影を四方に揺らしている。ゆっくり、確実に探せば、必ず見つかるはずだ。

「そうだ」

もう一度手のひらの上に小さく炎を作り出した。炎はアナスタシアの手を離れると、ゆっくりとした動作で、壁に沿つて動き始めた。

炎が大きく揺れる所、そこに隙間が在るはずだ。

瞬きすら忘れてじつと瞳を凝らし、アナスタシアは炎の動きを追つた。

歯痒い程に、炎はずつと一定の動きを保ち続けている。それでも少しずつ、じりじりと、どんな小さな隙間も見逃さないように、アナスタシアは炎はゆつくりと動かし壁を伝わせていく。

永遠に近い時間が流れたように思えた。

一瞬、炎が乱れた。

心臓の鼓動が一気に大きくなる。

焦る心を抑え、アナスタシアはもう一度その場所に炎を動かした。

一度行き過ぎて戻し、そしてある一点で不規則に揺らめいた炎を、アナ

タシアは呼吸を止めたまま見つめた。

「……隙間……」

その場にまるび寄り壁に手を当てた。立ち上がったアナスタシアの丁度頭の上辺りに、注意してみなければ判らない程の、ごく細い、丁度手の幅程の長さの亀裂が縦に刻まれている。

細い、だが確実な空気の流れが、手のひらをひんやりと撫でた。

アナスタシアは暫くその冷たさを瞳を閉じたまま感じていた。それはほんの微かでも、アナスタシアの心を落ち着かせてくれる。

まだ助かつた訳ではない。こんな細い亀裂を抜け出る術など、アナスタシアは持つていなかつた。

それでもこの小さな亀裂が、今のアナスタシアにとつて唯一の、外界との繋がりだつた。

アナスタシアは風が額に触れるのを感じながらできる限り口を寄せ、高鳴る鼓動を押し出すように叫んだ。

「アーシア！ 誰か！ アーシア！」

呼び過ぎて擦れた声は、微かな反響を残して亀裂に吸い込まれる。背伸びして耳を近付けてみたが、返る声は聞こえて来なかつた。覗き込もうとしても亀裂は高い位置にあり、奥までは見えない。

「——アーシア！ 聞こえたら返事して！」

例えは亀裂の向こうまでそれほど距離はなくとも、そこに誰かがいるとは限らない。声も届くかどうか判らなかつた。

ただ、風が通つているという事は、必ずどこかには繋がつてゐるのだ。

「アーシア！」

何度も目かに叫び、アナスタシアは引き攣るように噎せ返つた。嗄れた喉は

声を出すと焼けるように痛む。

「だめだ、このままじや……」

もし誰かが来た時に声が出せなくなつていたらと思うと、このまま叫び続けるのは無駄だ。

けれども、黙つていて、そこに来た誰かが通り過ぎてしまつたら？

そのどちらも怖かつた。

「どうしよう……」

通りかかつた誰かに、そこに来た誰かに、確実に気付いてもらう手段を、アナスタシアは必死に考え始めた。

(何か、目印になるものがあれば……何か)

指先すらも入らないこんな小さく細い隙間から、何も通す事はできない。通るのはそれこそ、風や水ぐらいなものだ。

(風、水——)

形の無いもの。

自分が自由自在に姿を変えられればいいのにと、アナスタシアは唇を噛み締めて天井を睨んだ。

ちらちらと炎が揺れている。

大きくなり、小さくなり、それそのものが生きているように踊る炎。

ひゅつと小さく鋭い音を立てて、アナスタシアは息を吸い込んだ。

一つだけ、どんな狭い場所をも通れるものがここに在る。

「炎、だ……」

アナスタシアの瞳が、天井の炎を移したように輝いた。

炎ならば、アナスタシアの意思のままに、亀裂を擦り抜ける事ができる。

アナスタシアは細心の注意を払い、手のひらの上に消えない炎を作り上げ

た。アナスタシアの意志がある限り、消える事のない炎を。

そおつと、慎重に、亀裂へと近付ける。

誰かが——、アーシアが來てくれる事を信じて。

亀裂の先がどこへ繋がつてゐるのか、全く判らない。そこが人の立ち入れる場所なのかも判らない。

それでも、アナスタシアはこの状況下で、ここまで辿り着いた。炎が彼女の身を守り、光を与え、隙間を見い出させたのならば、この炎がもう一度、アナスタシアを助けてくれる事を信じて——

アナスタシアは亀裂の奥へ、炎を送り込んだ。

どれほどの深さを通り抜けたのかアナスタシアにも掴めなかつたが、炎は消える事無く確実に亀裂を伝い、アナスタシアの居る場所とは違う別の空間に抜け出ると、闇の中にくつきりと、その熱とかぎろいを浮かび上がらせた。

暗い坑道の中で松明が頼りなく揺れた。

何か重いものを叩くような、引き摺るような音だった。

音は闇の中を、次第にレオアリスとアーシアのいる方へと近づいてくる。

砂袋のような重い何かが壁に当たる音。足元からずしんと、腹に響く振動が伝わる。

二人は緊張した顔を見合せ、じり、と後退った。だが引き返すという選択肢は二人の中には無い。アナ斯塔シアがいるのはこの道の先なのだ。

道の先に目を凝らしても、黒々とした闇に覆われていて見通す事ができない。

レオアリスは新しい松明に火を移し、消えかけていた松明を闇に向けて放り投げた。松明はくるくると回りながら狭い坑道を束の間照らし出し、数間先に落ちた。

——何もいない。

炎が照らし出した一直線の坑道には、音の主は見つからなかつた。

だが音は確実に、視線の先で頼りなく燃える炎を嘲笑うかのように、絶え間なく坑道を震わせながら二人へと近づいてくる。

「どこかに、脇道があるんだ」

松明の炎でははつきりとは判らなかつたが、音はもう、松明との中間辺りから響いて来ている。

レオアリスは視線を走らせた。道幅は狭い。黒竜では無いはずだ。ただ、この闇にどんなものが潜んでいても、何の不思議もない。

レオアリスは腰に帶びていた剣を抜き、アーシアの前に出た。松明の炎に細い刀身が光を弾く。それは微かに青白い光を纏っているように見えたが、レオアリスもアーシアもその事には気付かなかつた。

「何が来る？」

アーシアが口を開きかけた時、がしゅ、と再び闇が囁いた。

「多分、」

二つの光が浮かぶ。殆んど目の前だ。

手にした松明の光の輪に触れるか触れないかの所に、長い首が突き出して

いた。まるで壁から生えているように見える。

連なる鎧の如き鱗の中で、二つの光——両眼が銀貨のように光を弾いた。

「レオアリスさん！」

はっと身構えた瞬間、不意に空気を切る鋭い音とともに、足元に太い尾が打ち付けられた。尾はぎりぎりレオアリスの脚を逸れ、地面を碎く。レオアリスはよろめいて壁に手を付きながら、坑道を塞ぐように現れた姿を見つめた。

「竜……！」

だが黒竜ではない。それは黒竜よりずっと小さい、レオアリス達よりも大きいくらいの、緑の鱗を持った竜だつた。カトウシユ森林に——この坑道に古くから棲む竜だ。

黒竜ではない事にほつとしたものの、すぐにそれは間違いだと気付く。どんな竜あれ、レオアリス達にとつては脅威に違ひはない。

爛々と瞳を燃え上がらせ、竜は再び尾を引いた。

「逃げて！」

咄嗟にアーシアが投げた荷物が竜の眼の間に当たり、があんと岩に響く硬い金属音を立てる。竜は驚いたのか尾を巻いて、一瞬だけ怯んだ様子を見せた。

レオアリスは走る代わりに右手を上げ、空中に法陣を描き出す。鋭く術式を唱えると、風が渦巻き、光る法陣から弾かれて暗い坑道を疾つた。

無数の風の刃を受け、竜が身を捩る。風の刃は鱗に弾かれるよう散つたが、竜は脇道に退いた。

重い足音が遠退き——、消えた。

しん、と静寂が戻る。

だがそれは安堵をもたらすものではなく、どこから來るのか判らない

あざと顎

に怯える静けさだ。

「レオアリスさん、今の内に抜けましょう！」

アーシアはレオアリスの背を押して、坑道を走り出した。竜が姿を現した脇道の前を駆け抜ける。

通り過ぎる瞬間にちらりと覗いた脇道は、墨のような闇に埋まっていた。

坑道にレオアリス達の足音だけが響く。

「お前、荷物、何入つてたんだ？」

あんな音が響くようなものが何があるだろうかと、レオアリスは走りながらアーシアを振り返った。

「鍋が役に立つたみたいですね、持ってきて良かつた！」

（鍋……？）

「でも、もうアナスタシア様に、ご飯を作つて差しあげられません」

瞳を見交わし、思わず噴き出した二人の背後で、どさりと大きな音が響いた。上から物を落としたような音だ。

（まずいぜ）

周囲に眼を向けたレオアリスの顔が厳しさを増す。坑道の両脇、そして頭

上には、いくつもの脇道や縦穴が黒々と口を開けていた。アーシアの頬からも笑みは失せ、緊張に張り詰めている。

（気配が……複数ありますっ）

枝分かれした道は、どこに竜が潜んでいるのか判らない。アーシアが竜を感じする、その感覚だけが頼りだ。

（追いかけて……集まつて来ます！）

今走り抜けてきた闇からは、竜が立てる重い音が響き始めている。

（とにかく、走るしかない！）

彼等の後を追つて足音が迫る。振り返ると再び、竜が姿を現わし、四つん這いになつて坑道を進んでくるのが見えた。

（来た――）
走りながら首を巡らせていたレオアリスの瞳が、大きく見開かれた。脇道から、両眼を燃やした竜が次々這い出してくる。

（……マジかよ、何匹いるんだ？！）

見えただけで四頭の竜が一人の後を追つてきていた。竜の足は早く、距離はまるまる縮まっていく。

ただ坑道の狭さが竜達の動きを制限し、レオアリス達に有利な状況を作ってくれていた。彼らは一頭ずつしか道を通れず、少なくとも一斉に襲い掛かる心配だけは無い。

（それなら――）

先頭の竜が動きを止め、顎を開いた。小さな光が集まつてゆくのが、暗い坑道にはつきりと見える。竜の息だ。ひゅうひゅうと細い音を立て、風が吹き始める。

（レオアリスさん！ 竜が息を吐きます！ 風です！）

（くそっ）

両脇を見ても、こんな時に限つて脇道が無い。ここで吐かれたら、どこにも逃げ場が無かつた。

どくりとレオアリスの身体の内側で鼓動が響く。鳩尾の辺りが熱を帯び、意識の奥底から、呼び掛けるものがある。

ただ、それはひどく近いようで、まるつきり別の空間にあるような感覚だった。まだそれを、レオアリスは掴む事ができない。

（レオアリスさん！）

（お前は先に行け！）

身の裡の鼓動を追つている時間は無い。狼狽えて立ち止まろうとしたアーシアを押しやり、レオアリスは術式を唱え、宙に雷撃の法陣を描いた。

（風なら――）

法陣が完成する寸前で竜の息が迸つた。目の前に渦巻く風が迫る。

レオアリスは風を見据えたまま、構わず指先を振り切つた。

法陣から閃光が膨れ、竜の放つた風と正面からぶつかる。

轟音が坑道内に響いた。雷撃と風が碎け、狭い坑道内で嵐のように吹き荒れる。壁や天井が削られ、荒れ狂う風に舞い散る。

相剋という、術に良く見られる現象だ。同系統の風と雷が互いに互いの力を削ごうと闘い合い、散つた。

竜は渦巻いた風と雷に弾かれ、長い首を反り返らせて倒れ込み、追つてくる仲間の竜達の道を塞いだ。

レオアリスもまた、二つの衝撃に吹き飛ばされ、数間先に叩き付けられる。

「つ」

意識の飛びそうになる頭を振り、跳ね起きて、すぐにレオアリスはもう一度法陣を描いた。

次に迸った雷光は竜ではなく、坑道の天井を撃つた。先程の衝撃でもろくなつた天井の岩壁に亀裂が入り、腹を上にしてもがく竜の上にばらばらと欠片が落ちる。だがレオアリスの狙い——天井を崩すまでに至つていいない。

（弱い、くそ！）

「レオアリスさん！ こっちに……！」

アーシアは切迫した声でレオアリスを呼んだが、レオアリスは立ち止まつたまま、再び術式を唱えた。竜はもがきながら起き上がり、獲物を脅かすよう吼えた。耳をつん裂く咆哮が坑道を震わせる。

法陣が組み上がり、闇に光る。

「崩せ！」

三度目の雷光が奔り、一直線に天井を撃ち碎く。三度の衝撃を受けた岩盤は、耐え切れず轟音を響かせて崩れた。

牙を剥きレオアリスを噛み砕こうと迫つた顎が、飛び退いたレオアリスの足を掠めて、ばくんと空気を噛む。掠めた牙が肉を裂く感覚があつた。

「つ」

二、三度地面を転がつて再び跳ね起きた時、竜の頭上から崩れた岩が降りかかり、竜を押し潰した。次々と降り注ぐ岩に土煙が上がり、視界を覆う。

坑道に跳ね返り響いていた音と土煙が収まった時には、岩は完全に道を塞ぎ、竜の姿を覆い隠していた。

「——」

束の間息を殺したまま崩れ落ちた道を見つめ、レオアリスは痛む足を僅かに引き摺りながら、駆け戻つてくるアーシアへ近寄り、どことなく反省の色の交じつた笑みを浮かべた。

「悪い、退路を断つちまつた。て言つても、どつちにしろもう退けないけどな」

崩れた岩の向こうからは、落石を逃れた竜達のくぐもつた咆哮が聞こえてくる。アーシアはまだ青ざめたまま首を振つた。

「そんな事よりレオアリスさん、足が」

「ああ」

竜の牙が掠めた左足のふくらはぎから血が滴り落ち、服と靴を真っ赤に染めていた。布地が裂けて両側にふた筋の裂傷が走つている。レオアリスは少し眉をしかめたが、足を動かしてみて頷いた。

「これくらいなら大丈夫だ」

「このくらいって……駄目です、手当を」

アーシアは傷を良く見ようとしたやがみこみ、驚いた様子で青い瞳を見開いた。服を染めた血の量と比べて傷は浅く、既に血も止まりかけている。幸いにも皮膚を掠めただけのようだ。

「見た目だけ派手なんだ。あんまり痛みもないし」

上着の裾を剣で切り素早く足に巻き付けると、一度地面を蹴り走れる事を確かめて、レオアリスは心配ないと言うようにアーシアの背中をぽんと叩いた。それから、背後にちらりと眼を向ける。

竜の咆哮はまだ聞こえるが、その数は最初よりも少なくなつていて。それが意味するところは一つだ。

諦めた訳ではないだろう。

「急ごう、あれもそんなには保たないだろうし、脇道がまだあるかもしけない」

二人は再び坑道を走り出したが、レオアリスが走りながらも自分の両手を見比べているのに気付き、アーシアは首を傾げた。

「どうかしましたか？」

「いや……術が、弱い気がする」

「術が——？」

返つてくる反応が弱いのだ。

あの雷撃は、黒竜を斃せないまでも、地に伏させる程の衝撃を与えた。レオアリスの目論見では風の力を吸収し、威力を増すはずだった。それが今回は、あの竜の息に相殺されている。

(そういえば——)

宿営地で眠りの法術を唱えた時も、術からの反応が弱く発動が遅かった。焦っているせいで術式が雑になっているのかもしれないとも思うが、再び竜が現れた場合を考えると不安が付き纏う。

もしアナスタシアを見つける前に黒竜に出会ってしまったら、今の術の状態では目眩ましにもならないのではないか。

今回は運よく坑道を崩せたが、何も手が無かつたら——。レオアリス達はアナスタシアを助けられずに終わってしまう。

(何か、他の手——剣)

手にした抜き身のままの剣は、頼りなく細い。この剣ではなく、もつと——

どくりと、身体の裡で鼓動が響く。

レオアリスは手についていた剣を鞘に收め、その手をじっと見つめた。

もう少しで何か判りそうな……掴めそうな感じと、それができないもどかしさがレオアリスの中で闘ぎ合っている。

(どうすればいいんだ?)

不意に羽音が響き、二人はぎよつとしてつんのめるように立ち止まった。

だがすぐにその羽音が竜のものではなく、もつとずっと軽やかな聞き覚えのあるものだと気付く。辺りを見回したレオアリスの肩に、黒い鳥が降りた。

[カイ!]

カイが高い声を上げ、レオアリスに軍が坑道へ到着した事を報せた。

[軍が? こそ、早すぎる]
[どうしましよう]

できるならアナスタシアを助け出し、地上に出るまで彼等の到着を遅らせたかったが、もうこれ以上レオアリスにも打つ手が無い。

(手っていうのも変か)

もともとレオアリス達は、軍からすれば随分厄介で勝手な行動を取つていると見られているだろうし、本来軍の到着は今の状況にとつては、逆に有り難い話には違いない。

足手纏いになるのは嫌だが、何もしないでただ待つのはもつと嫌だと、たつたそれだけの意地の話だ。

「……もう仕方ない。せめて一刻でも早くアナスタシアを捜そう。カイ、お前が来たのは丁度いい、捜してくれ。昼間一緒に水を捜しに行つた奴だ。覚えてるな?」

レオアリスはカイの金色の瞳を覗き込んだ。伝令使は遠距離を一瞬にして飛べるが、まったく情報の無い場所へ行ける訳ではない。カイが行ける場所は、レオアリスの明確な指示があるか、もしくはカイ自身が何がしかの情報を持つている者か場所だ。

「炎の気配を捜すんだ。この闇で、目が覚めてれば絶対火を灯す」

この状況下でどれほどアナスタシアを捜し出せる可能性があるのか、レオアリス自身にも判らなかつたが、カイは了承を表して高く鳴くとレオアリスの肩から舞い上がつた。

「カイ、アナスタシアを見つけたら、戻る前に伝えてくれ

「アナスタシア——」

レオアリスは少しの間、何と言ふべきか想いを巡らせた。

おそらく暗い闇の中でたつた独りでいる、彼女に、少しでも安心させられる言葉を。

アーシアはじっと、希望を託すようにカイを見つめている。

「……アーシアか俺か、必ず行くから——そこでじつとしてろ」

金色の瞳をぱちりと瞬かせ、カイの姿は闇に溶けるように消えた。アーシアはカイの姿が消えた闇に祈るような眼差しを注ぎ、それからレオアリスに視線を戻した。

「僕達は——」

「このまま進む。この先にいるのが確実なら、待つてより少しでも進んだ

方がいいしな。でも本当はどっちが先とかじや無くて、軍が先にアナスタシアを助けたら、それはそれでいいんだし」

アーシアは頷き、一度レオアリスの顔を見つめてから、再び坑道を早足で歩き始めた。

「……すごいですね」

「何が？」

「すぐ答えが出てくるのが——僕は慌ててばかりです」

レオアリスの見せる判断力に、アーシアは驚きを感じていた。竜達に追われている時も混乱する事無く、術で坑道を崩して見せた。今のように何かを決めるのも、あまり迷う様子を見せない。

森で出逢った時から、レオアリスは年齢の割りにとてもしつかりしていて、アナスタシアやアーシアを感心させ、その事にアナスタシアは拗ねたりもしたが、今はそれがより際立つていて感じられた。

「今はやれる事があんまりないし——やれる事が逃げるか戦うかの二つに一つなら、誰だつてどっちかを選べる。……それにお前だつて、鍋投げたじやねえか」

「あれは、本当に咄嗟です。鍋が入つてたのも忘れてましたし」

レオアリスは可笑しそうに短く笑つた。アーシアが一番驚きを感じているのはこういうところだ。この状況下でレオアリスは緊張こそすれ、恐怖を感じている様子が無い。

「——怖くはないんですか？」

「怖い？」

そう尋ねられ、レオアリスは首を傾げて暫く考え込んだ。

「——確かに、あんまり怖くはないかもな。まあ慣れてきたのかもしれないし、どつちかつて言うと……」

「いや、何でもない」

問い合わせたアーシアに対して、レオアリスは首を振つた。

アーシアはそう言うが、レオアリス自身は焦つてもいるし、緊張もしている

る。まだ先は殆んど見えていない上に、竜の脅威から完全に逃れた訳でもなく、いつ襲い掛かってくるか判らない狭い坑道の中にいる。そして確実に——、行く先には、黒竜がいる。

客観的に冷静に考えれば、これほど危険で無謀な状況はないだろう。まさに死と隣り合わせの道を、言つてしまえば自ら死に向かつて歩いているようなものだ。

それなのに、自分の中に高揚感があるのが判る。

そう口にするのは不謹慎な気がして、レオアリスはその感情を飲み込んだ。

「すごいなあ、貴方は」

アーシアの純粹な咳きにほんの少し、後ろめたさを覚える。

「すごいって……怖くないのは単なる慣れとか、物を知らないだけってのはあるだろ。怖いのにアーシアは足を止めない。そつちの方が俺にはすごい」

アーシアの顔は今でも青ざめているし、時折震えている。それが松明の揺れる不安定な明かりのせいだけではないのは、レオアリスにも判つていた。それでも一切口には出さず、一度も引き返そうとは言わない。アナスタシアが生きていると判つてからは、取り乱す事もない。

レオアリスにはひどく感心させられる事であると同時に、何となく、出会つてからの二人の様子を見ていて、その理由が納得できる気がして、いた。

それだけの強い絆が、二人の間にはあるのだ。

「僕は——」

「アナスタシアは絶対に生きてて、絶対に自分が助け出さんだつて、そう思つてる。だろ？」

アーシアの強い意志がなければ、坑道の闇を見た時か、それとも複雑に分かれている道を見た時か、竜が現れた時か——、アナスタシアを助ける事を諦めはしないにしても、レオアリスは別の方方法を探ろうとしたかもしれない。

「信頼つて言うか……信頼以上か。ちょっと羨ましい」

「……僕は、食物を食べないって言つたでしよう？」

唐突なアーシアの言葉に、レオアリスは聞き返す事無く頷いた。それが、アナスタシアが生きていると二人が、アーシアが強く確信している理由だ。

確信しているから、確証がなくてもこの道を下っている。

「生まれつき、食物を摂取できなって。誰かに力を与えてもらわなくちゃ、

生きていけません。だから本当は、もうとっくに死んでいたはずなんです」

初めてアナスタシアと出逢った時、アーシアは誰にも顧みられずに、死に瀕していた。

あれは駄目だと諦める同族の声が、今でも耳に残っている。自力で食物を

摂取できない者を救う術など彼等も持たなかつただろうし、アーシア自身もそれを仕方の無い事だと諦めていた。

ただ——それでも、生きたかった。

諦めながら、心の奥底では生きたがつていた事に、アナスタシアに気付かされたのだ。

差し伸べられたのは、暖かい、小さな手。幼い声。

『お前、何で泣いてるの?』

息が絶えようとしていた時に、アーシアは自分でも気付かないまま、ずっと泣いていた。

アナスタシアの手から注ぎ込まれた温もりが、アーシアの身体をその時からずつと、そして今、こんな状況でもなお、暖め続けてくれている。

「アナスタシア様は、僕にの方自信の命を、分け与えてくださつてあるんです。けど、アナスタシア様が僕にくださつたのは、それだけじやありません」

『アーシアって呼ぼう。お前にあげる。もうアーシアはおねえさんになるから』

幼い自分の呼び名をくれた、アナスタシアの深紅の瞳とそこに温かく宿る炎を、アーシアは今でもはつきりと思い出せる。

「十年間ずっと、あの方は僕に暖かい居場所をくださつた。ずっと、温もりを与え続けてくれました。だから今の僕があります」

多分まだ言葉足らずだろうアーシアの話を、レオアリスは否定の色も見せずじつと聞いていた。

「だから僕は、あの方の為に生きるんです。それが僕の唯一の望みです」

アーシアの声は誇りと喜びに満ちている。その誇りがこの闇を照らすようだ。

「こうなつた今までさえ、アナスタシア様は僕に力を与えてくれています。——絶対に、お助けします」

その誓いに似た響きに押されるように、レオアリスは無言のまま頷き返した。

遠くで何かの崩れるくぐもつた音が響いた。炎が吹き抜ける風に煽られて揺れる。

「来たぜ」

おそらく、道を塞いでいた岩が崩されたのだ。咆哮が岩壁に反響しながら、二人の場所まで届く。

「——どっちかが必ず、アナスタシアの居る場所まで辿り着くんだ。もし俺が遅れても、お前はとにかく先へ進む事を考える。それでいいな」

「貴方も、そうしてください」

二人は同時に頷き、それから身を翻して坑道を走り出した。咆哮は反響を繰り返し、次第に大きくなつてくる。

走りながらアーシアは、すぐ後ろのレオアリスと、それからこの坑道の先にいるはずのアナスタシアの事を考えていた。

今この場の暗い坑道を抜け出す事でも、竜の頸^{あぎと}から逃れる事でもなく、これから先にある未来の事を。

(きっとこの人は、アナスタシア様の持つてゐる色々な柄に捉われずに、あの方の傍にいてくれる)

アナスタシアが誰なのか、知らなかつた時も知つた今も、レオアリスの態度は全く変わっていない。

『嘘つきだつて』

たつた一人でもそういう相手がいれば、アナスタシアがあの時のような傷ついた瞳をする事もなくなるだろう。

(王都に――)

アナスタシアが帰るべき王都へ、レオアリスにも行つてもらいたいと、アーネ

シアは強く思つた。

この光の少ない道を抜けるには自分は何をすべきか、アーシアは走りながら

らずつと考えていた。

七

炎は絶える事無く、闇の中で揺らめいていた。

アナスタシアが炎を送り出した先は、坑道の奥深くにある広大な空間の、ほぼ垂直に近い斜面の途中にあつた。地上から見ればそこは、黒竜によつて穿られた深い縦穴に隣り合わせの位置にあつたが、そこに至る道は狭く危険に満ちた暗い坑道のみだ。

今、地上の池のほとりには、アナスタシア救出と黒竜を封じる為に、正規軍の第四、第五大隊が集結し始めていた。深紅の鱗を持つ正規軍の飛竜達が次々と舞い降り、兵士の纏う鎧と剣がぶつかり合つて鳴るかちやかちやとう金属音が満ちている。

正規軍大将ヴァン・ヴレッグもまた、少し前にこの宿营地に降り立ち、厳しい顔を正面の丘へと向けていた。

もし硝子張りのように物体を見通す眼を持つていれば、彼等とさほど違わない位置に、アナスタシアが閉じ込められたまま座り込んでいるのが見えただろう。けれど誰も一人としてそんな眼を持つ者はなく、アナスタシアとの間は距離ではなくその物量によつて遠く隔てられていた。

「公が生きておられるのは確かか」

ヴァン・ヴレッグは傍らに立つウインスターに問いかけた。

「確証があるわけではございません。ただ、ワツツ少将の言に寄れば、剣士と公の従者は確かにそう言つていたと」

ヴァン・ヴレッグはウインスターが口にした剣士という言葉に、ぴくりと眉を寄せた。だが口に出しては、「なるほど」とだけ言つて、視線を逸らせた。ウインスターはヴァン・ヴレッグの顔をじつと見つめたが、それに關して特に問い合わせようとはしなかつた。

「法術部隊と隊士十名が既に坑道へ入っています。黒竜を発見すれば急使を送る手筈。それに備えて地上部隊を展開させ、万が一黒竜の封印に失敗した時の防壁を作る必要があります。——もう一隊の法術士達は、どのような役割を？」

ボルドー達先遣隊の後から、およそ四十名の法術士がヴァン・ヴレッグの

本隊とともに宿營地に到着している。併せて五十名、西方軍の有する法術士団の全てだ。黒竜を封じる為に、ヴァン・ヴレッグは全ての術士をこの地へと配備した。

ヴァン・ヴレッグに代わって応えたのは副将であるデフだ。

「籠の鳥」だ。先遣のボルドー達は地中において封印の刻印を打ち、封術を行なう。地上の術士達は彼等の術の発動に合わせ、地中と地上から黒竜を囲い込み、封印する。完全に籠に入れてしまえば、例え黒竜といえども、おそらく数百年はこの地から出られまい

数百年、と呟いたワインスターへ、デフは「奴にとつては、一眠りするだけの間かもしれないが」と付け加えて自嘲するように笑った。

「だが、その間に封印を重ねて鎖を重くするぐらいはできるだろう。……黒竜を発見し次第、封術の準備に取りかかる。部隊は術士達に一小隊ずつ付け、六ヶ所に展開させる。これが展開図だ」

デフはワインスターの前に丸めていた紙を広げ、そこに描かれた宿營地の場所と封術の法陣、それに沿つた部隊の展開図を示した。ワインスターは展開図を仔細に眺め、位置を確認して頷いた。

「承知しました。早速配置を開始します。……しかし、もし黒竜を見つける前に公を発見できなかつた場合は、封術の発動は遅らせるのですか」

「——」

デフは黙り込み、ヴァン・ヴレッグの横顔を見た。

「——もし黒竜を先に発見した場合、当然黒竜の封印が先になるだろう」

ワインスターは一瞬だけ何かを言いかけて口を開いたが、すぐにそれを閉ざし、ヴァン・ヴレッグとデフに敬礼すると、部隊の展開を指示すべく宿營地の中へと足を向けた。

やがて指示を受け、宿營地の正規軍は静かに、迅速に移動を開始した。

炎が揺れる。

静かに動き始めた正規軍の、遙か足元で、アナスタシアは膝を抱えて音を

無い空間にじっと耐えていた。

アナスタシアがこの球状の空間の中で目覚めて二刻、炎を送り出してから、既に一刻近い時が過ぎている。

厚い土の向こうで揺れる炎はアナスタシアに自らの存在を伝え続け、風も時折空間を照らす炎を揺らしては、そこが密閉された空間ではない事をアナスタシアに伝えてくれる。

アナスタシアは膝を抱えた指先にぎゅっと力を込め、ひたすら気丈に待ち続けていた。

(必ず、アーシアが、誰かが見つけてくれる)

やれるだけの事はやつた。後は待つ事——それが一番辛く苦しい事だったが、信じてじつと待つ事だけだ。

(必ず——)

炎は広い闇の中で、ゆらゆらとその存在を主張し、訴え続ける。

その闇の中を、一瞬何かが横切つた。炎が一瞬、叫び声の代わりのように大きく揺れる。

僅かな沈黙の後、通り過ぎたように見えた影は、炎に気付いたのか、一度大きく旋回した。

微かな羽音を立てて、影——カイは炎の傍に浮かんだ。

ピィと高く鳴き、主を呼ぶ。暫くカイは首を傾げていたが、レオアリスの声が返らない事に、どうすべきかと迷うように目の前の炎と背後の闇を見比べた。

炎の前に浮かんだまま、ぱちりぱちりと瞳を瞬かせ、踊る炎を見つめていた。やがて一度大きく羽ばたいて風を煽ると、カイは炎に飛び込むように姿を消した。

闇の奥で、二つの銀の光が一度だけ瞬き、低い雷鳴のような音が闇を這つ

て散った。

(必ず――)

来てくれるから、と自分でも覚えていないくらい繰り返した言葉を、もう一度呟いた時だ。

微かな羽音が聞こえ、アナスタシアは閉じていた瞳を開いた。

音はもうどこにもない。

「――」

アナスタシアは緊張に肩を張り詰めた。心臓が急激にどくどくと血を送り出し、全身が脈打つているようだ。

(今、音がした……したよね)

軽い、耳元を掠めるような羽音が、確かに聞こえた。ここに落ちてきて初めて、アナスタシア以外によつて立てられた音だ。

「羽音――」

(まさか、アーシア？！)

どくりと心臓が跳ねる。

ただ、聞こえた音はアーシアの翼の音より軽い気がする。

確かめなくてはいけない。だが耳を澄ましても、先程の音はどこかへ消えた。(嫌だ、気のせいだつたら……。でも)

失せてしまったのか、かさりともしない。不安が返す刃のように心臓に触れ(嫌だ、気のせいだつたら……。でも)

気のせいだつたら……アナスタシアの期待が造り上げた幻聴だつたとしたら、絶望は深くなるだけだ。

だが、炎の先に誰かが来たのなら。今、声を出さなければ、通り過ぎてしまふ。

(確かめろ……早く！)

アナスタシアは自分を叱咤し、思い切つて顔を上げ、壁の亀裂を見つめた。(早く！)

立ち上がつたその時、唐突に、壁の隙間から矢のように黒い影が飛び込んだ。

「きやあ！」

思わず身を縮めたアナスタシアの目の前で、影は球状の壁をぐるんと一回転すると翼を広げて停止し、彼女の前に降り立つた。

アナスタシアは驚きに口を開けたまま、その姿を見つめた。

現われたのは黒くて小さな、尾の長い鳥だ。

見覚えのあるその姿に、アナスタシアは瞳を見開いた。

「――まさか」

誰かが通りかかるのを願い、炎に気付いて、その奥のアナスタシアの存在に気付いてくれる事を強く願っていたものの――、あまりに唐突な、予想もしない相手の出現に、アナスタシアは信じられないものを見る想いで目の前の黒い鳥をじっと見つめていた。

まだ雛に近いその鳥は、およそこの場に不釣り合いに、愛らしく小首を傾げている。

森で見た姿、一緒に水を捜しに行つた、あの姿だ。

レオアリスの連れていた、伝令使――

「カイ……？」

カイはピイと鳴いた。

おそるおそる伸ばした腕に、カイはふわりと降り立つと、一仕事済んだ後のように羽を啄ばみ始めた。腕に止まつた脚の爪が皮膚にほんの少しだけ痛みを伝え、それが夢でも幻でも無いのだと教えてくれる。

アナスタシアが聞いた羽音は、カイが炎を擦り抜けた時の音だつたのだ。

「カイ……」

頭を撫でるとカイは首を竦め、金色の瞳をぱちりと瞬かせた。

(まさか……)

近くに――こんな場所に。

「……レオアリスが、いるの？」

レオアリスの名を聞いた途端、カイはまたピイと鳴いて、嘴を開いた。ま

だ耳に残つてゐる少年の声が流れる。

『アナスタシア』

はつと息を詰め、アナスタシアは身を乗り出した。ここに閉じ込められてから初めて聞く、誰かの声だ。

それも、思いもかけない相手の声。

「レオアリス……」

その声を聞いても、まだアナスタシアは自分が夢を見ているのではないかと思えた。

それでもカイの爪の感覚は本物だ。

『……アーシアか俺か、必ず行くから——そこでじつとしてろ』

身体の奥底から、例えようもない暖かさが込み上げてきて、アナスタシアはその場にぺたりと座り込んだ。涙が湧き起こり、ぽろぼろと頬を伝う。

（来てくれた——）

カイは何事も無かつたように嘴を閉じると、しばらく首を傾げながらアナスタシアを見つめていたが、再びふわりと舞い上がった。

「ま、待つて……！」

慌てて伸ばした手が空を切り、アナスタシアはカイの消えた後の空間を見つめた。

できれば行かないで欲しかつた。こんな空間に、また独りで取り残されるのは嫌だ。

それでも、アナスタシアにもカイが消えた事の意味は判る。主の、レオアリスのもとに、アナスタシアの居場所を教えに行つたのだ。

多分、いや、絶対に、ここで待つていればアーシアとレオアリスが来てくれるはずだ。

（待つてれば……？）

アナスタシアは下ろしかけた腕を、壁に当てた。

アーシアとレオアリスがいる。この壁の向こうの、どこかにだ。

二人が、アナスタシアを捜しに来ててくれている。

冷たい無機質な壁が、今は温もりを持つてゐるように感じられた。細い隙

間は、くつきりと刻まれ開かれるのを待つてゐる扉だ。

それは片側からしか開かれないだろうか？

「じつとしてろつて……私を誰だと思ってるんだ」

ぐい、と乱暴に涙を拭い、アナスタシアは手の先の隙間を睨み付けた。

二人がいる。この向こうの、どこかに。危険を冒してまで、この地底に来ている。

微かな熾火おきびだった炎はアナスタシアの中でゆらりと揺れ、はつきりとした熱を持つて燃え盛り始めた。

「ただ救けられるのなんて待つてられるか。——絶対に、ここを出てやる！」

カイは闇を疾駆し、レオアリスの許へ戻った。

青白い丸い光。それがカイが見ているもう一つのレオアリスの姿だ。

以前は微かで不安定な光だったが、今、その光は闇の中でまばゆく輝きを増している。

辺境の村からカトウシユ森林まで、微かな光を追うのは幼いカイには少しくたびれたが、今は苦もなくそれを目指す事ができた。

主の許へ戻った喜びに一声鳴いて、カイはレオアリスの肩に降り立つた。

「カイ！」

レオアリスは足を止め、翼を休めた小さな身体を撫でてやる。指先から伝わるカイの言葉に、近寄ったアーシアへ瞳を輝かせた。

「見つけたぜ！」

「本当ですか！？　どこに——アナスタシア様はご無事で……お怪我は？！」

意識はあるんですか？？？」

矢継ぎ早のアーシアの質問に、レオアリスはとにかく安心させようと、力

イに確認しながら一つ答える。

アナスタシアに怪我が無い事、意識がある事を聞いて、アーシアは張り詰めていた頬を緩めた。

「良かつた……」

ほつとして力が抜けたのか、アーシアはふらふらと壁に寄りかかった。実際、殆んど休む事無く進んできて、体力の限界も近い。

「良かつたな」

レオアリスの言葉にこくりと頷く。上げた青い瞳は涙交じりだ。

それを眺め、レオアリスは僅かに躊躇つてから、アナスタシアのいるもう一つの状況を口にした。

「けど、救け出すには少しだけ困難な場所にいるみたいだ」「困難……？」

「はつきりは判らないけど……土の中の、空間らしい」

「——土の中」

それが土砂に飲まれたせいだと、アーシアにも容易く想像が付いたようだ。再び顔が青ざめる。

「——」

「……とにかく行こうぜ。先ずはそこまで行つて顔を見せてやらないと。お前の顔を見たら安心するだろ」

「……は、はい」

アーシアは震える唇で何度も頷いた。

「ここまで何とかなったんだ。絶対に助けられる」

ぽんとアーシアの肩を叩き、一度背後の闇に厳しい眼を向けてから、レオ

アリスはアーシアの背を押して再び坑道を進み始めた。

最初の内だけ早足を保っていたものの、アーシアは抑えきれない想いに駆られて坑道を走り出した。レオアリスは彼を呼び止めようと手を延ばしかけたが、思い直してそれを降ろす。

今のアーシアに体力を削るなど、この先の道の危険性などを言つても無理な話だ。

「カイ。アーシアに付け。いざつて時はまずアーシアをアナスタシアの所に連れて行くんだ」

肩のカイに告げ、カイがアーシアを追うのを確認してから、レオアリスはもう一度背後の闇に視線を投げた。

足音は付かず離れず、確実に二人の後を追つて来ていた。

距離はまだ遠いようだが、立ち止まれば足音も止まり、進めばまた動き出す。追い縋るのは容易いはずなのに、決して近付いて来ようとはしなかつた。

それはわざと一定の距離を保つてゐるようにも思えた。

どうにか引き離したくても、先程からずっと一本道なのだ。深く深く、ただ下つてゐる。

「——」

(わざと……俺達を追い込んでるなら)

この先にいるのは。

アナスタシアを救出した上で、竜達に追い付かれる前に抜け出すのはおそらく難しいだろう。

もう一度道を塞ごうかとも思ったが、それでは帰り道を失う可能性が高い。
(とにかく、アナスタシアの所まで辿り着くのが先だ)

アーシアに告げた言葉をもう一度呟いて、レオアリスも道を急いだ。

アーシアは一心不乱に駆けて行く。ただ、気持ちは一刻も早くアナスタシアの許に辿り着きたくても、身体には大分疲れが蓄まつていて、走りながらよろめき、膝に手を当てて屈み込んだ。

カイがぱさりと羽をばたかせてレオアリスを呼ぶ。

「大丈夫か？」

追い付いて覗き込むように声をかけると、苦しそうに肩を揺らしながらも、アーシアは唇を噛み締めて首を振った。足が震えているのに、それでも走るうとする。

「大丈夫、です。行きましょう」

「休んだ方がいい。まだ追い付かれるには余裕があるし、いざつて時に走れなかつたら何にもならない」

「でも」

足を止めたくない気持ちはレオアリスにもよく判つてはいた。こうしている間に、アナスタシアがどんな状況に陥っているか判らないのだ。

だが無理をして自滅しては何にもならないからと、レオアリスはきっぱり首を振つた。

「お前の主人はそんなに柔じやないだろ」

「——」

「とにかく、休まないにしても走るんじやなくてせめて歩こうぜ。さすがに俺も、お前がここで倒れたら担いでやれないし」

レオアリスの言葉にアーシアははつと顔を上げた。申し訳なさそうに足元に視線を落とす。視線の先には、もう乾いているが怪我を負っているレオアリスの足がある。

「……すみません。足は」

「足？　ああ、これは平氣だ。もう痛みもない。問題は体力だよ。お前ふらふらだぜ」

「すみません」

アーシアは頭を深く下げ、深呼吸をして歩き出した。歩くと余計に、背後の足音は大きく響く。

「貴方も疲れてるのに、すみません」

何度も謝るアーシアへ、レオアリスは困った顔で苦笑を洩らした。

「まあ俺は、まだ行けるかな。慣れてんだ、歩くのは。食料の買い出しに隣の街まで歩いて一日かかつたし、周りは森しか無いからどこへ行くのもひたすら歩く。森を抜けて街道に出るのも半日がかりださ」

俺の故郷な、と付け加え、懐かしそうに近寄つたカイの羽を撫ぜる。

「——そういう場所は、僕も好きです。アナスタシア様も」

レオアリスは嬉しそうに笑つた。

「そうか？　じゃあいつか案内するよ。まあ案内するつたつて何にもないけど」

「本当ですか？」

アーシアが思いの外嬉しそうな顔をしたので、レオアリスは故郷の森しかない情景を思い浮かべ、逆に気まずそうに眉を寄せた。

「あんまり期待持たれても——」

ふいに、唸るような音が聞こえた。長く、尾を引くような、震える低い唸りだ。

ぎよっとして、二人は闇の先を見つめた。

強い風が前方から吹いてきて、二人の短い髪を煽る。再び闇は唸つた。

獣の咆哮か、威嚇する時の唸り声に似ている。背筋がぞくりと粟立つようなその唸りは、尾を引き、耳を騙そうとするようにくぐもりながら壁に衝して、消えた。

しん、と不気味な静寂が戻る。

「——まさか、黒竜か？」

「いえ……黒竜のいる場所は確かに近いですけど——そんな感じはしません」

アーシアも良く判らないといった顔で眉を潜めている。二人は瞳を見合

せ、松明を前にかざすと、口をつぐんだままゆっくり進んだ。

唸るような音は進むに従つて、次第に幾つも重なるようにぼうぼうと鳴り

響き、消え残つた音が坑道に反響を始める。

それほどの距離もなく、二人は坑道を抜けた。

目の前に広がつたのは、ぽつかりと口を開けた広い空間だ。

「ここは——」

踏み込んだ途端、角笛のような太い音が唸りを上げた。

「うわっ！」

レオアリスは全身に叩きつけた突風に煽られ、たたらを踏んで壁にぶつか
り、そのまま寄りかかつた。

驚いて近寄ろうとしたアーシアの前で、松明が大きく揺れ、消えた。

炎の残像だけを目の奥に残し、真っ暗な闇が辺りを支配する。

唸る音。四方から渦巻くように強い風が吹き付けてくる。風が渦巻く度に、
空間全体が震えるように唸りを上げていた。

「この音——風だ」

見えない空間を見上げ、レオアリスは呟いた。広い空間に風が吹き込んで
渦を巻き、唸るような音を立てているのだ。複数の音が重なつてているという

事は、入り口が複数あるという事だ。もしかしたら、地上が近いのかもしれ
なかつた。

「松明を……」

消えてしまつた松明に、改めて火を灯そうとした時、風の音に紛れて、頭
上で奇妙な音がした。

かりり、きし。

何かを擦るような音だ。すぐに新たな風に搔き消されたが、風が弱まつた

隙間を縫つて、音は再び聞こえてくる。

かりり、かりり。

「レオアリスさん、火を……！」

アーシアの声は震えている。
かりり、ぎし。

レオアリスの反応が返らない事に、アーシアはぎくりとして声を強めた。

「レオアリスさん？」

微妙に慣れてきた眼に、レオアリスが先程のまま、壁に寄りかかっている
のが映る。

レオアリスはずっと頭上を見上げていた。
何かが光った気がしたのだ。

「レオアリスさん！」

「あ、ああ」

顔を戻したレオアリスは一瞬アーシアの位置を見失つて頭を振り、それから松明に火を灯した。風のせいで上手く点かず、じりじりとした焦燥が募る。

「くそ、点けって」

早く火を灯さなくては。

早く火を灯してこの闇を払いたい。
かり……かりり。

やがてぱちぱちと音を立て、漸く炎が燃え上がり、レオアリスはそれを頭
上に高く掲げた。吹き付けた風に、炎が大きく瞬いた。

二人は頭上を見上げたまま、そのあまりの光景に息を飲んだ。
網膜に焼き付くように浮かび上がつた、高くそそり立つ岩の壁、幾つも刻
まれた風の入口。

そして、その壁に逆様に張りつき、長い首をもたげて二人を睨む——、竜
の姿。

「——な……」

大きく風に煽られた炎が、一瞬だけ空間全体を照らし出す。

二人は頭上を見上げたまま、そのあまりの光景に息を飲んだ。

消えてしまつた松明に、改めて火を灯そうとした時、風の音に紛れて、頭
上で奇妙な音がした。

かりり、きし。

何かを擦るような音だ。すぐに新たな風に搔き消されたが、風が弱まつた

隙間を縫つて、音は再び聞こえてくる。

かりり、かりり。

「レオアリスさん、火を……！」

壁を掴んだ竜の爪が、岩を締め付ける音。
その数は、十体を超える。

竜の巣だ。

風が渦巻き、太い唸りを上げる。

レオアリスは知らず、この場所が本来は風竜の版図であつた事を思い出していた。

ああ、だから風が強いのだ、と。

風が渦巻く、竜達の棲み処。

竜の両眼がぎらぎらと光を弾き、愚かにも自ら飛び込んで来た獲物を睨んだ。

九

「——つ、戻れ……！」

凍るような視線に射貫かれて我に返り、レオアリスは今出てきた道に身を翻そうとして、立ち止まつたアーシアの肩にぶつかつた。

「アーシア？ 何……」

凍り付いているアーシアの視線を追つて、レオアリスは息を飲み込んだ。坑道の奥から、竜の立てる重い音が近付いてくる。

「——」

袋の鼠だ。

ここに繋がつていると判つていたからこそ、竜はゆっくりと二人を追つてきたのだ。侵入者をいつでも噛み碎けるが故に。

（どうする……）

留まつても戻つても、結果は同じだ。竜に囮まれれば、待つてゐるのは死しかない。

きし、と頭上の岩が鳴る。

竜の立てる擦れるような独特の擦過音が、ゆっくりと近付いてくる。

（戦うしかない）

ここまで来たのだ。

傍らを見れば、何も武器すら持たないアーシアは、それでも決然と瞳を上げている。

（戦うんだ！）

アーシアに背を預けるように振り返り、レオアリスは頭上を睨み付けた。

二人の真上にいた一頭の、銀色に燃える両眼と視線が合わさる。

風が吠え——竜達が一斉に吼えた。空気がビリビリと震え、細かい岩の欠片が降り注ぐ。

レオアリスの手元から雷撃が走り、頭上に迫つた一頭を撃つた。雷撃はちょうど、獲物を噛み碎こうと開いた喉に突き刺さり、竜の巨体がもんぞり打つて地面に転げ落ちる。

それを合図のように、壁に張り付いていた竜達は、ぱさりと翼を広げた。

「アーシア！ カイに付いて走れ！」

剣を引き抜き、レオアリスが叫ぶ。

この先に、必ず道があるはずだ。

「駄目です！ 僕も」

「アナスタシアを救けるんだ！ それがお前の目的だろ！」

迷うアーシアとレオアリスの間を、竜の身体が擦り抜けるように飛び、退いた二人の距離が開く。

「アナスタシアを救けて、俺が生きてる間にここに戻って来い！ そしたら今度は俺を救けられるだろ？」

冗談めかして言つてみたものの、さすがにあまり笑えなかつた。アーシアは僅かに躊躇い、それを振り切るように身を翻した。

「必ず——！」

（アナスタシア様を——）

掠めるように飛ぶ翼を掻い潜り、アーシアはカイを追つて駆け出した。

天井から降下し迫り来る竜へ、剣を背中から振り抜く。剣は一瞬青白い光を纏い、翼を易々と切り裂いた。片翼を失つた竜の身体が地面に激突する。

「——」

その思いがけない切れ味にレオアリス自身驚き、まじまじと刀身を見つめた。

（これが、まさか）

ある種の期待を持つて見つめたレオアリスの視線の先で、剣は刀身を震わせたかと思うと、次の瞬間根元から砕けた。

（駄目だ、この剣じゃ……）

いつも剣は折れる。いつもと同じ事だ。

この剣ではない。この剣では駄目なのだ。

どくりと身体の裡で鼓動が響く。

右手から迫つた竜に折れた剣の柄を投げ付け、飛び退く。雷撃の法陣を組み立てる。

もうとしたレオアリスに、新たな竜が爪を伸ばす。襲い掛かる爪や尾を躱すのが精一杯で、あつという間に法陣を組む余裕など無くなつた。

ただ、まだ希望はある。

（引き付けて、アーシアさえここを抜ければ）

ちらりと投げた視線が飛び交う竜達の隙間にアーシアの姿を見つけ、色を失つた。

アーシアはぴたりと足を止めていた。アーシアの前には二頭の竜が首を低く下げ、行く手を完全に塞いでいる。

複数の翼の音が容赦なく空間を搔き回す。縦横無尽に空間を飛ぶ竜達の姿が、闇に浮かんでは消える。

まるで逃げ場を失つて立ち竦む獲物を、どう狩ろうかと思案するように、竜達は爪を伸ばしては引つ込め、急激に迫つては闇に消えた。

遊んでいる。
急がなくとも、この獲物はいざれ引き裂かれ、胃袋の中に収まるのだと、そう思つてゐるかのようだ。

どうくりと鼓動が鳴る。
今度は近かつた。壁一つ隔てた同じ空間に在る、そんな感覚だ。
手を伸ばせば、取れる。

剣が。
呼んでいる。
レオアリスが氣付かないまま、じわりと、微かな青白い光がレオアリスの身体を取り巻いた。

竜達の羽音が、一瞬静まり返る。
何を感じたのか、直後に竜達は一斉に吼えた。
獲物に飛び掛かろうとした、その時。

突然、激しい炸裂音が響き、天空の太陽のように、頭上に煌々と光が輝いた。

闇に包まれていた空間が強い光で満たされた。暗闇に慣れていた眼が痛みを訴える。

腕で眼を庇いその場に立ち尽くしたレオアリスとアーシア、警戒して身を伏せ喰る竜達を、光は奇妙なまでに白々と照らし出した。

ぐにやり。

光球が歪んだ。

その腹から光の線が吐き出される。

光は真下にいた一頭の竜目がけてすると伸び、先端が三つに分かれ竜を囲むと、地面に繋ぎ止めるように突き立つた。ひどく緩慢な動きに見えて、それはひと欠けらの慈悲もなく竜の動きを奪う。

ぶつん。

光の尾が光球から切り離され、一度地面に吸い込まれたかと思うと、ぼう、と三つの印が浮かぶ。そこから再び立ち上がった白い光が、もがく竜の身体を包み込んだ。

「法術——」

光はそれ 자체が生き物のように動いたが、紛れもなく法術だった。レオアリスが宿営地で使った法術と発動の仕方が似ている。

レオアリス達の目の前で竜の身体が、その足元からじわじわと色を変えていく。灰色の、無機質な、石に。

光は竜を完全に石へと変えた後、輝きを消した。目の前にあるのはもはや竜の精巧な彫刻のようだ。今にも動きだしそうな、というのはこの場合間違つた表現に違いない。竜は確実に、たつた今まで動いていたのだから。

ぐにやり、ぐにやりと光球が蠢き歪む度、次々と光の線が放たれ、一頭、また一頭と、確実に竜を捕え石へと変えていく。

レオアリスは術の主を探して辺りを見回したが、照らし出された広間の中にも背後の坑道にも、術士の姿は見当たらなかつた。

「——すげえ……」

レオアリスが感心して見入つたのも無理はない。視認できない標的をいとも容易く、正確に封じていく——高等法術だ。

「誰が」と呟いたが、それが誰の手によるものかはすぐに想像が付いた。軍の一、王都の術士。チエンバー達が言つていた、法術士団の術士だろう。

状況も忘れ、石化した竜の翼に触ろうと手を伸ばした時、背後で鋭い羽音がした。

「レオアリスさん！」

アーシアが鋭く叫ぶ。振り返つたすぐそこに、牙を剥いた竜が迫る。飛び退こうとして、運悪く石像に阻まれた。

「しまつた」

仲間を失つた竜は怒りに両眼を燃やし、せめてこの獲物を噛み碎こうと頸を突き出した。つい

石像の竜の足元が開いている。咄嗟に潜り込んだレオアリスを掠め、竜の頸あぎとはレオアリスの居た場所——仲間の石像を捕らえて、ぱりん、と噛み碎いた。

恐るべき力に、ひゅつと喉から音が洩れる。

「レオアリスさん！」

「来るな！ 自分でなんとかする、お前は先に行け！」

そう言つたものの、石像の竜の腹が邪魔をして、この下から抜け出せるのは正面しかなかつた。その正面には竜の牙がレオアリスを噛み碎こうと口を開けている。ぎりぎりまで下がつても、竜が首を伸ばせば難なく届いてしまう。

突き出される牙を辛うじて躱し、レオアリスは竜の鼻先を思い切り蹴り付けた。だが竜は一度頭を振つただけで、再び牙を剥く。

「レオアリスさん！」

上空の光球はぐにやりと蠢いたが、それきりだ。あとたつた一頭を残して、光球は力を失つてしまつたかのように見えた。

「どけ！」

太い声と共に、アーシアの横を大きな影が走り抜ける。見覚えのある姿にアーシアは驚いて立ち止まつた。ワツツだ。

ワツツはレオアリスに食らい付こうとする竜へ駆け寄りながら、背中にしょつていたぶ厚い盾を取り振り上げると、その平らな面を竜の頭めがけて力任せに叩き降ろした。

「オラア！」

野太い気合と岩を碎くような音と共に竜の長い首が弾かれ、竜の重い身体が地面に倒れ伏した。

半ば唖然とそれを見ていたレオアリスの目の前に、竜の長い首が投げ出される。竜は首をだらりとのばしたまま、完全に気を失っている。

「——す……げえ」

普通、いくら小型とはいっても、竜を殴り倒すだろうか。レオアリスの雷撃など、この威力に比べると遊びみたいなものだ。驚くというより最早呆れて、

レオアリスは伸びた竜と身体を起したワツツのいかつい姿を見比べた。

「ふん。盾つのは相手をど突くモンだ。覚えときな」

「あんたは例外でしよう。止めてくださいよ無理な事教えるのは」

「坊主、真似しようなんて考えない方がいいぞ。この人しかできん」

後から坑道を駆けてきたクーガーとウェインが、やはり呆れた眼で伸びた竜を眺め、漸く呼吸ができるというように身体を伸ばして息を吐く。坑道から、他にも数人の兵士が駆けて来る姿が見えた。正規軍が二人に追いついたのだ。

あの坑道にいた竜もワツツが殴り倒したのかもしれない、などとレオアリスは倒れている竜を見ながら想像した。

「状況に合わせろつてこつた。——それより、小僧」

ワツツは太い腕を伸ばし、まだ座り込んでいるレオアリスの襟首を掴むと、

石像の下から引き抜くように立ち上がらせた。

光球は既にそこにいた竜を全て封じ終えて動きを止め、白々とした光を投げていた。広い空間には風の呪く音だけが響いている。

「てめえ、どういうつもりだ」

ワツツの細い眼は容赦なくレオアリスを睨み据える。それだけで震え上がりそうな迫力があつた。何と言つても、竜を一撃で殴り倒した男だ。

その眼を、レオアリスは負けじと睨み返した。今更言い訳をして誤魔化すつもりはない。

「——アナスタシアを救ける為だ」

「救けるだ？」

「そうだ！ 生きてるつて判つてんだから救けるのは当たり前だろ！」

ワツツの岩のような顔が更に険しくなる。あつと思つたクーガーが止める前に、ワツツは頸をぐいと引き上げると、レオアリスの額に勢い良く頭突きを喰らわせた。

「いっ！」

堪らず額を抱えてしゃがみ込んだレオアリスの前に、ワツツが立ちはだかる。

「ふざけんじやねえ！ タつた一人で何ができる！ 救けに来てテメエが死んだら全く意味なんてねえんだぞ！」

レオアリスは額を押えたまま、それでも睨み返した。

「そんな事言つてたら、何にも始まらないだろうつ」

「くそガキ。知つた風な事言つてんじやねえ。大体テメエ、軍の行動を邪魔

した責任どう取るつもりだ？ 一歩間違えば、全部がパアになるところだぜ」

「それは、その間に、何とかするつもりで」

ぐい、と太い腕が拳を握り込んで持ち上げられ、レオアリスは飛んでくる衝撃を覚悟して、ぐつと唇を引いた。クーガーとウェインが慌てて腕を抑える。

「まあまあ、無事だつたんですから！」

「そういう問題じやねえ」

二人をぶら下げたまでも、ワツツの拳はレオアリスの頸を捉えそうだ。

「ワツツ少将、そこまでにしろ」

冷静な、だが少し刺を含んだ声がかかり、レオアリス達は声のした方向を見上げた。

広間の壁に開いた幾つもの横穴、風の通り道となつてある坑道の入り口に、男が立っている。レオアリスとアーシアは始めて見る顔だが、ワツツは「ボ

ルドー中将」と男の名を呼んだ。踝まである長衣が強い風に音を立ててはためいている。

ボルドーは冷ややかな眼で真っ直ぐにレオアリスを見下ろした。

「剣士——剣は使えるのか」

「——」

またそれか、とレオアリスはぐいと唇を引き締めた。できれば彼自身が、使い方を教えて欲しい位の話だ。

「答える」

理由は判らなかつたが、ボルドーの持つ敵意に似た意識を感じて、レオアリスもボルドーを睨み付けた。ワツツがまだ襟元を掴んでいた手を離し、耳元で囁く。

「ガン垂れんな。法術士団だ。お前の就職先になるかもしねえだろ」

ワツツは冗談めかしたが、法術士団と聞いてレオアリスは僅かに瞳を見開いた。

「法術士団——」

では彼等が、この竜達を封じた術士なのだ。しかし何故初対面の相手から微かとはいえ敵意を向けられるのか、そのワインスターに対面した時には感じなかつた感情に、レオアリスは眉を潜めた。

「どうなんだ」

「……使えない。でも関係ないだろ」

先程感じた、すぐ隣に在るような感覚は既に遠退いている。もう少しで掴めそうな気がしていたが、それを告げる気にはならなかつた。

ボルドーは暫く検分するようにレオアリスの姿を見つめた後、視線を外した。

「——地上に出てから諮詢にかける。これ以上邪魔になる前に連れて行け」

それまでレオアリスを殴るつもり満々だったワツツだが、急に嫌そうな顔になつてボルドーを見上げた。

(こいつあ、さつきわざと試そとしやがつた)

口には出さなかつたが、ボルドーはレオアリスが剣を使うかどうかを確かめようとして、あの時光球を動かさなかつた事に、ワツツは気付いていた。(ムカつくが、利用させる事あねえ)

「——お言葉どおり、俺達はガキを連れて帰りますよ。おう、クーガー、ウエイン、こいつ抑えてな

「帰るって、ちょ」

慌てるレオアリスを二人に放り出し、ワツツは傍らのアーシアに手を伸ばした。アーシアに躊躇間も与えず、両肩を後ろからがつちりと押さえ込む。そうして押さえ込むとアーシアの足が地面から浮き上がつた。

「帰るつてのは、地上に帰るつて事だ。後は法術士団の仕事だ。奴等がやるつてんだから、奴等に任せな」

驚き戸惑っていたアーシアは、打たれたように顔を上げた。

「待つてください、そんな、アナスタシア様が」

「軍に任せろ。その為の軍だ」

「アナスタシア様は生きてるんです！ 居場所だつて判つてます！」

「ならその居場所を教えろ」

ワツツは取り付く島も無かつたが、アーシアは必死に食い下がつた。こんな所で、もう眼と鼻の先にアナスタシアがいるというのに、帰るなどできる訳が無い。

「僕自身が行きたいんです！ お願ひします、行かせてください！」

「駄目だ」

「お願ひします！ 僕は行かなくちゃ」

アーシアの必死の懇願にもワツツは譲る気配を見せなかつた。レオアリスはクーガーとウエインの顔を見たが、彼等もその考えは同じのようだ。

(どうする)

本来は軍に任せるのが当然だ。それはレオアリスにも、アーシアにも判つている。

けれどそれで片付けられる話ではないのだ。理屈ではない。

「放して——放せつ！」

アーシアは憤り、精一杯の力で抜け出そうと暴れたが、振り回される手や足が顔や体に当たつてもワツツはびくともしない。そのまま引き摺つて軽々と地上へと連れ出せそうだ。

ボルドーがこの場を区切るように口を開いた。

「ワツツ少将、すぐ引き上げさせろ。我々は黒竜を捜し出し、作戦に移る」

ボルドーが手を上げると、別の坑道の入り口に立っていた術士が頷いて、低く術式を唱え始めた。探索の法術だ。

「……法術士団は何をするつもりなんだ？」

「黒竜を封じるんだよ。どうにかな。地底と地上、双方から印を置いてなんたらかんたら」

ワツツは鼻先をしかめて最後は適当に流したが、レオアリスは驚いて瞳を見開いた。二箇所で同時に、大規模な法陣を組む。二点同時の法術など聞くのは初めてだ。どんな条件なのがは判らないが、法術士同士の呼吸が合わなければ発動は難しい事は、レオアリスにも判る。

だが、今はそれに感心している暇も、黙つて見ている暇も無い。もう一度、レオアリスは声に力を込めて、ワツツを見上げた。

「黒竜を封じるのなら、それは任せる。任せるつていうより、その方が全然いいに決まってる。けど、アナスタシアはまだこの下にいるんだ。今更帰れつたって、そんなの納得できない」

「納得するとかしねえとか、そういう問題じやねえ」

「もうすぐそこなんだ、帰るより探す方が早い」

「それよりもおつ死ぬ方が早え」

きつぱりと言いつつワツツは頸をしゃくり、クーガーとウェインに坑道を示した。ぐつと奥歯で苛立ちを噛み締め、レオアリスはクーガー達に腕を掴まれたまま、一歩踏み出した。

「俺達にだつて、救けようとする権利があるだろ！」
「権利云々は責任能力があるヤツが言うもんだ。この場合、お前等より俺達の方が責任能力は高い」
「顔に似合わず、ワツツはレオアリスの抗弁を巧みに流していく。論破でき

ずにレオアリスはイライラと唇を噛み締めた結果、……叫んだ。

「アーシア！ 先に行け！」

強行突破だ。アーシアもまた問い合わせて、一つ身を震わせると、飛竜となつてワツツの腕を弾くように抜け出した。

「うおッ」

驚いたクーガー達の手が緩んだ隙に、レオアリスも身体を縮めて擦り抜け。クーガーもウェインも他の兵士達も、法術士達すら飛竜に変わったアーシアの姿を唖然とした顔で見つめていて、レオアリスはその間に彼等の間を走り、竜の石像を縫うように広間の奥に見える坑道へ走つた。

「……テメエ等、いい加減にしろっ」

最初に我に返つたのはワツツだ。一瞬どちらを捕まえようか迷つたものの、レオアリスを追いかけてワツツも地面を蹴る。

追い縋るワツツの腕を邪魔するように、アーシアが翔ける。

「この」

アーシアは一度くるりと空中に円を描き、ワツツの頭を飛び越して奥の坑道へと向かった。

「——微かに、足元が揺れた。

ほんの僅かな、地面に肌を付けていなければ判らない程の震えだ。だが、アーシアはぴたりと動きを止めた。

「アーシア！ 何してる！？」

坑道の手前で振り返つたレオアリスが、中空に浮かんだままのアーシアに気付いて叫んだ。

「——」

「アーシア！？」

アーシアは何かを探るように、何かに耳を研ぎ澄ませていて見えた。追いついたワツツも、レオアリスを捕まえるのを忘れてアーシアを振り返つた。

「何だ……」
「しつ」

レオアリスは口元に指を当て、アーシアの聞いているものを聞こうと耳を澄ませた。法術士の詠唱も途切れ、しん、と沈黙が落ちる。

レオアリスやワツツ、他の者達も次第にそれに気付き、訝しそうな顔で広間を見回した。

地面が揺れている。

小刻みに、振動が脚を這つて身体を昇つて来る。

「——地震か？」

ワツツが眉根に皺を刻み、落石を警戒して岩の天井に眼を向けた。ボルドー達も同じように、辺りを見回している。

だがアーシアは凍りついたまま、それだけは変わらない青い瞳を、釘付けにされたように地面に向けていた。アーシアの視線を追つて、レオアリスはじつと足元を見た。

振動は次第に大きくなり——、不意に、地面が跳ねた。

その衝撃で、一人の術士が坑道から足を滑らせ落下する。気付いたワツツとウェインが走り、地面に激突する前にその身体を捕まえた。

その間にも、振動は収まる気配を見せず振幅を増している。

レオアリスは揺れる足元を見据えたまま、ある考えに拳を握り締めた。

(下。——まさか)

素早く眼を向けたアーシアは、中空に凍りついたまま翼を震わせ、大きく肩で息をしている。恐れて——恐怖に震えている。

(まさか、下に、黒竜がいるなら——)

ぞつとして、レオアリスは頭上を振り被つた。ボルドーと視線が合う。

「結界を張れ！　早く！」

ボルドーはレオアリスの言葉に眉を潜めた。

「何を？」

「何でもいいから、早く張るんだ！　今すぐ！　できるだろ！？」

黒竜がこの下の空間にいるとしたら。この揺れは——

「——黒竜の息が来る！」

果然とレオアリスを見返し、ワツツもまた理解した。ワツツは既に一度、

黒竜の酸の息が丘を溶かして吹き上がる様を眼にしている。

「ボルドー中将！　結界だ！」

ボルドーが僅かにでも自尊心を守る事を選んだとしたら、この先の結果は全く違っていただろう。ワツツの強い口調に頬を引き攣らせたものの、ボルドーは体の前に、素早く一抱えもある法陣を描き出した。

法陣は光を発し、回転しながらレオアリス達の足元に落ちた。

搖れる地面の上に、ボルドーの張った結界が光の盾となつて広がる。光の盾が足元を覆うのが早いか、それを競うようになすしん、と坑道全体が大きく揺れた。

足元の岩盤がどろりと溶けて崩れていくのが見える。光の盾に触れて、じゅうと音を立てた。ワツツが呻いた。

「溶けてやがる……」

次の瞬間、白い光と共に、溶けかけた岩が濁流のように吹き上がった。

地面は完全に崩れ、石と化した竜を飲み込み、溶かして行く。

結界は黒竜の息に触れた瞬間、光を増してそこにいる者達を包み込んだ。薄い幕が強風に煽られるような音を立て、激しくうねる。荒波の上の小船のようになる間に結界は上下左右に揺れ、その都度中の者達は足元に倒れ、転がつた。

「もつのか、これ！」

誰かが悲鳴のような声を洩らす。みしみしと結界が軋み、光の奔流の中で歪む。

あともう僅か、黒竜の息が続いていたら、おそらく結界は負荷に耐え切れず弾け飛んでいただろう。だが、次第に光は弱く、細くなり始めた。

「——」

何人かが固く瞑つていた眼を開け、恐る恐る辺りを見回して安堵の息をつきかけて、——凍りついた。

結界すら突き抜ける、胃の腑を振るわせる咆哮が響く。

次第に薄れていく白い酸の光の幕の底、溶けて失われた岩盤の下から——

巨大な黒耀の竜が身をもたげ、翼を広げて、咆えた。

第十一章

劍

「——無事だ、全員……」

天空に、ぽかりとまるい夜空が覗いている。切り取られた夜空に散りばめられた星とちようど中天に上った月が、奇妙なまでに美しかった。

風の音は既に止んでいた。

黒竜の吐いた酸の息が、人の手と自然が作り上げた風穴を地上まで吹き溶かしたからだ。

黒竜の咆哮は再び穿たれた深い縦穴の岩壁に反射し、幾重にも降り注ぎそこにいる者達の耳を轟した。

磨き上げられた黒耀の鱗を纏う、太古の竜。光を弾く金の両眼には一切の慈悲も無い。おそらくこの西の地の竜達にとつてさえ、黒竜の存在は脅威ではなかつたのかと、レオアリスはそんな事を思った。

レオアリスやアーシア、ワツツ、兵士達にボルドー等法術士達、そこにいる誰もがその存在から放たれる圧倒的な力の前に、呼吸を忘れ、凍りつき立ち尽くしていた。足元の黒竜はその巨体には狭いと感じさせる地底の闇の中で、ゆるりと首を巡らせた。

ボルドーの張つた光の盾が、レオアリス達の足元で限界を訴えて瞬く。光が弱まる毎に、足元の黒竜の姿が透けて見えた。

「このままじゃ、落ちる」

レオアリスが膝をつき足元の盾に触れるのを見て、ワツツも我に返つた。

彼等は十数名ほどが光の盾を篭のようにして、まるい夜空と地底の黒竜との間に不安定に浮かんでいる。

川面に投げられ喰らい付かれるのを待つ、浮き餌のようだ。

「ボルドー中将！」

ワツツはボルドーの名を呼んで上空を振り仰ぎ、削られ変わり果てた光景にぎくりと息を飲んだ。

その一直線に穿たれた長い縦穴の途中に、ボルドー達もまた幾つかの光の盾に守られ、ワツツ達の少し上に浮かんでいる。

無理矢理押し出された声は語尾が擦れている。ボルドーは黒竜の酸の息がもたらした結果に打ちのめされていた。たつた一吹きがこれ程の破壊を生むとは、ボルドーの想定を越えていた。

だが今二撃目を食らえば法陣は保たない事を、ボルドーも理解している。

退くか、封じるか。

封じる事ができるか。

不安に駆られた心を、思いもかけない強い声が打つた。

「全員無事なら、封術はできるよな」

見れば、レオアリスがボルドー達を見上げている。自らも術を扱う少年ならではの、高位の術士に対する信頼に似たものが、その瞳の中にある。

「——可能だ」

ボルドーは早口で答えた。レオアリスは嬉しそうな顔をして、隣にいたワツツにそれを向ける。

「……何が俺達でだ。ガキが首突っ込むんじやねえ」

ワツツは苦虫を噛み潰した顔でレオアリスの頭をはたいたが、その上にはいつもの彼らしい表情が戻っていた。他の者達もまた、レオアリスの単純すぎると言える明確な言葉に、呪縛から解かれたような顔をしている。

結局それしかすべき事はないのだ。

怯えている時間はない。

(にしてもこのガキ、怖くねえのか。いや)

つい先程までは、黒竜の姿に、確かに息を飲んでもいた。だが今はもう、レオアリスは漆黒の瞳に光を刷いて、黒竜を見据えている。その光は、彼の瞳に見えているものは、ワツツ達とは全く違うものではないかと、そう感じさせた。

黒竜の脅威ではなく、黒竜を封じる為のはつきりとした道筋だ。

その瞳の色に導かれるように、ワツツの中にもまた、微かな道筋が浮かぶ。

「——降りる。ボルドー中将、俺達が先払いする、盾をこのまま降ろせるか？」

「その状態ではもう無理だ。新しく盾と、降下の手段を作ろう」

ボルドーが領いて傍らの術士に目配せし、術士が詠唱を始める。ワツツはレオアリスを押しのけて、彼が不服そうな顔をするのを構わず、兵士達を見回した。

「とにかく、奴が動く前に動く。酸の息は厄介だが、吐くまでに時間がある。

「とにかく、奴が動く前に動く。酸の息は厄介だが、吐くまでに時間がある。光が見えても、そこから潰せる」

その潰す事 자체が困難で、例え酸の息を止めたとしても黒竜の身を傷つけた術をワツツ達は持っていないが、ワツツはそれには触れずに兵士達を鼓舞するように強い口調で言い放った。

「半刻耐える。凌ぎければ、半刻後には奴は檻の中だ」

流れていた詠唱が止む。

しゆる、と何かの擦れる、小さい音が聞こえた。音の方を探れば、縦穴の壁から、青く細い薦が幾筋も伸びている。

「これで降りろってか。まるで降下訓練だな」

ワツツは呆れて、剃り上げたごつい頭を撫でた。

頭上の動きを感じ取っているのか、黒竜はゆっくりと身を揺すり、低く喉を鳴らした。金の両眼が一人一人の上を過ぎる。

その眼には、彼等が何をしようとも言葉を以てしない、まるで石くれでも見るのにも似た光が浮かんでいた。金の両眼が一人一人の上を過ぎる。

たつた今呼び起こされていたはずの希望が、再び萎縮していきそうだ。

「中将、封術の準備を」

再び黒竜に圧倒される前に、シアンが早口でボルドーを促し、仲間の術士達を振り返った。

「地上の部隊に伝令使を飛ばして。皆配置に着く……」

空を切る鋭い音と共に、尾が光の盾を掠めた。縦穴の岩壁を撃ち、碎く。

黒竜は広げた翼を震わせた。

飛び。

風を巻いて浮かび上がると、黒竜は丸い空を目指した。飛び立つのに邪魔

な物を振り払うように、盾目がけて長い首が打ち付けられ、その衝撃に盾は呆気なく砕けた。乗っていた十数名が縦穴に放り出される。

だが黒竜も盾の最後の力に押し返され、再び闇に降りた。

咄嗟に術士が術を唱え、壁から下がっていた薦が急激に伸びて、落下する兵士達の身体に巻き付く。ワツツは腹に巻き付いた薦に振り子のようにぶら下がりながら、手近な兵士の腕を掴んだ。

レオアリスは盾の端に寄っていたせいで、遠くに弾かれた。目の前に伸びた薦を掴もうとして、手が空を切る。「ガキ！」ワツツはもう一方の手を伸ばしたが、薦は反動で大きく揺れ、掴みかけたレオアリスの腕を僅かに掠め、擦り抜けた。

落ちていくレオアリスの眼下に、黒竜の頸^{あぎと}が開く。

「レオアリスさん！」

喰われる、と思った瞬間背中が硬いものに当たり、レオアリスの身体がふわりと浮かんだ。そこがアーシアの背の上だと気付き、レオアリスは身を起してほっと息を吐いた。アーシアはぎりぎり黒竜の牙を躲し、翔け上がる。

「助かった」

だが一人、間に合わずに、悲鳴を引いて闇を落ちていく。ばくん、と重いものが閉じる音がして、悲鳴が途絶えた。

「誰だ、落ちたのは！」

「判りません！ 多分、」

ワツツの怒鳴り声に返したのは、恐らくクーガーだ。

「ちくしょうッ」

誰かが叫ぶ。黒竜が再び翼を広げる。咆哮が湧き起り、縦穴を突き抜け怨嗟の如き禍々しい音を引いて散った。

「黒竜を飛び立たせるな！ ここで抑える！」

吹き出した汗拭い、ボルドーが声を上げる。ボルドー達の乗った光の盾も、咆哮を受けて波の上の木の葉のように揺れた。

「伝令使は！」

「飛びました、しかしまだ返答が」

「返答を待つて動く時間はない！　すぐに散開する！」

上空ではボルドー達の声が行き交い、足元では黒竜が飛び立とうと翼を広げている。俄かに混乱が満ちた縦穴を、アーシアはレオアリスを乗せたままぐるりと旋回した。

黒竜の向こう、広げた翼の奥に、揺れる紅い光が一瞬だけ視界を過った。

闇の中で、微かに、だが確かに紅く踊る、——炎。黒竜の背中辺りだ。

アーシアが急旋回し、翼が風を鳴らす。

「レオアリスさん、あれ！」

「見えた！　炎だ！　カイ、あれだな？！」

カイが高く鳴き、アーシアもレオアリスもさつと頬を引き締めた。あの炎の先に、アナスタシアがいるのだ。

「レオアリスさん、貴方は降りてください」

炎に辿り着くには黒竜に近付かなくてはいけない。それは最も危険な、無謀な行為だ。

「お前までおのつさんと同じ事言うなよ。大体こんな所、どこに居たって変わらないぜ」

「でも」

「どうせここまで来た理由なんて、全部ひっくり返ってるんだ」

レオアリスがこの森に来た理由。王の御前試合に出る為だ。

もう途切れた理由だが、まだその事はレオアリスの鼓動を早くした。その目的を達成する道はもう無いとさえ思えるのに、不思議と悔しくは無い。

今やるべき事は、目の前にある。

「アナスタシアを救出そうぜ。——これだけは、今さら退けない」

アーシアは青い瞳に揺らめく光を湛え、それを伏せた。

「——行きます」

一度上昇し、縦穴の縁から地上へ、月に飛び込むように抜け出す。レオアリスの瞳が、ぐるりと回った夜空の端に、幾筋もの旗が靡く様を捉えた。

夜に溶ける、濃紺の旗。

正規軍だ。

(封術が、始まるんだ)

アーシアは翼を羽ばたかせ、急降下を始めた。

「少し、乱暴ですけど」

「一度振り落とされてる、慣れた！」

「掴まつてください！」

一息に法術士達の脇を擦り抜け、ワツツの前を翔ける。

「ガキ、テメエ等！　戻れッ！」

薦が腹に巻き付き、まだ兵士の腕を掴んだ体勢のままワツツが怒鳴る。レオアリスは振り返つて怒鳴り返した。

「アナスタシアがいる！」

「何だとオ」

「それと、軍がそこまで来てる！」

打たれたようには上空を振り仰いだ。次いで足元の闇の先を探る。

どちらもそれらしきものは見当たらなかつたが、ぐつと奥歯を噛んだ。

「おい、上げてくれ！　いや、降ろせ！　下だ！」

叫んだものの、薦からも術士からも、返る反応はない。その間にもアーシアは黒竜に突っ込んでいく。

「あの、馬鹿共ッ」

黒竜が牙を剥き、翼をひと打ちする。アーシアの小さい身体が、黒竜の起こした突風に煽られ、態勢を崩した。アーシアは制御を失つたのか、切りもみ状態で落ちていく。

黒竜はアーシアの身体を捉えようと、ズラリと牙の並んだ頬を開いた。ワツツが奥歯を鳴らした時、アーシアの背から雷撃が走り、黒竜の頬を撃つた。力を失っていたかに見えた青い翼がふいに息を吹き返し、迫つた牙を直前で躰して、アーシアは見事なまでに黒竜の目の前から消えた。

頬が虚しく空を噛み、アーシアを見失つた黒竜の首が辺りに巡らされる。

「抜けた」

安堵に力を抜き呑いたワツツの横を、光の筋が過つた。

「今度は何だ！」

見ればそれは、法術士達だ。術を施しているのか、光を纏つて次々と縦穴を降りていく。地底に降り、封術を始めるつもりなのだ。

「おいコラ、そんな術があるなら俺達を先にどうにかしやがれ！ 護衛もくそもねえじやねえか！」

ワツツは苛々と毒づいたが、実際にそれは非常にまずい展開だった。法術士は術の詠唱の間、僅かに無防備になる。好むと好まざるとに閑わらず、ワツツ達護衛となる兵が付かなくては、術を仕掛けようとしても至近距離では分が悪過ぎる。

「軍がそこにいるつたつて、地上は態勢整つてんのかよ」

「大丈夫です。布陣は完了しますから」

ふいに身体かふわりと上がり、今の今まで兵の身体を抱えていた腕からも、

掛かっていた負担が消えた。振り返ったワツツのすぐ横にシアンが浮かんでいた。彼女はにこりと笑って、ワツツの肩に触れた。

「下に降ろします。援護を」

シアンの気丈なようで少し硬い笑顔は、これから来る最後の時への不安を滲ませている。

封術が失敗すれば、後は無い。おそらくこれが、最後の一手だ。

ワツツはやりと笑い返した。
「任せろ」

二

黒竜の頸^{あぎと}を躰し、アーシアは一直線に闇を翔けた。

瞳に映っているのは背後の黒竜の牙ではなく、搖らめく炎だけだ。炎は地底近く、切り立つ壁の途中に燃えていた。

アーシアが近づくとカイがレオアリスの肩から飛び出し、この場所だと示してくるりと回る。

「アナスタシア様！」

翼が壁に触れそうな危うい距離まで近付いて、アーシアはアナスタシアの名を叫んだ。叫びは炎に吸い込まれ、返ったのは沈黙だけだったが、アーシアの瞳が輝く。

「ここです、この向こうに、アナスタシア様がいます！」

アーシアははつきりと、この壁の向こうにアナスタシアの炎の搖らめきを感じ取っていた。

強い炎だ。

そう言つたアーシアの言葉に、レオアリスはただ頷き、アーシアに気付かれない程度に眉を顰めた。

（これじやあ——）

アナスタシアがこの奥にいるのは判つた。だがこれでは、助け出す手立てが無い。この壁をどうやって崩すべきか——。下手に崩せば、逆に最悪の結果を招きかねない。

風が唸り、黒竜の尾がレオアリス達のすぐ脇を掠め、岩を碎いた。黒竜が見失つていた二人を見つけたのだ。

アーシアの身体が煽られ、宙でよろめく。

再び風が鳴り、右斜め上で岩が碎ける。炎が風に煽られ、千切れるように揺れた。

「アナスタシア様！」

アーシアが炎を庇い身体を寄せせる。

(まづい)

このまま二人がここにいれば、黒竜は壁を砕きつづけ、いずれその向うにいるアナスタシアまで傷つけてしまう。

レオアリスは指先を闇に滑らせ、風切りの法陣を描いた。

法陣から飛び出した風の刃が黒竜の尾を撃ち、黒竜の尾が止まる。

「アーシア、任せたぜ」

アーシアの返事を待たず、レオアリスはアーシアの背を蹴った。動くレオアリスを追つて、黒竜が向きを変える。

「レオアリスさん！」

地底まではまだ相当な高さがある。アーシアは身を翻しレオアリスを追おうとしたが、黒竜の背中に阻まれた。

急激に近付いてくる地面に向けて、レオアリスは術式を唱え身体の周囲に風を生み出すと、それを纏わせた腕を振った。敵を吹き払う為に用いる術の応用だ。迸った風は地底に当たって吹き返し、地底に激突する寸前にレオアリスの身体を受け止めた。

くるりと身体を反して降り立ち、一瞬の停滞もなく足に感じた地面を蹴つて走る。直後に、レオアリスのいた場所を黒竜の尾が打つた。

無事に地底に降り黒竜を引き付けたまではいいが、思つた以上に暗く黒竜の攻撃が見えない上に、でこぼこと隆起した足元は走りにくい。

次々と落石のように尾や脚が降り注ぎ、地面を碎く。止まればたちどころに捉えられ押し潰されてしまいそうだ。レオアリスは音と気配だけを頼りに、闇の中を走つた。

斜め前から音を感じ、咄嗟に飛び退いて地面を転がる。立ち上がる間もなく尾が振り下ろされ、レオアリスの頭を掠めた。ぞくりと身が縮む。

「——そんなでかい動きで当たるかよっ」

黒竜は正確にレオアリスの動きを追つてい、一瞬も気を抜く暇が無かつた。だが重要なのは、少しでも長く、黒竜の意識をレオアリスに向けさせる事だ。

アーシアの様子を確かめようとしたレオアリスの瞳が、アーシアの姿を捉える前に止まつた。

黒竜の肩越しに、上空から、幾つもの光が降りてくるのが見える。法術士達だ。

降り掛かる光に気付き、黒竜が首を巡らせた。

レオアリスの指が法陣を描く。

「こっちだ！」

法術士達が一人でも欠ければ、封術の成功は無くなる。

この逃げ場のない縦穴はレオアリス達にとつて著しく不利な場所だつたが、この狭さが黒竜の動きを制限してもいるのもまた事実だつた。ここで封術を完成させなければ、地上へ飛び立つた黒竜を抑える事は、更に困難になるだろう。

何とか、封術が完成するまで、黒竜の気を散らすのだ。

せめて雷撃を使いたかったが、術式の長い雷撃を唱える余裕はない。ただ

氣を引き続ける為だけの風切りの術式を、レオアリスは再び唱えた。

風の刃は黒竜の鱗に弾かれ碎けたが、幸いにと言えるのか、黒竜はレオアリスを先に構う事にしたようだ。術士達に背を向け、再び尾を振り上げた気配を感じた。

風が鳴る。

正面から振り下ろされると思つた尾は急に角度を変え、飛び退いたレオアリスを真横から追つた。尾の先が身体を庇つて上げた腕を捉え、鋭く隆起した鱗が斧のようになに肉を切つた。

「——っ！」

衝撃に軽く数間も弾き飛ばされ、岩壁に叩きつけられる。

その場に崩れるように倒れ込み、全身の痛みに唇を噛み締めながら、レオアリスは尾を受けた左腕に手を当てた。ぬるりとした血が流れている。

幸いな事に尾は掠めただけで、折れた感覚は無い。逆に壁に叩きつけられたせいで、全身が麻痺したように力を失つてゐる。

黒竜がレオアリスを追つて向きを変えた。その地響きが倒れている地面か

ら全身に伝わる。

「やべえ」

擦れ声で呟き、無理矢理立ち上がるとしたレオアリスの頭上で、光が激しく明滅し、辺りを照らした。黒竜が苛立ち唸る。

白く照らし出された縦穴の底で、レオアリスは右腕をかざして瞳を細めた。

強い激しい光が黒竜の眼を眩ます内に、術士達が次々と降りてくる。

「坊主、いいやり方だつたぜ。このまま搔き回す」

真っ先に術士と共に降りたのはクーガーだ。クーガーは剣を引き抜きながらに笑って見せ、降りてくる兵士達をレオアリスに示す。レオアリスの

前方にも、光を纏った術士がふわりと降り立つた。その傍後に厳しい顔をしたワツツがいる。

ワツツは地面に立つて肩を回し、腕から血を流したレオアリスを何とも言ひ難い顰め面で睨んだが、怒鳴り付けるのかと思われた口をへの字に曲げた。

「言いたい事は後だ。おい、腕を見てやれ」

「——大丈夫。もう血は止まってる」

「ああ？」

誰の眼から見てもそれは深い傷のようだったが、レオアリスは腕を覗き込みあつさり首を振った。

「見せろ」

レオアリスの前にしゃがみ込んで腕を掴んで検分し、ワツツは驚きに太い眉を上げた。

傷は深い。だが既に肉は塞がり始め、血も固まりかけている。

(こいつは)

信じ難いほどの治癒力だ。

『彼は剣士だ』

ワインスターの言葉が頭を過り、ワツツは首を振つてそれを払つた。

(そんな事は関係ねえ)

「——ふん、ならない。とにかく今は術を完成させるのが先決だ」

視界を取り戻した黒竜が、尾を振り上げる。ワツツは持つていた盾を尾を

目がけて円盤のように投げ、走り出した。レオアリスがワツツを呼び止める。

「俺も手伝う。動ける術士が要るだろ？」

「てめえはそこにいる。」

「そんな事言つてる場合じや」

「今更止める訳じやねえ。お前はそこで、見計らつて術を使つてくれ。酸の息を吐かせるな」

レオアリスが力強く頷くのを見届け、ワツツは兵士達に声を張り上げた。

「奴はでかい団体でここじや動きが取りにくい！ やる事は簡単だ！ 当てさせねえ、飛ばさせねえ、たつた二つだ！」

黒竜の視覚を搅乱するように、九名の兵士達が縦横に走る。その間に術士達は、封術の布陣を取るために、静かに動いていく。

黒竜は低く唸り、足元に散つた兵士達に煩そうに首を巡らせた。尾を振り上げ叩きつけようとしたところへ、鉄の矢が放たれ黒竜の眼を掠める。振り返り噛み碎こうと迫れば、左右と背後の三方から再び矢が降り注いだ。

面倒になつたのか、黒竜は翼を広げた。飛び立とうとした黒竜の翼を、下から逆つた雷撃が撃つ。

黒竜は苛立つて吼え、激しく身体を揺すつた。

「いいぜ、焦つてきやがつた」

ワツツは走りながら口元を満足そうに歪めた。兵士達の剣もレオアリスの雷撃も、黒竜に傷を負わせる事はできない。まるで壁に向かつて石を投げているようなものだ。

だが、こういう戦い方もある。黒竜の首が向いた方とは違う方向にいる者がすかさず攻撃を仕掛け、それを絶えず繰り返す。手足を絡め取るように動きを封じ、相手の本来の力を出させないやり方だ。

倒す必要はない。封術が発動すれば、ワツツ達の勝ちだ。

全て順調だった。ワツツは周囲を見回し、術士達が配置に付いたのを確認した。

「あと一息だ！ もう少しで終わる！」

唐突に、黒竜はそれまでに積もつた怒りを爆発させて吼え、身体を巻きの

ようには激しく振った。尾が辺りを薙払い、数名の兵士が捉えられ、弾かれた。

「ウエイン！」

クーガーの叫びが遠くで聞こえる。「くそッ」ワツツは地面を蹴り駆け出した。ワツツの影を追うように、地面に光の線が走る。

「何だ！」

ワツツは振り返り、その光が背後の術士の足元から伸びているのに気が付いた。ワツツを追い越した光は地底に白い帯を刻みながら、対角にいた術士へと辿り着く。

術士が手を打ち鳴らし、地面に印を打つ。辿り着いた光は、角度を変え、再び地面を疾駆した。

封術が、始まつた。

黒竜の身体が、急に襟を引かれたかのように動きを止めた。

ぱん、と術士が手を合わせ、地面に印を刻み込む。

一人、印を打つ毎に、白い光が地面を走り、黒竜の動きが封じられていく。だが、五人目まで来て、光はぴたりと走るのを止めた。

「何だ」

慌てて止まつた光の帯の先を睨み付けたワツツの耳に、ボルドーの焦燥を含んだ声が届く。

「シアン！　どうした！」

慌てて止まつた位置にいたのはシアンだ。黒竜の尾が薙払つた辺りだ。

「シアン！」

返る返事はない。ワツツはぎり、と奥歯を噛んだ。必要な術士は十人。一人でも欠ければ、法陣は完成しない。

「――ここまできて」

ワツツの横を小柄な影が走り抜ける。レオアリスだ。レオアリスは走りながら、ワツツを振り返つた。

「俺がやる！　黒竜を引き付けてくれ！」

黒竜はまだ足だけを止められた状態で、首は苛々と振られている。ぐ、と足に力を籠める毎に、僅かずつながら足への束縛も弱まつていくようだ。

ワツツは兵士達を探して視線を巡らせた。無事に立つてゐるのは半数ほどだ。
(かまわねえ、あと少しだ)

ほんの僅か、時間を稼ぐだけでいい。ワツツは近くに倒れている兵士に駆け寄り、その弓を取り上げると矢をつがえ引き絞つた。

レオアリスは光の止まつてゐる位置に駆け寄つた。シアンはその側で頭から血を流し倒れている。

その傍に膝を着くと、うつすら眼を開けた。

「君」

「俺が代わる。どうやればいい？」

「……土は得意？」

レオアリスは一瞬躊躇い、頷いた。

「やる」

シアンは微かに笑つたが、指を上げて光の先を示した。

「そこに立つて、手を打つて」

レオアリスは言われたままに立ち上がり、素早く手を鳴らした。

その音に呼ばれ、行き場を失つていた光の帯が足を伝り合わせた手に辿り着く。じわりと手が熱を帯びた。重い。

四人の術士を経由し蓄積された膨大な量の力が、次々と足元から昇つてくれる。

まるで巨大な鉛を括りつけたような重みに、合わせた手が震える。

(きつい)

正規軍の術士達はこんなものを軽々と制御しているのだ。

「次は？」

「簡単よ。そのまま五芒を切つて、土に打ち込む」
(この状態で印を切るのかよ)

レオアリスはぐっと唇を噛み、手を合わせたまま五芒を描いた。走り出そうとする力に手が振り切られそうになる。だがこれからだ。

地面に打ち込んだ時、印が刻み込めるかどうか――

(じいちゃん)

カイルの顔と厳しく暖かい声が脳裏を過る。

『向き合えば、土は必ず応えてくれる』

五芒の最後の一角を形成すると、ぐん、と手が足元に向かって引かれた。

重量に引き摺られ、レオアリスは印を打つた。

身体の中を力の奔流が駆け抜け、地面に付いた手のひらから流れ出ていく。

光は地面に吸い込まれ、——音もなく消えた。

これまでのよう、地面を走る気配が無い。ここまで引かれて来た光の帶が不安定に瞬いた。

(まづい)

レオアリスが息を飲み、屈み込もうとした時、足元に五芒の印がゆっくりと浮かび上がった。

光を地面に刻みながら、一直線に走る。

黒竜の足元を抜け、再び折り返し、地面を疾駆し続ける。

「ありがとう。上出来よ」

肩で息をしながらそれを見つめていたレオアリスは、シアンの傍後にしゃがみ込んだ。

「あんたは」

左肩が折れていて、それが一番ひどい。頭の傷は倒れた時に付いたもののようだ。

「大丈夫……上に、治癒を使える術士が来てるから。備えあればってやつね」

ほっと息を吐いたレオアリスに、シアンはにこりと微笑んだ。

「封術が完成すれば、もう皆帰れるわ」

光は走り続け、既に八本目の帯を刻んでいる。

黒竜は怒り狂い、長い咆哮を上げたが、まるで地面に括りつけられたかのように足も尾も持ち上がらなかつた。搖すつてていた上体も、次第に動きを失つていく。

「——やつたか……」

ワツツは長い息を吐き、急激に湧き上がる疲労を覚えてその場にしゃがみ

込んだ。残り二筋の光が法陣を完成させれば彼等の役目は終わり、あとは地上の部隊の仕事だ。

邪魔の入らない地上部隊が術を失敗する事はない。

黒竜はこの地に封じられる。

戦いの終わりが、そこまで來ていた。

(長かったが、何となるもんだな)

ワツツは黒竜の向こう側に立ち上がりつて、レオアリスに眼を向けた。レオアリスは肩で大きく呼吸を繰り返しながらも、憧れと尊敬の入り交じつた瞳で術士達を眺めている。

彼等が高度な術を使いこなしているのを羨ましがつているような顔をしていて、ワツツは状況も忘れて笑みを浮かべた。

「——全く、大したガキだ。軍にいたら二階級特進ものだぜ」

レオアリスが黒竜の氣を引き付けていなければ、法術士達もここまで降りて来られなかつただろう。彼がシアンの代わりをしなければ法術は完成しなかつた。

それにレオアリスはただ闇雲に動いていた訳ではない。すべき事を理解して的確に行動していた。

うつかりしていると自分を飛び越して昇進しそうだと、半ば嬉しい気持ちを覚えてワツツは首を擦つた。

「まあ、もしかしたら法術士団に行くかもしれないし、……剣士だつてのが本当なら」

どのような道を進むのかワツツには想像も付かないが、いずれにしても確実にレオアリスはこの先王都へ上がるだろう。

「俺も王都に行くかな。面白そうだ」

レオアリスが視線を上げた先をワツツも追つて、気を抜いてばかりもいられない事に気が付いた。アーシアはまだ飛竜の姿のまま壁の前に浮かんでいる。壁を掘ろうとしているのだ。

(嬢ちゃんはあそこか)

まだ全てが終わつた訳ではなく、アナスタシアを救い出すという重要な任

務が残っている。

レオアリスはアーシアの方へ、そそり立つ壁へと近付いて、そこをどう登つてアーシアのいる場所まで行くべきかと思案している。ワツツも立ち上がるうと地面に手を付いた。

その時動いていたのは、レオアリス一人だ。

黒い影が頭上でゆらりと揺れた。

一瞬の事だった。

誰かが叫んだのが先か、ワツツの眼がそれを捉えたのが先か――。

レオアリスの身体に、黒竜の頸^{あぎと}が喰らいついていた。

牙が肉に食い込む濁った音が、流れる詠唱に交ざって、聞こえた。

ワツツが、気付いた他の兵士が呆然と立ち上がる。

「――おい」

ワツツ達が凍りつき見つめる先で、レオアリスは自分の身を捉える巨大な

顎を見つめ、瞳を驚きとも苦痛ともつかない色に見開いた。

歩き出

そうとした時、ごとりと重い音が響いた。

はつとして振り返ったカイルの眼が彷徨い、月明りに剥き出しになつた焼

け落ちた石を捉える。折り重なり倒れていた柱が崩れたのだ。

「――」

何でもない光景だ。もともと不安定だった瓦礫が、ゆっくりと時間をかけ

て、今、崩れたに過ぎない。

だが、カイルの胸に、雷雲のように黒々とした不安が湧き起つた。

鼓動が早鐘となり、身体の奥で鳴り響く。

カイルはよろめきながら、廃墟に近付いた。

「ジン……」

呼び掛けに答える声はない。しんと静まり返つた、張り詰めた景色があるだけだ。

十四年前の、忘れがたい晩が、カイルの脳裏に甦る。

三

カイルは深い森にばかりと開いた草地にいた。

そこは黒森の中にある、カイル達の村からそう遠くない場所だ。雪に覆われているが、明るい月明りに照らし出され、所々、雪から顔を出した石くれが見える。

無残に壊れた家々の跡。

ここにあつた里が失われたのは、もうずっと昔の事だ。

カイルは廃墟から視線を引き剥がし、天空に輝く月を見上げた。

レオアリスが村を出て以来、何の音沙汰も無い。まだほんの五日程の時間しか経っていないにも関わらず、カイルには永劫の時が流れたかのように感じられた。

ジェリドからはたつた一度だけ、伝令使が短い言葉を伝えてきたが、それ以外王都からの便りは無い。

カイルは不安ばかりが募る想いを断ち切るため、溜息を吐いて廃墟に背を向けた。

まだそこにいた者達と、生まれようとしていた命と。

四

「——お前の子だ。わしらは守れもせんで勝手な願いばかりじやが、——どうか」

どうか、守つて欲しい。

最早いない者に、言葉が、願いが届くのかは判らない。

何にこれ程不安を感じているのか自分でも判らないまま、沸き上がる不安を振り払おうと、カイルはその言葉を繰り返し続けた。

黒竜の牙がレオアリスの身体を咥えたまま、高く振り上げる。吹き出した血が雨の如く降り注ぎ、見上げるワツツ達の上にばたばたと落ちた。

ワツツは顔に落ちた血を拭わないまま、頬の上を流れるのを感じていた。それはぬるりと温かい。

(おい……、何やつてんだ、俺は)

ワインスターの言葉を否定しながらも、ワツツは知らぬ間に、期待していた。

レオアリスが剣士なら、またその身に危険が迫ったとしても、宿营地に黒竜が現われた時のように、何か——起ころのではないか。

レオアリスが黒竜の注意を引き付けるのを、その期待のもとに、本気では止めようとしていたかったのではないか。

(何やつて——)

何故、彼をもつと早くに、この地から離さなかつたのか。思い起こす全ての場面に、その機会は充分にあつたのではないかと思えた。あの森の宿营地で。黒竜が現れた時に。レオアリスが意識を失い、天幕に横たわっている間に。

たつた今まで、封術の成功を彼のお陰だと単純に喜んでいた、それにすら歯噛みする程の後悔と憤りを覚える。

黒竜の頭は高くもたげられ、最早ワツツ達には届かない位置にある。レオアリスに意識があるのかも判らない。手や足は人形のように投げ出され、力は失われている。

ぱたり、ともう一筋、ワツツの頬に血が滴つた。
どうする手立ても思いつかず、それでもワツツが剣を握る腕に力を込めた時、背後で白い光が湧き起こつた。

「なん……」

振り向いたワツツは、それが法陣の光だと氣付いた。十人目の術士の足元

で封術が最後の一点を結び、完成している。術士達でさえ戸惑つて立ち昇る光を見つめ、或いはその顔を十人目の術士、——ボルドーに向けていた。

ボルドーは真っすぐに顔を上げ、黒竜を睨んでいる。このまま黒竜を封じるつもりなのだ。

「——ふざけんな！ 何……何考えてやがる！」

ワツツはボルドーに掴み掛かり、胸ぐらを掴んで引き倒した。ボルドーは簡単に地面に倒れたが、法術は止まらない。次第に光を増し、一本の柱となつて黒竜の姿を包んでいく。

ワツツは倒れたボルドーの上に馬乗りになり、襟首を掴んで乱暴に引き起こした。

「術を止めろ！ まだあのガキがいるんだ！ 判つてんだろうが！」

「——止まらない」

「何だとオツ！ ふざけてんじや」

頭上が輝きを増した。振り仰いだ先、頭上の丸い空に光の輪が浮かんでいた。それは静かに、立ち上がる柱を目指し降りてくる。

ボルドーは襟首を掴むワツツの手首を抑え、白い光にくつきりと影を落とした顔で彼の眼を睨み返した。

既に地上の術も発動した。ここで法陣を切つても術は止まらない。第一、止める事によつて引き起こされる危険を考えろ」

「貴様」

「ではお前は、自分があの立場だつたら止めろと言うのか」

ボルドーの言葉に、ワツツは吐き出しそうなほど顔を歪めた。

「犠牲は付き物だ。国を守る為に何が最優先か、軍人であるお前に判らないとは言わせない」

ボルドーの指摘は的を突いている。ワツツ自身がああして死にかけていたとしても、おそらく法術を止めろとは言わないだろう。ワツツは喉を突いて込み上げるものを見、一度ゆっくり噛み碎くように飲み込んだ。

「——確かに、俺は軍人だ。軍つてのは、國を守る為にある」

ワツツはボルドーから手を放し中腰になると——力一杯殴り付けた。

「だからって、ガキを犠牲にする軍になるつもりはねえ！」

ボルドーは避ける事も、ワツツに非難の眼を向ける事もしなかつた。

ぎり、と奥歯を噛んでワツツは立ち上がりつた。振り返ったそこにクーガーと、クーガーに支えられながら立つウェインがいる。既に彼等の背後で、上空から降りてきた光の輪が、地底で光る柱に巻き付いて閉ざそうとしていた。更にもう一本。天に光る輪が生まれると、柱に向かつて降下を始める。地底と地上からの、二点による強力な封術は、黒竜の姿も、レオアリスの姿も、もはや完全に覆い隠している。

「……どうにかしてこじ開けるぜ」

ワツツの無理難題に異論も唱えず、二人は頷き、柱を睨み付けた。

「——アナスタシア様！ アナスタシア様！」

祈りに似た切迫した声で、アーシアはアナスタシアを呼んだ。必死になって壁を掘る。早くアナスタシアをここから出して、その炎で黒竜を弊し、レオアリスを救けてもらわなくては。

唯一、アナスタシアにだけ、それが出来る。

「アナスタシア様！ レオアリスさんが、死んじやう——！」

天空から降りてくる金色の光の輪がアーシアの青い鱗を照らした。封術はレオアリスごと、黒竜を封じ込めようとしている。

「——つ」

アーシアは身を翻し、レオアリスを取り戻そうと黒竜へ飛び掛かった。青い翼が、光の柱に易々と弾かれる。黒竜の姿もその柱に覆い尽くされ、アーシアの瞳にはもう光る柱しか見えなかつた。

封術が、完成する。

「待つて」

叫んだアーシアのすぐ後ろで、壁に灯っていた炎が大きく揺れた。

どろりと岩が溶ける。まるで火口から流れ出した溶岩の如く、触れた岩を焼きながら壁を伝つた。

「——」

見る間に溶け出した岩は壁にいびつな口を開き、ぶつぶつと沸騰しながら煙を上げた。

その赤く溶ける口から、すっと腕が伸びた。溶けた岩に、手が掛かる。

「ア……」

アーシアは彼女の名を呼ぼうとして、言葉を失った。

その白く華奢な指は、火箸を掴んだように赤く爛れ、あちこちに血が滲んでいる。

指先にぐっと力が籠もり、アナスタシアの身体が壁に開いた穴から押し出されるように現れた。アーシアが大切に梳いてきた黒く長い艶髪もあちこちが焦げ、腕や頬も火傷を負っている。

そのあまりに強く凝縮された炎が、彼女自身をも傷つけたのだ。

そうして全身に傷を負いながら、アナスタシアはアーシアを認める、ふわりと笑った。

「泣くなよ、アーシア。……私が救けてやる」

ふらつき、倒れかけたアナスタシアの身体をアーシアは急いで背中に掬い上げた。アナスタシアは愛おしそうにアーシアの青い鱗の首を抱き締め、疲れ果てた者がするように、長い息を吐く。

ほつれた髪の零れた頬を上げ、封術による光の壁を透かし見るようになつめた。

「……あいつまだ、生きてるな」

アーシアの背に手を付き、立ち上がるうと肩に力を籠めた。

「待つてろ……私が」

がくんと肘から力が抜け、アナスタシアはアーシアの背にくずおれた。自らの炎にあてられ、アナスタシア自身も限界に近い。

「アナスタシア様……っ」

「へいき」

アナスタシアはもう一度、アーシアの背にぐいと手を付いた。

(助けるんだ、私が)

彼は、出会ったばかりのアナスタシアの為に、ここまで来てくれた。もう一度王都で会おうと、そう言つたのだ。

(助けるんだ——絶対に)

アナスタシアはアーシアの背の上で、ゆっくりと立ち上がった。

既に二つの光の輪も柱に到達すると、それぞれ底と上辺の二箇所に巻き付き、煌々と縦穴の中を真昼の如く照らしている。

「！」

唇を噛み締め、アナスタシアは自らを叱咤し立ち上がった。手のひらに炎を作り出す。それは火傷を追つた手を追い打ち焦がした。

だが、レオアリスを救け出そうとすれば、アナスタシアにはあの柱を焼き払う以外に方法がない。

焼き払う自信はある。

ただ、もし柱の中にいるレオアリスごと、焼き払ってしまつたら——(しつかりしろ、迷つての場合じやないんだ！)

憤りと焦り、不安にかられながらも踏み出そうとしたアナスタシアの瞳が、アーシアの背に残された袋に吸い寄せられる。

「何……？」

確かにレオアリスが持つていた袋だ。それは強い封術の光に薄められ微かに揺らぎながら、それでも内側から透けるように光を発していた。

手を伸ばし、アナスタシアはその袋を開いた。

「これ——」

光っているのは鎖の切れた石の飾りだった。青い小さな石だ。それが自ら光を放っていた。

取り出したその石の奥に、何かの影が見える。

交差された、二本の剣——

良く覗き込もうとした時、柱が震えた。

「いいき」

アナスタシアはもう一度、アーシアの背にぐいと手を付いた。

に似た空気が、互いの中間で霸を競い凌ぎ合う。その間にある空間さえ、碎かれ霧消しそうな二つの力。

レオアリスの身体を微かな青白い光が取り巻いた。

身体に食い込んでいた牙が、一瞬にして碎かれる。黒竜のくぐもつた苦鳴

の咆哮が光の壁に幾度も打ち当り、轟く。

まだ黒竜の頸に捉われたまま、まるで操り人形のような無機質な動きで、

レオアリスの右腕が上がる。

手が鳩尾に当てられ——ずぶりと手首まで沈んだ。

流れるはずの血は無く、代わりに青白く清烈な光が溢れ、白く閉ざされた

封印の内側を染めていく。

腹に沈んだ拳が何かを掴み、今度は静かに顕れようとしていた。

吹き上がる強烈な、身を凍り付かせる程の鬼気が漆黒の鱗を叩き、黒竜が

唸る。長い首を振り、獲物を完全に噛み碎こうと、音を立てて頸を開ざした。

レオアリスの身体が黒竜の頸あぎとに呑まれ、光が途絶える。

束の間の静寂。

頸の縁に手が掛かり、硬く閉ざされていた頸を、内側からゆっくりと抉じ開けていく。持ち上げられた牙の隙間から、再び青白い光が零れ、辺りを照らした。

レオアリスは頸の中で立ち上がり、黒竜の牙を蹴り軽々とその牙の中から抜け出すと、黒竜の足元に降り立つた。先ほど流れ落ちた大量の血は既に乾き、牙によつて貫かれた傷痕は跡形もない。

まるで何事も無かつたかのように、レオアリスは黒竜に向かって一步踏み出した。

その手には、一振りの長剣が握られている。

月の雫に浸したような、冴えざえと凍り付く刃。

黒竜が張り詰めた威嚇の唸りを上げ、低く身を伏せる。爛々と光る金の両

眼が目の前の少年に釘付けにされ、二つの存在を取り巻く大気が凍て付いた。強大な黒竜の怒りの感情と、レオアリスから発せられる研ぎ澄まされた刃

に似た空気が、互いの中間で霸を競い凌ぎ合う。その間にある空間さえ、碎かれ霧消しそうな二つの力。

黒竜の両眼を見据えたまま、レオアリスの腕が、もう一度持ち上がった。左腕だ。

鳩尾に当てられ、再びずぶりと沈む。

黒竜の肩がびくりと跳ねる。それまでの均衡を破り、尾がレオアリスに向かって振り下ろされた。

右腕の剣が、すい、と上がり、迫る尾を捉える。

刃は尾に触れると、まるで紙を切るように、そのまま振り抜かれた。

二つに断ち切られた尾が、叩きつけられた勢いのままにレオアリスの背後

の壁に当たり、彼の足元に落ちる。

尾の先端を落とされた黒竜は、軋る苦鳴をあげた。先端を失った黒竜の尾がレオアリスの周囲で跳ねる。

どこか楽しそうな色を浮かべて黒竜の様を見つめたまま、レオアリスは鳩尾に沈んでいた左手を引いた。

零れる光と共にゆっくりと現われ形造られていくのは、右手の剣を写し取つたような、もう一本の長剣だ。

レオアリスの持つ剣——それは彼の身体の一部、一対の肋骨を変化させたものだつた。立てれば柄がレオアリスの胸の辺りまで届く長剣。

レオアリスの手の中で、二振りの長剣は、それ自体が生きているかのように静かに明滅し、長い眠りから解き放たれた歓喜に震えた。

かつりと硬い音を立て、レオアリスは更に一步、黒竜へと近づいた。怒りに両眼を燃え立たせた黒竜が、牙を剥き出す。

剣はふいに、無造作に振り抜かれた。

剣から巻き上がつた衝撃が地面を砕いて走り、あれほどの強固さを誇った黒竜の鱗を突き抜け、右の翼を断ち切る。

黒竜は驚愕と、怒り、そしておそらく生まれて初めて感じた恐怖に、吼えた。

光の柱が、その内側に吹き荒れる力に耐えかね、びりびりと振動する。光は弱まつたかと思えば振り返して強く輝き、不安定に揺らめく。

その外では、柱を見つめていた誰もが、レオアリスを救い出そうとしていたアナスタシアやワツツまでもが、軋む光の柱に固唾を飲み、恐れて僅かに身を引いた。

レオアリスは自分が黒竜と対峙する光景を、初めは硝子を一枚隔てた景色として眺めていた。

自分の手が握っている二本の剣。その青白く光を纏う刃に、意識が自然と引き寄せられる。十四年間知らぬままに、自分の中に宿っていた剣だ。

それを掴んでいるのは自分の腕のはずだったが、自分ではないようを感じていた。誰かが勝手に身体を動かしている、もしくは剣がひとりでに動いているような、曖昧な感覚だ。

その剣が黒竜の尾を断ち、翼を落とす様を、レオアリスは驚きとともに見つめていた。

霞の中にあつたその感覚が、次第に狭まり、揺れながら近付き、大気を打ち鳴らす咆哮をきっかけに、——重なった。

唐突に、レオアリスは嵐の如き力の奔流に投げ出された。

身体を引き千切らんばかりに渦巻く力。意識が弾かれ、消えてしまいそうだ。

それが剣の力だと、自分の内側から吹き上がつてくるものだと、そう気付くまでに数瞬の空白があつた。腕が強い力に振り切られるように引き摺られた。

「なん」

慌てて向けた視線の先に、剣の柄を握った自分の右手と、その柄からまつすぐに伸びる研ぎ澄まされた刃がある。

「——剣」

レオアリスは手のひらから伝わる柄の感覚を、初めて意識した。まるで吹き荒れる風の渦の中に腕を突っ込んでいるようだ。ぐん、と腕が引かれる。

「つ、……待つ」

制御が効かない。暴風だ。

身の裡から容赦なく叩きつけられる力に、レオアリスは歯を食いしばり、身体を丸めて両腕を押さえ込んだ。

握った剣が激しく振動し、レオアリスの制御を無視して飛び出そうとしている。

振動が走ることに、体中の骨が軋み、悲鳴を上げた。

肺が酸素を求めて僅かな呼吸をした瞬間、剣は再び振り抜かれ、黒竜の背後の地面に深い亀裂を穿つた。跳ね上がった剣が、黒竜の足元を掠めて空を切る。

だがその剣風は、黒竜を捉えていない。レオアリスの意識が完全に戻った事が、逆に剣の制御を失わせているのだ。

(駄目だ、これじや)

呆れるほど滅茶苦茶だ。どれほど強力な力であつても、制御できなければ何の意味もない。

焦るレオアリスの意識を余所に、剣は解放の喜びに打ち震えるように光る。レオアリスの意志を超えて、本能のままに動こうとしている。

(——抑えろっ)

剣士としての覚醒とは、自分の意志を無視して切り裂こうと動く剣を自らの制御下に置く事——、そこから始まるのだと、レオアリスは誰に教えられる訳でもなく、本能で理解した。

そして今レオアリスが置かれている状況では、間違いなく、抑えきれなければ待つてるのは、死だ。暴走する剣が黒竜を捉えるより先に、黒竜の牙がレオアリスの身体を碎くだろう。

だがその前に、剣の力によつて、身体が砕け散つてしまいそうだつた。

自らの剣に切り裂かれる——そんな馬鹿な考えが、実際にこの吹き荒れる力の中では、最も真実味を帯びていた。

じわりと湧いたのは、戸惑いと、不安だ。それはレオアリスの心の中で確実に触手を伸ばし、剣を押さえ込もうとする意志を掴んで揺さぶり始める。

(——こんなもの、どう抑えればいいんだ)

どうすれば抑えられるのか、その答えの欠片すら見つからない。

腕の力は今にも失われそうだ。例えレオアリスがワツツのような大男であつたとしても、力で抑え切る事はできそうにない。

(無理だ)

そう思った瞬間、剣はレオアリスの抑止を振り切って走った。

切り裂いたのは、黒竜の居場所とは全く見当もつかない場所だ。

意識が飛んでいた時の方が、剣の力は生きていた。いつそ剣だけで、レオアリスの意識など無い方がましなのではないか。

自分の力であるはずが、自分には全く抑える事ができない。その事がどうしようもなく悔しかつた。

(ちくしょう)

握り込んでいる手の血管が、剣の放つ力に押されて切れ、吹き出した血が

霧のように辺りに散る。

眼が霞み、押さえ込む腕の感覚が、次第に麻痺していく。

剣に満ちる力は、逆にレオアリスの意識を蝕んでいくようだ。

(抑えなきや……)

噛み締めた唇から血が滴る。

その痛みも遠く、レオアリスは自分の意識が再び霞んでいくのが判つた。

「本来剣士とは、覚醒の際に助け手が要るのだ」
ふいに口を開いた王に、アヴァロンは訝しそうに眉を上げた。

そこは王城の中の円柱の連なる広い謁見の間で、先刻、西のカトウシユ森

林より、正規軍西方軍の急使が封術の発動を告げたばかりだった。謁見の間は水を打つたように静まり返つてゐる。

「王……？　如何なされました」

十数段の高みに玉座が据えられ、王はその玉座に背を預けて座し、ゆったりとその瞳を閉じていた。アヴァロンの問い掛けに、王の瞳が上がる。その瞳は面白い遊戯でも眺めるような光を浮かべ、アヴァロンの姿を通り越した先へ向けられている。

「剣士の剣は、ともすれば己の身を喰らう牙にもなるという。剣の覚醒の折、助け手として補助の役目を果たすのが、同じ一族の剣士だ。助け手がない場合、剣士はその多くが、自らの剣の力によつて身を滅ぼす」

「——」

アヴァロンは何も言わず、ただじつと王の姿を見上げた。言葉ではアヴァロンに話しかけているながら、王の瞳、それが向かっているのはここではない。

「二刀——。……面白い」

呟かれた言葉に、アヴァロンは頬を引き締めた。

(カトウシユの剣士が、二刀を……?)

剣士の剣は通常一振りのみだ。二刀を持つ剣士など、近衛師団の長として長く剣を持つアヴァロンですら、聞いた事がない。

(十四年……まだそれだけだ)

アヴァロンの脳裏に刻まれている、あの時から。

「王」

「——少し、きつかけがいるか」

アヴァロンの顔に浮かんだ困惑と微かな憂慮の色を面白そうに眺め、王は再び、その黄金の瞳を閉じた。

(駄目だ……)

剣を抑えきれない。このまま剣の力に飲まれるのはただ自分の力不足のせいで、それは仕方のない事だと、諦めにも似た思いがレオアリスの心を支配

しようとしていた。レオアリスの心が弱くなるに従つて、剣の力はますます強まつていく。

切つ先の触れている地面を切り裂き、碎く。

剣の纏う光に触れた皮膚が、薄い刃が撫ぜたように切れる。

容赦無い力で、剣は己を掴む主の手を引き千切り、身体を切り刻もうとしている。

抑えられない。

仕方がない。

意識が剣の力の中に沈み、消えていこうとした時。

ふいに、ぴたりと振動が止まつた。それはまるで、誰かが剣をそつと抑えたかのようだつた。

剣は今までの暴走が嘘だつたかのように、穏やかな光を湛えている。

微かに伝わつてくるのは、喜びの感情だろうか。それはレオアリスの心中にも、静かに湧き上がつた。

見開かれたレオアリスの瞳が、刀身を過ぎる影を捉える。研ぎ澄まされた刃に映つた人影——。

一瞬だけ、刃の中から向けられた黄金の瞳と視線が合つた。

「！」

はつとして顔を上げ、レオアリスは辺りを見回した。

光の柱の中には、レオアリスと黒竜のみだ。他の誰の姿も、どこにも見当たらなかつた。

茫然としているレオアリスの手の中で、剣が再び目覚めて、激しく振動を始めた。

「——」

ぎり、と歯を食い縛り、レオアリスはもう一度剣の柄を握り込んだ。

(抑えろ！)

剣に飲まれている場合ではない。

飲まってしまう訳にはいかない。

この剣を抑えて、自分自身の力で——、王都へ、行くのだ。

おそらく、その為には、この剣が必要だ。
絶対に。

じわり、と両手の剣の光が増し、レオアリスの身体と、その周囲を青白く染め始めた。

この剣が、レオアリスには必要だ。
どうしても。

「——必要なんだ！」

骨を碎くような鳴動が伝わる。剣はレオアリスの意志を受け入れるべきか、

弾くべきか迷うように、激しく明滅した。

同時に、大気を振るわせる咆哮が響く。

視線の先に、怒りに両眼を燃え立たせた黒竜の姿があつた。

制御を欠いているとはいっても、光を纏う切つ先が身を掠めるごとに、肉を断たれる錯覚は黒竜を脅かしていた。尾を断たれ、片翼を失い、生まれて初めて感じた恐れは、黒竜の中に逆巻く激しい怒りを生んだ。

黒竜が血の滴る頸^{あざと}を開いた。

光が集まっていく。

(まずい……)

レオアリスは左右に視線を走らせた。この術に囮まれた状態では、避ける場所もない。

剣は未だ、レオアリスの制御を受け入れてはいない。

退こうとした足を、レオアリスはぐつと押し止めた。

(——逃げる場所なんて、

酸の息が奔る。

(無い！)

自分が何をしようとしているのか、半ば曖昧なまま。

レオアリスは暴走しようとする剣を力の限り引き寄せ、一直線に迫る酸の息に向けて、覚醒して初めて、自らの意志で——、剣を振り抜いた。

それまでの抵抗が嘘のよう、剣はレオアリスの意志に従い、風を切り裂く

いた。

剣から迸った青白い光が、白い恐るべき死の息とぶつかり、爆発に似た突風が吹き荒れる。

黒竜の息を殺しきれず、剣光が押し戻される。

「——ツ」

右腕を振り切った態勢から、レオアリスは左足で思い切り地面を蹴った。ぐるりと身体を半回転させ、左手の剣を振り抜く。全身の力が、剣に乗せて流れ出る。

剣風が地面を碎いて奔り、押し戻されかけていた光にぶつかる。

青白い光が膨れ上がり、ひと呼吸の後——、酸の息は跡形も無く霧散した。

剣風は尚も力を保つたまま、黒竜の身体を突き抜けた。

びき、と厚い氷に鱗が走るような音が響く。

黒竜の背後の壁が、黒々とした線を刻んだ。次の瞬間、音を立て、封術の柱が砕けた。

アナスタシアやワツツ達に見えたのは、碎け散る光の柱、閉ざされていた幕が落ちていくように姿を現わした黒竜と、その正面に立つレオアリスの姿だった。

「あれは」

青白い光を纏う一振りの剣が、その手に握られている。

「剣士……」

誰かが茫然と呟く。

レオアリスの左手から落ちた剣が、地面に突き立つて輝きを弱め——するりと溶け、消えた。

右手の剣も、一度鼓動のように脈打つと、手の中から焼き消える。息を飲んで見つめるアナスタシア達の前で、レオアリスの身体がぐらりと傾いた。

「……レオアリス！」

アナスタシアが叫び、レオアリスが地面に膝を付いたと同時に、黒竜が倒れかけていた身をもたげ、吼えた。

「退れ！　まだ生きてる！」

咆哮に搔き消されながら、ワツツが叫ぶ。

黒竜は残された力を全て叩きつけるように、開いた喉の奥に光を集めた。驚愕に飲まれて見つめていたワツツは慌てて手元の武器を探り、それが全て砕けていた事に気付く。

「くそ、」

ワツツが駆け寄ろうとし、誰かが術を唱える。

それを追い越し、紅い光が走ったかと思うと、黒竜の身体は轟音と共に炎に包まれた。

燃え盛る炎の中で、ずる、と身体が二つにずれる。

黒竜は尚も低く大気を震わせる咆哮を発し——、崩れ落ちた。炎を纏いつかせた黒竜の巨体が、音を立てて倒れる。

束の間、呼吸を奪うほどの静寂が支配し、ただ炎の燃え盛る音だけが辺りに満ちていた。

誰もが息を殺し立ち竦む中で、一番最初に駆け寄ったのはアナスタシアだ。長い髪をふわりと残し、レオアリスの側にしゃがみ込む。

「レオアリス！ しつかりしろ！」

レオアリスは倒れたまま、ぴくりとも動かない。アナスタシアは蒼白な顔でレオアリスを抱え起こし、それから押し黙つた。

「アナスタシア様……？」

少年の姿に戻つたアーシアが駆け寄り、ワツツも音を立てて走つてくる。

「どうした？ まさか」

アナスタシアは二人を見上げ、泣き笑いのように顔を歪めた。

「……寝てる」

レオアリスの肩を掴もうとしていたワツツがびたりと腕を止める。じっと瞳を閉じた顔を覗き込み、それから力が抜けたように腰を落とした。

レオアリスはかなり気持ちよさそうな様子で、健やかな寝息まで立てている。

「——暢気なガキだ……」

ワツツは溜息を吐き出し呟きながら、もう一度その顔を覗き込み、それから彼が走り抜けた行程や、使い果たしただろう力に思いを巡らせた。

「当然か」

ワツツは片手を挙げ、埃に塗れている首筋を擦つた。

「俺も寝てえな。それより酒か」

首を回したワツツの眼に、ボルドーが慎重に近付いてくるのが見えた。ボルドーが傍に立つのを胡坐をかけて待ちながら、首をごきりと鳴らす。

ワツツの隣に立ち、ボルドーは視線を落とした。その瞳の中には、何かを懼れる色がある。

「——彼は、どうなつた」

ワツツはもう一度首を鳴らした。黒竜の牙により受けたはずの身体の傷が消えていたが、それは言わなかつた。ボルドーも判つてゐるだろう。

「見ての通り、ぶつ倒れて寝てます」

「あの剣は」

「見ての通り、消えますぜ。黒竜は公が焼き払つてくださつた、これで一件落着、正規軍の任務も終了です」

アナスタシアの炎が黒竜を焼き尽くし、斃した。

果たしてそだらうかと、ワツツは炎の中で二つに崩れていく黒竜の姿を思い出す。

あの炎の前に、既に黒竜は致命傷を受けていたのではないか。二つに切り裂いたのは——

（公が斃した。それでいい）

指令部への報告も、ワツツはそう上げるつもりだ。ワインスターがワツツに告げた、ボルドーのもう一つの任務。それを蒸し返す必要は無い。

ボルドーは何かを言いたげに口を開きかけたが、レオアリスに視線を落としたまま、結局その言葉を振り切るように、長い息を吐いた。

「——上に治癒を使える者がいる。運ぼう」

ボルドーは靴音を立て、ワツツ達に背を向けた。

「無事な者は怪我をしている者を地上へ上げろ！ 撤収し、この場所は埋める」

首を巡らせてその姿を追つていたワツツの傍に、クーガーとウェインが近寄つた。二人ともワツツ同様埃まみれの姿で、ウェインは胸を覆つた鎧がぼろぼろに砕け、血も滲ませている。見回せば、他の兵士達も、術士達も、アナスタシアでさえ同様にに頭から砂か土を被つたような姿だ。

だが、その姿をただ眺められる事こそが、今回の戦いの終わりを実感させてくれた。

「——これで漸く、終わりですね」

「治癒の術士がいるなら、チエンバーも少しはましにしてくれるな」

「ああ、ましになる。前より良くなるかもしれないねえぜ」

できればレオアリスが目を覚ます前にチエンバーの傷を癒して、その姿を見せてやりたいものだと、ワツツはそう思いながらレオアリスへ視線を向け

た。

森での後処理が終われば今回の任務を終え、ワツツ達は再び第六軍に戻る。この少年にもう二度と会う事が無いとは思わなかつたが、次に会つた時には、驚くほど変わっていそうな気がしていた。

「おーい、起きろよ。起きろつてば」

アナスタシアは地面に横たわっているレオアリスの横に膝を抱えてしゃがみ込み、頬をぱちぱちとはたいていた。レオアリスは一向に起きる気配が無い。

「すつゞく腹減つてゐるんだ、いつまでも寝てると食つちやうぞ。ふつうさあ、寝る？ 戰つてゐる最中にさあ。私がいたから良かつたようなものの、ホントだつたら死んでるぞ。お前、剣でも術でもウカツだよな！」

別に今すぐ起す気などないくせに、ぱちん、ぱちんと頬を叩いていたアナスタシアに、アーシアは笑みを零した。アナスタシアを肩に手を置きしやがみかけ、中腰のまま動きを止めた。

「……アナスタシア様、あれ」

アーシアが指差した先を追つて、アナスタシアは深紅の瞳を輝かせた。まだ黒竜の身体を焼く炎の手前に、踊る炎の光を弾くものがある。

「——宝玉だ」

アナスタシアは駆け寄り、足元に転がつて光を弾いている宝玉を取り上げ、アーシアの手渡した布に大切に包んだ。

今度こそそれは、アナスタシアの手の中にしっかりと納まつた。布の影に在る宝玉をじつと確かめるように覗き込み、それからアーシアを振り返つた。「これを渡しても、あいつ怒らないよね。自分で手に入れたんだもん」

アナスタシアは拾つて、保管しただけだ。アーシアが頷くのを嬉しそうに見つめ、アナスタシアはそれをぎゅっと握り込んだ。

「起きたら、渡してやろう」

第十一章

森の息吹

(剣一)。あれは、本当だつたんだ)

嵐の中にいるような感覚。あの力はまだ自分のものでは無いように思える。湿気と草の匂いを含んだ大気がひやりと頬を撫でる。

レオアリスは二、三度瞬きを繰り返した。とても深く眠っていた感覺がある。指先が手繕つたのはさらりとした布の肌触りで、背中や足に伝わる柔らかい感触は、布を張つた寝床だ。

(あれ?)

さつきまであの坑道にいたはずなのに何故こんなところにいるのだろう。そう思つて起き上がるうとして、胸の辺りに重苦さを感じ頭を持ち上げると、薄明かりの中でアナスタシアとアーシアが二人揃つてレオアリスの上に突つ伏して眠り込んでいるのが見えた。

(――何で……?)

暫し思考を巡らせてこの状況の原因を探してみたが、それよりもとにかく、ああ、無事だったのだ、とその事が頭に浮かぶ。アナスタシアは無事、あの深い土の中から救出されたのだ。

(良かつた)

胸の奥から安堵の息を吐き、レオアリスはそうつと寝床から抜け出して立ち上がつた。二人とも疲れきつているのか起きる様子はなく、ぐつすりと気持ち良さそうな寝息を立てている。

辺りを見回せば、頭上から緩く流れる布地には見覚えがある。あの宿营地の天幕だ。一瞬、時間が戻つたのかと――、まさか自分は昨夜の天幕から動いておらず、あの坑道での戦いは夢を見ていただけだったのかと、そんな感覚に襲われた。

(――)

自分の記憶が疑わしくなつて少し狼狽え、夢ではないという確実な証拠を求めて、レオアリスは無意識に右手を上げた。

引き寄せられるように鳩尾に手を当てる。そこにある剣の気配が、確かに手のひらに感じられた。

嵐の中にいるような感覚。あの力はまだ自分のものでは無いように思える。反面、手のひらに感じる気配は、ずっと昔から慣れ親しんだものようだ。望めばいつでも、掴む事ができる。

そして、刀身の向こうから投げられた瞳の、深い金。

(あれは……)

剣から伝わつた、喜びにも似た感情。それはレオアリスの心の中にも、くつきりと鮮やかに刻まれている。

それが誰なのかは判らないが、王都に行けば会えると、漠然と、けれども確信に近い予感があつた。

静かに呼び掛けてくる剣の声を宥め、レオアリスは扉代わりの布を繰つて天幕を出ると、露を含んだ草を踏み、森の梢から斜めに差し込む朝日に手をかざした。

正規軍は大半が引き上げたのか、宿营地のあちこちに張られていた天幕も、レオアリスが寝ていた天幕と周辺の幾つかを残して、他は跡形もない。白々とした朝日が黒竜の破壊した丘を照らしているのだけが、あの混乱の名残だ。池のほとりの宿营地だつた場所は、すっかり通常の森の風景に戻つていた。

不意に後ろで樹の枝が揺れた。すぐ後ろの枝から鳥が飛び立つたかと思うと、雲の無い白い空へ弧を描いて翔っていく。

(――)

その軌跡を何とはなしに追つてゐる内に、レオアリスは森に生き物達の息遣いが戻つてゐる事に気が付いた。

取り戻した平安を歌い上げるような、色鮮やかな鳥達の囀り。駆け抜ける小さな足音に枝葉を揺らす、樹々の楽しそうな様子まで思い描ける。

森には生命の気配が満ちていた。

「終わったのか……」

黒竜の存在に怯えて逃げ出した森の生き物達が、再び森に戻つてきたのだ。カトウシュは昨日までと全く変わつた、生命の振り籠のように身体全体を風に揺らしてざわざわと謳つてゐる。

レオアリスは瞳を開け、カトウシユのざわめきに耳を澄ませた。カトウシユと対話した時のあの不安定な様子は、今は感じられない。もう一度術を敷いてカトウシユと話をしてみようかとも思ったが、暫く迷って、それはやめる事にした。広大な森の意識が凝縮する世界に必要に入していくのは、やはり危険だ。

瞳を開けて頭上から降り注ぐ木漏れ日を眺める。何と無く実感が湧かなかつた。レオアリスは黒竜の最期を見ていない。随分深く眠っていたのか、

ここ数日の強行軍で溜まっていた疲労もすっかり抜けていて、清々しささえ感じられる。

次第に強くなつてくる陽の光を浴びて伸びをしながら、終わつたと言うよりは何事も無かつたみたいだと、そんな感想を抱いているところへ、ワツツが身体を左右に揺らしながら近づいてくるのが見えた。

ワツツはレオアリスの傍まで来ると、頭の先から爪先まで眺めて、満足そうにつるりと頭を撫でた。

「漸く起きたな。なかなか起きねえから頭でも打つたかと思つて心配してたぜ」

「——えーっと……」
何を尋ねるべきか、レオアリスは思考を巡らせた。

黒竜はどうなつたのか、他の兵士や法術士達はどうなつたのか。これからどうするのか。

ワツツは腕を組んで辺りを眺め、レオアリスの内心の疑問を拾うように口を開いた。

「お前は丸一日寝てたんだ」「……一日！」

唚然として森の上に昇つた朝日を振り返る。という事はあれは、あの戦いから一日後の朝日だという事だ。

「嬢ちゃん……じゃねえ、公と坊主が心配して傍で見てるつてきかねえから、両側に寝床並べてやつたんだ。驚いたろう」「寝床……役に立つて無かつたけど」

「ん？」
「あ、いや」

「カトウシユ一帯の封鎖は昨日の昼に解除された。夜までには現場処理も終えて、部隊は大半引き上げたぜ。チエンバーも先に引き上げた。治癒のできる術士が来ててな、腕が何とか動くようになつたぜ。治癒つてのはありやすげえなあ」

レオアリスが驚き、それから嬉しそうな顔をしたのを眺め、ワツツは頷いた。

「お前が目えますのを待たせてやりたかったが、早いとこちやんと設備の整つた場所に移る方がいいからな。寝てる間に顔だけ見て帰つたよ」

「俺も、もう一度会つてお札を言いたかった。……今度会う時があつたら」「ああ、帰つたらすぐ会う。伝えとく」

「お願ひします」

二人の前方には、池を挟んで少し崩れたあの緑の丘がある。その丘を見る

ともなしに眺めながら、ワツツはまた言葉を続けた。

「あの縦穴はボルドー中将が何やら訳の判らねえ術使つて埋めて行つた。まあ何だかんだ言つてあの人も大した術士だ。あれはなんつーうのか良く知らねえけどよ、あんま戦闘系の術は得意じやないけど、守護つてのか、あそこの邊でずいぶん高位らしいな。シアンが教えてくれた」

「あの盾は普通じやできないよ。黒竜の息を防いだ。王都の法術士つて、皆あんなのか……」

レオアリスは力強く、それから羨望と手の届かないものに対する諦めも交じつた口調で頷いた。ワツツは首筋を「しげ」と擦りながら、身体を揺らしてレオアリスに向き直る。

「……黒竜はお前が斬つて、公が焼き尽くした。覚えてるか？」
封術の発動の後のレオアリスの中の記憶は曖昧で、剣を握る感覚だけが確かにだつたが、それでも剣を振り抜いた瞬間ははつきりと思い出せる。

「少しなら……」
ワツツは可笑しそうに眉を上げた。

「あれだけの事やつて少しかよ、もつたいねえな。ボルドー中将の術にも劣らないぜ。俺だつたら年食つた時の自慢話の為に尾ひれ付けて頭に叩き込んでおくけどな」

孫どもが寄り付かなくなるぐらい喋り続ける、と嘯いてみせてから、厚い胸を伸ばし、ワツツはにやりと笑つた。

「お前にやずいぶん助けられた。礼を言うぜ」

「礼つて、別に俺は、どつちかつていうと邪魔してたようなもんだし……。そいや、ここで掛けた術、あれやっぱり問題になつたりするのかな」

「ならねえよ、安心しろ。俺の大将——ワインスター殿だが、まああの人ガ取り沙汰す気ねえからな。ワインスター殿も引き上げたが、やっぱり礼を言つてたぜ」

「——」

ワインスターの厳しい顔を思い出し、レオアリスが何と言うべきか迷つている時に、背後でぱさりと布が音がして高い声が響いた。

「レオアリスっ！」

いきなり後ろから飛び付かれ、レオアリスは前につんのめつた。首に細い腕が巻き付く。

アナスタシアはそうしなければ居なくなつてしまふとでも言うように、たおやかな腕に力を込めた。

「お前つ何で黙つて出てくんだ！ 心配しただろつ」

「——つ」

「ちよつとお、返事くらいしろよ！」

レオアリスからの返事がない事に不満を感じたのか、アナスタシアは更に腕をぎゅっと卷いて、すぐ傍にある顔を覗き込もうと爪先を伸ばした。

「公、首絞まつますぜ」

ワツツの指摘にはつとして、アナスタシアが腕を解く。レオアリスは漸く呼吸を取り戻して、全身で息を吸い込んだ。せつかく生き延びたのに、うつかり死んでしまうところだ。

「お前なあ、加減つてモンを」

喉をさすりながら恨めしげな目を向けたレオアリスに構わず、アナスタシアは再び抱きついて、長い溜息をついた。

「あー良かつた」

「ちよ」

アナスタシアはまるで犬か猫にでも懐くように頬を擦り寄せているが、

困つたのはレオアリスだ。何せ今まで同年代の女の子などいた試しがない。

顔に血を昇らせているレオアリスの肩を、ワツツがぽんと叩く。

「いいねえ若えのは」

年寄りじみた事を言ってワツツはにやにやしている。レオアリスの反論し

たそうな視線を受け流し、ワツツはおどけるように肩を竦めた。

「俺はのいてるぜ、まあゆつくりしろや。ただもうすぐ出立だ、荷物は纏めとけよ」

レオアリスが何か言う前に、ワツツはさっさと背を向けて歩き出した。アナスタシアは漸くレオアリスを放して、それから勢い良く背中を数度叩いた。

「見たか！ やっぱお前剣士じやん！」

「見たかつて」

何でそんなに得意そうなのだろう。ただ、レオアリスは呆れながらも、アナスタシアの無事な姿とその向こうのアーシアの嬉しそうな様子に、改めてほつと息をついた。

「とにかく——、無事で良かつたよな」

陽射しに照らされた池のほとりは、まるで一幅の絵のように美しく平穏そ

るもので、池の水面は光を弾きながら微かなざざ波を揺らして横たわってい

る。青い空を背負う森と、足元の緑の草。

身体の奥からゆっくり暖まつていくような、そんな柔らかな光景だ。

アーシアがレオアリスに歩み寄つて深々と頭を下げる。

「本当に、ありがとうございました。……アナスタシア様」

「そうだ、これ」

アーシアが懷から出した布の包みを受け取り、レオアリスに差し出す。レオアリスが布を開いて驚いた顔をしたのを見て、アナスタシアは慌てて言い

添えた。

「言つとくけど、拾つただけだからな」

唇を尖らせたアナスタシアの顔を一度眺め、レオアリスは手の中のそれに瞳を戻した。見た目は半透明のゴツゴツした岩の欠片のようだが、それは確かに、陽射しを強くような虹色の輝きを纏っている。

「——宝玉……」

レオアリスは息を飲んで宝玉を見つめた。

これを手に入れる為に、レオアリスはこんな遠くまで来たのだ。

村を出た日から、もう既に何カ月も過ぎたように感じられた。

「すぐしまってください。長い間空気に晒すと消えちゃいますから」

アーシアが心配そうに包みに手を添える。レオアリスは吸い寄せられてい

た視線を外し、手早く包み直して懷にしまった。

「——ありがとう。これで御前試合に出られる。本当は諦めてたところだつ

たから、嬉しいよ。……すごく」

アナスタシアはぱあっと顔を輝かせ、後ろ手に手を組んで軽やかに草を踏みはじめた。レオアリスとアーシアの周りを回りながら、自分も踊るようにくるくる回る。長い漆黒の髪がアナスタシアの動きを追うように流れ、これが森の中ではなくアスタークトの館であれば、優雅な樂の音が流れ出しそうだ。

「なあ、王都に行くなら一緒に行こう。私が街を案内してやる。どうせ泊ま

る所なんてないんだからうちに泊まってればいいよ。御前試合って今月の末

だろ？ 私もそのすぐ後……」

アナスタシアは急に、軽やかだった足取りをぴたりと止めた。

「何だ？」

楽しそうに跳ねていたかと思えば次には凍り付いたように立ち止まる、この相手は相変わらず掴み所がないと、レオアリスはただ可笑しい気持ちになつただけだが、アナスタシアはじつと顔を伏せている。

それはおとといの晩、アナスタシアが兵士達に囲まれていた時に見せた、泣き出しそうな様子に似ていた。

「……どうかしたのか？」

レオアリスは眉を潜めてアナスタシアに問いかけ、もう一度今度はアーシアに尋ねようと顔を向けかけた時、アナスタシアがいきなり頭を下げる。

「ごめん！」

「——はあ？」

突然謝られても、レオアリスには訳が判らない。何が、と聞き返す前にアナスタシアは更に深く頭を下げた。そのままでは頭が地面についてしまいそうだ、レオアリスは慌てて肩を掴んで引き起こした。

「ちょっと待て、謝られる覚えなんてないぜ、一体」

「私、アスタークトだって事をお前に隠してたんだ」

「——は？」

レオアリスの声は思わずという感じで裏返ったのだが、アナスタシアは更に身を縮める。

「隠そうと思って隠してた訳じゃなくて、ちゃんと説明するつもりで——迷つたのは確かだけど、ほんとに騙すつもりとかなくて、ちゃんと説明」「ちょ……ちょっと待てって！」

顔を伏せたまま早口に流れ出るアナスタシアの言葉を何とか遮り、レオアリスは落ち着かせるように一呼吸置いてから、ゆっくり尋ねた。

「……何で俺に説明する必要があるんだ？」

「だつて」

跳ね上がった深紅の視線の先で、レオアリスは首を傾げる。

「お前がアスタークトだからって、俺に謝らなきやいけない意味が判らねえ」

「だつて——普通、怒る、でしょ……？ 黙つてたら」

「……怒んねえだろ、そんな事」

レオアリスの声は呆れているというよりは、少しばかんとした感じだ。

「——怒らないの？」

もののすごく、本当に遠慮がちに見上げてくるアナスタシアの瞳を眺め、レオアリスは込み上げる可笑しさに耐え切れず笑い出した。

「何で笑うんだ！」

「だって、あの時そんな事気にしてたのかと思うと……」

この池のほとりで兵士達に囲まれて、泣きそうな、ひどく傷付いた顔をしていたのが、黙っていた事を怒ると思つていたからだとは。

レオアリスはまだ笑っている。アナスタシアの深紅の瞳が恨めしそうに細められた。

「そんな事って、真剣なんだぞ！　ずっと気にしてたんだから」

さすがに笑いを収め、レオアリスは一度じつとアナスタシアを見てから、また少し口元を緩めた。

深紅の瞳は光を弾いて燃え立つようで、周囲の緑の中でもよく映える。

「向いてるよ」

「え？」

「俺の勝手な感想だけど」

ゆらゆら不安定に揺らぎながら、激しく煌々と、自由気儘に辺りを照らし、熱を放つ。

「炎帝公つて。——お前にぴつたりだ」

アナスタシアはゆっくり瞳を瞬かせた。少し青ざめていた頬に、また薔薇色の透けるような色が差す。

「まあ、驚いたのは驚いたし、お前が正規軍の将軍つて周りは苦労するだろうけど、我が儘なのは意志が強いって事だし、やる事が突拍子もないのは行動力があるって事だし、実際向いてんじやねえ？」

「……お前、私をそんなふうに見てるのか……」

喜ぶべきかがつかりるべきか良く判らずにアナスタシアが肩を落とすと、レオアリスはにや、と口元に笑みを浮かべ、それからはつきりと口にした。

「お前ならできる」

何だか——たつたそれだけの単純な言葉が、心の中にすうっと入ってきて、アナスタシアは気持ちが軽くなつていくのが判つた。まるで羽根を付けて浮かべたようだ。

「——うん」

アナスタシアはこくりと頷いた。胸の内側から沸き上がるような、暖かい

感覚に押されて、ふわりと柔らかい笑みが白い頬に広がる。

アーシアを見れば、アーシアはアナスタシア以上に嬉しそうに微笑みを浮かべていた。

彼等の周囲では樹々の若葉が陽を受けて輝き、さわさわと心地よい音を奏でている。ワツツが近付きながら片手を上げ、そろそろ出立が近いのが判つた。

「荷物——つて、アーシアは投げちまつたんだつけ」

「投げた？　何それ」

アナスタシアが何の事かとアーシアの顔を覗き込むと、アーシアは恥ずかしそうに微笑んだ。

「すみません、咄嗟に」

「竜に投げ付けたんだ。良かつたじやないか、お前の為に重いの我慢して持ってきた鍋が役に立つて。我が儘も、ある意味先見の明があるか？」

「……お前、いちいち」

笑いながら天幕に戻つて荷物を——鞄というにも少ないが——手に取り、レオアリスは二人を振り返つた。

「まあこれでもう帰るんだ、荷物もそれほど必要ない——」

「ああ！」

アナスタシアが大声を上げ、レオアリスは驚いて天幕の中からアナスタシアの顔を見つめた。アナスタシアは大きな瞳を見開いて、また凍り付いている。

「今度は何だ？」

「やばいやばいやばーい！　何も解決しないじゃん！」

「何が？」

黒竜との戦いが終わつて森が平穏を取り戻し、アナスタシアは自分の不安を払つたようなのに、これ以上何が解決していないのかと、レオアリスは眼を見張つて真剣に数えだした。

「後始末？　報告とか？」

「そんなんじやないよー！　結婚！」

「……はあ？」

きよとんとアナスタシアを眺め、それからレオアリスは思わず後退った。

「結婚！——お前幾つ？」

「失礼な、十四だ。そんな事よりアーシア、どうしようつ。……逃げる？」

「アナスタシア様、さすがにもう」

自分達に自活能力が無い事は嫌という程身に染みている。これ以上旅を続けてもいずれ路頭に迷う事になる。

アーシアとしては王都に戻ってゆっくり疲れを癒して欲しいし、さすがに

継承式までには余裕を持つて戻つてもらいたかった。

「後はもう、話し合つて解決なさるしかありません」

「話し合つて解決できる相手じやないから出て来たんじやん！」

「……それが嫌で出てきたのか？」

「おう、何騒いでんだ」

ワツツが三人の間に首を伸ばす。三者三様の表情を見比べて、最後にレオアリスを捕まえた。

「何かあつたのか？」

「いや、何か、結婚がどうとか」

「結婚すんのかい！ 気がはええな！」

ワツツはレオアリスの背中をばんと叩いた。

「やるじやねえか坊主！」

何だか場が混乱してきている。

「いや、俺じやなくて、アナスタシアが結婚するのが嫌で飛び出して來たつて話で」

「適當みたいに言うなよ、一生問題だぞ！ このままじやムカつく嫌味な気障野郎つて、言うねえ嬢ちゃん。一生の内にそこまで酷評される機会はざらにあねえ、いつそ貴重だぜ」

「一生問題だつてんの！ 笑うな！ ムカつく！」

アナスタシアはげらげら笑うワツツを、こんがり焼きそなぐらいきりりと睨み付けた。ワツツはちつとも怯む様子がない。

「くそつ、睨んでも頭に弾かれる！ イヤ！」

「ああ？」

ワツツは少しだけ心外そうに、剃り上げた頭に手を当てた。

「とにかく帰ろう！ 思い出したら不安になつてきた。また勝手に話進めるかも——進んでたらどうしよう！」

アナスタシアはそう口にしている最中にも、くるりと身を翻し、やたらと森に向かつて走り出した。

「待つてください、僕がお運びしますから」

アーシアが慌てて後を追う。

取り残されたワツツはまだ頭に手を当てたまま、同じく二人の姿を追つているレオアリスに顔を向けた。

「お前はどうする？ 公が戻る気になつてんなら、無理に監視——じやねえ、護衛も付けねえ。けど何なら王都まで軍が送つてやつてもいいぜ」

「レオアリス！ 早く来い！」

深い森を背に、まだ怒つた口調のままアナスタシアが手を上げて、急げと呼んでいる。飛竜に姿を変えたアーシアが、その隣で青い瞳をレオアリスに向けた。

「——あいつらと一緒に行くよ。色々ありがとう」

「おう。じや、またいつか会おう」

レオアリスが駆け出し、ほどなく二人を乗せたアーシアがふわりと浮かんで、真っ直ぐに空に滑り込む。カトウシユの森が一度、旅立つ彼等に挨拶をするように身を揺らした。

見送るワツツの前で、青い鱗の飛竜は空に溶けるように消えた。

笑い出した。

「ムカつく嫌味な氣障野郎つて、言うねえ嬢ちゃん。一生の内にそこまで酷評される機会はざらにあねえ、いつそ貴重だぜ」

「一生問題だつてんの！ 笑うな！ ムカつく！」

アナスタシアはげらげら笑うワツツを、こんがり焼きそなぐらいきりりと睨み付けた。ワツツはちつとも怯む様子がない。

「くそつ、睨んでも頭に弾かれる！ イヤ！」

「ああ？」

ワツツは少しだけ心外そうに、剃り上げた頭に手を当てた。

「とにかく帰ろう！ 思い出したら不安になつてきた。また勝手に話進めるかも——進んでたらどうしよう！」

アナスタシアはそう口にしている最中にも、くるりと身を翻し、やたらと森に向かつて走り出した。

「待つてください、僕がお運びしますから」

アーシアが慌てて後を追う。

取り残されたワツツはまだ頭に手を当てたまま、同じく二人の姿を追つているレオアリスに顔を向けた。

「お前はどうする？ 公が戻る気になつてんなら、無理に監視——じやねえ、護衛も付けねえ。けど何なら王都まで軍が送つてやつてもいいぜ」

「レオアリス！ 早く来い！」

深い森を背に、まだ怒つた口調のままアナスタシアが手を上げて、急げと呼んでいる。飛竜に姿を変えたアーシアが、その隣で青い瞳をレオアリスに向けた。

「——あいつらと一緒に行くよ。色々ありがとう」

「おう。じや、またいつか会おう」

レオアリスが駆け出し、ほどなく二人を乗せたアーシアがふわりと浮かんで、真っ直ぐに空に滑り込む。カトウシユの森が一度、旅立つ彼等に挨拶をするように身を揺らした。

見送るワツツの前で、青い鱗の飛竜は空に溶けるように消えた。

終
章

その先へ

足元に広がっていたのどかな田園風景の中に、再びぼつりぼつりと小さな森が現れ始めたかと思うと、それはすぐに一帯を覆う緑の帶になつた。ずっと彼等を追いかけるように続いていた街道の白い筋が、その森の中に潜り込む。アーシアの翼が大きく風を打ち、気流に乗つてぐんと滑空する。

「レオアリス」

アナスタシアが指差す前に、レオアリスの眼もそれを捉えていた。

青い空と緑の帶の間で、陽光を弾くものがある。アーシアの翼が風を煽る度に、それは次第に姿を現し始めた。

幾つもの尖塔。陽光を弾いていたのはその甍や窓だ。尖塔は近付くごとにゆっくり空に伸びて行く。尖塔に続く優美な城が現われ、そこから更に堅牢な城郭が城を取り巻く。外側に山の裾のように広がるなだらかな城下の街――。

王都だ。

アル・ディ・シウム——「美しき花弁」と賞賛される、この国を中心部。

この国を統べる王の居都。

それは急速に、レオアリスへと近付いてくる。もう既に、尖塔や城郭に棚引く旗まで肉眼で見る事ができた。

近付けば近付くほど、その信じられないほどの巨大な街に圧倒され、レオ

アリスはただ息を飲んだ。王都の姿はまるで森の中に突如として立ち現れた山のように見える。小さな山などよりも広く、書物の知識だけでは到底想像も付かない規模だ。

「すげえ……本当にあれが街なのか」

レオアリスの呟きに、アナスタシアは我が事のように得意げに顎を持ち上げた。

「そうだよ。あれが王都アル・ディ・シウム。私の生まれ育った街で――これから、お前の舞台だ」

アナスタシアの深紅の瞳が陽光を吸い込んだようにきらきらと輝いている。それを見つめ返すレオアリスの漆黒の瞳もまた、それ以上の輝きを、期待、憧れ、驚き、微かな不安さえ全て一つにその中に湛えている。

その瞳のまま、レオアリスは真っ直ぐ王都を見つめ、もう一度確かめるようになぞらうに呟いた。

「辿り着いたのだ。

「あれが、王都か」

既に足元を緑に染めていた森は通り過ぎ、なだらかな起伏の上に作物の緑の帶と川と街道、点在する民家の景色が描かれている。その牧歌的風景の中で少し変わっているのは、王都の周りを幾つもの施設が取り巻いている事だ。建物一棟につき、広い楕円形の敷地がそれぞれ付随している。

そして敷地の中では、鎧を纏つた兵士達がずらりと並んで陣形を組み、手にした剣や槍を閃かせていた。兵列が波打ち、次第に別の陣形へと位置を変えていく。

レオアリスは驚いて、アーシアの背から身を乗り出した。

「戦闘――？」おい、あれってまさか

「違う違う、あれは演習。こちらは軍の演習場なの」

「演習場、なのか、あれが……」

物々しい空気は、知らない者にはこれから戦が始まるのかと驚かされる。「あれは師団だな。旗が出てるだろ。黒い」

「師団――」

近衛師団。王の守護兵団の事だ。

演習場の周囲や陣形の中に靡く旗は、黒地に暗紅色の双頭の蛇。黒は近衛師団を表し、暗紅色の紋章は王を表す。

その紋章、そして近衛師団旗に、レオアリスは幼い頃書物で見た時に覚えた憧れの筆つた瞳を向けた。

物見櫓にいて指揮を取つていたらしき一人の将校が、上空を駆け抜ける珍しい青い飛竜に気付いて空を仰ぐ。銀髪で大柄な壯年の男だ。その隣にいた緋色の髪をした女性が、彼の様子に気付いて同じように空を見上げた。

視線が合う前に、アーシアは演習場の上を通り過ぎた。

「本当は街を案内してやりたいけど、うちまで歩くと相当な距離だから……

二刻以上かかるかな、今日は真っ直ぐうちに行くよ」

王都を取り囲む高い外壁を越えると、あの演習場から感じた物々しさは一

転、密集した高い建物と入り組んだ通りの喧騒に変わる。

アーシアの翼は速く、建物はゆっくり眺める間もなく眼下を通り過ぎるが、上空から垣間見る複雑な街の構造は、知らずに迷い込んだら出て来れないのではないかと思うほどだ。

「ここは第一層、いわゆる下町。いろんな種類の屋台とかいつもいっぱいあるし路地とか迷路みたいで面白いぞ」

そういうアーティシアは降りたそうに首を伸ばした。緩やかな斜面に沿つて王城へ向けて飛ぶに従い、その光景は次第に整えられ、一つ一つの建物の敷地も広がっていく。

「ここは中層。商人達とかが多い。意外とこちらへんが美味しい店が一番多いんだって。それから上層。こちらの店は美味しいんだけど、歩きながら食べられるところが少ないの」

アナスタシア独自の感想で、街の紹介が続く。

「ここからが王城」

堅牢な城壁とそれを取り囲む堀の上を過ぎた時、アナスタシアはそう言つてレオアリスに一帯を指差してみせた。

「第一層は軍の兵舎と指令部がある。第二層が軍の将校の屋敷で、第三層が

諸侯の屋敷。それから――」

先ほど遠くから見た、優美な城と空に伸びる尖塔が、もう目の前にある。

「王の居城だ」

黒と銀を基調にした、壯麗な城だ。レオアリスはその威容を喉を反らせるようにして見つめた。

（王の居城――）

あの窓のどこかに、王が本当にいるのだ。どくりと鼓動が高鳴った。

（本当に、来たんだ）

「アナスタシア様、降ります」

アーティシアが真下にある緑の敷地を目指して、円を描くように降下を開始する。

第三層というこの辺りは広い敷地を持つ屋敷が多くたが、これまで目にした中で一番広いその敷地は緑の絨毯に覆われ、レオアリスの眼にも職人達が手を掛けた事が一目で判る美しい庭園が幾つも広がっている。

敷地内には複数の広い館が点在するが、あれはもしかして全てアスター公爵家の屋敷なのだろうかと、レオアリスは呆れる思いで見回した。敷地内には小さな森や池まである。

アーティシアが降りようとしているのは、一際大きな白い外壁の館――白鳥が翼を広げた姿に似ている事から白鳥宮と讃えられる、アスター公爵家本邸の前の庭園だ。

庭にいた者達が気付き、何人かが館に走りこむ。すぐに倍以上の人達が館に入り口から姿を現わした。

「アーティシア！ ファーガスだ！ もしかして、皆いる？」

アナスタシアが嬉しそうに叫んで、見上げる人達の間を指差した。

「ファーガス！ 皆！」

アナスタシアはアーティシアの背から飛び降りると、待ち受けていた人達の中に駆け込んだ。

白髪を丁寧に整えた身だしなみの良い紳士が、アナスタシアに向かつて深々と頭を下げる。周囲の女官達もアナスタシア深くお辞儀し、それからわつとアナスタシアを取り囲んだ。

「アナスタシア様、よくご無事で――」

「どれほど心配したか」

「まあまあ大変、こんなに御髪も御衣装も埃塗れになさって」

アナスタシアの姿を嬉しそうに眺めては、湯浴みの用意をしなくてはと言つて何人かが駆け出し、お食事の用意をと言つてはまた數名が館に走つて

いく。温かい混乱の中、ずっと頭を下げていたファーガソンは漸く身体を起し、アナスタシアを見つめた。

「ご無事なお姿を拝見し、嬉しゅうございます」

「ファーガス！ 良かった、居てくれて——！」

アナスタシアはファーガソンに抱きついた。埃塗れの主をの肩を、ファーガソンが広い手のひらで包む。それから少し厳しい表情を浮かべてアナスタシアを見た。

「心配しておりました。館の者達は毎日心臓の潰れそうな思いで過ごしていたのですぞ。まずは彼等にお言葉を」

アナスタシアは素直に頷いて、見守る人々に顔を向けた。きゅっと頬を引き締めて深々と頭を下げる。

「ゴメン、皆。本当に心配をかけた」

「——ま、まあアナスタシア様、私達に頭を下げるなんてお止めください」女官達は慌ててアナスタシアの肩にそっと触れると、その身体を起した。ただ彼等の表情の上には、新鮮で、喜びの交じつた驚きがある。

アナスタシアは今でも、彼等にとつて温かい、身近な主だったが、今のアナスタシアその親しみやすさだけではない、深い思慮を感じさせた。

深紅の瞳がそこにいる全員の瞳を見つめてから、期待を籠めてファーガソンの上に戻された。

「長老会は皆を首にするのをやめたの？」

「撤回されではおりません。貴方がお戻りになるまではと止められただけですから……」

アナスタシアが家を出た事が外部に知れ渡らないように、事情を知る者を留める措置をしただけだ。長老会の決定がまだ生きている事を知つて、アナ

「全然変わって無いじやん、どうしよう。また」
「出奔なさるなど、もう二度とお止めください」

「アーファンにきつぱりと釘を刺され、アナスタシアが唇を尖らせる。
「だつて、それ以外に」

「我々は構いません。もともと貴方様が公爵家をお継ぎになる間まで、あのお館を預かっていたのです。ですが貴方は確かに、この公爵家を統治するお方として、この先長老会と上手に付き合つていかなくてはなりませんから、もう少し方法を探されるのは良い事です」

「そんなのどうでもいいよ。今、皆がここにいられる方法を探す。私に任せ

て」

ファーガソンは今度は否定せず、柔らかい笑みを浮かべた。それから離れた所に立つアーシアと、もう一人の少年に顔を向ける。

「アーシアも無事で良かった。——あちらの方は」

アナスタシアの顔がぱつと輝いた。

「旅で知り合ったんだ。私の友達」

「ご友人……」

灰色の瞳を見開いて、ファーガソンはアナスタシアの嬉しそうな顔を見つめた。アナスタシアの口から「友達」という言葉を聞いたのは、十四年間身の回りの世話をしてきたファーガソンでさえ初めての事だ。

「王の御前試合に出るんだよ。絶対優勝する、私の保証付き！ 今皆に紹介するから——レオアリス！」

明らかにこの光景に戸惑つていたレオアリスは、傍らのアーシアに促され、駆け戻つてくるアナスタシアへと歩き出した。途中から走り寄つたアナスタシアに腕を捕まれ、小走りに輪の中に連れて行かれる。驚きと好奇心の瞳が集中する。それは少しも嫌な印象を受けないものだつたが、それでもレオアリスは緊張して背筋を伸ばした。

「レオアリスだ。私と同じ十四歳。御前試合に出る為に王都に来たんだ」

レオアリスが慣れないながらも礼をしてまた顔を上げる間、ファーガソンは丁寧に、何かを判断しようとするような眼でレオアリスを見つめていた。つまりはアナスタシアが連れてきた少年が、アナスタシアの友人に相応しいか確かめようとする視線だ。

重い視線にレオアリスは思わず身を固め、ただ逸らしてはいけないとそう思つて、ファーガソンの灰色の瞳を見返した。

暫く瞳を逸らさず見つめた後、ファーガソンはにこりと笑った。

「良い眼をしておいでだ。アナスタシアお嬢様の連れてこられた方であれば、歓迎します」

ファーガソンの一言で、それまでじつと様子を見守っていた女官達がふわりと裾を持ち上げ、深くお辞儀する。アナスタシアは嬉しそうに輝かせた瞳を、まだ驚いているレオアリスに向けた。

「お腹空いたね」

「やつぱ、どつかに宿取れば良かつたなあ……」

レオアリスは高い天井を見上げて、盛大な息を吐いた。

とんでもない目に合つた。

アナスタシアから紹介された後は、この館の女官だという女性達に寄つてたかって取り囲まれて訳の判らない内に館の中に運ばれた。溺れそうな程広い風呂に放り込まれ、身体を洗おうと言い出した女官達を生きた心地のしないままに追い返し、漸く落ち着いたかと思えば、今度はだたっぴろい食堂とやらでやたらと長い卓に着かされ、何だか判らない凝りに凝った料理を次々と出されて、席の後ろにずらりと並ぶ女官達の視線の中で味も判らないままに口にした。

「食つた気がしねえ……」

女官達がずらりと並んでいたのは主や客の世話をいつでも滞りなくできるようについて、アスタークトのような裕福な貴族の屋敷ではさほど珍しくない状況だが、今まで自分達で鍋をつつき合つていたレオアリスにしてみれば、落ち着いて食べられたものではない。あんな視線の集中する中で、アナスタシアが全く気にせず、しかも尋常ではない量をべろりと食べていた姿が不思議でならない。

しかもまた、与えられたこの客間が、まるで生まれ育つた家一つがすっぽり入つてもまだ余裕があるほど広かつた。部屋は無駄に三つもあるし、天井も、家の屋根より高い。

「何だそりや」

柔らかすぎる絹張りの寝台は厚意を無駄にするようで申し訳ないが、レオアリスにはあまり向かないようだ。何だか村を出てからの旅路や黒竜と戦ったあの時よりも、どつと疲れた気がした。

村の素朴な食事と、低い天井と、寝返りを打つたびにガサガサ音を立てる藁の寝台が懐かしい。

夕食後にアナスタシアと話していく、どこかに宿を取ろうかと言つた時にはもの凄い勢いで否定されたが、やはり明日は街の、あの複雑な迷路のような辺りで宿を取ろうと真剣に思つていた。

だがそれは別にして、館の人々は皆温かく、本当にアナスタシアを大事にしているのはレオアリスにも感じられた。彼等が解雇される事に怒つてアナスタシアが家を飛び出した気持ちも、何となく理解できる。

「家か——」

祖父達はどうしているだろう。全く便りを出さずに、きっと心配しているに違いない。彼等に囲まれて嬉しそうに身振り手振りで旅の話をしているアナスタシアを見ていて、祖父達に会いたい気持ちがとても強くなつた。

本当は今すぐにでも、祖父達に会つて、色々な話をしたい。レオアリスが経験した事を——剣の事を話したら、どんな顔をするだろう。

「取り敢えず、カイに一度伝えに行つてもらおう……それとも、御前試合の結果が出てからにするかな……」

故郷の村とこの王都の間には、何千里という果てしない距離が横たわっている。今すぐ、一瞬でこの距離を渡れる法術を使えればいいのにと、そう思ひながら、睡魔は確実にレオアリスを捕らえて、深い眠りに引き込んだ。

「どうしよう、アーシア。長老会を何とかやり込めるいい方法ないかな?」

久しぶりの絹の寝台に寝そべつて、アナスタシアは頬杖を付いて寝台の脇に座るアーシアを見つめた。柔らかい寝台が心地良く、お腹も久しづりに満たされて、気を抜くとふわふわと漂う睡魔に引き込まれてしまいそうだ。

頬杖を付いたまま頭ががくんと落ち、アナスタシアははつと顔を上げた。

二

「いい方法、考えなきや！」

必死で瞼を持ち上げようとするアナスタシアの姿に、アーシアはくすりと笑みを零した。

「もう今日はお休みください、アナスタシア様。明日また考えればいいです」「うん……。明日は、レオアリスを街に連れてってやるんだー……。明後日はどうしよう……。そうだ、試合の登録にいかなきやね……、どこで、やってる……のかなあ」

アーシアが返事をする前に、アナスタシアの頭がぽんと枕の上に落ち、すぐに小さな寝息を立て始めた。

幸せそうなその寝顔を、アーシアは微笑を浮かべて眺める。それから立ち上がり、壁に掛けられた灯りを一つ一つ吹き消して、廊下に出ると扉をそつと閉ざした。

「——すげえ」
「何だ、これ——」

レオアリスは立ち尽くしたまま、ぽかんと口を開けた。

目の前を絶えず行き交う人、人、人また人の群れ。広い大通りを、生まれて初めて見る程の大勢の人々が埋めている。まるで国中全ての人々が集まつたのではないかと思えた。一々肩を引き来る人を避けなければ、前にも進めないほどだ。

王都に辿り着いてから一夜明け、目の前に実際に広がつた王都の光景を、レオアリスは息を継ぐのも忘れて啞然として見つめていた。

あまりにぼうっと突つ立つていたものだから、道を急ぐ男にぶつかられ、

たたらを踏む。

「邪魔だ、坊主！」

遠慮会釈なく投げ付けられた言葉も、怒るより驚くばかりだ。「お前、ぼうつとそんなよなあっ」傍らにいたアナスタシアがぐいと腕を引き、大通りを歩き出した。

「おい、今日つて祭り？」

「はあ？」

「こんな沢山人が出てて——祭りでもあるのか？」

アナスタシアはぴたりと足を止め、何かすぐ面白いものを発見したように、にやあ、と笑つた。

「田舎モン！」

「何だよ」

「祭りなんかないよ。これが普通なの。しかもここは上層だから、まだ人は少ない方だよ。下町に行つたらもう大変」

アナスタシアの勝ち誇った顔を睨み、そもそもすぐ辺りの様子に惹かれて、レオアリスはまた周囲を見回した。

初めてこの眼で見る王都はレオアリスの想像を遥かに超えて、多くの人々

と馬車、活気と煩いほどの喧騒に満ちていた。本当に、これ程の大勢の人々が行き交う通りを見たのは、生まれて初めてだ。

幅の広い道の両側には屋台が所狭しと並び、通りに建つ商店を覆い隠さんばかりだ。淡い褐色をした煉瓦造りの三階立ての建物が通りに沿ってどこまでも続き、その奥にも更に折り重なるように建ち並んでいる。鮮やかな屋根の瓦、煙を上げる煙突、壁の窓一つ一つに住民達の生活の気配があった。

そして見上げる先に、陽の光を受けて輝く大小の尖塔が見える。上空は風が強いのか、尖塔に掲げられた幾つもの旗が青い空にくつきりとなびいていた。

王城。一晩明けても、まだ信じられない思いだ。

どくりと鼓動が鳴り、レオアリスは鳩尾の剣の上に手を当てた。それはレオアリスの意志を待っている。

手を解き、レオアリスはゆっくり深呼吸した。

(ここが、王都——)

自分はこの場所で、どれほど通用するのだろう。何ができる、この先どうするつもりなのか。

唐突に、それまでの驚きと興奮の中に身を震わすような不安が差し込んだ。あまりに巨大な都。決して軽い想いで村を出てきた訳ではないのに、ここに来たのは本当に正しかったのかと、そんな考えが浮かぶ。ただ、それは地方から王都へ上がった者達が等しく覚える感情でもあつた。

期待や野心を簡単にひと呑みにしてしまう、巨大な生物のようだ。

「どうしたの？」

「——緊張、してきた」

「緊張？」

アナスタシアは少し瞳を開いた。この王都で生まれ育ったアナスタシアには、その感情は無縁のものだ。

「こんなにでかいとは思わなかつたからな」

自分がこれ程小さく、力なく感じさせられるとは思わなかつた。アナスター

シアはじつと王都を見つめるレオアリスの横顔に視線を注ぎながら、その不

安をどうすれば解消できるのかと少し考え込むように首を傾けて、それから口を開いた。

「——まあでも、今は祭りじゃないけど、この先大きな催しがあるよ」「催し？」

「御前試合。お前が出るヤツ」

アナスタシアに向けたレオアリスの瞳の輝きが増す。

御前試合——その為に、レオアリスは旅を重ねてきたのだ。

ぐつと口元を引き締め、たつた今まで王都の様子に驚いていた表情が消える。漆黒の瞳は真っ直ぐに、この先の御前試合を見据えているようだ。

何も心配ないな、とアナスタシアは笑みを浮かべた。今感じているだろう不安もおそらく、その剣を抜いた瞬間に消える。

ここではまだ誰もレオアリスの姿を知らないし、レオアリス自身、たぶんまだ自分の姿を本當には理解していない。けれど、アナスタシアには判つてゐる。

(絶対、優勝だ)

その瞬間を見るのはアナスタシアの楽しみだ。若い二刀の剣士への驚きと歓声を、アナスタシアは誇らしい気持ちで思い描いた。

「さてと、じゃ登録行こうか。場所は師団の第一大隊司令部だつてさ」

「近衛師団の？」

「仕切るのが師団だから」

王の御前試合を取り仕切るのは近衛師団なのだ。志願者の登録から試合の審判まで行う。

だからと言つて優勝者が必ず近衛師団に入る、という訳ではなく、本人の希望によつて進む先を決められる。

「まー師団に入るヤツ多いケド」

アナスタシアは真剣な顔でレオアリスを振り返り、ぎゅっと手を握つた。

「お前は師団に入つちやダメだからね！ 正規軍に入るんだぞ」

「何だそれ」

「正規と師団は仲悪いの。そう言つてたもん、誰か」

「アナスタシア様、そんな人伝えだけで決め付けちゃダメです。特に貴方は、これから正規軍の将軍になられるんですから」

アーシアは穏やかに、ただし有無を言わざぬ口調でアナスタシアを諭した。

「お母君はそんな事、一言も仰った事はありませんでしたよ」

「……アーシア、王都に帰ってきたとたんに口煩くなつた」

「貴方のお立場を再認識したんです。これからアスター家を継ごうという方がそんな視野の狭い事を仰つてはいけません」

「判つたよ、もうつ。——レオアリス」

アナスタシアは唇を尖らせながら、びし、とレオアリスに指を突き付けた。

「とにかくお前、御前で優勝しても、師団じやなくて正規だから！」

「優勝つて、する訳ないだろ」

「まあ、剣士に勝てるヤツがいるか。優勝貰つたようなもんだ」

「剣士つたつて、俺この試合では剣は使わないぜ」

「……何で？」

アナスタシアは瞳を限界まで見開き、レオアリスを見つめた。当然剣を使つものと思つていたのだ。

「何で何で？！ そんなのダメだろ！」

制御する自信が無いから、とは言い難くて、レオアリスは視線を彷徨わせた。レオアリスが心配してるのは、あの力の奔流を抑えきれなかつた時の事だ。レオアリス自身は、剣を使うのにはもう少し時間が必要だと、そう考えていた。

「いや、だつて最初から術士として出ようと思つてたし……法術院に入りたいと思つてたし」

「お前の術、役に立たないじやん！」

「どが付くほどきつぱりと言い切られ、レオアリスはぽかんと口を開けた。

「はあ？」

「アナスタシア様、アナスタシア様が知らないだけで、レオアリスさんすごく活躍されたんです」

アーシアの言葉にアナスタシアはふう、と頬を膨らまして腕を組んだ。ア

ナスタシアとしては、レオアリスが剣を使うのを見たい。それはもう、絶対に見たいと思っている。

「——なら、後で法術院に連れてつてやる。諦めつくぞ」

「何だよ諦めつて」

「——ナスタシアとしては、レオアリスが剣を使うのを見たい。それはもう、絶対に見たいと思っている。

ナスタシアとしては、レオアリスが剣を使うのを見たい。それはもう、絶対に見たいと思っている。

ナスタシアとしては、レオアリスが剣を使うのを見たい。それはもう、絶対に見たいと思っている。

ナスタシアとしては、レオアリスが剣を使うのを見たい。それはもう、絶対に見たいと思っている。

ナスタシアとしては、レオアリスが剣を使うのを見たい。それはもう、絶対に見たいと思っている。

ナスタシアとしては、レオアリスが剣を使うのを見たい。それはもう、絶対に見たいと思っている。

ナスタシアとしては、レオアリスが剣を使うのを見たい。それはもう、絶対に見たいと思っている。

「——文書宮は？」

「文書宮？」

「あそこ、誰でも入れるんだろ？」

「そりや、そりだけど……」

本当はアナスタシアは街に行つて色々見て回つて遊びたい。とにかく、誰かと、友人とそうやって他愛もない時間を過ごすのが、アナスタシアの長い間の夢でもあったのだ。

「——ナスタシアとしては、レオアリスが剣を使うのを見たい。それはもう、絶対に見たいと思っている。

「まあ、いいや。……ちやんとさあ、街にも行くぞ？ 王都に来て街見ない

なんて有り得ないんだから」

「街ね、行く行く。それより文書宮つて本当に何でもあるのかな」

「——」

アナスタシアの膨らんだ頬を、傍らのアーシアが可笑しそうに眺める。

「十日だけじゃありませんよ。この先幾らでも、いつでも行けるでしょう」

「——うん」

「行きましょう。早く登録を済ませれば、今日法術院に行つて、場所が近いから王立文書宮にも行けますよ。お食事もしなきやいけませんし、急がなきや」

アーシアの言葉は巧みにアナスタシアを誘導し、それはそれで楽しそうだと、アナスタシアは瞳を輝かせて頷いた。

三人は今来た道を引き返すように、王城に向かつて歩き出した。行き先は

王城の第一層にある、近衛師団の第一大隊司令部だ。

街と王城を隔てる「外門」と呼ばれる門が深い堀の向こうに建ち、それは常に開かれている。基本的に誰でも通過できるが、門の両脇には近衛兵が常に控えて、不審者に眼を光らせている。

近衛兵達はアナスタシアやレオアリスが通り抜けるのを特に訝しむ様子もなく、引き止められる事もなかつた。若い方の近衛兵がアナスタシアの姿をやや頬を赤くして見送った位だ。

外門を過ぎると街から続く大通りは少し趣きを変え、緑の小さな扇形の葉を重そうに垂れた銀杏の樹が、広い道の左右にずっと続いている。晴れた午前中の陽射しも相まって気持ちがいい。

道を行き交うのは軍服を纏つた正規軍や近衛師団の兵士達が圧倒的に増えた。この第一層に、兵士達の宿舎があるからだ。

また長衣を身に着けた学士風の人々、時折馬車も走り抜けていく。ばさりと風を煽る音に見上げれば、赤い飛竜が二騎、街へと飛んでいくところだった。

「あれ、あれが正規軍の飛竜。紅玉みたいな鱗でカツコいいだろ？ 私は青が好きだけど。入隊すれば支給されるんだ」

「赤が正規軍で、師団は黒だけ」

アナスタシアはまた眉をしかめて、レオアリスを横目で睨んだ。

「黒はどうでもいいよつお前はあの赤いのに乗るの」

「——黒が似合うつて言つたじやないか」

「似合う」

はつとアナスタシアは瞳を見開き、顔を振つた。それを追うように長い黒

髪も忙しく揺れる。

「黒じゃなくて、赤と濃紺の方が似合うつてば」

「黒ね、判つた」

判つてやつているのだ。レオアリスはにやりと笑つて、まだ言い募ろうとするアナスタシアの背中を軽く叩くと、肩越しに道の先を指差した。

「第一大隊の司令部つて、もしかしてあれ？」

すぐ先の通りの右側に、緑の芝に囲まれた三階建の一際立派な建物がある。正面は階段を五段ほど登る低い露台が貼り出し、装飾を施した石の手摺りが巡らされている。入り口の重そうな鉄扉は解放されていて入りやすそうだ。入り口の上の壁面に、近衛師団を現わす紋章が飾られ、そのすぐ下に一という数字が刻まれている。

「そうそう、あそこ——」

アナスタシアが頷いたと同時に、その開かれた扉から男が一人転がり出でた。短い悲鳴とも驚きともつかない声を上げながら通りの石畳の上まで転がつて、打ち付けた肩を押さえている。

何事が鋭く怒鳴り付ける声と共に、男を放り出したらしき数人の黒い軍服姿が入り口にちらりと動き、すぐに引っ込む。倒れていた男は素早く立ち上がり、自分が通りの注目を集めている事に気が付いたのか決まり悪そうに辺りを見回して、身体を縮めて街の方角へ立ち去つた。

三人はぽかんと口を開けたまま、その場に立ち尽くした。

「——何だ、今の」

第一大隊司令部の入り口は間違いなくあそこだが、思わず踏み留まつてしまふほど異様な光景だった。

「……え、あれ入れんだよね……？ 許可要るの？ 何で蹴り出されたの？」

「場所は合つてるんだろ？」

「一応、あそこでいいはずですが……」

レオアリス達の他にも、旅装の男が一人、やはり入るべきかどうか躊躇うように恐々と首を伸ばしている。

「あ、いいんですよ、ほら。表示が出てます。受付中つて」

アーシアは短い階段を登つて入り口に駆け寄り、これです、と二人を振り返つた。

深い緑色の鉄扉に貼られた白い張り紙には確かに、丁寧な文字で「御前試合志願者は棟内中庭へお進みください」と書かれている。

「何か、すごい丁寧で気軽にうなどこがコワイ……」

放り出されたあの男が何なのは判らないが、旅装だった事から、同じ御前試合の志願者に思えた。志願者が、放り出される——。何事か。

「と……、とにかく行こうか」

アナスタシアはぶるんと頭を振つて、入り口に足を掛けた。恐る恐る入り口を覗き込むと、中はしんと静まり薄暗い。入つてすぐは天井の高い小さな広間になつていて、左右に棟内に入る為の細い鉄の桟に硝子を張つた扉と、それから正面にも扉の無い入り口があり、そこから緑が覗いている。騒々と声も流れてきていた。

「あそこ中庭かな」

ちょうどその時、男が一人そこから出てきて、三人の立つ入り口へと歩いてくる。軍服ではない。同じ志願者ようだ。擦れ違つた三十代の男は、三人を物珍しそうに眺めて通り過ぎた。

「——行こう」

レオアリスは少しひんやりした棟内に入り、床を叩く硬い靴音の響きを押さえるようにしながら真っ直ぐ中庭に向かつた。薄暗がりから中庭に出ると、太陽の陽射しに目がちかちかする。

「すごい並んでる！」

アナスタシアは中庭を見回して驚いた声を上げた。まだ午前中も早い時間だといふのに、円柱の並んだ回廊に囲まれた中庭には、奥に受付用の机が置かれ、その前にずらりと五十人近い列が出来ている。男が多いが女の姿もちらほらと見える。年齢は三十代が最も多いようで、レオアリスのような十代の少年の姿は見られなかつた。

それにもこの人数が、全員御前試合を志願しに来ているのだろうか。

まだ三人の後からも中庭に入つてくる者がいる。

「そんなに竜つていたつけ」

アナスタシアは素直な疑問に首を傾げた。

「とにかく並んでくる」

「私も」「あ、僕も」

レオアリス達が列の後ろにつくと、前にいた男が振り返り、瞳を見開いた。気付けば他の志願者達も、警備の為か回廊の柱の横に立つ黒い軍服の近衛兵達も驚いた顔で三人の方を眺めていて、中庭には静かだが騒めきが起きている。多くはあんな子供がと驚きと苦笑の入り交じった顔をしていて、あからさまに指差して笑う者までいる程だ。

「やな感じ！」

「驚いてるんですよ。レオアリスさんと同じ年頃の志願者いないですし」

「ガキだからって舐めんなよ」

アナスタシアはきり、と周りを睨み付けたが、レオアリスはじつと瞳を前に向けたままだ。

「何だよお前、もう緊張してんの？」

「当たり前だろ、普通」

「失格！」

受付の近衛兵がいきなり声を上げ、レオアリス達は飛び上がって身を寄せた。見れば一番前で宝玉を見せていた男が追いやられるところだ。「王の御前試合に偽物を持って来て通ると思うか！ 摘み出せ！」

「うわっ、もしかしてさつきのこれが」

アナスタシアは首を縮め、近衛兵に両脇を抱えられて連れ出される男を見送つた。

「やっぱ全部本物じゃないんだ」

「カトウシユ森林は途中で封鎖されましたしね、そんなには」

男を先程のように放り出し終えたのだろう、少しうんざりした顔の近衛兵達が戻つてくる。志願者達が並んでいる列に厳しい視線を向けながら、彼等はまた回廊の柱の脇に立つた。

結局レオアリスの番が来るまでに、半数以上は近衛兵に摘み出されていた。

今、前の男が懐から取り出した宝玉を受付の机に置いている所だ。

それはレオアリスの持っている宝玉と同様、半透明で虹色の光を放つている。

る。

「でもあれ、ちっさいな」

こつそりとアーシアの耳に囁いたアナスタシアの声を聞き咎めた男が眉を

吊り上げて振り返り、アナスタシアは首を竦めてペロリと舌を出した。男は

無事登録を終えたらしく、まだアナスタシアを睨みながら、中庭を出て行つた。

「次、前へ」

受付の近衛兵が書類に視線を落としたまま声をかけ、レオアリスは受付の

前に立つた。眼を上げた近衛兵がぽかんと口を開ける。

「……坊主、使いか？」

「違います。本人です」

近衛兵は半分立ち上がり、レオアリスと後ろの二人をまじまじと眺めた。

「三人で？」

「お前だけか？ どうせ後ろの二人が加わっても大して変わらないが、大丈

夫なのか？ 幾つだ」

「十四」

騒々と周囲が声を上げる。

「十四だつて？」

「本気かよ」

「宝玉持つてるのか？」

近衛兵は隣の同僚と顔を見合せ、ごほんと咳払いして再び座つた。

「十四つて、お前ここ来て何をするか判つていてるのか」「判つてます。その為に来たんだ。年齢制限があるなんて聞いてないけど」

レオアリスの反論に近衛兵はばつの悪い顔を見せたが、納得した様子でもない。

「宝玉は？」

年齢を聞いたからか、明らかに受け付けるのも無駄だと言わんばかりに、身体を半分斜めに向けたまま肘を突いている。アナスタシアはむつとして近衛兵を睨み付けたが、珍しく言葉を飲み込んだ。レオアリスは袋から宝玉の包みを取り出し、受付の机の上に置く。

「全く何か勘違いしてるぜ」

「ここはガキの遊び場じゃないんだけどなあ」

受付の近衛兵達は溜息をつきつつ包みを開き——、包みから現われた宝玉の大きさに思わず息を詰めた。興味津々で見ていた周囲の志願者達もどよめき、身を乗り出す。

「何だ、これ——、こんなの普通の大きさじやないぞ」

先程の志願者が提出したのは、親指と人差し指で輪を作つた程の大きさしかなかつたが、今机の上に置かれて虹色の輝きを放つている宝玉は拳大もあり、全く別のもののように見えた。

「どーだ見たか！ ガキだと思つて馬鹿にすんなよ！」

アナスタシアがふんと笑つて、満足気にレオアリスの肩を叩いてみせる。だが近衛の男は暫くその宝玉を見つめた後、うさんくさそうな顔をレオアリスに向かた。

「本当にお前が取つてきたのか？」

普通に考えれば、たつた十四の少年が持つて来れる代物ではない。レオアリスにしろアナスタシアやアーシアにしろ、大人の眼からすればまだ成長途中の子供としか映らず、彼等の姿を知らなければ本気にしないのも無理の無い事だ。

ただ、近衛兵達の上には、最初から本気で信じようともしていない様子がはつきりとある。

レオアリスは唇を噛みしめ、苛立ちを押さえた。

「そうです」

レオアリスが頷いたのも、近衛兵達はあまり真剣に聞いていないようだ。「宝玉は自分で手に入れて来た物でないと認められない。第一にいくらなんでも大き過ぎだ。偽物なんじやないか？ どうせ偽物持つて来るなら尤もら

しい物を持つてくれれば……

「ふざけんな！」

アナスタシアは黙つて聞いていなかつた。憤つて机の上に身を乗り出す。

「偽物の訳ないだろう！　どこ見てんだ節穴！」

「何だ、お前」

「よせ、アナスタシア。とにかく見てください。ここではそれを判断するんでしよう」

「馬鹿を言え、こんな大きい宝玉があるか。偽物に決まってる」

近衛兵は机の上の宝玉を乱暴に押し戻した。

「いいから帰れ……」

アナスタシアは机に片手をついて、虹色に光る宝玉を掴んで近衛兵の前に突き付けた。

「見もしないで決め付けるなよ！　本当にレオアリスが取ってきたんだ！」

「黒竜の宝玉だ、他とは違う！」

「黒竜――？」

黒竜、とその場が静まり返り——次の瞬間どつと笑い声が湧き起こつた。

「黒竜だつて？」

「嘘つくならもつとましむ嘘つけよ」

アナスタシアは周りの声を押さえ付けるように振り返つて彼等を睨む。

「嘘なもんか、——こいつは剣士なんだから！」

笑い声はぴたりと止まつて、それから益々大きくなつた。今度は何を言いだすのかと言わんばかりだ。

「劇団でも行つてこい！」

「劇団の試験なら見た目だけでも一発で通るぜ」

「誰が保証してくれんだい、お嬢ちゃん。証人がいるのかよ」

「そんな……」

アーシアが青ざめて唇を震わせ、レオアリスは黙つたまま唇を引き結んで、

じつと前を見つめている。周囲を取り囲む笑い声に、頭がくらくらする程の怒りを覚え、アナスタシアは彼等の正面に立つた。

レオアリスは溜息をついて、中庭の入り口に足を向けた。アナスタシアが

「——保証なら、私がする！」

アナスタシアは長い髪を振つてその場の全員をぐるりと見渡し、力強く叫んだ。

「私はアスタロトだ。私の言葉を信じられないのか！」

だが、笑いは收まるどころか、更に火に油を注いだだけだ。もう何を言つても全く通じない。すっかり質の悪い冗談か誇大妄想の困つた相手だと、そう思われてしまつたようだ。

「——お前等、いい加減に」

「無理です、アナスタシア様。出直しましょう」

アーシアも悔しさのあまり、張り詰めた頬を微妙に震わせている。だがもうこれ以上、どうしようもない。せめてこの場にアナスタシアを居させたくない、中庭を出ようと手をとつた時、それまでじつと黙つて笑い声を聞いていたレオアリスが、周囲を睨み付けた。

「何で笑う！　真剣に話してる相手に向かつて、それが真つ当な態度かよ！」

そこにいた者達が一瞬の内に静まり返つた。レオアリスの声に含まれた激しい怒りの感情に驚いただけではなく、踏み出したレオアリスの身体が、微かに青白い陽炎のようなものを纏つたからだ。その空気はこの場を圧倒するに充分だつた。

「何が可笑しい」

アナスタシアはレオアリスの為に本氣で怒つて、真剣に説明しようとしていた。彼女自身が笑われる必要など、本来全くなない。

陽炎はすぐに消えたが、中庭にいた者達はすっかりレオアリスの纏つた空気に飲まれていた。

「否定するにしたつて、せめて笑わずに聞くべきなんじやないのか」

決まり悪そうな顔を足元や回廊の空間に向ける者、そろりと視線を隣にいる相手と合わせる者、様々だが、誰も答えを返せずに、それまで聞こえなかつた中央の噴水の音だけが響いている。

「——行こう」

レオアリスは溜息をついて、中庭の入り口に足を向けた。アナスタシアが

手を伸ばして腕を捕まえる。

「レオアリス」

「もういいよ。悪かったな、嫌な思いさせて」

「そんなの」

アナスタシアは視線を落とし、まだレオアリスの拳がきつくなっているのに気が付いた。

自分の言葉が説得力が無いからだと、アナスタシアは心の奥に針で刺すような痛みを感じた。

ここでも、アナスタシアは誰も説得できていない。長老会を前にした時のように。

(こんな感じやダメだ)

「もう一度——ちゃんと、私が」

きり、と唇を噛みしめ、レオアリスを引き止める為に腕を引いた時、場違いに明るい声がかかった。

「忘れ物ー」

届託ないその声に、三人とも思わず振り返って足を止めた。受付の机から身を乗り出して宝玉を差し出しているのは、初めて見る顔の青年だ。近衛師団の黒い軍服を身に纏っている。

受付の近衛兵達がさつと左腕を胸に当て直立した。

「クライフ少将！」

「騒ぎが執務室まで聞こえたぜ。つたく、受付くらい肅々とやりやがれ」

二十歳そこそこに見える青年が少将と呼ばれた事に、レオアリスもアナスタシアも驚いて見つめている内に、クライフは机を回ってレオアリス達の前まで来ると、三人に問いかけるように宝玉を眼の高さまで持ち上げた。

「これはさあ、下んとこがもう色が消えかけてる。だから本物だと思うんだが、持つて帰らなくていいの？」

「——」

「置いてくなら、御前試合に登録するつて事だよな？」

「え」

ぽかんと見上げたレオアリス達の前で、クライフは背後を振り返った。

「でしょ、ランスレイ中将」

クライフの視線の先、回廊の奥にある扉の前に、六尺五寸はある大柄な壯年の男が立っている。男——ランスレイが厳めしい瞳を中庭にいる者達に向けると、輪のように広がっていた人だかりがびくりと揺れた。

近衛師団第一大隊中将ランスレイといえば、およそ御前試合を目指そうという実力と経験の持ち主であれば、一度ならず耳にする名だ。

もはやこの場には失笑の欠片もなく、弓の弦の如く緊張に張り詰めている。

「——本物だ。それから」

ランスレイは兵や志願者達の間を抜けアナスタシアの前に立つと、その大きな身体を屈め跪いた。

「ご無礼、何卒お許しください。——次期アスター公爵アナスタシア様」

「アスター公爵お？ その嬢ちゃんが？」驚いて声をひっくり返らせたクライフをじろりと睨んで黙らせ、ランスレイは再び頭を下げた。

「知らぬ事とはいえ、不愉快な思いをされた事だと思います。全ての責任はこの私がお受けします。後日正式な処置が下るはず、この場は」

茫然と立ち尽くしていたアナスタシアは、ランスレイの言葉に頬を張り詰めて青ざめた。

「そんなの、いい！ 頭を上げろ」

「しかし」

「いいたら！ 誰かの責任とかじやないんだから」

ランスレイは尚も顔を上げようとしている。その姿にやる方無い視線を落として、アナスタシアは泣きたい気持ちになつた。

ランスレイが頭を下げる程に、自分の腑甲斐なさが浮き彫りにされるようだ。先程まで笑っていた兵や志願者達も、今ではすっかり青ざめて膝を付いている。

(ダメだ)

アスター公爵という名が他者によって証明されなければ、誰もアナスタシア

の言葉を聞いてくれないなんて、それでは駄目なのだ。

「他者によるものでもアスターの名でもなく、自分の力で納得させなれば意味が無い。」

「……本当に、私は責任とか言うつもりは無いんだ」

グラントレイは一度考え込むように眉を寄せたが、アナスタシアにとつて余り好ましい状況ではないと理解したのだろう、静かに立ち上がった。

「有難うございます」

グラントレイは左腕を胸に当て深く体を下げてアナスタシアに敬礼すると、身体を返した。一瞬だけ、グラントレイの視線がレオアリストの上を過ぎる。

レオアリストはその視線の中に、先日の正規軍第六大隊大将ウインスターと同じ光を感じた。

中庭を横切つていくグラントレイの後ろ姿を、レオアリストの視線がじっと追う。

「さて坊主、宝玉は本物だ。出場登録は確かに受け付ける。ホント悪かったな。ま、こんなバカでけえ宝玉があるなんて思つてなかつたからよ、水に流してやつてくれ」

クラフトは笑つてレオアリストの肩を叩いた。この青年が話し出すと重い空気が俄かに明るくなるようで、近衛兵達も明らかにほつとした顔を見せている。

クラフトは宝玉を布で包み直し、受付の近衛兵に手渡した。代わりのようにレオアリストに紙を差し出す。

「んじや、ここにちゃんと名前と宿と、必要事項書いといってくれ」

そう言つて明るい鳶色の瞳をぐるりと回すと、クラフトは三人に顔を寄せ、こつそり囁いた。

「黒竜と戦つたって、マジ？」

近衛師団にも情報が流れているのかと驚いたものの、三人同時に頷くとクラフトは瞳を輝かせた。

「くつそう、いいなあ！ 僕も居合わせたかったぜ！」

それからはつと気が付いて、周りに誰か——グラントレイが居やしないか

と見回す。どうやらグラントレイは棟内に戻つたようで、クラフトは明らかに肩の力を抜いた。

「すんません、正規にとつちやそんなふざけた話じゃないつすね」

クラフトは背筋を伸ばし、腕を跳ね上げてアナスタシアに敬礼する。

「ご無礼致しましたあ！ ——あ、それからあの御仁、くそ真面目なんで、あんま気にしないで何卒見逃してやってください」

両手で拝む仕草をするクラフトに、少しだけ気持ちが軽くなつて、アナスタシアも口元を緩める。

「怒つてる訳じやないから、平氣」

「マジっすか、良かつた！」

にかりと笑つてもう一度敬礼し、クラフトは再び机を回つて受付の後ろに立つた。

「ほれ、受付再開しろ。言つとくけどお前等、ホントに偽モンだつたら容赦無く放り出すからな」

再び列が進みはじめ、中庭に騒々とした空気が戻り始める。相変わらず放り出される志願者もいて、彼等はそこまでして御前試合に何を賭けているのだろうと、——自分は何を賭けるのかと、そんな疑問を抱きながらレオアリストはその場を後にした。

棟の出口を抜けると少し解放されたような気分になる。誰ともなく息を吐き、顔を見合せた。暫くお互の想いに沈んで黙つて立っていたが、気持ちを振り切りようにななスタシアが顔をぐいと上げる。見上げた空では、まだ太陽が東の空から斜めに光を投げかけているところだ。銀杏の樹の柔らかい騒めきが、沈んだ気持ちを少しだけ浮き上がらせてくれた。

「——まだ昼には早いね。どつか行く？ 行きたい所ある？」

「行きたい所か……」

「法術院でも見に行くか？ お前、参考になるかも」

何にしても御前試合に出られると決まつたのだ。何か少しでもやつておける事はやつておいた方がいいと、アナスタシアは道の先、坂の上に見える尖塔を指差した。法術院はあの尖塔の下辺り、王城の中心部にある。

「——いや、法術院はいいや。見ても仕方ない」

レオアリスの顔の上には、これまで御前試合と聞いた時に見せていた、あの純粋なまでの憧れの光が無い。今一件で気持ちが失われてしまつたのか

と、アナスタシアは慌てて漆黒の瞳を覗き込んだ。

「あれ嘘だよ。諦め付くつていうの、からかっただけで——御前に出るなら見といの方がいいよ、行こ？」

アナスタシアが何に慌てているのか気付いたのだろう、レオアリスは僅かに瞳を見開いて、それから笑つた。

「やる気無くした訳じやねえよ」

「俺は、剣士として出る」

きつぱりとそう言つて、風が静かに樹々を揺らして過ぎていく通りに立ち、レオアリスは漆黒の瞳に光を灯した。

「お前が言つてくれた事を、証明してやる」

「——」

心の奥にレオアリスの言葉の意味が伝わる。それを噛み締めるようにアナスタシアはゆつくり瞳を見開き、それからあつと頬を輝かせた。

「……じゃあ、優勝？」

レオアリスは引き締めていた頬を呆れて緩めた。アナスタシアの思考は相変わらず唐突だ。

「ここまで行くかよ」

「行くよ！ 絶対優勝！ そこで正規に入るんだ」

「判んねえよ、そんなの」

「判るよ、私は」

一度言葉を切り、アナスタシアはあらん限りの確信を込めて、力一杯頷いた。

「お前は優勝する」

「……何となく、そんな気になつてくるな……」

アナスタシアの深紅の瞳は、炎を宿したように強く輝いている。その光を見ていると、どんな嘘でも本当にになつてしまいそうだと、レオアリスは苦笑を洩らした。自分が優勝できると信じ込んでしまいそうだ。

「そんな気になるじやなくて、そうなんだから。……でもそれじや、どこに行く？」

すっかり気を良くしたのか、アナスタシアは愛らしく首を傾けてレオアリスとアーシアを眺めた。

「お前は帰らなくていいのか？ 何か色々やる事あるんじやねえの？」

「——うん……」

やらなくてはいけない事は、幾つもある。本當は今朝も長老会から面会の申し入れがあつたのを、疲れているという理由で明日に引き延ばしたのだ。

正直に言えば、明日も彼等と顔を合わせる気になれないだろう。というより、今一件で、ますますその気力が無くなつてしまつた。

「いいよ。大丈夫。今日一日はお前に付き合つてやるから」

「ふうん……」

レオアリスの曖昧な返事に、逃げたいと思つていた自分の心が見抜かれた

ようを感じて、アナスタシアは素早く言葉を継いだ。

「どこ行く？ 買い物？ 服買う？ 飯？」

じつと物聞いた気にレオアリスはアナスタシアの瞳を見つめていたが、今は無理に聞いても無駄だと思ったのか、その瞳を道の先に向かた。

「じゃあ、王立文書宮」

アナスタシアがへにやりと悲しそうな顔を見せる。王立文書宮などに行つたら、多分レオアリスなどはそれだけでもう一日が潰してしまったのが目に見える。

「文書宮……？ 何で「じゃあ」？」

「前の御前の記述とか見たいし」

「——文書宮行つたら、その後飯行く？」

「いいよ」

レオアリスはあっさりと返事をしたが、それが本当かどうか非常に疑わしい。もう既に、文書宮にあるだろう書物の山を想像して、その漆黒の瞳を輝かせているほどだ。

「——じゃあ行く」

渋々といった顔で頷き、それでもアナスタシアは先に立つて、緩やかな坂道を登りはじめた。レオアリスも嬉々として、その後歩いてくる。

「文書宮つて、どこにあるの？」

「文書宮とか、法術院とか、あと内政官房や財務院、地政院などもそうです。が、國の中枢を担う組織は大体王城そのものの中にあるんです。」

「そのもの？」

普段はこの第一層から城のある第四層までをひと括りに「王城」と呼んでいるのだが、正式に「王城」という場合は、第四層を指す。

「ややこしいんだな」「この辺りを王城と呼ぶのは、慣習みたいなのですね」

「城を見たら、またびっくりするぞ。当たり前だけど、うちの屋敷なんか目じゃないし、とにかく色々入つてるから、ものすごく広い。」

また驚くだらうレオアリスの姿を想像して、アナスタシアは早くもくすぐ

す笑つた。

「迷子にならないように、ちゃんと付いて来てね」

「何だそれ。お前が迷うんじやねえの？」

「迷わないよーだ。……アーシアがいるから」

「僕、あまり王城には入つた事ありませんよ」

えつと驚いた顔をしたアナスタシアを見て、やっぱり迷いそだとレオアリスが笑う。

「——大丈夫。一度行つたことがあるから！」

「一度かよ。何年ここに暮らしてるんだ」

「一度で十分なの、あんなとこ」

そんな他愛のない会話を延々続けながら、三人はゆっくりと王城へ続く坂道を登つていつた。

結局歩くと一刻近い時間がかかる事を思い出し、再びアーシアの背に乗つて、三人は王城の門の前に降りた。それから予想通り驚いた顔で目の前に聳える壮麗な城を見上げているレオアリスを引つ張りながら、正門を潜り、アナスタシアは城の玄関へと続く玉敷きの道をすたすた歩いていた。正面の巨大な門を抜けると広大な広間に出て、アナスタシアは広間を見渡し、右を指差した。

「こっち。確か」

広間にある広い階段を登るには身分証明が必要だが、一階部分は誰でも通り抜ける事ができる。アナスタシアは一度階段の右側にある通路を進んでくるりと広間へ引き返し、きょろきょろと辺りを見回してから、ぽんと手を打ち合させて、今度はその階段の左側の通路へ向かつた。

「……合つてんの？」

「大丈夫」

ちよつと頬を染めつつ、それでもアナスタシアは確信を以つて頷いてみせ

た。アーシアは全く見覚えがありません、と首を振つたが、アナスタシアにはこの長い折れ曲がった廊下には、見覚えがある。何度も角を曲ると、王城の中庭に出た。

「ここだ！」

中庭には雨でも濡れずに通れるように屋根を設けた回廊が横切つていて。確かに昔、母に連れられて来た覚えがあった。美しい庭に橋のように架けられた白い回廊を良く覚えている。王立文書宮があるのは、その回廊を渡つた先だ。

白い花崗岩を格子状に組み合わせた回廊の壁面からは、左右に整えられた緑の中庭が広がっているのが見える。行き交う学士や王立学術院の制服を着た学院生達も、王立文書宮がこの先にあると教えてくれていた。

回廊は半分ほど進んだところで十字に交差して分かれている。アナスタシアはちよつと迷つて、それから学院生が歩いてくる正面の道を選んで再び歩き出した。

「——あ、あれ！ ほら、あの扉」

回廊の行き止まりに、両開きの扉が見える。扉には知の象徴を表わす意匠である、葉を茂らせた年経た樹木が一面に彫られているのが、離れた所からでも見て取れた。外側には取っ手がなく、見てみるとどうやら、外からは重い扉を押し開けて入るようだ。

「ほら、着いたでしょ」

得意そうにレオアリスとアーシアを振り返ると、アナスタシアは扉に両手を置いて、重く大きな扉を押し開けた。

軋んだ音を立てて開いた扉の奥には、天井の高く取られた広間が左右に広がり、天窓から差し込む幾筋もの光と舞い散る埃の中に、壁に上から下までずらりと並べられた書物を浮かび上がらせている。そこに収められた書物だけでも、一生かけても読みきれないほどの量だ。

両奥の壁にはそれぞれ上部を弓状に作られた通路が設けられていて、更に

奥があるのだと知らせている。アナスタシアは室内を眉を顰めて見渡した。「えっと確か、一階だけでも十五は部屋があるんだ。皆こんな感じ」

面白み無いよね、と隣のレオアリスを見たが、レオアリスの瞳はすっかり書物の山に釘付けになっていた。

「——すげえ……これ、全部見ていいのか？」

「いいよ。持ち出す時は申請がいるけど」

「ちよつと——、すぐご飯だからね！」

「ちよつと——、間に消えてしまった。」

「ちよつと——、すぐご飯だからね！」

アナスタシアの呼びかけはレオアリスの背中に届かず、床に落ちたようだ。

ぼつんと取り残されたアナスタシアが不満たっぷりの顔でアーシアを振り返る。

「あいつ、こんな所の何が面白いんだ。さっぱり判らない」

「貴方はもう少し興味をお持ちになった方がいいです。本当に色々あつて勉強になるのだとファーガソンさんが言ってましたよ」

「私は、痛快活劇なら好きだな！ 良くあるじやん、町人に身をやつして悪事を暴くつてヤツー。あれいいよねえ」

アナスタシアの瞳がキラキラ輝いている。読むの面白いよね、というよりやつたら面白いよね、と言い出しそうで、アーシアはすかさず首を振つた。

「お食事とか、苦労なきりますよ。ご自分で作れなきや。お掃除も、お洗濯も、ちゃんと街の人のようにやれなくちやいけません」

「そおなの？ ちえ。——ああ、お腹空いたあ。レオアリスどこ行つちやつたの？ 先にご飯にしたいなあ」

書架の影を覗き込みつつ、ふらふらと当てもなく幾つもの広い部屋を抜け、閲覧用の机が並んだ一際広い広間に出て。並んだ仕切りの付いた机と、その前に座つて静かに書物に眼を落としている幾人もの学院生や学士達を見るともなしに眺め、アナスタシアはびたりと足を止めた。

「あ、ヤバイ」

「？ どうしました？」

余り出会いたくない相手が、一際目立つその姿で、窓際の卓で複数の書物を広げているのを見つけてしまった。ヴエルナーハウスのロットバートだ。

素早く通り抜けようとしたアナスタシアを、状況を理解していなかつたアーシアは訝しそうに呼び止める。

「アナスタシア様？」

「あ、バカ！」

何人かが顔を上げ、二人を煩そくに睨み付ける。その先でやはり視線を上げたロットバルトと、ぱっちり目が合つた。ロットバルトは微かに驚いたようすに瞳を開いたが、立ち上がりアナスタシアへ目礼した。

「お知り合いでですか？」

「知り合いつてものか。ヴエルナーだ」

アーシアはぎよつとして慌ててお辞儀した。

「お辞儀なんかすんな

アナスタシアが立ち止まつていてる間に、ロットバルトは読んでいた書物を閉じ、上位の相手への礼儀作法に倣つてアナスタシアの前へ立つと、丁寧に一礼した。

「ご無事で何より」

お久しぶりです、でもご機嫌麗しく、でもない第一声にアナスタシアの頬がぎよつと強ばる。

「ぶ、無事つて……何で知つてんだ」

「大抵の者は知つてゐるでしよう。無論公にされてゐる訳ではありませんが、もう少し慎重になられるべきでしたね」

そんなふうに平然と言われ、どこまで誰に伝わつてしまつてゐるのかと、アナスタシアは空恐ろしくなつた。あの家出を知られてゐるかと思うと、顔に血が昇るのが判る。ここで静かに書物を読んでゐる人達にまですっかり知られているような気分になつて、辺り構わず睨みつけると、顔を上げていた閲覧者達がさつと頭を下げた。(やつぱり知られてる?)

だが彼等は單に、このかけ離れて見えたいい二人が何の話をしているのか、興味を引かれていただけだ。アナスタシアは内心の焦りを隠し、ふん、

と息を吐き出した。

「単なる、り、旅行だ！」

「そうでしよう」

ロットバルトは表情も変えず領き返す。苦しい言い訳すら、当然想定されていたものようだ。

(くそ、ムカつく)

「そんじや、さよなら」

くるりと背中を向けてその場を離れようとして、アナスタシアはふと立ち止まつた。出奔する前夜にも同じような事があつた気がする。

この青年に忠告めいた事を言われて、無視して家に帰つたら翌日、出奔――。

(――あれ、何か判つてたのか?)

それにこの青年は言つてみれば、アナスタシアと同じ立場だ。王立学術院の首席として将来を嘱望されているとも聞いた事がある。内政官房に進んで、いずれは国の重要な決定事項を任されるようになるだろう、と、確かに夜会の前にファーガソンが作つてくれた紙に書いてあつた。

ヴエルナー侯爵家の子息として、それからそこまで将来を嘱望されている者として、たぶん色々な知識を持つてゐるはずだ。

例え、誰かに意見を言う時。

「ねえ、ちょっといい?」

既に席に戻りかけていたロットバルトは、アナスタシアから声をかけるとは思つていなかつたのだろう、意外そうな顔をして振り返つた。氷のような印象の整つた顔を向け、アナスタシアが何か言い出すのを待つてゐる。

「えつと……あの時何か言つただろ? あれ判つてて言つたの?」

「……ご質問の差す所が、全く理解できませんが

声の中に、瞳の中にも呆れの色が過ぎり、アナスタシアはさすがに判りにくい言い方だつたと言葉を継いだ。

「だから、戻るべきだつて言つたじやん」

「ああ――」

夜会の席での事だと気付いて、蒼い瞳を細める。

「予測の範囲でしよう」

「予測の範囲つて……だつたら何で教えてくれないの？！　一言言つてくれればいいのに！」

前もつて判つていたらあんな騒ぎにはならなかつたのだ。思わず文句が口を突いて出て、アナスタシアはそういう事を言うつもりではなかつたと首を振つた。それに大声を出したせいで周りの閲覧者達が迷惑そうな顔をアナスタシアに向けている。

「こちらへ。せめて廊下へ出てお話を伺いましょう」

ロツトバルトは部屋と部屋を繋ぐ短い廊下へ出て、中ほどの柱の前で振り返つた。

「それで」

言いたい事は文句だけか、と言われているようで、アナスタシアは視線を逸らし大理石の廊下に落ちた柱の影の先を追う。

「今のは無し。文句言いたい訳じやなくて、……まあ家出たお陰で何倍もい事あつたし」

「——それは良かつた」

どうでも良さそうだ。早いところ本題を切り出さないと、話を打ち切られそうだつた。

「過去はいいの、過去は。問題は、この先」

プラフォードとの件をどう解決するか、長老会とどう話すべきか——そこだ。

「だからさ、あの後結果的に結婚話になつて、それを受けないとエレノア叔母は無能力みたいに言われるし、ファーガス達は首にされかけるし——」

元々アナスタシアは状況説明が上手い方ではない。これでは何を言わんとしているのか判りにくい。横で黙つて聞いていたアーシアが時折口を挟みたそなにしていて。ただ、アーシアがちらりとロツトバルトを見ると、彼は取り敢えず話を最後まで聞くつもりのようだ。

「それなのに、私は全然、説得できないの」

(……あれ、だから何だ？)

アナスタシアは自分自身顔をしかめた。自分がどうとかではなくて、一般的にどう問題解決すべきかを聞きたかったのだが、どうもそういう流れに持つて行けていない。

ロツトバルトは眉一筋動かさない。その氷のような印象の整つた顔を眺め、アナスタシアの心の中に後悔が湧いてくる。

(何でこいつに聞いてんのかなあ)

立場が近くて遠いか、逆に込み入つた話をしやすいのはある。確かに今のアナスタシアの状況で、事情もある程度知つてゐるし、一番いい相談相手の一人ではあるだろう。相談に乗つてくれるなら。

(乗りそうになり……)

乗りそうにないし、相談というより愚痴を言つてゐるみたいだし、そもそも会つたのはこの前の夜会が初めてだ。

「やつぱ……」

「説得するつもりがあつて、何故それを最後までやらずに家を出たんです」話を打ち切ろうとして手を上げかけ、ロツトバルトの問いかけにその手を中途半端な位置で止めた。

「何でつて——そりや、腹が立つたから……向こうは強硬だし……」

「相手が強硬な態度だからといつて説得を諦めるのなら、その程度の問題だ」という事でしょう

温かい言葉が帰つてくるのを期待してゐた訳でもなかつたが、その言われ方はかなり堪えた。言う通り、だからだ。

それでもムツとして、アナスタシアはロツトバルトを睨み付けた。

「その程度つて——なら、お前ならどうすんの？　偉そうに言うけどさ、あの頑固じじいどもを説得するいい手があるのか」

ロツトバルトは答えを教えるべきかどうか考へるように瞳を細めていたが、やや溜息混じりに口を開いた。

「再考を促す要素はありますよ。問題点を上げて不安を煽ればいい」

「不安で」

彼等に不安に思われているから結婚話が出るのではないかと、そう言おうとして、ロツトバルトの頬に浮かんだ微かな笑みにアナスタシアは開きかけた口を噤んだ。

「判りやすく申し上げれば、要は脅す事です」

「脅す？……また出でいくぞ、とかつて？」

ロツトバルトは再び呆れた色を浮かべ、今度ははつきりと溜息をついた。

だが、一応最後まで教えてくれるつもりのようだ。
「ごく簡潔に言えば、まだ基盤の弱い所へそんな有力な家を呼び込んでいいのかと、そう問い合わせばいいんです。そこが今回の最も根本的な課題のはずでしよう」

暗い森の中で、顔にぱちんと小枝でも当たったように、アナスタシアは瞳を見開いた。そこに枝が伸びていたと、初めて気付いた、そんな感覚だ。

「——あ、そうか！」

ロツトバルトの言わんとするものはアナスタシアにも判る。この結婚話は、アスター公爵家の地盤固めの為のものだ。

一言で母である前公爵の後を継ぐと言つても、全てが元のままという訳ではない。アナスタシアはアナスタシアとしての、新たな公爵家の地盤を築いていかなければいけない。今が一番不安定な時期なのだ。

アナスタシアが納得したのを見て取り、これで用は終わつたと言わんばかりにロツトバルトはその場を立ち去りかけた。アーシアが慌てて呼び止める。

「すみません、その」

おそるおそる声を掛けると、ロツトバルトは足を止め振り返つた。

「そんなに上手く行くでしようか」

そんな事かと言うように、ロツトバルトは肩を竦める。

「行くでしようね」

返答は淡々と事もない口調で、アーシアは胸を撫で下ろし、かけた。

「ベルゼビア、或いはヴエルナーでも構いませんが、それを呼び込んだ場合に想定されるアスター公爵家の変動を多角的に例に挙げる。この場合、話

を優位に進める為には、まず自らが状況を把握しているという事を相手に示す必要があります。最初に利点を最小限に挙げた上で負の変動を際立たせれば、基本的な心理は負の可能性に引きずられ易い」

アーシアは——その後ろでアナスタシアも固まつた。ロツトバルトの言葉は手元の文章でも読み上げるように淀み無い。

「無論相手を論破する為には、事前に長老会を構成する各人の政治力や影響力、交友関係、協力体制、不和や綻びがあるか、不足している所はどこか、それらを充分把握した上で、それぞれの思考傾向に合わせて情報を適切に提示する事が重要です。まずは個々に面会して根回しをし一定の合意を得てからでなければ

「……ま、待つた！ ちょっと休み！」

真っ青になつた二人を眺め、ロツトバルトは微かに笑つた。少し言い過ぎたとでも思ったのかもしれない。

「まあ、単に問題点を指摘するだけで解決するものでもない。どんな場合に於いても折衝を成功させたいなら、ある程度の下調べと根回しは必要だとう事です。ただ、貴方に本当に問題を解決しようという意思があれば、無理な事ではないでしょう」

「……その気はある！」

下調べとかなんとか、そんなもん無理だけど、というのは飲み込んだ。

「それは良かつた。では、私はこれで」

そう言うとアナスタシアが口を開く前に一礼し、今度は呼び止めさせる隙もなく、ロツトバルトは元の広間へ歩き出した。ロツトバルトの姿が廊下から消えて、アナスタシアは肺に溜め込んでいた息を解放の喜びを込めて思う存分吐き出した。聞き慣れない理詰めの言葉の奔流に、血まで凍り付いてしまつた気がする。

「あれが王立の首席かよ……目眩した。叔母上があっち選ばなくて良かつたあ……。ブラフオードの方がまだマシ」

みんな相手と下手に結婚なんてしたら、一生あの理詰めの思考で物事を進めなくてはいけなくなつてしまふ。アナスタシアの最も苦手な相手だ。

ああして語っている間も表情一つ変えず、本心が全く見えない。普通あれだけの事を話そうとしたら、少しぐらい感情が籠るものではないだろうか。

「あいつ、楽しい事とか全然無さそうだよね」

「失礼ですよ」

さすがにアーシアにたしなめられて、アナスタシアは肩を竦めた。

「感謝はしてる」

口に出しては冗談めかしてみたが、アナスタシアの内心はこれから踏み出す世界の一端を鼻先に突き付けられたような、そんな気がしていた。それもほんの一端だ。公爵家の当主として、どれだけの事をしなくてはいけないのか、自分にこれから求められるであろうものは、今こうして想像している以上におそらく、重い。

（良くみんな平然としてるよ）

今のロットバルトにしろ、ブラフオードにしろ、ルシファーにしろ――母である、前公爵にしろ。

それともああやつて眉一つ動かさないでいなければ、やっていけないのかかもしれない。

（母様――）

母アムネリアはアナスタシアの前ではいつも微笑んでいて、そんな大変さは微塵もアナスタシアに見せなかつた。でも時折、アナスタシアとアーシアを連れてふらりと出奔しあちこち旅行したのは、彼女なりの、いわば調整だったのかもしれない、ふとそう思つた。

（私に、母様と同じ事ができるのかな）

自信など見当たらぬ。それでも、アナスタシアは今言われた事をもう一度真剣に考え直していた。

長老会と、どう対峙すべきなのか。

ロットバルトが教えてくれた事を全て実践するには時間が足りないし、今自分にできるとも思えない。

ただ、長老会を説得できる可能性は、少しだけ出てきた。
(じいいどもを脅す……)

脅すというのはロットバルトが判りやすく比喩してくれたもので、本当の考え方はもう少し違うだろう。

どこまでそれができるのか。

長老会がやつてくるのは明日だ。

「アナスタシア」

何だか懐かしい声に呼ばれてぱっと振り返ると、レオアリスが嬉しそうに瞳を輝かせて廊下を歩いてくるところだ。どうやらアナスタシア達はレオアリスがいた部屋を通り過ぎていたらしい。

「すげえな、ここ。一年だつて籠もつてられる」

「一年！ 一日だつてこんなとこいたら埃被つちやうよ」

「何言つてんだ、宝の山だぜ。これが無料解放なんて、王都つてすごい」

何度目か判らない、感動の光を浮かべた瞳で、レオアリスは出てきた部屋を振り返つた。それから、アナスタシアの表情に気付いて思わしげな色を浮かべる。

「――どうかしたのか？」

「え、何で？」

「いや、顔が強ばつてるから」

じわ、と心の奥から温かい感情が湧いてきて、アナスタシアは堪えるように唇を引き結んだ。

長老会との確執は問題で、憂鬱だ。

けれどこの事が無ければ、アナスタシアはレオアリスと出会つていなかつたのも確かだつた。

彼等に感謝してもいい位だと、アナスタシアはそんな事を思った。

「何でも……」

何でもない、と言おうとして思い直し、アナスタシアは一度口を閉ざした。口にするぐらい、いいかもしれない。レオアリスは多分そういう相手だ。

「……公爵家なんて、めんどくさい」

アーシアは心配そうな瞳を上げてアナスタシアの顔を見つめたが、何も言わなかつた。レオアリスも黙つて次の言葉を待つてゐる。

「でも——私も、自分で言つた事を証明してみようと思うんだ」

「言つた事？」

「私が、アスター口だつて事。皆の前で、誰にも疑われたり否定されたりし

ない位に、はつきり見せる」

アナスタシアとレオアリスは互いに瞳を見合せて、どちらともなく可笑し

そうに笑つた。

「できるよ」

もう一度、レオアリスはあの森で言つてくれた言葉をくれた。

それは温かく、アナスタシアの背中を押してくれる。

（明日ちゃんと、長老会に会おう）

逃げずに正面から話をしなくては、先に進めないのだから。

「お前も頑張れよ、御前」

「ああ」

頷いたレオアリスにアナスタシアが不満そうな顔を向ける。

「そんな適當な返事いやなくてさ、おーっ！ とか言えないの？」

アナスタシアは拳を振り上げて見せ、もう一方で上げた拳を指差した。

「……言わねえ」

「えーっ、気迫が足りないよ、気迫が。ほらっ、一緒にやろ」

「何を……？」

嫌そうな顔をするレオアリスに構わず、明るい廊下の真ん中でアナスタシ

アはまた元気良く腕を振り上げた。差し込む光に影が踊る。

「頑張るぞ、おーっ！ つて」

「——やだ」

ちよつと格好付けたい年頃の少年らしく、レオアリスはふいと眼を逸らし

た。
「何言つてんの。要は気迫でしょ！ ほら、一緒に」

レオアリスの腕を掴んでぐぐ、と上に持ち上げる。

「よせ、この馬鹿力！」

「いいからあ、ほら」

腕を下ろそうとするレオアリスと上げさせようとするアナスタシアの攻防を、アーシアはいつかの森を思い出しながら賢明に何も口を挟まず眺めている。

（あ、アナスタシア様勝つた）

攻防の決着が着いたようだ。アナスタシアは嫌がるレオアリスの腕を思い切り持ち上げた。

「いくぞ、セーのっ」

「やかましい！ ここをどこだと思つとるんじや！」

しわがれた怒鳴り声が廊下の向こうから響き、はつと瞳を向けた先から、小柄な老人が物凄い勢いで走つて来るのが見える。

「あっ、ヤバイ、ヌシだ！ 走れ！」

「主？」

レオアリスが聞き返す間にも、アナスタシアはもうくるりと背を向けて逃げ出している。

「ここに住み着いてる主だよ。スランザールっていう爺さん。捕まつたら書庫に閉じ込められるぞ！ 百冊本読むまで出してもらえないとか、徹夜で歴史やらうんちく聞かされるつて」

「——いいんじやねえ？ 僕ちよつと聞いてこようかな」

「ばあか！ お前ホントばか！ いいから走れ！ アーシアも！」

レオアリスとアーシアが視線を合わせる。一人とも心の中に浮かんだのは、おそらく同じ光景だ。

あのカトウシユの森と、暗い坑道。

「何か、走つてばっかりだな」

「ですね」

可笑しそうに笑い、それからアナスタシアを追つて明るい廊下を走り出した。

「ですから、アナスタシア様が今おっしゃられた論法では、少し難しいのではありませんか」

アスター公爵家長老会——アスター公爵家親族及び傘下の当主十名で構成される、意思決定機関だ。

こうした意思決定機関は主に、四大公爵家及び十ある侯爵家に存在し、巨 大な領土や財力、政治力を抱えるほど、複雑な対人関係や利害関係を生じながら、時に当主の意志すら凌ぐ力を有する事がある。長老会と上手く付き合 い、操作しながら家を治めるのが、貴族の総主の一一番の役割とも言える程だ。ベルゼビア公爵家やヴエルナー侯爵家など、総主の能力と権力が抜きん出 て強く長老会が下部組織的な役割のみに収まっている家もあるが、その例は 稀な方で、アスター公爵家は原則として重要決定事項は長老会との合議制 を取っていた。それはアスター公爵自身が、正規軍將軍として、政治より 軍事的役割に比重を置いているからである。

今回、アスター公爵家長老会が次期当主アナスタシアの婚姻に、ベルゼ ビア、ヴエルナーの両家を最有力候補に上げたのは、家そのものの有する政 治力の他に、もう一つ、長老会の力が言うなれば弱く、相手方長老会の干渉 が少ないと——アスター公爵家にとつて有利に運べると判断した背景があ る。

有力な家同士の婚姻は互いの力を強め、その影響力を広げる事に大いに価 値を發揮するが、ともすれば一方が吸收されかねない、危うい均衡の上に立 つものでもあった。

アスター公爵家長老会は、その危険性を考慮した上で、それでもアナス タシアの足場固めを望んでいるのだ。

そんな話をファーガソンに説明され、アナスタシアは絶望的に暗い気分になつた。

いつになく早起きもして、今日も天気はとてもいい。庭に面した窓からは 披けるように青い空が広がり、庭園の緑は青々と輝いている。

それなのに、アナスタシアの真上にだけ、黒雲が立ち込めているような気 がした。

ガソンに聞かせてみたところだ。結構いける、とそう思っていた。

「もちろん、ヴエルナー様の仰るとおり事前に根回しなど綿密な準備ができれば、私もそれをお勧めしたいところですが、……今日では」

ロットバルトの手法は予め手許に複数の切り札を用意し、状況に応じてそれを適切に開いていくというものだ。それは常に周囲の動向を把握している者にしか出来ない手法だと、ファーガソンは残念そうに首を振った。

アナスタシアの手許にある札は、たつた一枚。自分自身という最大の、そして実は最も弱い切り札でしかない。

「でも、今日負ける訳にはいかないんだ」

結婚なんとしたくはないし、ファーガソン達の立場を守りたい。それが理 由ではあるが、何よりも、長老会に負けたくはなかつた。

ここでアナスタシアが自らの意志を通せなければ、この先の長老会との関 係が決まってしまう。

大袈裟でもなんでもなく、アナスタシアにとつて一生を左右する日——そ れが、今日だった。

話の合間にアナスタシアの髪を結いながら、アーシアはその頬の線を見つ めた。いつになく緊張に張り詰めているのが判る。

「私自身が、長老会を説得できなくちゃいけないんだ」

アナスタシアは窓の外に広がる、気持ちの良い緑の庭園に瞳を向けた。館 の正面にある庭園から緩い曲線を描き、白い車道が芝の上に延びている。正 門に続く道だ。

もうあと一刻もすればあの道を辿り、長老会を構成する親族達が、馬車で やつてくる。

アナスタシアはぎゅっと細い指を握り締めた。

扉が叩かれたのは、半刻ほど経った頃だ。本邸の執事であるシュセールが

両開きの扉を丁重に押し開けて、アナスタシアの前に深々とお辞儀した。

「ソーラン侯爵がご到着なさいました。談話室へお通ししております」

長老会の筆頭を務める侯爵の到着を聞いて、アナスタシアは僅かに狼狽えて椅子から腰を浮かせた。

「もう……？」

早い。会議の定刻まで、まだ半刻近くある。

まだアナスタシアは長老会を説得する有効な手立てを思い付いていなかつたが、侯爵が到着した以上、主として挨拶に出なければいけない。

極力アナスタシアに準備をさせないという意図が、そこに見え隠れしていた。

(どうしよう——)

ロットバルトの言つた手法など、元々無理だ。アナスタシアの手札より、彼等の持つ手札の方が圧倒的に多いのは分かり切っている。総主という立場にありながら、日頃の用意を怠つていたアナスタシアの、負けだ。

対峙か、従うか。

もう二者択一しかない。

膝の上で、両手が白く握り締められる。

対峙か、従うか——

(——どっちも、ダメだ)

アナスタシアは深紅の瞳に熾き火を宿し、まるでそこに長老会がいるところでいうように、真っ直ぐに睨み付けた。

「シュセール」

立ち上がり、アナスタシアは案内の為に開かれた扉の内側に控えていたシュセールを呼んだ。シュセールがその場で頭を下げる。

「今日の会議はどこでやるの？」

「中央棟二階の議場をご用意してございます」

そこは定期的に長老会が議事を行う場だ。つまりは彼等の主戦場とも言え

る。アナスタシアは躊躇わざ、きつぱりと告げた。

「変える」

「変える——議場を、でござりますか」

アナスタシアの端的な言葉を驚きの中で正確に汲み取つたのは、この古参の執事の能力の高さを示している。シュセールは一呼吸ただけで、アナスタシアの瞳を静かに見つめた。

今からは無理だ、とも時間がかかる、とも言わなかつた。

「どちらにござりますか」

アナスタシアの意図を汲み取り、最大限に活かし、叶える。シュセールがそうした能力と意志を持つてゐる事に、主の後ろに立つファーガソンは深い喜びを感じた。

これからアナスタシアに仕え、アナスタシアを支えていく、その役割を彼女に譲り渡す事に、ファーガソンには異存は無い。

アナスタシアはじつと、シュセールの背後、開かれた扉から見える廊下の、窓の外の庭園に瞳を注いだ。

そこはこの白鳥宮が翼の中に抱く中庭だ。夏の草木が多く植えられ、初夏から盛夏には、そこで連日のように園遊会や夜会が開かれる。

「天気がいいから、館の中庭にして。飲み物と、簡単な食事を用意してくれる？」

「——承知致しました」

シュセールは深くお辞儀すると、すぐに他の女官を呼び指示を始めた。通りの指示が済んだのを見て、アナスタシアはシュセールの待つ扉へと歩いていく。

ファーガソンは思わずアナスタシアを呼び止めた。

「アナスタシア様、夏の庭園でござります」

ファーガソンの困惑を含んだ声に、アナスタシアは振り返り、にこりと微笑みを返した。先ほどまで彼女を覆つていた緊張は、陽射しを受けた氷のようになじみを消している。

「いつてくるね、アーシア、ファーガス」

心配しなくても大丈夫、と、そう告げるような穏やかな微笑みに、前アスター公爵の姿が重なる。

眼を見開く二人の前で、アナスタシアの後ろ姿は優美な扉に閉ざされた。

「今日は天気がいい、せつかく集まつていただいたのに室内で重苦しい話を
するだけなんて、もったいないでしょう」
「……それにしても、このような、まだ早熟な庭などを——我々を軽んじて
おられるのか」

「不満?」

アナスタシアの口調は、全く険を感じさせないので、当主達は戸惑つた
ように顔を見合させた。

アナスタシアは中庭への広い階段を降り、当主達の間を抜けて、緑の植え込みに歩みを進めた。まだ若い葉に触れながら、整えられた小路を緩やかに歩き、順番に一人一人の顔を見つめる。

「お前達はこの庭を、まだ早熟で人前に見せるものじゃないと言う

「当然です。この場にいる者が我々だからまだ許されますが、もし外に向

てこのようななさり方をすれば、アスター公爵家は笑い者になりますよう

ソーントン侯爵はアナスタシアを追つて白い階段を降り、対峙するようになど頭に浮かべたのがそれだった。次期総主アナスタシアは、この長老会を軽んじている。

第一に、このような場所でまともな話などできる訳がない。

アナスタシアがソーントン侯爵を伴い、ぴつたり定刻に中庭に面した硝子張りの扉から姿を見せた時、中庭は降注ぐ陽射しも熱を失つたように静まり返つていた。

ソーントン侯爵は一段高い扉の前からその場を見渡し、瞬時に事態を悟つて、苦虫を噛み潰したように顔をしかめた。声に厳しい響きを滲ませ、隣に立つアナスタシアに問い合わせる。

「うん。でも、私も同じだ」

当主達はアナスタシアが何を言い出したのかと、不可解そうな表情を浮かべた。庭園の隅に控えているアーシアやファーガソン達も、はらはらと心配そうな瞳でアナスタシアの姿を追つている。

「今日は私が突然言い出したせいで、ただでさえ庭師達は準備ができてない。
お前達に見せるのは辛いだろうね」

「——」

「この庭は、これから庭師達が丹精を込めて美しく整えて、人を迎える
よう育てていくの」

再び小路を戻り、アナスタシアは当主達の少し前で足を止めた。アナスタシアの纏う淡い色合いの服の裾を、風が揺らして過ぎる。

「私も、この庭と同じ。この庭以上に、まだ何の力も知識もない」
全てはまだ、これからなのだ。

白鳥宮が囲む庭園は、夏を見立ててしつらえられている。その為に、初夏にもまだ少し早いこの時期は、緑も鮮やかに輝き花の蕾が枝に膨らみかけているものの、賓客を迎える為の華やかさを少々欠いていた。

通常、園遊会などで賓客をもてなす際は、その館の最も華やかな場所を用意するか、そうでなければ手間をかけ、数日前から美しく整えるのが礼儀だ。

当然の事ながら、そうしたしきたりを重んじる長老会の当主達が、いきなり変更されたこの時期早い庭園を喜ぶ事はなかつた。

「何と礼儀を弃えない扱いだ」

庭園に案内されたアスター公爵家の中枢とも言える長老会の面々が、ま

ず頭に浮かべたのがそれだった。次期総主アナスタシアは、この長老会を軽んじている。

「うん。でも、私も同じだ」

当主達はアナスタシアが何を言い出したのかと、不可解そうな表情を浮かべた。庭園の隅に控えているアーシアやファーガソン達も、はらはらと心配そうな瞳でアナスタシアの姿を追つている。

「今日は私が突然言い出したせいで、ただでさえ庭師達は準備ができてない。
お前達に見せるのは辛いだろうね」

「——」

「この庭は、これから庭師達が丹精を込めて美しく整えて、人を迎える
よう育てていくの」

再び小路を戻り、アナスタシアは当主達の少し前で足を止めた。アナスタシアの纏う淡い色合いの服の裾を、風が揺らして過ぎる。

「私も、この庭と同じ。この庭以上に、まだ何の力も知識もない」
全てはまだ、これからなのだ。

アナスタシアは優雅と言えるほどの穏やかな笑みを頬に刷き、真っ直ぐソーントン侯爵を見つめた。その姿に、相手はまだほんの少女だと、そう思つていたソーントン侯爵は、たじろぎに似た感覚を覚えてアナスタシアを見つめ返した。

「私に力が足りないのは判つてゐる。でも、だからって変に他の家の力を借りるんじやなくて——」

アナスタシアは彼等を一人一人じつと見つめて、それから静かに頭を下げた。

選ぶのは、対峙でも、追従でもない。

「私は、お前達に力を貸してほしい。だつてずっと、この長老会がアスタートを支えてきたんだろ？」

選ぶのは、共に歩む事だ。

当主達はアナスタシアを見つめたまま、じつとその言葉を聞いている。

「まずはこの庭園を美しくするように、アスターの内部を整えるのが先だと思う」

風が緩やかに庭園を抜けていく。暫くは誰も何も言わず、衣擦れのような枝葉の揺れる音だけが、初夏を迎える前の庭園を満たしていた。

「——貴方がこの庭園で、我々は庭師という訳ですか」

ソーントン侯爵はゆっくり、一言一言を区切りながらそう呟くと、厳しい表情を崩さず、アナスタシアを見つめた。

何の合図もなく、ソーントン侯爵が膝を付き、深く頭を伏せる。他の当主

達も同じように、その場に膝を付いた。

「アスターの誇りは夏の盛りと同じ。我々はこの家を——貴方を盛り立て支える事に、何の異存もございません」

青い空と緑の庭園を背に立つアナスタシアの黒髪が、風に鮮やかに舞う。それはこれから確実に訪れる初夏の気配を纏つて、華やかに薫り立つようだつた。

「きっと、花は美しく咲くでしよう」

顔を上げ、新しい主を振り仰いだソーントン侯爵に、アナスタシアは輝くような笑顔を向けた。

五

御前試合の会場として今回用意されたのは、王都外周にある演習場の内、最大の規模を持つ、観覧者二万人を収容する南第一演習場だ。今回の出場資格が竜の宝玉と聞いて、観戦を希望する申請が引きも切らなかつた為で、会場整備には試合開始の前日から多くの人手を要した。

今日の試合にも、近衛師団第一大隊から第三大隊まで、王城の守護隊をしてほぼ全てがこの場の警備と整理に当たつてゐる。

「さすが、資格が竜の宝玉だけあって、今年は粒が揃つてゐるな」

クラライフは満員の観覧席から、今まさに剣戟の音の響く闘技場を見下ろした。といつても近衛師団将校である彼は、暢気に観戦を楽しんでいる訳ではない。

「昨日までの法術戦も素晴らしかつたわよ。あれが一人でも師団に入つてくれるといいんだけど、法術院がもう囮い込んでたから」

どうかしら、と余り期待は持つていなゝ声だ。緋色の豊かな髪を背の半ば辺りまで流した二十代前半の女——近衛師団第一大隊少将フレイザーはクラライフの隣に立ち、繰り広げられている試合にその翡翠色の視線を注いでいる。

御前試合は六日間に渡つて勝ち抜き形式で開催される。三日間を法術戦、残り三日間で剣や槍などの武具——いわゆる白兵による試合が行われた。今朝から、白兵部門の第一試合が始まつたところだ。

内外から試合を見ようと集まつた観覧者達で、試合会場は立錐の余地もない。

しかも通常は最後の一日だけ王の天覧があるのだが、今日は何故か、第一日目だというのに王が会場を訪れていた。

振り仰げば、観覧席の中央の高みに王の玉座が見える。

「誰を観に来てるんだろうな。そんな前評判いいヤツいたか？」

クラライフの言葉に、フレイザーも玉座を仰ぐ。

玉座には薄い日除け布が掛けられ周囲からの視線を遮つていたが、傍らには近衛師団総将アヴァロンが立ち、王が既にそこに座している事が伺えた。

フレイザーは判らないと答える代わりに、軍服に包んだ細い肩を竦めてみせる。近衛師団将校とは言え、少将位で王に直接まみえる事など滅多には無い。王の考えを遙酌しようとしても、全く無理がある。

「じゃあ、私は持ち場へ回るわ。のめり込んで一緒に騒ぎ過ぎないようにね」

艶然と笑つて、フレイザーは観覧席の間の通路を歩いていく。クライフはその後ろ姿に非常に好意の籠もった瞳を向けた上で、闘技場に視線を戻した。

「おー、早え！ 踏み込みがいいんだな」

今試合をしているのは共に東方出身者同士だが、若い女の方が優位に進めている。自分の身の丈に合った細身の剣を上手く使いこなして、対する男の大刀よりも立ち回りが素早かつた。

「フレイザーミてえ。格好いいー！ 男は無理にでかい獲物使い過ぎだ」

警備をするはずがつい観戦に夢中になつてしまふのが、クライフの悪い癖だ。昨日までの三日間も、クライフは目ぼしい出場者にしつかりしるしを付けていた。

といつてもそれはクライフばかりではない。少し目を向ければ、第二や第三大隊の将校や正規軍将校、地方都市の警備隊の紀章を胸元に着けた男達の姿まで見える。彼等は御前試合で目を付けた出場者を、自らの隊に加えるべく目を光らせているのだ。

試合後に優秀な出場者にどつと駆け寄り、口説き合いになる事も良くある光景だ。

試合は刀引きをした模擬刀などではなく、お互いが手に馴染んだ真剣で行われる。竜の宝玉を命懸けで手に入れてきても、試合で命を落とす危険性は少なからずあった。

但し、出場すれば必ず、いずれかの地位が約束される——それが人を命の危険を冒してまで御前試合に駆り立てる、最大の理由だった。

(あのガキがそろそろだなー)

クライフは手元の進行表にちらりと視線を落とした。丁度正午に行われる第四試合の欄に、レオアリスの名前が記載されている。そこには北方出身、とその程度の情報しかない。相手は地方都市の警備隊で長い経験を積んでい

る、マシュー・フォーゲルというそれなりに名のある男だ。

クライフは先日のレオアリスの姿を思い起こした。怒りのせいできつく張り詰めた顔をしていたが、まだ迫力を感じるというよりも、綺麗に整った顔立ちと年齢相応の線の細さが余計に、クライフにしてもまだ御前試合には早いのではないかと、そんな印象を与えていた。

ただ、あの宝玉と、魔気ながら正規軍から伝わってきたカトウシユ森林での黒竜との戦いは、クライフに期待を抱かせるには充分だった。

それから、あの中庭で、一瞬だけ彼の身を包んだ青白い光——見た瞬間に、寒気を感じた。

面白そうだ。

あの少年が一体何者なのか、カトウシユの森でどんな関わりがあつたのか。非常に興味があつた。

(さて、どうやって黒竜と戦ったのか——お手並み拝見と行こう)

レオアリスは時折大きくなる闘技場の歎声とどよめきを、与えられた狭い個室で聞いていた。それはあの北の故郷で聞いた、遠くで嵐に揺れる黒森の騒めきを思い出す。

心臓は緊張に高鳴り、止む事が無かつた。

先ほどまではアナスタシアとアーシアがいて、彼等と話す事で緊張が紛っていたのだが、レオアリスの試合を上から観ると言つて二人が戻つた後は、抑えるものもなく鼓動が踊り続いている。

少し前に偶然、試合を終えた出場者が血だらけの姿で運ばれてきたのを目にしてしまった事も、緊張に拍車を掛けていた。

(落ち着け)

もう逃げも隠れもできないのだと、自分に言い聞かせる。

自分の力を、試すしかない。

身体の裡で剣が己が存在と発現を訴えるように、別の鼓動を刻む。早く出せと急かすようだ。

(落ち着け——)

歎声が一際大きくなり——やがて扉が叩かれた。

ぎくりと立ち上がったレオアリスの前で、何の感慨もなく扉が無造作に開かれ、近衛師団兵が顔を覗かせる。

「次だ。準備はできてるな」

事務的にそう尋ねると、レオアリスに付いてくるように促して、近衛兵は細い廊下を先に立つて歩き出した。一瞬動くのを嫌がつた足を、無理矢理踏み出す。固い靴底がカツンと冷たい石を踏んだ。

ゆっくり歩くからか薄暗いせいか、さほど長くはない廊下は、どこまで行つても抜け出せないのではないかと思えてくる。

それとも、この廊下を出たくないという願望か。

だが、確実に廊下の先にある出口の光は近付き——レオアリスは薄闇と光の境界を抜けた。

途端に、場内の喧騒が全身を叩いた。

光に白く隠れた視界が次第に形を取り戻し、レオアリスの瞳に場内の様子がはつきりと映り込む。

広い闘技場を観覧席がぐるりとすり鉢状に取り囲み、そこにひしめく大勢の人々。注がれる数千、数万の眼。意識。

歎声、喧騒——、突風にうねる森の樹々ような、音の洪水だ。

「——つ」

すごい、という言葉は、レオアリスが自覚しない内に、一際大きくなつた歎声に搖き消された。

息を飲んで立ち尽くしているレオアリスの背中を、案内の近衛兵の声が押した。

「挑戦者両名、中央へ！」

(両名——)

はつと目を上げて前方を見れば、反対側の入り口から、男が一人進み出る

ところだつた。レオアリスの対戦相手だ。

「中央へ進め」

動かないレオアリスに、少し苛立つた声がかかる。

「——」

ぐい、と唇を引き結び、両手を握り締め、漸く、レオアリスは闘技場を中央に向かつて歩き出した。

鼓動は弾けそうに早く、周囲はひとりでにぐるぐると回つてゐるようだ。喉がからからに乾いてゐる。

「おい、あれ——」

「嘘だろ」

現れた若い——若すぎる挑戦者の姿に、場内は騒々と揺れた。

闘技場の中央に向かう姿は、誰がどう見てもまだ十代も半ばだ。がつちりと鍛え上げた体格の対戦相手、フォーゲルに対しても頭一つ分もの身長差と体格差があり、余りに頼りなく見えた。

あんな子供の出場を認めたのかと、登録を取り仕切つてゐた第一大隊の判断を証しむ声も多い。

クラライフは観覧席の批判をひと睨みしてから、首を巡らせて闘技場の中央に立つ少年の姿を眺めた。

「こうして見るとまじいなあ。ガキが大怪我でもしたら俺にも責任あるか……？」

試合が危険な方向に向かつた場合、いつでも止められる用意をしておいた方がいいかもしれない。

クラライフが観覧席の段を降りようとした時、更に場内が騒めいた。

クラライフが居る側とは反対の一角が騒ぎ出した為に、最初は何を騒いでいるのか判らなかつた。次第に観戦者達の言葉が波のように広がつてくる。

「武器は」

ぎよつとしてクラライフは観覧席の一番下まで駆け降り、欄に手を付いて身を乗り出した。誰かが指を指して叫ぶ。

「あのガキ、武器を持ってないぞ——！」

目を凝らしたクライフにも、確かにそれが見て取れた。今、闘技場の中央——王の玉座の正面に立ったレオアリスは武器を全く持たず、鎧すら身に付けていない。

「おいおい……」

思わず口元に引き攣った笑みを浮かべ、クライフは上官のグラントレイを探して観覧席内を見回した。グラントレイは玉座の近くに立っている。

今度はそのグラントレイへと階段を駆け上がるとしたクライフの背後で、審判の声が流れた。

「王の御前である、礼を」

中央で足を止めた二人の前に、審判役の近衛兵が立ち、高みにある玉座を示す。レオアリスは太陽の眩しさに瞳を細めながら、玉座を見上げた。

「——王……」

うねる騒めきと煩いほどの鼓動の中に、王という言葉は、それらを圧してレオアリスの耳に響いた。

周囲の音が消える。

それまでの激しい鼓動も、消えた。

見上げた視線の先、薄い布に覆われた玉座に、王がいる。

どくん。

心臓が——剣が脈打つた。

促されるままに、その場に膝をつく。顔を伏せていても、王の存在がはっきりと感じられた。

鳩尾が熱を増す。ゆっくり、全身に温かい血が巡るようだ。

剣が、慶びを得て、脈打つ。

レオアリス自身にさえ理由の知れない、震えるような畏敬と歓喜が、静かに、止め処なく、身体の裡から湧き上がってくる。

審判の声がかかり、挑戦者二人が立ち上がる。歓声と困惑の声が、場内に渦を巻いている。

「まずいって……、いくら何でも無茶だ！」

クラiftonは階段を駆け上がった。

だが、見上げたグラントレイの、その後方で、王は頷いたようだつた。アヴァロンが片手を上げる。

「マジかよ」

口を開けたクライフの周囲で、どう、と歎声がうねり、試合が始まつた事を告げた。クライフは片足を階段にかけたまま、どちらへ向かうべきかと迷つて視線を彷徨わせた。

(無理だ、止まらねエ)

フォーゲルが距離を置き、腰の剣を引き抜いた。レオアリスは立つたまま、フォーゲルに真っ直ぐ向き合つてゐる。一人の距離は一間——、たつた一步踏み込めば、おそらくフォーゲルの剣の間合いだ。

クライフは玉座を振り返つたが、日除け布の奥の様子は伺えなかつた。通り場無く辺りを見回したクライフの瞳が、玉座の近くに、見覚えのある少女の姿を捉えた。アナスタシアだ。

驚いたのは、この状況に真っ青になつていてもおかしくないはずのアナ斯塔シアが、傍らに座る少年とまるでただの観劇にでも來てゐるかのように、嬉しそうに笑つてゐる事だ。レオアリスを心配する様子は全く見えない。

「——何なんだ……？」

クライフは立ち尽くし、最早王が止めるまで終わらないだろう戦いを、茫然と見下ろした。

簡単に決着がつくと、誰もがそう思つていた戦いは、次第に観覧席の声を奪つていた。

フォーゲルの剣撃は鋭い。あれを間近で避けるのはクライフから見ても少し苦労しそうだと、そう思える。

だが、フォーゲルの剣先は一向にレオアリスを捉えなかつた。

「しつかりしろ！ 武器も持つてない相手だぞ！」

初めは武器を持たない少年への驚きに満ちていた観覧席も、次第に呆れや苛立ちすら含んだ声に変わつてゐた。

「相手がガキだからって遠慮するなよ！」

「手を抜くな！」

「武器も忘れるような相手で、気が抜けちまつたのか？」

「お前の名は飾りかよ！」

呆れた観客達の遠慮のない野次が、闘技場のフォーゲルの耳にも届く。

フォーゲルは苛立つて観覧席を素早く睨んだ。

「勝手な事言いやがつて……」

手を抜いてなどいない。相手が少年であろうと武器を持たなかろうと、それを選んだのはこの少年自身だ。フォーゲルが遠慮する理由は無い。

御前試合はただ勝てばいいものではなく、自分の持っている力をこの場で示す事が重要なのだ。

ただ、当たらない。

(ちくしょう……どうなつてんだ)

どれほど機会を狙つて剣を振るつても、まるで影を斬ろうとしているように、剣はレオアリスの身体を掠めもしなかつた。

「おい、あれ……」

「——まさか

長剣が纏う光に煽られるように、レオアリスの足元の砂が吹き上がる。その姿はまるで、彼自身が研ぎ澄まされた一振りの剣のように、見る者を捉えた。

剣を右手に提げてレオアリスが一步踏み出し、場内を覆っていた呪縛が消えた。

「劍士——」

驚愕がさざ波のように広がり、再び騒然と沸き上がる。

目の前に現れた剣、それはまさしく、そこに剣士が存在する証明だ。

戦闘種と呼ばれる種の中でも、最も高い戦闘能力を持つ、稀な種族。多くの者が、初めて目の当たりにする剣士とその剣に、驚きと、恐怖に、身を震わせた。

だが、剣士の剣は通常、左右のどちらかの腕に宿る、はずだ。これまで、剣士とはそういうものだと考えられていたはずだ。

(見てろ——証明してやる)

戦いの最中に一体何をしようとしているのか、観戦者達が身を乗り出して覗き込んだ時——レオアリスの右手の辺りから、青白い光が零れた。

「——何だ……」

光に圧され、場内がしんと静まり返る。青白い光は彼等の顔を薄く染め、

高みにある玉座の日除け布にも差し掛かった。

飲まれたような静寂の中、ずぶり、とレオアリスの右手が沈んだ。

その手が、何かを掴んでゆっくりと引き抜かれる。

細い青白い光が現れるごとに大気が震え、見えない圧迫感が観覧席を叩く。

声もなく凍り付く観戦者達の目前で——

それは、姿を現わした。

青白い光を纏う、一振りの長剣——。

レオアリスの身体を、剣と同じ光が薄く取り巻いている。

場内を支配したのは、恐怖にも似た感覚だ。

「これは」

アヴアロンは傍らの玉座に視線を向けた。薄い布の向こうで、王の横顔が見える。黄金の瞳は面白そうな光を湛えて、眼下のレオアリスに注がれている。その視線の先で。

更に、レオアリスの腕が上がる。

左腕——。

鳩尾にびたりと当てられ、光が零れる。

観戦者達がそれの意味するものに、ぎくりと息を飲んだ。

「おい、まさか」

クライフは欄を掴んだまま掠れた声で呻いた。

「有り得ねえ……」

既に現われている右の剣が共鳴するように、強い光を纏う。

左手がゆっくり引き上げられ、光が剣の形を成していく。

二本目——。

右手の剣を鏡に映したような、左の剣。

突風の如く、剣氣ともいうべき鋭い風と光が場内に吹き荒れ、観戦者達はまるで剣そのものを突き付けられたかのよう、咄嗟に身体を庇い眼を覆つた。

右手の剣を地面に押さえ込むように下ろしたまま、レオアリスは肩で呼吸を繰り返していた。
(駄目だ)

二本目の剣は、抜き出しただけで意識を持つていかれそうになった。慌て戻し——戻せたのが不思議な位だ。

そうしている間にも右手を伝わる剣の力に、レオアリスは眉を寄せた。重い。そのくせ、力を込めて握り込んでいなければ勝手に跳ね上がりそうだ。

「何だあ」

レオアリスは右手に一振り残った剣を上げたまま、じっと俯いて動かない。

「……止めたのか」

左の剣が姿を消した事に、クライフはほっと息を吐いた。観覧席の上にも同様に安堵の色が漂っている。

二本目——あれをこの場で使われたら、それだけで御前試合という域を超えてしまう。

黒竜が正規軍によつて倒されたと聞いた時は、クライフは強い興味を引かれた反面、眉唾物だという思いもあつた。だが、今の彼の姿を目の当たりにすれば、何の疑いもなく頷ける。

炎帝公と、剣士。

よくそんな時に、その顔触れが揃つたと感心するほど、稀な取り合わせだ。

「——正規は、運が良かつたな」

そう呟いてから、運がいいのは自分達も同じかと、クライフが口元を歪める。もしその二人の存在がなければ、今頃クライフ達はこうして御前試合を見つめている余裕などなく、黒竜との戦乱の中にいたかもしれない。

見上げれば王の玉座が、吹き抜ける風に日除け布を揺らしている。王は彼を観に来たのだと、すっかり納得しながら、クライフは再び闘技場の剣士に視線を戻した。

フォーゲルは驚愕と恐怖と叩きつけられる圧力に、どこか困惑した様子すら見せて後退つた。だが実は、戸惑っていたのはレオアリス自身もある。

間合いがどれほどのか、剣を振り抜いた時その力がどれほどの範囲に亘るのか。レオアリスはまだ、自分の剣を全くと言つていいほど知らない。どう扱つていいのかが、こうして剣を手にしている今も、さっぱり判らなかつた。

躊躇つているレオアリスを見て取り、上から眺めていたアナスタシアが、立ち上がりつていきなり大声を張り上げた。

「レオアリス！ 遠慮すんな、思いつきりふとばしちやえ！」

周りはぎよと振り返つたが、一番慌てたのは傍らにいたアーシアだ。

「ア、アナスタシア様っ」

アナスタシアの腕を抑えて引つ張る。あれは黒竜を裂いた剣だ。レオアリ

スが何の加減もなく剣を振り抜けば、観覧席まで巻き込まれ兼ねない。

「いいじやん、迷つてるよりそれが一番いいんだ」

「良くありません、相手は黒竜とは違うんですから——レオアリスさん下手したら王都にいられなくなっちゃいますよ」

アーシアもクライフと同じ心配を、レオアリスの剣を既に見ている分、それより強い懸念を抱いていた。闇雲に振り回し観覧席に被害を及ぼせば、御前試合どころでは無くなる。

観覧席には大勢の人々と——王がいるのだ。

アナスタシアは周囲を見回して、彼等の恨めしそうな顔に細い眉をしかめた。

「んもう、めんどくさいなあ」

ただ、この場の誰一人として、レオアリスが剣士である事を疑う者はいない。誰もが、初めて見る、若い二刀の剣士に、呼吸を奪われるよう見入っている。

それで我慢する事にして、アナスタシアは再び闘技場を見下ろした。

「——じゃあ、お前、降参しろーつ！」

今度は対戦相手に向かつて叫ぶ。

アナスタシアの声は場内の騒めきを飛び越え、しつかりレオアリスの元まで届いた。

「あの女、ああいう性格かよ……」

こつちは必死で剣を抑えているのに、苦笑が洩れる。ただ、このまま睨み合いをしていても仕方がないのだ。

結局レオアリスは、目の前の対戦相手より先に、剣を抑えなければこの試合に勝つ事すらできないのだ。

アナスタシアは観覧席で、他に負けない程の声を張り上げている。

「少しはらしくしろってんだ」

あれが半月後には公爵かと、もう一度苦笑を零したが、結局あれが一番アナスタシアらしいのだ。いつでも、何の飾りも無い。

（——このままじや、また笑われちまう）

そうさせるのは嫌だつた。レオアリスは再び、ぐつと剣の柄を握り締めた。

アナスタシアの怒鳴り声は当然フォーゲルにも届いていた。

目の前の少年が剣士だという驚きと、その存在から叩きつけられる鋭い刃のよう圧力はフォーゲルの身体を氷のような手で縛り付けていたが、アナ

スタシアの言葉は逆にフォーゲルを我に返らせた。

フォーゲルは剣を手元に引き寄せ、まだ驚愕と恐怖の張り付いた視線をレオアリスに向けた。

レオアリスはフォーゲルの動きに気付いて身構えたものの、動く気配はない。

「何で動かねえ。舐めてんのか？」

フォーゲルなど、剣士から見ればいつでも倒せる相手のはずだ。それに高を括つているのか、それとも、何かを狙つているのか——

フォーゲルの額を、冷たい汗が伝う。こうして対峙しているだけで喉元に刃を突きつけられているかのように、払い難い恐怖を感じていた。

だが、動きを止めたままのレオアリスを注意深く觀察していたフォーゲルは、ふと眉を上げた。レオアリスはフォーゲルを侮つて動かないのでは無いように思えたのだ。

（もしかして、動けないんじやないか……？）

理由は知らないが、手にした剣を持て余しているように見える。

「——」

剣士と聞けば、誰でも一の足を踏むだろう。剣士一人いれば、百の兵を抑えるとさえ言われる。

できれば——いや、一生向き合いたくない相手だ。名も無い少年だと思つていた相手が、蓋を開ければ剣士だったなど、フォーゲルは自分の運の悪さを呪つた。

ただフォーゲルにも、これまでの経験と竜の宝玉を手に入れてきたという自負がある。

フォーゲルの手が、馴染んだ剣の柄を握り込む。手のひらに汗が滲んでいるのが判つた。

身体を捉える恐怖を断ち切るように声を上げ、フォーゲルは地面を蹴つて走つた。場内がどよめく。レオアリスは身構えたが、その場を動かない。

(行ける！)

間合いを詰め、フォーゲルは剣を横薙ぎに振り抜いた。レオアリスの喉元を目掛けてフォーゲルの切つ先が奔る。

(つ)

レオアリスは膝を沈め、剣を両手で掴んだ。長剣が重そうに動き、迎え撃つ。

刃が打ち合つた瞬間、フォーゲルの剣は呆氣なく碎けた。衝撃を受けて、フォーゲルが弾き飛ばされ、地面に叩きつけられる。

どよめきが上がつた。

レオアリスの剣が奔つたあとの地面に、くつきり一直線に亀裂が生じている。

フォーゲルは呻きながら起き上がり、完全に碎けた剣と感覚を失つている右腕、それから地面に走つた亀裂を見つめた。

(——つはあ

レオアリスは振り抜いた剣を引き摺るようにして戻し、喉を反らして身体全体で荒い呼吸を繰り返した。

「きつ……つい

制御に、ただ一振りするだけの事に、いちいち全身の力を振り絞つている。相手がもう試合放棄してくれないかと、そんな事まで頭に浮かぶ。(——だから、そんなんじや駄目だ！)

きつく眼を閉じ、レオアリスは自分を叱咤した。

それでは意味が無い。

剣の力を抑え、制御した上で、欲を言えば周囲に被害を出さずに——勝つ。それでなければ意味が無い。

閉じた瞳を開ける。抜けるように青い空が映る。

どよめきはいつの間にか、歎声に変わつてゐる。この剣士の力を見たいと、場内は総立ちになつていた。

(倒せ！)

「遠慮するな、力を見せる場だ！」

(そんな事言われてもなあつ)

あと一振りでもしたら、自分の制御を振り切りそうなのだ。

剣はせかすように明滅している。何で自分を使えないのかと非難するようだ。

(くそ、こいつ本当に俺の剣か？)

何だかいい加減、レオアリスは腹が立つてきた。大体黒竜と対峙したあの時、一旦は自分の手に収まつたと思つたのに、これから毎回こんな消耗する思いをしなければならないのだろうか。周囲にも気を遣つて、重い剣が勝手に切り裂こうとするのを抑えながら――

いつその事、思い切り、何も考えずに振り切りたいと、そう思った時だ。「気にする事は無い。振れ」

ふいに静かな、だが朗々とした声が場内を打つた。

場内の視線が騒々と揺れながら声の主を探し——玉座の上で止まつた。

王が立ち上がり、玉座の前にその姿を現わしている。

王はゆつたりとした暗紅色の長衣を重ね合わせた長身に、ただそこに立つだけで辺りを圧する威厳を纏つていた。

レオアリスもまた、立ち尽くして玉座を見上げる。初めて目にする王の姿に、全身を包むような懐かしさを覚えた。

鼓動が鳴り、剣が鳴る。

その瞳は黄金の光を帯びていると、見えないままに何故だかそう思った。王の冷厳とした面に、微かな笑みが浮かぶ。

「力を示せ」

観覧席と闘技場の間に、突如として黄金の光の壁が立ち上がる。

観戦者達の驚愕の表情だけを残し、周囲の音が消えた。

見回せば、対戦相手であるフォーゲルの姿さえなく、その場にいるのは剣と、レオアリスだけだ。

剣が振動する。

お前に自分を抑えられるのかと、そう問い合わせている。レオアリスの制御などいらないと言わんばかりだ。

(この――)

剣が必要としなくても、レオアリスにはこの剣がいる。

ここまで来た、その望みの為に。

黄金の瞳に。

「いい加減――」

ぐいと剣を睨み付け、一旦肩に担ぎ上げるように重い剣を振り被り――

「おとなしくしろ！」

レオアリスは一息に剣を振り抜いた。

剣から光がほとばしり、地面を碎きながら走る。それは深い亀裂を刻み、闘技場を二つに裂いて、黄金の壁に撃ち当たった。壁は一度微かに光を増しただけで、激しい剣風を苦もなく受け止める。

瞬きすら忘れてその光景に見入る観戦者達の前で、黄金の壁に堰止められた剣光は渦巻いて霧散し、消えた。

呼吸の音さえ憚る静寂がその場を支配する。アナスタシアでさえ、息を潜めてじつと闘技場の一点を、レオアリスの姿を見つめていた。

レオアリスはゆっくりと、肺の奥から息を吐き出した。

気が付けば手内の剣から、先ほどまでの重さは失せ、激しい明滅も収まっている。

「――見事だ、剣士」

はつとして振り仰ぎ、レオアリスは玉座を見上げた。既に王は玉座に戻り、薄い幕がその姿を覆い隠している。

顔など見えるはずもない距離で、レオアリスは王がその黄金の瞳を自分に向け、笑みを浮かべているような気がした。

どくん、と再び手内の剣が鳴る。ただ、そこから感じられるのはもはや、レオアリスの制御を振り切ろうという意志ではなく――

喜びだ。

レオアリスの制御を受け入れる事と、もう一つ、目の前の存在への、深い喜び。

この瞳の前に立つ為に自分はある厳しい道を辿つて来たのだと、理由すら思いつかないままに、ただ心からそう思った。

傍らのアヴァロンが、代わって闘技場を見下ろす。

「この勝負は決した。双方、剣を收めよ」

レオアリスの手から剣が搔き消える。一度、身体の裡で剣の鼓動が鳴つた。

レオアリスがその場に膝を付き、静かに玉座へと礼を捧げる様子を、観戦者達が息を飲んだまま見つめている。

促され、彼がその場に立ち上がりその若い顔を上げる。

束の間の静寂の後、一際大きな歓声が広い演習場の建物を震わせた。

月は変わり、緑耀の月と称される初夏。御前試合の興奮も冷めやらぬ王都が、もう一つの祭典を迎える。

四大公爵家の一つ、アスター公爵家の継承式だ。

半年前に前アスター公爵が身罷り、その喪の明けを待つて、一女アナスタシアが新たな公爵として爵位を引き継ぐ事になる。王都の住民達は、傾国とまで謳われた前公爵に勝るとも劣らないと、……噂される、新たな若い公爵の誕生を心待ちにしていた。

街では知り合いの顔を見つければ、急いでいようが構わず立ち止まり、今度の正規軍将軍と、そしてこれもまだ話題に新しい御前試合の結果に、熱心なお喋りが繰り広げられていた。

新公爵も、御前試合の優勝者も——とにかく、どちらも若い。

それが驚きとともに、これから未来に爽やかな香氣ともいえる期待を抱かせるに充分だったのだ。

それはこの五月の若葉を薰らせて吹き抜ける風のよう、心地よい期待だつた。

そして、王都全体が沸き返る、アスター公爵家継承式当日。

爵位継承式典は王城の礼展の間で行われる。諸侯の居並ぶ中、王の前で宣誓し、王から爵位を授かる。その後、王城の正面の露台から集まつた人々に顔見せを行い、馬車で沿道に並ぶ群衆の間を抜けて、アスター公爵家へと戻る。

全てが終わるまでおよそ一刻半、さほど長くはない。

既に王城正面の庭園には正規軍が整列し、その後ろは正門の外まで、新しい公爵を一目見ようという人々で早くから埋め尽くされていた。

「母様と同じくらいつて——そんな訳ないじゃん！」

アナスタシアはこれからまさに継承式が行われようとしている、王城の控

えの間で、きりきりと歯噛みして呻いた。張り詰めた顔は今にも泣き出しそうだ。

住民達の最大の関心事が、アナスタシアの「美しさ」がどれほどか、に向かっている事に、アナスタシアはかなりの重圧を感じていた。

「笑われちやうよーっ」

長椅子の肘置きに凭れてうつ伏せ、細い肩を震わせている。

「そんな事ありません！」

室内にいたアーシア、ファーガソン、数人の女官達が一齊に口を揃えてきっぱり首を振った。その面は使命感に燃えている。

「本当に、今日のアナスタシア様はお美しいです！」

「そうですとも。お母君がご覧になつたら、さぞお喜びになる事でしょう」

「……本当？」

全員が力強く頷いた。アナスタシアは首だけ持ち上げて子犬のような瞳で彼等を見回し——再びわっと突つ伏した。

「見かけばつかって言われちやうーっ！」

「終わりが無い。」

「アナスタシア様……」

アーシアはどうしたものかとアナスタシアの傍らに膝をつき、その背中を撫ぜた。

とにかくアナスタシアは、二、三日前から情緒不安定なのだ。これから公爵家を継ぐ事に非常な意気込みと決意をみせたかと思えば、街の噂一つに急に萎れたように落ち込んだ。

館の者が手替え品替えして宥めるのだが、なかなか落ち着いてくれない。とうとう昨夜など、あのソーントン侯爵までが、アナスタシアに優しく、非常に辛抱強く、励ましの言葉を掛けて行つたほどだ。

「継がない！ やっぱ無理だもんー！」

この言葉もこの三日間で何度も知れない。しかしもう、継承式はすぐに始まろうとしている。

あと半刻——王城付きの女官がアナスタシアを迎えてから、王城の五階

にある礼展の間へ赴き、式典が執り行われる。

今こんなに心を乱していくは、王の面前で——居並ぶ諸侯の前で、儀礼の手順を間違えてしまうかもしねえ。

式典では他の三公、十の侯爵家当主に、九十九家の貴族当主や軍関係者達——彼等が新しい公爵に、言わば植踏みの視線を向けてくる。失敗はあってはならない事だ。

アナスタシアを落ち着かせようとして、付き従うアーシア達も次第に気持ちが急いてきてしまった。

「アナスタシア様、大丈夫です。皆貴方を支えていますから」

「だつて、皆一緒に入れないんじょ？」

「それは——でも、礼展の間に一階部分が回廊になつてゐるでしょ？そこからなら我々もお姿を拝見する事はできます」「でも……」

「ゾーントン侯爵がお手引きをしてくださいますし」

「うーー」

ちょうどそこでファーガソンが壁の時計を素早く盗み見たのを、アナスタシアは見逃さなかつた。

「もう時間！ やだあ！」

「いえ、」

ふいに扉が叩かれ、アナスタシアは飛び上がり、椅子の上で身体を強ばらせた。

ドキドキドキと、心臓が細かく早い鼓動を刻み出す。

両開きの扉の片側が開かれ、次の間に控えていた女官が顔を見せた。だがそれは王城の担当官ではなくアスター家から付き従つてきた女官で、少し戸惑いがちにお辞儀した。

「アナスタシア様、ご面会です。次の間にお待ちいただいておりますが」

こんな時に一体誰が訪ねてくるのだろうと、アナスタシアは不思議そうに瞳を瞬かせた。

「面会？ 誰？」

「通つていただきなさい」

安堵の響きすら交えてファーガソンが額を返し、アナスタシアはきよとんと老執事の顔を見上げた。ファーガソンが主に穏やかな笑みを向ける。

「私がお呼びました。少しの間でもお話なされば、お気持ちが楽になるでしょう」

ファーガソンが説明する間にも再び扉が開き、アナスタシアは開かれた扉の向こうに良く知つた姿を見つけた。

「レオアリス！」

予想もしていなかつた嬉しい驚きに、アナスタシアの顔がぱあッと輝く。

御前試合が終わつてすぐ、レオアリスは近衛師団に入隊が決まつた。ゆつくり言葉を交わす時間もないまま、レオアリスは慌しく近衛師団の宿舎に入つてしまい、その事も近衛師団に入った事もアナスタシアにはだいぶ不満だつたのだが、アナスタシアはアナスタシアで繼承式の準備に追われ、会いに行く余裕も無かつた。

だから、ほほ十日振りの再会だ。たつた十日の空白でしかないので、随分久しぶりに思えた。

レオアリスは黒地に銀糸の刺繡を施した、襟の詰まつた軍服を身に纏つてゐる。近衛師団の軍服だ。踝の半ばまである長い上衣と黒で統一された軍服は、細身の身体を引き立て、最後に見た時よりもずっと大人びて見えた。

扉の前で足を止め、レオアリスは驚いたように瞳を見開いた。

「……何か、久しぶりだな」

レオアリスはどこなく瞳を逸らしアナスタシアを真っ直ぐ見ようとしている。近衛師団の軍服だ。踝の半ばまである長い上衣と黒で統一された軍服は、細身の身体を引き立て、最後に見た時よりもずっと大人びて見えた。

扉の前で足を止め、レオアリスは驚いたように瞳を見開いた。

「おい」

「カッコいいー！」

「ちょ……はあ？」

何故再会の挨拶がそれなのかとレオアリスは呆れた顔を見せたが、アナスタシアは構わずレオアリスの両手を掴んでぶんぶんと振つた。

「それ似合う！ すつごい似合う！」

久しぶりに会う嬉しさと、レオアリスが近衛師団の制服を纏っているという――本当に優勝して、近衛師団に入つて、だから彼はこれからずっと王都にいるのだというその喜びで、アナスタシアは今までの緊張もすっかりどこかに放り出してしまつたようだ。

「優勝おめでとう！ 私が言つたとおりだろ？」

アナスタシアにしてみれば、漸く面と向かつて告げる事ができた言葉だ。

だが、レオアリスは決まり悪そうに短い黒髪をくしやくしやと交ぜた。

「優勝つて言うか……あの後試合してないし」

あの第一試合を見て、他の出場者達は皆、レオアリスと当たるのを嫌がつて棄権してしまつたのだ。本当はあと三試合するところだったのを、全く剣を合わせる事なく、優勝が決まつてしまつた。

だからレオアリスには、優勝したという実感がない。

「あつたり前でしょ？」

別におかしくも何ともない当然の結果だと笑つて、それからアナスタシアは手を放し、二、三歩後ろに下がつてレオアリスをじつと見つめた。白い頬に抑えきれない笑みが浮かぶ。

「やつぱり、黒が似合うな。仕方ない、師団でもいいや」

「仕方ないってなあ。――お前こそ」

アナスタシアの正装を改めて眺めて、レオアリスは続く言葉を口の中にしまい込んだ。

「そうそう、これ継承式の衣装。どお？」

アナスタシアはレオアリスの前で、得意そうにくるくると回つて裾を広げて見せた。先ほどまで鉛のようにずつしりと感じていた衣装が、今はまるで羽毛のようにならぬ身内バカと言われようが何だらうが、アーシアは嬉しくてつ

そもそもこの衣裳は継承式の為にあつらえられた、とつておきだ。これはど華やかな衣裳は、これまでアナスタシアも身に付けた事はない。

深紅に染めた絹を幾重にも織り込み、裾を薔薇の花弁のように膨らませている。手触りもやはり薔薇の花弁のそれで、銀糸で細く繊細に編まれた肩掛け

けが、大きめに取られた襟割りから覗く肩を覆つていて。

王都社交界の最先端の型で華やかさがあり、かつ深紅の光沢が公爵という地位に相応しい落ち着きも添えていた。

と、言つてもレオアリスには残念ながら、その良し悪しなど判らない。

「どうつて」

「似合う？ 似合う？」

「あ……」

レオアリスが口元を手で覆つたまま、瞳を泳がせる。アナスタシアが期待外れの反応に、眉をしかめて睨み付けた。

「あーつて何それ」

「いや、まあ――それなりに似合うんじやねえ？」

「それなりにって何だ！ この姿見て、他に言う事ないの？」

「他について――動きにくそうだな」

「はああ？」

離れた所から二人のやり取りを見守つていたアーシアは、頬に可笑しそうな色を浮かべた。端から見ると一目瞭然だが、レオアリスの歯切れが悪いのは、照れているからだ。

それも当然と誇らしく頷きたくなるほど、今日のアナスタシアは美しく装つている。髪も結い上げ、薄く化粧を施し――ちよつと涙で崩れているが、華やかな正装はただでさえ綺麗なアナスタシアを、より一層引き立てていた。(今日のアナスタシア様は、絶対国中で一番、お綺麗だし！)

親バカならぬ身内バカと言われようが何だらうが、アーシアは嬉しくていい緩む口元を抑えた。それに、アナスタシアはすっかり元気になつたようだ。一時はどうなる事かと思つたが、レオアリスが来てくれて良かつたと、ほつと胸を撫で下ろした。

今日の継承式は正規軍が警備を取り仕切る。だから近衛師団は王城の警護を除いて通常訓練が行われているはずだ。軍服姿という事は、この為にわざわざ近衛師団の訓練を抜けてきたのだろう。

幾らアスターク公爵家からの要請があつたとは言え、入隊したばかりでも

あり、あまり体面のいいものではないに違いない。

申し訳ないと思う半面、レオアリスの軍服姿はアナスタシアの隣に立つと、とても良く似合っていた。

「お似合いですね」

アーリアがファーガソンに頷きかけると、ファーガソンは眉をしかめ、一呼吸も置かずきっぱり首を振った。

「まだ早い」

その顔がまるで娘の連れてきた相手を拒絶する父親のようで、ついこの間までは結婚話まで出ていたのにと、アーリアはどうとう吹き出した。

「何？ どうしたの？」

きよとんとアーリアを振り返ったアナスタシアへ、アーリアは柔らかい微笑みを返した。

「いいえ。——とにかく、お掛けになつてください。立ち話はダメですよ」

座つて話せると聞いて、アナスタシアはまだ時間があるのだと嬉しそうな顔をする。二人の分の椅子を引いてやり、二人が腰を落ち着けたのを確認してから、アーリアはお茶を取り替えようと壁の飾り棚に向かった。

「そういえばレオアリス、第一大隊に入つたんだって？ あのツンツン頭のヤツがいる所だ。同じ隊？」

「違う。俺は最初左軍の小隊に入つたから——クライフ少将は中軍なんだ」

「へえ。ん？ ……最初つて？」

「今は直属の上官がグラントレイ中将になつた。イマイチ立場がよく判らないんだけど、中隊配属……なのかな。今は兵法とか、場所貰つてこいつを使ひこなす訓練してる」

レオアリスは親指で鳩尾を示した。剣を使いこなせるようになる事、それがグラントレイから与えられた当面のレオアリスの「職務」だ。

実は初め、レオアリスは小隊の訓練に上手く馴染めなかつたのだ。とにかく支給された剣はすぐ折つてしまふ。上官である少将フレイザーは、それを剣士としての力に通常の剣が耐えられないのだろうと言つた。

今まで簡単に剣が折れていたのはそのせいだったのだと納得したもの、

かと言つて通常訓練で剣を抜く訳にもいかない。

それを聞いて、何でそんな事を悩んでいるのかと、アナスタシアは首を傾げた。

「あの試合の時みたいに、結界張ればいいじゃん」

「そろは言つても、普通あんな広範囲の術を使おうとしたら何人も術士が必要なんだ」

「そうなの？ もつと簡単なのかと思つた！ そつかあ、——お前の剣、黒竜の封術を切つたしなあ」

普通に張るんじや無理だね、とアナスタシアが呆れたように呟く。

それだけの術を、王は一つの術式も用いずに敷いてみせた。

あの時レオアリスが何の躊躇いもなく剣を振つたのは、明確な理由があつたからではない。

ただ、不安も無かつた。

「——王かあ」

アナスタシアは窓の外に視線を投げて、その向こうに見える尖塔を眺めた。レオアリスを近衛師団に配したのは王だ。アナスタシアとしては内心「ずるい」などと思ひもしたが、それは単純な感想で、これから的事を考えれば、レオアリスには近衛師団が一番いいのかもしれない。

王の被護下にあるから。

レオアリスの剣はアナスタシアから見ても強すぎる。

(多分、喜ぶ奴らばっかじやない)

王の直轄軍である師団は、他の意思に阻害されない。

「——ねえ、王には会つたんだろ？ どうだつた？ 何話したの？」

アナスタシアは椅子の上で身を乗り出した。もう十日も前の事だが、御前試合の当日に、レオアリスは王と謁見している。

「何か言つてた？」

王があの御前試合で、レオアリスを「助けた」のは、アナスタシアにさえ特別な事だつたのが判る。

レオアリスの感情——逢つた事などなくとも、王という存在に憧れるのは、

理解できる。ただ、その王という存在が、たつた一人に手を差し伸べるといふのは、かなり稀な事ではないだろうか。

「どんな理由がそこにあるのか、それが何となく気になっていた。

「御前試合の事とか」

見ればレオアリスは、宝物でも見つけた子供のような顔をしている。そのくせ、何故か決まり悪そうに瞳を逸らせた。

「いや——」

「いやって……結界張つてくれた理由とか、言つてなかつたの？」

「それが……あんまり覚えてないんだよな」

アナスタシアは深紅の瞳を目一杯見開いた。

「はあ？！ 何それ！」

あれほど嬉しそうな様子を見せておきながら、覚えていないとはどういう事か。

「しようがないだろ、緊張で頭真っ白だつたんだから」

レオアリスはレオアリスで非常に悔しそうだったのだが、アナスタシアは容赦なく呆れた声を上げた。

「あり得ない！ あんつたに王に会いたがつてたじやん！ 緊張で覚えてないつて、何やつてんの！」

ムツとして瞳を細め、レオアリスはやり返すべく、薄く笑みを浮かべた。

「人の事言えんのかよ。お前だって、さつきまで緊張で顔が引きつってたじやねえか」

今度はアナスタシアがさつと赤くなつた。しつかり見られていたのだ。

「ひ——引きつってないよつ！ 私は余裕だもん」

「絶対嘘だ。ぶつ倒れそうな顔してたぜ。式の最中に切れるなよ」「平気だよつ」

ふんと顔を逸らした時、扉が叩かれた。椅子の上でアナスタシアが飛び上がる。扉が丁重に開かれ、王城の女官達が静かに頭を下げた。

「しまつた、俺こんな事言いに来たんじやなかつたんだ」

何だかただの茶飲み話のようになつてしまつたが、本当はもっと、言いた

い事があつたのだ。ただ扉が開いた瞬間の、アナスタシアの緊張しきつた顔を見て、用意してきた言葉——頑張れとか、期待してるとかそんな言葉は、どこかへ消えてしまつた。

レオアリスは眞面目な顔になつて、椅子の上で背筋を伸ばした。

来る途中で、王城の正面に集まつた大勢の人々と、整然と並んで自らの新しい将軍を待つ正規軍の姿を目にした。そこには言い難い熱氣と期待に満ちていた。

これからアナスタシアは、とても重いものを背負つて、引き返し難い道を進もうとしている。

「——俺に言える事なんて、あんまり無いけど

思い返せば、あの遠い西の森で出逢い、互いの事も、自分の事も、何も判らないまま、ひたすら走り抜けてきた気がする。

迷つてばかりで、できない事ばかりだつた。

それでも、何とかここまで來たように——、これから先もずっと、同じようにも迷い、自分の力の小ささに歯痒い思いをしながら、前へ進んでいくのだろう。

ただ、瞳を上げればおそらく、この奔放な友人が、そこにいるのだ。

「……逢えて良かつた」

アナスタシアは瞳を見開き、喜びと、それから込み上げる感情にぱつと顔

を伏せた。

開かれた扉の向こうでは、継承式へ誘う女官達が、肅然とこうべを垂れてアナスタシアが出てくるのを待つている。

「アナスタシア様」

ファーガソンの促す声。呼吸の音すら潜め、張り詰める室内の空気。

継承式が終われば、アナスタシアはアスター公爵家を継ぎ、新たな公爵、新たな正規軍將軍に就くのだ。

ただ、先ほどまであれほど怖かった継承式が、今はそれほど怖いものでは無くなつていた。

レオアリスは、王の前に立つた。全ての困難を、レオアリスは自分の力で

抜けてきた。

(逢えて良かった、私も)

この友人の前に、向かい合う全ての人達の前に、まっすぐ顔を上げて立てていたい。

アナスタシアはゆっくりと、伏せていた顔を上げた。

見送る為にレオアリスが立ち上がり、アーシアやファーガソン達も改めて姿勢を正す。

それに背中を押されるように、アナスタシアは静かに席を立ち、扉に向けて歩き出した。

「アナスタシア」

レオアリスは声を掛けたが、多分何かを言おうとしていた訳ではないだろう。

ただその響きは、多くの言葉を含んでいる。

『アナスタシア』——私の名前)

あの森の中で、レオアリスが初めて、アナスタシアの名を呼んだ時の響き。

それを大事に取つておこうと、そう思った。皆が——同じ年の友人が、ただ彼女を呼ぶ為だけに呼んでくれた名前だ。

アナスタシアは開かれた扉の前で足を止め、背を向けたまま、深く瞑想するように瞳を閉じた。

(私は——)

「——アスタート」

大切な名前をそうつと胸の内にしまつて、アナスタシアは顎を上げた。

瞳に、炎の光を宿す。奔放で、苛烈で、ゆらゆらと儚い、身に秘めた炎。それを瞳に纏いながら、アナスタシアは振り返った。

「アスタートって呼んでよ」

レオアリスの漆黒の瞳が、アナスタシアの深紅の瞳を、正面から受け止める。

「——アスタート」

レオアリスは響きを確かめるようにはつきりと口にし、あのいつもの快活

な笑みを浮かべた。

その響きが、自分を形作るようだ。

「うん」

それだけで、胸を張つて継承式に臨める。

(アスタートだ、私は——)

アナスタシア——アスタートは深紅の瞳を昂然と上げ、それから扉を抜けると、彼女を待つ場所へ、歩き出した。

初めはただひたすらに、自らの内なる叫びに従つて——、少女は意思を貫く為に当てもなく王都を飛び出し、少年は憧れだけを何もない手に掴んで、雪深い北の辺境を旅立つた。

通常なら重なり合う事など無かつた二つの道は、幾つもの偶然を重ね、交差した。

ただ、出逢いとは、思い返せばいつも、そんな奇跡のような偶然でできている。

いつも、いつも。どこかで一つ選択を違えれば、おそらく現在が大きく変わつていただろう、ささいな偶然だ。

それは運命と呼ぶほど、簡単なものではない。それは彼等が、自らの意思で選び取つてきたものだからだ。

竜の息から零れる宝玉のように、手に入れ難く、失われやすいもの。

自分から手を伸ばして初めて、形作られるもの。

これからアナスタシアは公爵家を継ぎ、レオアリスは剣士として、互いの道を進む事になる。

それは全く新たな道であり、あの深い西の森から、くつきりと続いている道もある。

新たな道が全て、踏み出す一歩から始まるように。
彼等の前に、その先へ、物語は刻まれていく。